

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第546集

平成20年度発掘調査報告書

亘 久 保 Ⅲ 遺 跡	火 行 塚 遺 跡
矢 盛 遺 跡 第 20 次 調 査	小 沢 V 神 籠 石 遺 跡
燒 野 遺 跡	小 沢 VI 遺 跡
燒 野 遺 跡 第 2 次 調 査	上 野 I · II 遺 跡
飯 岡 才 川 遺 跡 第 15 次 調 査	新 町 遺 跡
上 平 Ⅲ 遺 跡	ほか調査概報(42遺跡47調査)

2009

(財)岩手県文化振興事業団

平成20年度発掘調査報告書

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が残されていきます。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、平成20年度に当センターが発掘調査をした遺跡の調査成果をまとめ、調査報告書及び調査概報として発刊するものです。全県下で53遺跡59件、約20万m²が調査され、旧石器時代から近世までの遺構、遺物が検出されております。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました委託者をはじめ、地元の各市町村教育委員会及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成21年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 武田牧雄

目 次

平成20年度の調査結果について 1

I 発掘調査報告

(1) 昼久保Ⅲ遺跡（盛岡市）	5	(7) 火行塚遺跡（二戸市）	61
(2) 矢盛遺跡第20次調査（盛岡市）	11	(8・9) 小沢V神籠石遺跡	
(3) 燃野遺跡（盛岡市）	15	・小沢VI遺跡（宮古市）	91
(4) 燃野遺跡第2次調査（盛岡市）	27	(10) 上野I・II遺跡（一関市）	129
(5) 飯岡才川遺跡第15次調査（盛岡市）	47	(11) 新町遺跡（久慈市）	147
(6) 上平Ⅲ遺跡（二戸市）	53		

II 発掘調査概報

(12) 衣の関道遺跡第2次調査	179	(35) 中村城跡	202
(13) 川目A遺跡第5次補足調査	180	(36) 子飼沢II遺跡	203
(14) 羽黒田遺跡	181	(37) 松山大寺田沢遺跡	204
(15) 中嶋遺跡	182	(38) 下川原I遺跡	205
(16) 向II遺跡	183	(39) 下川原II遺跡	206
(17) 下巖江I・II遺跡	184	(40) 作屋敷遺跡	207
(18) 坪渕II遺跡	185	(41) 牡丹野遺跡	208
(19) 大平野II遺跡	186	(42) 尼坂遺跡	209
(20) 金浜I遺跡	187	(43) 合野遺跡	210
(21) 金浜II遺跡	188	(44) 小林繁長遺跡	211
(22) 八木沢野来遺跡	189	(45) 下中居I・II遺跡	212
(23) 八木沢駒込I遺跡	190	(46) 舟渡I遺跡（農政）	213
(24) 八木沢駒込II遺跡	191	(47) 舟渡I遺跡（土木）	214
(25) 八木沢II遺跡	192	(48) 戸桜遺跡	215
(26) 八木沢ラントノ沢II遺跡	193	(49) 野沢I遺跡	216
(27) 隠里VIII遺跡	194	(50) 野沢II遺跡	217
(28) 向中野館遺跡第10次調査	195	(51) 境遺跡（農政）	218
(29) 向中野館遺跡第11次調査	196	(52) 境遺跡（土木）	219
(30) 細谷地遺跡第19次調査	197	(53) 田代遺跡	220
(31) 細谷地遺跡第20次調査	198	(54) 雨滝遺跡	221
(32) 矢盛遺跡第18次調査	199	(55) 駒板3遺跡	222
(33) 矢盛遺跡第19次調査	200	(56) 齊羽場館跡	223
(34) 戸仲遺跡第3次調査	201		

平成20年度の発掘調査結果について

平成20年度の発掘調査事業は50遺跡55件199,866m²で開始したが、年度途中での追加を含めて最終的には53遺跡59件208,962m²の調査に着手した。本調査以外では農業基盤整備事業等に関連する試掘・確認調査や三陸国道建設に関連した試掘調査を実施している。

後期旧石時代は前年度から継続になる奥州市下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡（17）・大平野Ⅱ遺跡（19）、北上市齊羽場館跡（56）を調査した。下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡では石刃石器群と細石刃石器群の2文化層が確認され、石器集中区8箇所から約750点の石器が出土した。大平野Ⅱ遺跡では細石刃核1点が出土した。齊羽場館跡では台形様石器・彫器・搔器などが2面の文化層に含まれている。

縄文時代では盛岡市川目A遺跡（13）・戸仲遺跡（34）、花巻市下中居Ⅰ・Ⅱ遺跡（45）、奥州市小林繁長遺跡（44）・大平野Ⅱ遺跡・住田町子飼沢Ⅱ遺跡（36）、二戸市雨滝遺跡（54）・上平畠遺跡（6）・火行塚遺跡（7）、軽米町駒板3遺跡（55）、遠野市向II遺跡（16）、宮古市八木沢野来遺跡（22）・八木沢Ⅱ遺跡（25）などを調査した。戸仲遺跡では中期の複式炉を伴う堅穴住居・駒板3遺跡では後期の集落、大平野Ⅱ遺跡では壁際に石が並べられた堅穴住居など中期から後期の集落が検出されている。3年目の調査になる川目A遺跡では配石造構の広がる範囲が確認された。遺物包含層からは後期を主体とする土器270箱など多量の遺物が出土し、男性器を有する土偶をはじめとする300点を越す土偶や、石棒類100点以上など注目すべき遺物も多い。そのほか縄文時代晩期の遺跡として学史的にも有名な雨滝遺跡をはじめ、下中居Ⅰ・Ⅱ遺跡・小林繁長遺跡では前期末から中期の遺物包含層を調査し、多量の遺物が得られている。

弥生時代では北上市境遺跡（51・52）で、昨年度に続き弥生時代の堅穴住居が検出されたほか、花巻市羽黒田遺跡（14）、火行塚遺跡、宮古市金浜Ⅱ遺跡（21）などでもまとまった量の遺物が出土している。

古墳時代では久慈市新町遺跡（11）から5世紀代とみられる土師器を伴う堅穴住居が検出された。久慈産の琥珀は、古墳時代に畿内まで流通したとされており、その地での集落遺跡として注目される。

奈良時代は宮古市松山大地田沢遺跡（37）で7棟の堅穴住居からなる集落が検出され、イネ・オオムギ・コムギ等の炭化種子や鉄製品なども出土している。調査区に隣接する尾根上には、住居跡とみられる庭地も残っている。ほかにも金浜Ⅱ遺跡、花巻市中嶋遺跡（15）から各1棟の堅穴住居が検出されている。

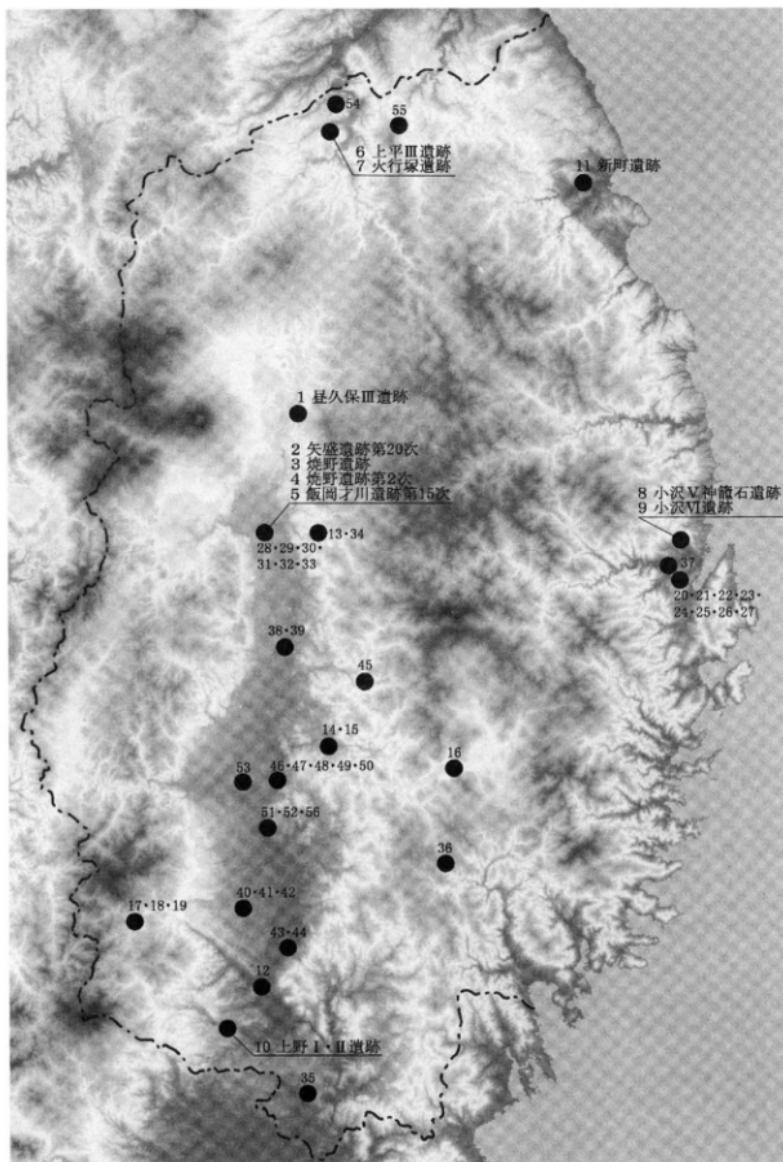
平安時代は約20の遺跡が調査され、羽黒田遺跡・中嶋遺跡、盛岡市向中野館跡（28・29）、紫波町下川原Ⅰ・Ⅱ遺跡（38・39）などの遺跡では10棟以上の堅穴住居からなる集落の存在が明らかとなつた。一関市中村城跡（35）では水田跡が2地点で2面調査されている。ほかにも奥州市牡丹野遺跡（41）・作屋敷遺跡（40）、向II遺跡、宮古市金浜Ⅰ・Ⅱ遺跡・隈里Ⅷ遺跡（27）、北上市野沢Ⅰ・Ⅱ遺跡（49・50）・齊羽場館跡、盛岡市細谷地遺跡（30・31）などでも堅穴住居が検出されている。

中世は下川原遺跡で12世紀の土坑や溝などの遺構からかわらけが出土している。遺跡北西に位置する比爪館なども含め、平泉藤原氏との関連が注目される。向中野館遺跡は、一辻50mほどの土壘とその外側に堀がある構造が確認された。中村城跡からは堀跡や大溝・橋脚が検出され、多量の木製品が出土している。北上市田代遺跡（53）では、輸入陶磁器を伴う掘立柱建物群が調査されている。

近世では、「下嵐江の番所跡」推定地である下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡で多くの建物跡が検出され、400mほど西に位置する奥州市坪瀬Ⅱ遺跡（18）では、この時代の墓所と見られる墓群が見つかった。向II遺跡、盛岡市矢盛遺跡（2）・焼野遺跡（3・4）、下中居Ⅰ・Ⅱ遺跡などでも建物跡や墓が検出されている。

近代の生産遺構として子飼沢Ⅱ遺跡で多量の鉄滓が捨てられた排滓場が検出されている。製鉄炉跡等の調査は次年度以降となったが、幕末に操業された仙台藩の文久山鉄山の流れをくむ遺跡として注目される。

（調査第一課長 佐々木清文）



I 発掘調査報告

凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30cm

中コンテナ：42×32×20cm

小コンテナ：42×32×10cm

(1) ひるくば 星久保Ⅲ遺跡

所 在 地	盛岡市玉山区芋田字星久保50-1ほか	遺跡コード・路号	KE57-0139・THKC-08
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	1,040 m ²
事 業 名	一般国道4号渋民バイパス建設事業	調査終了面積	1,040 m ²
発掘調査期間	平成20年7月1日～8月1日	調査担当者	本多準一郎・中村絵美・藤原大輔

1 調査に至る経過

「星久保Ⅲ遺跡」は、渋民バイパス建設工事の施工に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することとなったものである。

一般国道4号は、東京都中央区日本橋を起点として、青森県青森市に至る国道で、東北地方の大動脈を担っている主要幹線道路である。

国道4号渋民バイパスは、盛岡市玉山区越戸と同区芋田の間約5.6kmの区間で計画されている。現国道は、ほぼ区の中心を南北に縦断し、全幅員8～12mと狭く両側に歩道がない状態であり、近年の自動車交通の増大と車両の大型化に伴い、増加する交通需要に対応し、通過交通の分離による交通の円滑化、交通安全の確保および沿道環境の改善を図ることを目的に昭和61年度に事業着手、平成8年から工事着手、平成16年度に一部供用し事業を進めている。

「星久保Ⅲ遺跡」については、過年度において岩手県教育委員会および盛岡市教育委員会が分布調査を実施し確認されたものである。「星久保Ⅲ遺跡」については試掘調査を平成19年度に実施している。その結果に基づいて岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、平成20年7月1日付で岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で受託契約を締結し、「星久保Ⅲ遺跡」の発掘調査に着手した。

(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)



第1図 遺跡の位置

(1) 昼久保Ⅲ遺跡

2 遺跡の位置と立地（第1・2図）

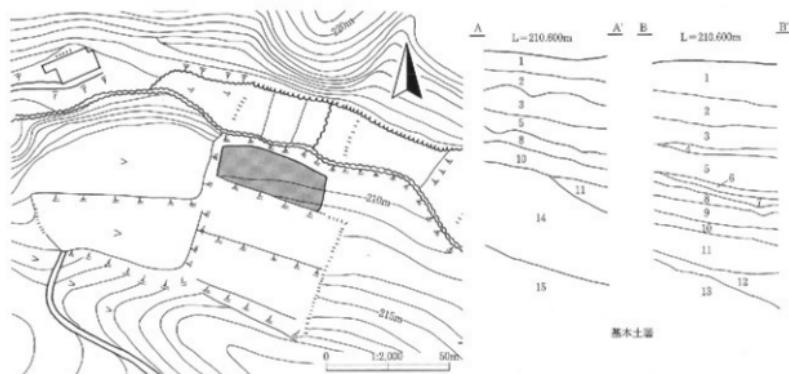
昼久保Ⅲ遺跡は、いわて銀河鉄道好摩駅の南東約1.5km、現国道4号東側の盛岡市玉山区芋田字昼久保50-1ほかに所在している。

遺跡は、秀峰姫神山から延びる小起伏山地の縁辺部に立地し、遺跡の範囲は、南北60m、東西に110mを測る。北側は西流する沢で区切られており、沢は西方約200mで北上側と合流している。遺跡の標高は210～215m前後で、沢に向かって傾斜している。現況は畑地で三段に切土され、本調査区は一番下段にあたり標高は210m前後となっている。

3 基本土層（第2図）

本調査区の基本土層は以下の通りである。

1層	暗褐色土	表土
2層	黒褐色土	十和田a火山灰混入 整地の際に斜面上部から動かされた層
3層	黒色土	斜面上部は削られ残っていない
4層	にぶい黄橙色土	古代検出面 十和田a火山灰が多く混入 斜面上部には残っていない
5層	黒色土	斜面中ほどから堆積が始まる層
6層	黒褐色土	沢付近の落ち込み部分から堆積が始まる層
7層	黒褐色土	沢付近の落ち込み部分から堆積が始まる層
8層	明褐色土	斜面上部は1層のすぐ下の層になる オレンジバミス混入 同定は行なつてないが何らかの火山灰の可能性がある。
9層	黒褐色土	沢の落ち込み部分から堆積が始まる層 オレンジバミス混入
10層	灰黃褐色土	水酸化鉄が混入している層
11層	黒色土	沢の落ち込み部分から堆積が始まる層
12層	浅黄橙色土	沢が急激に落ち込む部分から堆積が始まる層 部分的に入る層
13層	黒色土	沢が急激に落ち込む部分から堆積が始まる層 部分的に入る層
14層	黒色土	斜面上部から中部では8層下にくくる層
15層	明黄褐色土	繩文検出面。層厚は不明。(地山層)



第2図 調査区と周辺の地形・基本土層

4 調査の概要

(1) 検出遺構

4層面、10NグリッドでRF01焼土遺構1基を検出した。32×25cmで焼上の厚さは5cmである。一部かく乱を受けている部分があり、一時的に被熱を受けたのか長く被熱を受けたのかは断面の観察などからも判断はできなかった。遺物が伴わず時期については不明である。

(2) 出土遺物

縄文土器片が1袋弱ほど出土している。全て破片でかなり摩滅しているものが多い。掲載したものでは、縄文早期、後期、晩期のものが出土している。

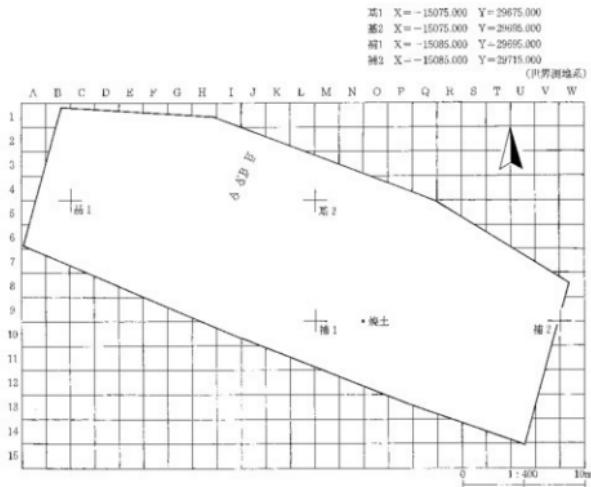
5まとめ

今回の調査範囲内には明確な遺構が存在せず出土遺物も極めて少量であった。上層の堆積状況等から、現況は旧地形から大きく変更を受けていることが確認され、特に斜面下方は斜面上部からの盛土が施されていた。また、沢部分にかけて急激に地形が落ち込んでおり、遺構なども少なかったと推測される。地域民の話によると、沢を越えた北側の丘陵部分から耕作の際に遺物が出土しているようで、主体部は北側に存在する可能性が高い。

なお、岩久保Ⅲ遺跡調査の報告はこれをもって全てとする。

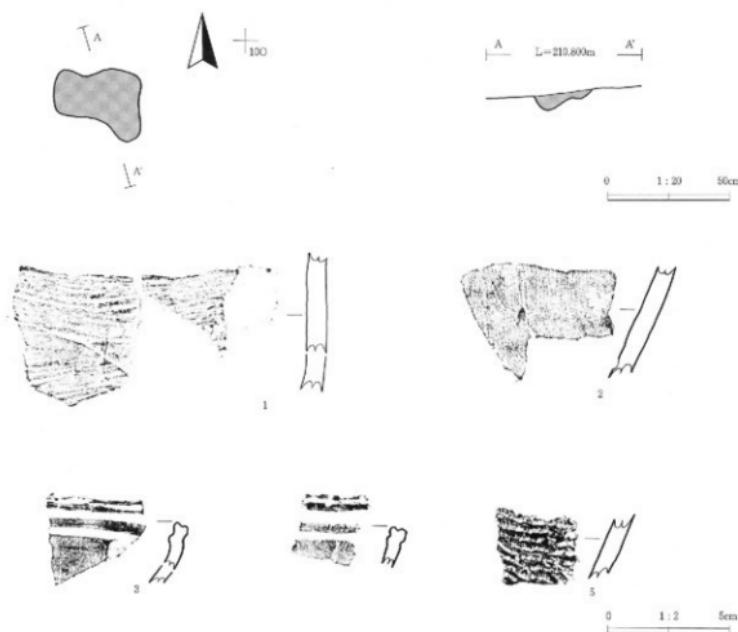
<引用・参考文献>

- (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
 2005『芋田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第457集
 2007『平成18年度発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第504集



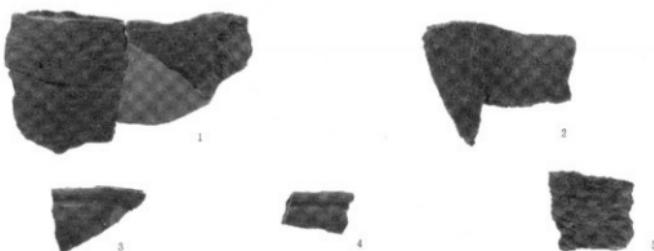
第3図 遺構配置図

(1) 桑久保Ⅲ遺跡



第4図 RF01焼土遺構・出土遺物

番号	出土地点	層位	器種	部位	文様の特徴	時期	備考
1	9 Lグリッド	15層	深鉢	体部	目線条痕文	早期	
2	4 Iグリッド	2層	深鉢	体部	彫齒条文	後期	
3	7 Gグリッド	3層	浅鉢	口縁部	口唇：沈線 口縁：沈線	晩期後世	
4	2 Eグリッド	3層	浅鉢	口縁部	口唇：沈線 口縁：沈線	晩期後世	
5	4 Iグリッド	2層	深鉢	体部	無節繩文	不明	



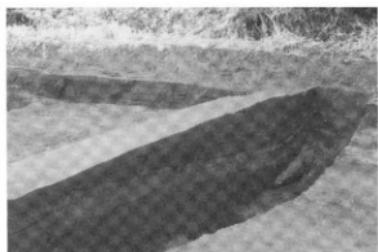
写真図版1 出土遺物



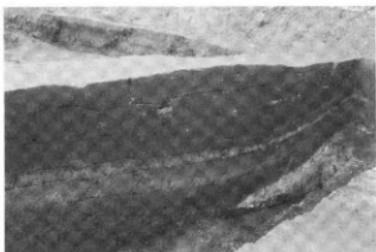
調査前風景（東→）



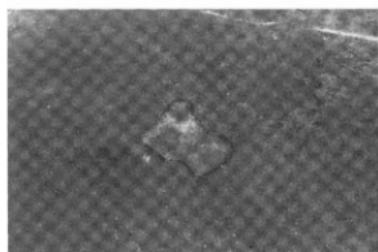
調査前風景（西→）



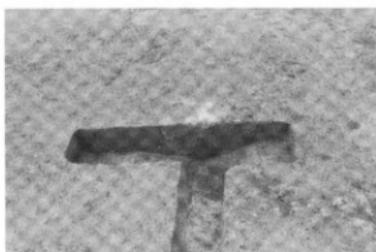
基本土層



基本土層



RF01焼土造構全景



RF01焼土造構断面



古代面終了状況（東→）

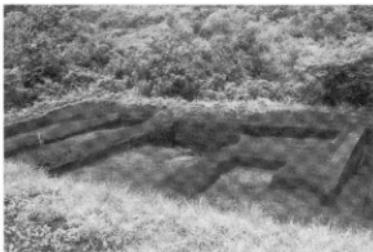


古代面終了状況（北東→）

(1) 昼久保Ⅲ遺跡



調査終了状況（西→）



調査終了状況（南→）

写真図版 3 調査終了状況

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうねんどはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成20年度発掘調査報告書						
副書名	昼久保Ⅲ遺跡						
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第546集						
編集者名	本多準一郎・中村絵美・藤原大輔						
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	西暦 2009年2月27日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
昼久保Ⅲ遺跡	もりおか し たまやま 盛岡市玉山 区芋田字昼 久保50-1 ほか	市町村 3201	遺跡番号 KE57-0139	39度 51分 49秒	141度 10分 49秒	2008.07.01 ～ 2008.08.01	1,040m ² 一般国道4号 渋民バイパス 建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
昼久保Ⅲ遺跡	散布地	縄文時代	焼土遺構 1基	縄文土器片			
要約	縄文時代の遺物の散布地。明確な遺構は検出されなかったが、少量ながら縄文時代早期、後期、晚期の土器片が出土していることから、付近に同時期の生活痕跡が存在する可能性が高いと推測される。						

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

(2) 矢盛遺跡 第20次調査

所 在 地 盛岡市向中野字野原41-3ほか
委 託 者 國土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
事 業 名 一般国道46号盛岡西バイパス建設事業
発掘調査期間 平成20年4月11日～4月25日

遺跡コード・略号 LE26-0139・IYM-08-20
調査対象面積 1,404m²
調査終了面積 1,404m²
調査担当者 金子昭彦・木戸口俊子

1 調査に至る経過

「矢盛遺跡」は、盛岡西バイパス改築工事の施工に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

一般国道46号は、盛岡市を起点に奥羽山脈を仙岩トンネルで越え、秋田市に至る主要幹線道路であり、盛岡市で一般国道106号と接続することにより、太平洋側と日本海側を結ぶ大動脈の役割を担っている路線である。

盛岡西バイパスは、盛岡市永井第一地割字高屋と同市上厨川字前潟の間約7.8kmの区間で計画されている。近年の自動車交通の増大と車両の大型化に伴い、増加する交通需要に対応し、交通の分散による交通の円滑化、交通安全の確保及び沿道環境の改善を図ることを目的に昭和59年度に事業着手、昭和62年から工事着手、一部供用し事業を進めている。

「矢盛遺跡」については、盛岡南新都市開発整備事業の区域内に存する埋蔵文化財包蔵地であり、過年度において岩手県教育委員会および盛岡市教育委員会が分布調査を実施し確認されたものである。「矢盛遺跡」については平成19年度に試掘調査を実施している。その結果に基づいて岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と協議を行い、発掘調査を財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、平成20年4月10日付けで岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で受託契約を締結し、「矢盛遺跡」の発掘調査に着手した。

(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)



第1図 遺跡の位置

2 遺跡の位置と立地（第1図）

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南に約3km、仙北町駅から南西約1.8kmに位置し、半石川によって形成された冲積段丘上および周囲の旧河道に立地する。標高は122m前後である。

3 基本層序

0層 整地層で層厚0～30cm。住宅に伴うものであろう。調査区中央付近には見られなかった。

1層：表土（耕作土）層厚20～50cm。調査区中央付近は浅かった。

*この地域では、通常、Ⅱ層：クロボク土、Ⅲ層：漸移層、Ⅳ層：黄褐色土が認められるのが、本調査区では削平されて全く残っていなかった（Ⅱ層上部が平安時代遺構の掘り込み面）。

V層 黄褐色（黒褐色部分も）砂礫層で層厚不明。

4 調査の概要

今回の調査区は、おそらく水田か畑造成時に砂礫層まで大きく削平されたため、平安時代の上師器壺（内黒）破片3点が、東側整地層を中心に出土しただけである（第3・4図）。不掲載の1点は、「粗掘」出土で第4図2と同一個体の可能性のある1.6×1.3cm0.67gの胴部小片（内黒）である。

本調査区は、南西から北東に延びる自然堤防状の段丘の一部に相当すると思われるが、その南西側のときは、第12次調査区で認められた。今回と同様、砂礫層まで削平され遺構は残っていないかった。

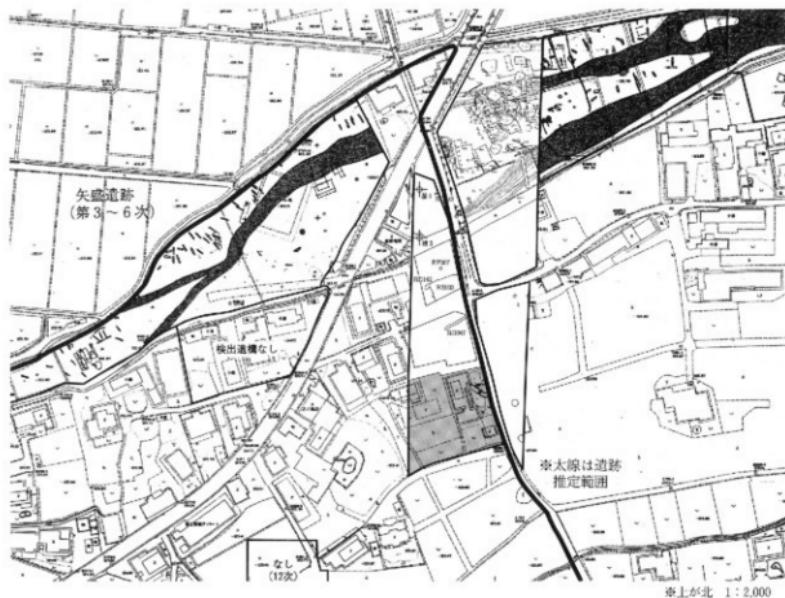
今回の調査区は、遺跡の北端に近い。北端は旧河道、その南は段丘だが、削平されているためか、道路を挟んで東側に隣接する細谷地遺跡も含めて、周囲には近世以前の遺構はほとんど確認されていない（第2図）。詳細は、当センター報告書第488・524・534・535集等を参照いただきたい。

なお、矢盛遺跡第20次調査に関する報告は、これをもって全てとする。

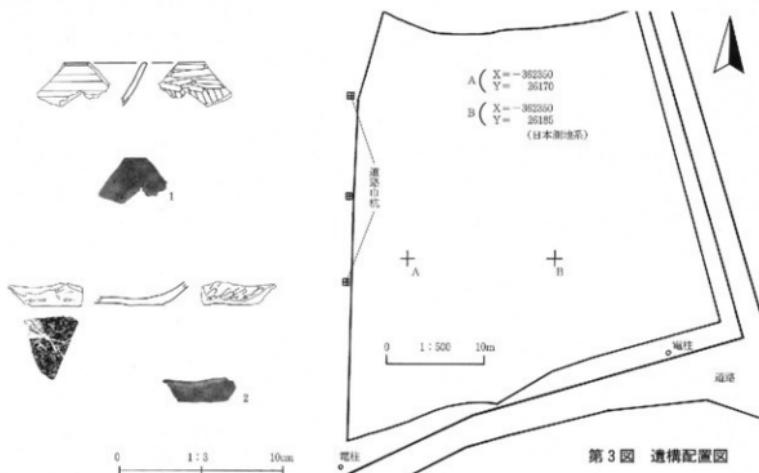
報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうねんどはくつちょうさほうくこくしょ							
書名	平成20年度発掘調査報告書							
副書名	矢盛遺跡第20次調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第546集							
編集者名	金子昭彦							
編集機関	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦 2009年2月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所 在 地	市町村	遺跡番号	。	。				
矢盛遺跡 第20次調査	岩手県盛岡市向中野字 野原41-3 ほか	03201	LE26-0139	39度 40分 27秒	141度 08分 05秒	2008.04.11 ～ 2008.04.25	1,404m ²	一般国道46号 盛岡西バイパス建設事業に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
矢盛遺跡 第20次調査	集落跡	平安時代		土師器 3片16.01g				
要約	今回の調査区は、削平されて残っていなかったが、本遺跡の高い部分には、平安時代の集落跡が認められている。							

※緯度・経度は世界測地系における数値である。



第2図 調査箇所(網部分)と周辺の調査区



第3図 遺構配置図

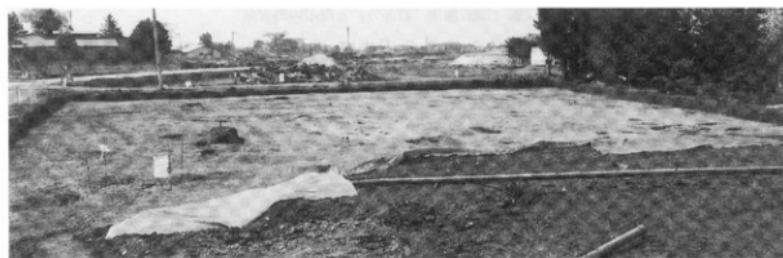
矢盛遺跡遺物観察表

No.	出土遺物名	質地・形状	残存状況	内面(口縁部/凹凸/底面)	外側(口縁部/底面/底面)	備考
1	破片	土器、球・口	小片	ロクロナメ	ミカサ	内生褐色斑塊・外面黒色、スヌ行重?
2	破片	土器、球・口	瓦面	ロクロナメ→手持しハケヌリワ	ミカサ	内生褐色斑塊・内外面に擦れ

第4図 出土遺物



調査区全景（東から）



調査区全景（北から）



調査前風景（北東から）



調査前風景（北西から）

(3) 焼野遺跡

所在地 盛岡市飯岡新田4地割焼野53-1ほか
 委託者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
 事業名 一般国道46号盛岡西バイパス建設事業
 発掘調査期間 4月15日～5月15日

遺跡コード・略号 LE26-0271・IYE-08
調査対象面積 1,161m²
調査終了面積 1,161m²
調査担当者 木戸口俊子・金子昭彦

1 調査に至る経過

「焼野遺跡」は、盛岡西バイパス改築工事の施工に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

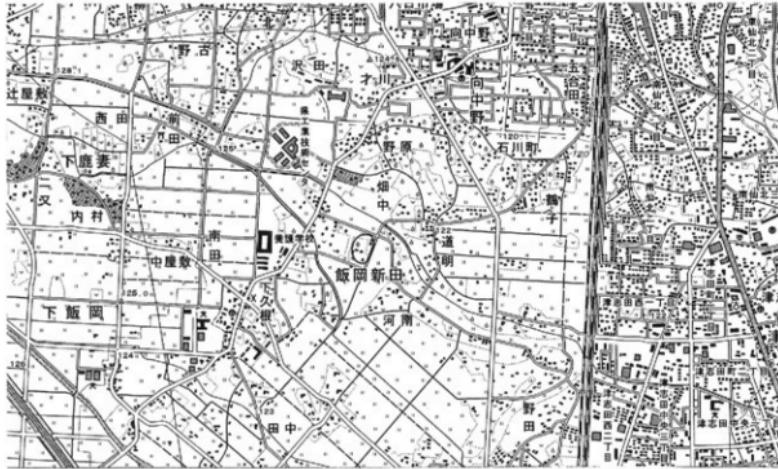
盛岡西バイパスは、盛岡市永井第一地割字高屋と同市上厨川字前潟の間約7.8kmの区間で計画されている。近年の自動車交通の増大と車両の大型化に伴い、増加する交通需要に対応し、交通の分散による交通の円滑化、交通安全の確保及び沿道環境の改善を図ることを目的に昭和59年度に事業着手、昭和62年から工事着手、一部供用し事業を進めている。

「焼野遺跡」については、盛岡南新都市開発整備事業の区域に存する埋蔵文化財包蔵地であり、過年度において岩手県教育委員会および盛岡市教育委員会が分布調査を実施し確認されたものである。

「焼町遺跡」については平成19年度に試掘調査を実施している。その結果に基づいて右子祭教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、平成20年4月10日付けで岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で受託契約を締結し、「焼野遺跡」の発掘調査に着手した。

(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)



第1図 遺跡の位置

2 遺跡の位置と立地

JR東北本線盛岡駅より南約3.5km、仙北町駅より南西約2.3kmに位置し、零石川右岸の中～低位段丘に立地している。複合遺跡である矢盛遺跡の南側にあり、標高は123m前後で南北に細長い調査区である。西隣は同年度に調査した第2次調査区がある。調査前は休耕田、畠地、一部宅地として利用されており、比較的平坦な地形で休耕田部分（調査区北側）では一段低くなっている。

3 基本層序

前述したとおり南北に細長く平坦な調査区だが、土層の様子は北側と南側で異なる。南側部分を除いてII層およびIII層はほとんどなく、大半が表土をはぐとIV層の疊層であり、広範囲にわたって削平されている。中央部よりも南側は現代の搅乱等のためか遺構はほとんど検出されなかった。

I層 10YR2/2黒褐色土 粘性なし しまりなし
植物根、雑物多い 表土（旧耕作土） 20～30cm
II層 10YR1.7/1黒色土 粘性ややあり しまりや
やあり 南側で最も厚く北に向かって徐々に薄く
なる 北側ではほとんどなし 0～30cm
III層 10YR2/2黒褐色土と10YR4/3にぶい黄褐色
土（IV層）との混合土 粘性ややあり（II層より
もあり） しまりややあり（II層よりもなし）
下位ほど砂質 II層と同様、南側で最も厚く堆積
し中央部分より北側ではほとんどなくなる
(漸移層) 0～20cm

IV層 10YR4/3～10YR5/6にぶい黄褐色～黄褐色 砂質土と礫との混合層 下位ほど疊多い
粘性ややあり しまりややあり（III層よりもなし） (疊層) <遺構検出面>

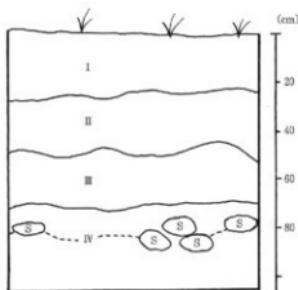
4 調査の概要

調査区のグリッド設定は、他の盛南開発に伴う調査遺跡同様、盛岡市教育委員会が定めたものに従った。平面直角座標第X系（日本測地系）に則り、50×50mを大グリッド、これを2×2mで分割したものを小グリッドとし、北から南に向かってアラビア数字、西から東に向かってアルファベットを付した。グリッドや標高の基準となる杭点は別図に示したとおりである。

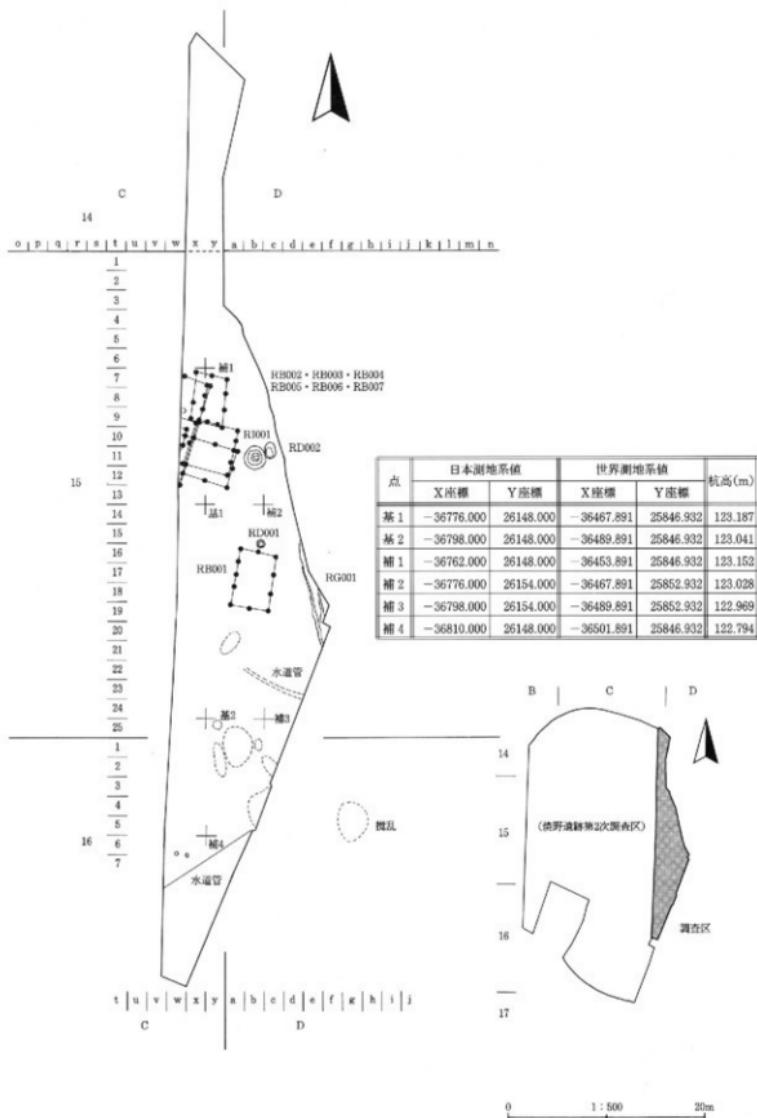
掘立柱建物跡などの遺構は、中央部分の微高地に集中して検出され、より高い西側（第2次調査区）に遺構が延びている。ただし、前項でも述べたようにIV層の疊層での検出という大半が削平搅乱を受けているため全ての遺構把握に至っていない。また、検出遺構に伴う遺物が全く出土していないため、時期は不明である。一段低い北側部分では、旧耕作土（水田跡）の下位から流れ込みと思われるが繩文土器や石器が数点、また土師器片および須恵器片が出土した。今回これらの時期の遺構は見つかっていないが、周辺に当該時期の遺構の存在も考えられる。



第2図 調査区の位置図



第3図 基本土層図（南側）



第4図 遺構配置図

(3) 焼野遺跡

(1) 遺構

掘立柱建物跡 7 棟、土坑 2 基、井戸跡 1 基、溝跡 1 条、柱穴状土坑 6 個を検出した。

<掘立柱建物跡> (第 5 ~ 7 図、写真図版 1)

RB001掘立柱建物跡のみ単独で検出され、その他は重複しあつたが第 2 次調査区へ延びている。下記の表の遺構規模は、第 2 次調査を経てわかったものを記載している。そのため図版では建物跡の一部のみのものもある。建物はほぼ同じ場所に何度も建て替えられている。RB003のみ軸が異なっているが、同遺構の梁方向と他の建物跡の桁方向の軸はやはり同じである。数少ない柱穴状土坑同士の重複で建物跡の新旧関係がわかるものは第 7 図に示した通りである。検出面から近世陶磁器が出土しているが、最近まで宅地として利用されていたこともあり、時期判断に至るものはない。なお、第 2 次調査区へ延長している遺構については、同書中の「焼野遺跡第 2 次調査」の項も参照していただきたい。

遺構名	位置	規模 (桁行×梁間総長)	軸方向 (桁方向)	柱間寸法 (桁行・梁間)	出土遺物・時期その他
RB001	15D16a付近	3 × 2 間 (5.4 × 4 m)	N- 9° - E	1.8m • 2 m	P2 より古銭出土 柱あたりあり
RB002	15C9y付近	2 × 2 間 (4.7 × 4.7m)	N-14° - E	2.3m (2.4) • 2.1m	遺物なし RB003～RB006 と重複
RB003	15C10w付近	* 4 × 2 間 (7.1 × 3.8m)	N-72° - W	2.4m (1.6) • 1.9m	遺物なし 2 次調査区へ延長
RB004	15C7x付近	3 × 2 間 (5 × 3.3m)	N- 6° - E	1.6m • 1.6m (1.7)	出土遺物なし
RB005	15C7w付近	* 4 × 2 間 (11 × 4.8m)	N-19° - E	4.6m (2.5) • 2.3m (2.5)	遺物なし 2 次調査区へ延長
RB006	15C9v付近	* 4 × 2 間 (12.4 × 4.8m)	N-17° - E	5.0m (6.4) • 2.35m	遺物なし 2 次調査区へ延長
RB007	15C9v付近	* 3 × 2 間 (5.8 × 4.6m)	N-14° - E	1.7m (2.0) • 2.15m (2.4)	遺物なし 2 次調査区へ延長

(*印)の遺構は、第 2 次調査によりわかったもの

<その他の遺構> (第 8 図、写真図版 2)

別表に詳細は記載してある。土坑は掘立柱建物跡と同様の埋土で、やはり遺物を伴わないので時期は不明である。RI001井戸跡は、擂鉢状に掘られ、底部で桶分の大きさ (50 × 45cm) をさらに掘り水を溜めるようになっていた。桶はほとんど腐食している状態であった。それ以外の遺物はなかった。

RG001溝跡は調査区境に検出し、ほとんどが現道と調査区北側へと延び、全容は不明である。検出された場所、方向、埋土の様子から新しいものと思われる。もともとの土地境の溝の可能性が高い。

P27、P42、P43は、一列に並び、本来は掘立柱建物跡となるものと思われるが、第 2 次調査においてもこれらは遺構と関わる柱穴状土坑は検出されなかった。

(2) 出土遺物 (写真図版 3)

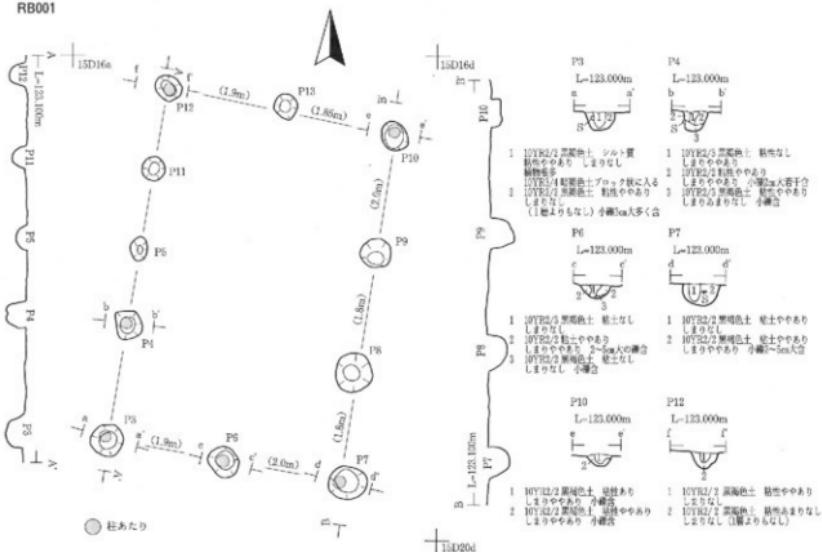
今回の調査で出土した遺物は小コンテナで 1 箱弱である。縄文土器 10 点、石器 12 点、土師器および須恵器片各 1 点、古銭 2 点、井戸杵 (桶) 1 点、それ以外は近世陶磁器片である。ほとんどが遺構外の出土であり、頁数の関係で記載は一部とした。

5 まとめ

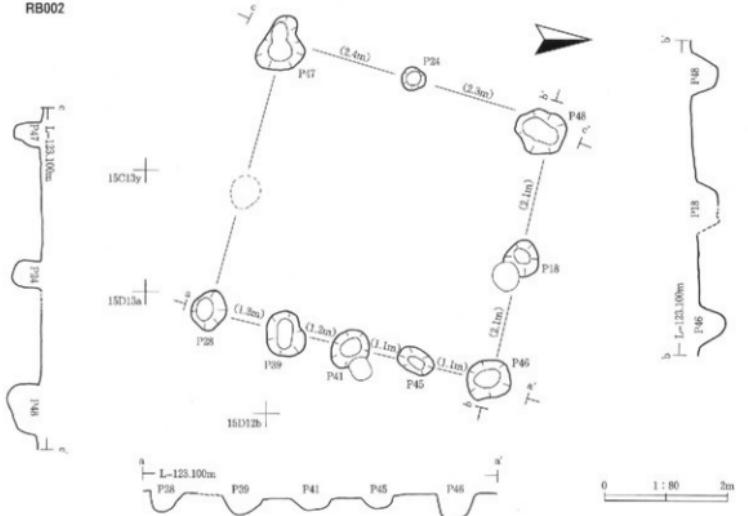
今回の調査では、中央部の微高地に深く掘られた掘立柱建物跡を確認した。数点の縄文時代や平安時代の遺物は出土したが、調査区内では関連する遺構は検出されていない。第 2 次調査区内では近世以降と思われる墓壙も確認していることから、本調査区は近世以降に作られた集落跡と考えられる。

なお、焼野遺跡平成 20 年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

RB001

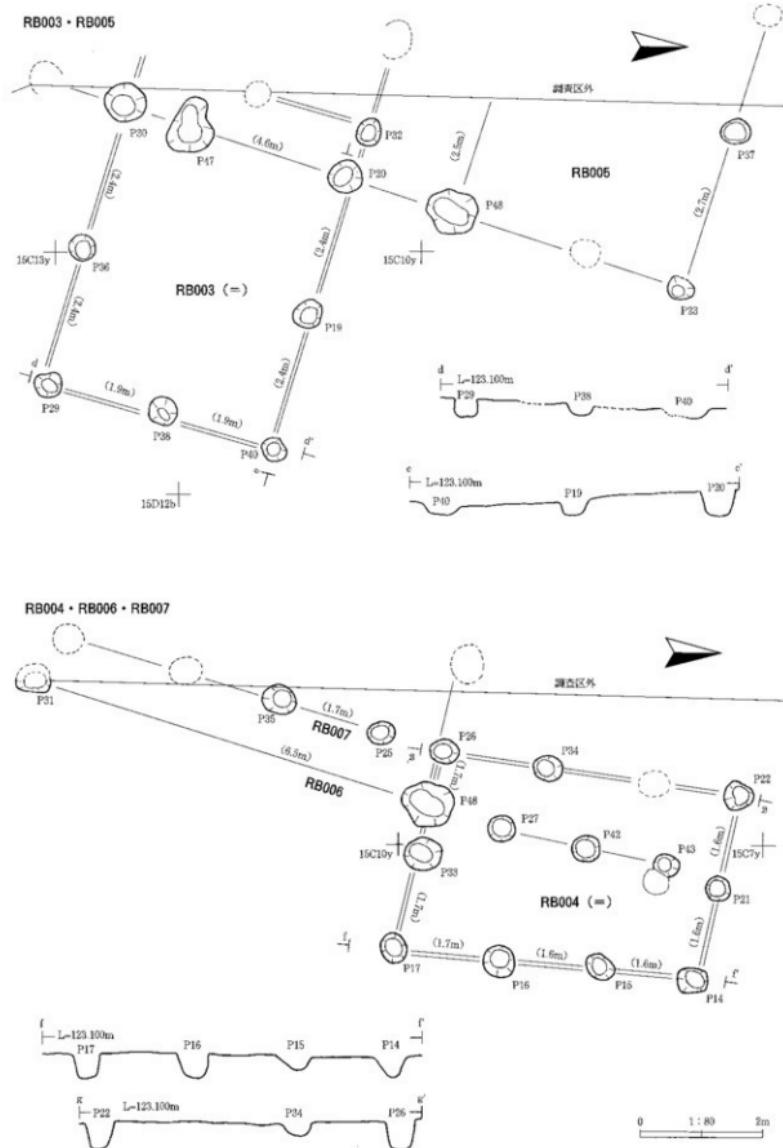


RB002

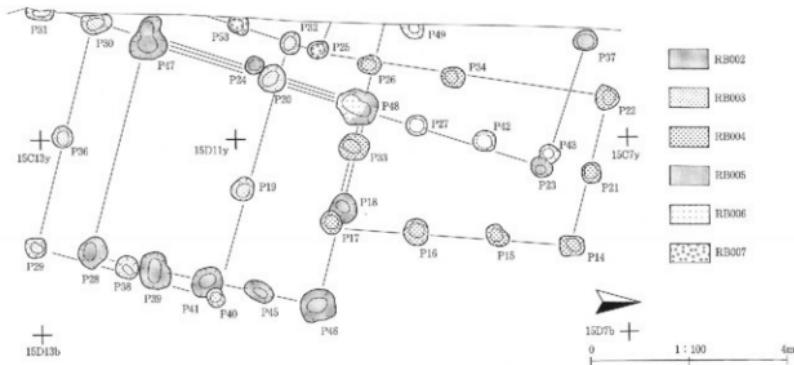


第5図 RB001・RB002掘立柱建物跡

(3) 焼野遺跡



第6図 RB003～RB007類立柱建物跡



第7図 挖立柱建物跡集中区（RB002～RB007）

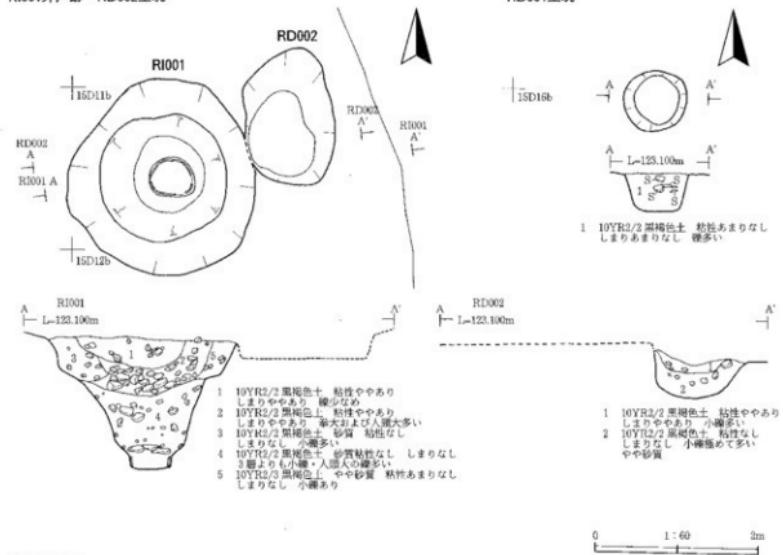
第1表 柱穴状土坑表（掘立柱建物跡）

（）は推定値

遺構名	建物名	長径(cm)	短径(cm)	最深(cm)	軒高(cm)	埋 土 状 況
P 5	RB001	52	51	30	122.59	-
P 4	RB001	45	39	33	122.58	-
P 5	RB001	59	36	30	122.72	HY2G/2層褐色土 勝利やあり しまりややあり P6(壁面)よりも堅強・しまりなし
P 6	RB001	51	46	35	122.60	-
P 7	RB001	64	54	30	122.47	-
P 8	RB001	64	59	35	122.47	HY2G/2層褐色土 勝利ややあり しまりややあり 下層底30~50cm入る
P 9	RB001	59	49	38	122.46	HY2G/2層褐色土 勝利ややあり しまりやややあり 磨こぶし大や小・勝利
P10	RB001	50	45	19	122.62	-
P11	RB001	39	36	26	122.65	HY2G/2層褐色土 勝利あまりなし しまりなし 1~5cmの跡多く含む
P12	RB001	43	41	34	122.58	-
P13	RB001	38	36	20	122.68	HY2G/2層褐色土 勝利ややあり しまりなし 墓道
P18	RB002	(55)	(45)	39	122.49	1. HY2G/2層褐色土 勝利なし しまりなし 小礫多く 2. 15YR2/2層褐色土 勝利なし しまりなし
P24	RB002	49	40	48	122.52	1. HY2G/2層褐色土 勝利ややあり しまりやややり 2. 15YR2/2層褐色土 勝利なし しまりなし
P28	RB002	60	52	55	122.52	HY2G/2層褐色土 勝利ややあり しまりやややり 小礫含む
P39	RB002	75	62	53	122.44	HY2G/2層褐色土 勝利ややあり しまりなし こぶし大的勝利あり
P41	RB002	70	56	19	122.52	HY2G/2層褐色土 勝利なし しまりなし 小礫多く入る
P46	RB002	72	62	44	122.54	HY2G/2層褐色土 勝利ややあり しまりやややり 墓道
P47	RB002 + 005	87	76	51	122.50	HY2G/2層褐色土 勝利ややあり しまりやややり 人頭大的勝利 小礫含む
P48	RB002 + 005 + 006	84	75	49	122.45	HY2G/2層褐色土 勝利ややあり しまりやややり 木板の隙間に多く 墓道に多く
P19	RB003	47	46	27	122.57	HY2G/2層褐色土 勝利ややあり しまりやややり 1~5cmの跡含む
P20	RB003	57	51	42	122.56	HY2G/2層褐色土 勝利ややややり しまりややややり
P29	RB003	44	40	31	122.58	HY2G/2層褐色土 勝利ややややり しまりややややり 小礫含む
P30	RB003	(62)	(39)	47	122.52	HY2G/2層褐色土 (シートトントン) 勝利ややややり しまりややややり (シートトントン) 勝利性なし しまりなし (この位置の裏土 小礫多く含む)
P32	RB003	45	40	45	122.56	HY2G/2層褐色土 勝利あまりなし しまりややあり 小礫含む
P36	RB003	44	41	37	122.58	HY2G/2層褐色土 シートトントン 勝利ややややり しまりやややり
P38	RB003	46	45	20	122.56	HY2G/2層褐色土 勝利ややややり しまりややややり 小礫含む
P40	RB003	42	34	20	122.58	HY2G/2層褐色土 勝利なし しまりややあり 小礫多く入る
P14	RB004	50	41	34	122.45	HY2G/2層褐色土 勝利ややややり しまりややややり こぶし大的勝利位に多く
P15	RB004	50	37	27	122.56	HY2G/2層褐色土 勝利あまりなし しまりややあり 小礫多く含む
P16	RB004	54	49	41	122.42	HY2G/2層褐色土 シートトントン 勝利ややややり しまりやややり 墓道
P17	RB004	(47)	(40)	40	122.42	HY2G/2層褐色土 勝利ややややり しまりなし
P21	RB004	42	39	44	122.50	HY2G/2層褐色土 勝利なし しまりやややり 墓道
P22	RB004	49	47	46	122.50	HY2G/2層褐色土 勝利なし しまりやややり 墓道
P26	RB004	46	37	52	122.47	HY2G/2層褐色土 勝利ややややり しまりなし 墓道
P33	RB004	62	57	55	122.29	1. 15YR2/2層褐色土 シートトントン 勝利ややややり しまりやややり 2. 15YR2/2層褐色土 (混合陶質土) 小礫多くやや堅強 勝利なし しまりなし
P34	RB004	49	41	22	122.20	HY2G/2層褐色土 シートトントン 勝利なし しまりなし 小礫大や大千合
P23	RB005	43	33	43	122.47	HY2G/2層褐色土 勝利ややややり しまりややややり 一側かく直を受ける 墓道
P37	RB005	50	41	50	122.51	HY2G/2層褐色土 勝利ややややり しまりややややり
P45	RB005	62	39	22	122.56	HY2G/2層褐色土 勝利なし しまりややややり 墓道
P31	RB006	(54)	(17)	32	122.70	HY2G/2層褐色土 勝利ややややり しまりややややり 5cmの跡
P25	RB007	45	35	52	122.53	HY2G/2層褐色土 勝利あまりなし しまりやややり 小礫含む
P35	RB007	49	42	45	122.60	HY2G/2層褐色土 勝利あまりなし しまりなし 勝利跡
P 1		40	39	20	122.35	15YR2/2層褐色土 勝利ややややり しまりのみ 墓道
P 2		45	41	19	122.57	15YR2/2層褐色土 シートトントン 勝利あまりなし しまりややややり 墓道千合
P27		44	42	24	122.64	15YR2/2層褐色土 勝利ややややり しまりややややり 小礫含む
P42		48	41	19	122.71	15YR2/2層褐色土 勝利ややややり しまりなし 墓道で多く
P43		40	35	45	122.49	-
P44		(48)	(24)	23	122.74	15YR2/2層褐色土 勝利あまりなし しまりあまりなし 勝利跡

(3) 桃野遺跡

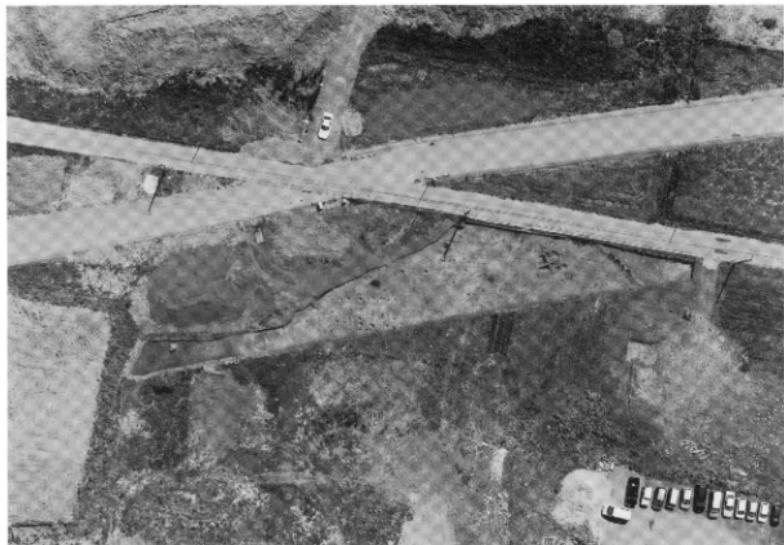
RI001井戸跡・RD002土坑



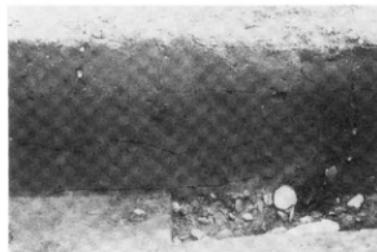
第2表 土坑、井戸跡、溝跡観察表

遺構名	項目
RD001土坑	位置 (グリッド) 15D16b付近 規模 (鉢長×最幅×最深) 78×76×45cm 平面形 円形 断面形 ピーカー状 出土遺物・その他 腹物なし 小塊多い
	位置 (グリッド) 15D11e 規模 (鉢長×最幅×最深) 168×110×58cm 平面形 橢円形 断面形 オリズム状 出土遺物・その他 腹物なし 小塊あり R1001と西側接する
	位置 (グリッド) 15D11b 規模 (鉢長×最幅×最深) 2.43×2.25×1.62m 底部構造 木枠 50×45cm 平面形 円形 断面形 オリズム状 出土遺物・その他 枕部に植の一部残存 位置 RD002と東側接する
RI001井戸跡	位置 (グリッド) 15D16付近 規模 (鉢長×最幅×最深) 9.98×1m(幅)×17cm 平面形 オリズム状 断面形 出土遺物・その他 腹物なし 調査区外へ延長 北-南への幅約 7.7mの勾配
	位置 (グリッド) 15D16付近 規模 (鉢長×最幅×最深) 9.98×1m(幅)×17cm 平面形 オリズム状 断面形 出土遺物・その他 腹物なし 調査区外へ延長 北-南への幅約 7.7mの勾配

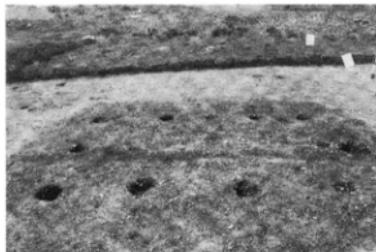
第8図 RD001土坑・RD002土坑・RI001井戸跡・RG001溝跡



調査区全景（直上－左が北）



基本土層



RB001 完掘



RB004 完掘



P7 (RB001) 断面

(3) 焼野遺跡



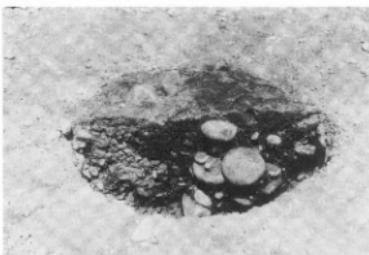
RI001 完掘



RI001 断面



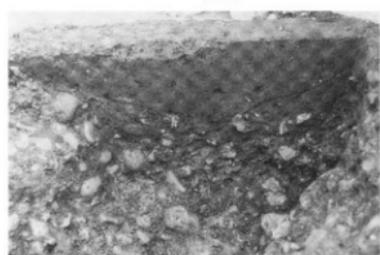
RD001 完掘



RD001 断面



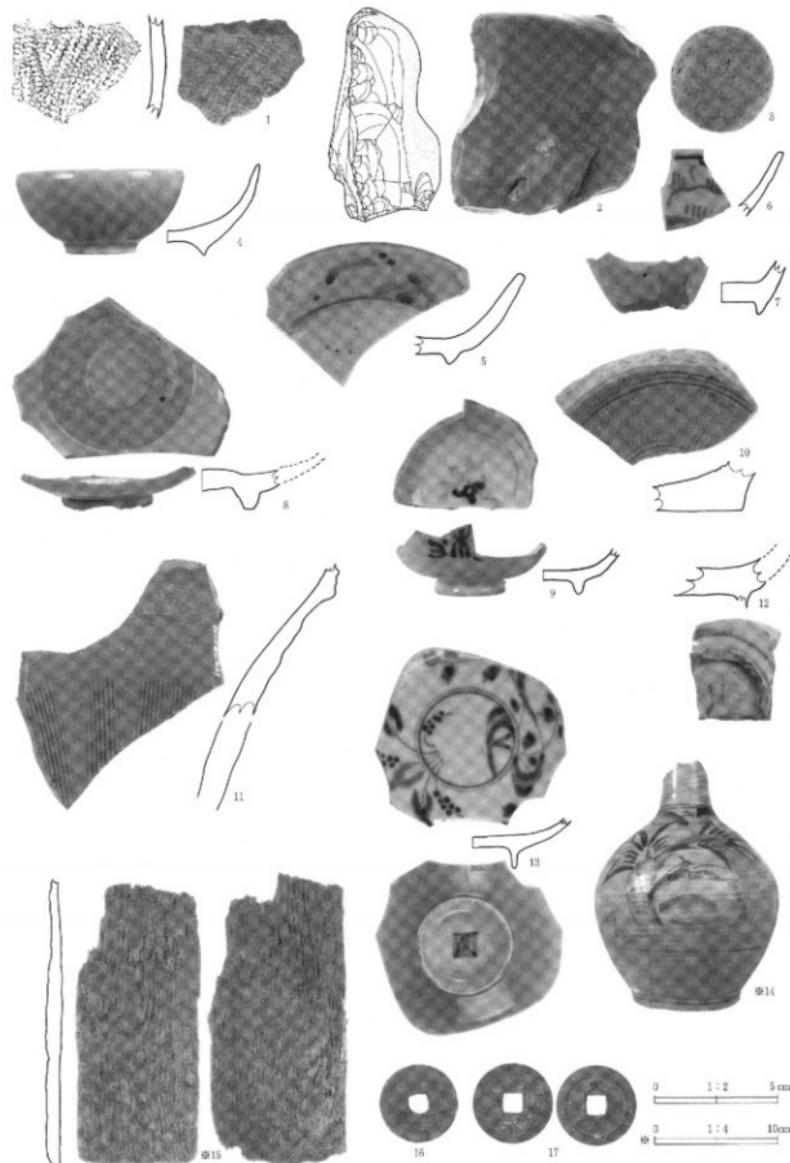
RD002 完掘



RD002 断面

RG001 完掘

写真図版 2 接出遺構 (2)



写真図版3 出土遺物

(3) 焼野遺跡

第3表 遺物観察表

掘削番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	重量(g)	時代	産地	備考		
													()	〔 〕は推定値	
1	3	14C #97号	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	柄部	-	-	-	15.7	後期?	破片	地文のみ		
4	22	16D1a付近	カクラン	磁器	小杯	口～底	(7.5)	3.1	3.5	67.4	近代	緑色釉			
5	38	北側Hゾーン	I層	磁器	皿	口縁部	12.6	-	3.7	45.5	V期	肥前	草花文		
6	36	溝上面	機出面	磁器	皿	口縁部	-	-	[2.9]	5.8		溝面	斜付草花文		
7	35	R1001	上位	磁器	碗	底部	-	-	3.0	[2.6]	31.7	IV期～	肥前	透明釉 無文	
8	25	16D1a付近	カクラン	磁器	皿	底部	-	4.6	[2.7]	70.8	IV期	肥前	見込鉢ノ目輪ハギ	灰釉	
9	23	16D1a付近	カクラン	磁器	小鏡	体～底	-	3.0	[3.0]	26.2	近代	見込鉢?	外輪	鏡字体	
10	33	16D4b付近	カクラン	陶器	小型擂鉢	底部	-	-	-	57.6			在地系?		
11	32	16D4b付近	カクラン	陶器	擂鉢	体部	-	-	-	103.1			在地系?		
12	30	16D4b付近	カクラン	陶器	碗	底部	-	-	[2.5]	29.9	19c前	瀬戸	染付	銘あり	
13	39	北側Hゾーン	I層	磁器	皿	底部	-	-	4.0	[2.0]	50.2	IV期	肥前	染付草花文 滅幅 外面青磁釉	
14	19	16D1a付近	カクラン	磁器	碗	底～底	-	-	8.8	[20.4]	819.4	19c	在地	草花文 斜付模白化土 瓷器	

南嶺 番号	登録 番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
15	47	R1001	底部	木製品	桶	破片	24.4	22.6	1.2		板材付枚瓦破片 井戸刷(根倒)
16	41	中央東原	I層	古鏡	寛永通鑑	略亮	2.75	2.70	0.10	3.50	新寛永
17	42	RB001(P5)	下位	古鏡	寛永通鑑	略亮	2.55	2.55	0.20	2.50	新寛永 背文(追点文)

<引用・参考文献> 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうねんほどはくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成20年度発掘調査報告書							
副書名	焼野遺跡							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第546集							
編集者名	木戸口俊子							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019) 638-9001							
発行年月日	西暦 2009年2月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
やののいせき 焼野遺跡	いわてけん 盛岡市 市飯岡新田 4地割焼野 53-1ほか	03201	LE26-0271	39度 40分 16秒	141度 08分 05秒	2008.04.15 ~ 2008.05.15	1,161m ²	一般国道46号 盛岡西バイパス建設事業
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
焼野遺跡	集落跡	近世 ～現代	掘立柱建物跡 7棟 土坑 2基 井戸跡 1基 溝跡 1条 柱穴状上坑 6個	縄文土器・石器 土師器・須恵器 近世陶磁器 古鏡 木製品(井戸桶)				
要約	これまでの盛南開発に伴う一連の発掘調査の中で、最も南側の調査である。調査区の中の標高の若干高い部分に集中して掘立柱建物跡や土坑などが見つかった。調査区周辺はこの地よりも高いことから近世の掘立柱建物跡がさらに広がるものと見られる。縄文土器や土師器・須恵器片は見つかったものの、いずれも小片で同時代の遺構は検出されず、本遺跡は近世以降の集落地であることがわかった。							

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

(4) やけの 焼野遺跡 第2次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田4地割焼野53-3ほか
委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間 平成20年9月8日～11月6日

遺跡コード・略号 LE26-0271・IYE-08-02
調査対象面積 5,019m²
調査終了面積 5,019m²
調査担当者 木戸口俊子・金子昭彦

1 調査に至る経過

盛岡南新都市土地区画整理事業は、盛岡市が21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市として発展していくことを目指し、現在の既成市街地のほかに南部地域を新都市として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都市を形成するために策定された事業である。

この事業は、平成2年9月に岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の三者が地域振興整備公団（現独立行政法人都市再生機構）に対して事業要請を行い、これを受けて公団が実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成3年度から面積313haを対象とした土地区画整理事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に関わる埋蔵文化財の取り扱いについても協議が重ねられた。その結果、本調査に関しては盛岡市教育委員会が試掘調査を行い、調査を必要とする範囲を確定し、財團法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることになった。

本遺跡第2次調査については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成20年度の事業として確定した。これを受け、平成20年6月3日に、財團法人岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長との間で委託契約を締結し、6,307m²の発掘調査を実施する運びとなった。その後、1,288m²の減じた5,019m²に面積を変更して、平成20年10月2日付けで変更契約を行った。野外調査は平成20年9月8日から11月6日まで、室内整理は平成20年12月1日から平成21年2月28日まで行われた。



第1図 遺跡の位置

2 遺跡の位置と立地

JR東北本線盛岡駅より南約3.5km、仙北町駅より南西約2.3kmに位置し、零石川右岸の中～低位段丘に立地している。複合遺跡である矢盛遺跡の南側にあり、標高は123m前後で同年度当初に実施された焼野遺跡調査区の西隣に位置している。遺跡の南には古代の遺跡である石持遺跡や夕覚遺跡などがある。調査前は畑地、宅地、一部墓地として利用され比較的平坦な地形をしている。

3 基本層序

前調査次の上層と変わりない。全体的にⅡ層とⅢ層は調査区中央から南東側に残っており、北側は搅乱を含む表土を剥ぐと礫層となる。搅乱層（Ⅰ層）は本調査区のほうが厚い。

I 層 10YR2/2黒褐色土 粘性なし しまりなし
植物根、雑物（家屋基礎）多い 表土（旧耕作土）
20～50cm

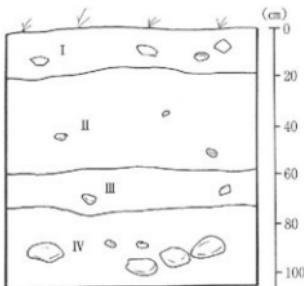
II 層 10YR1.7/1黒色土 粘性ややあり しまりや
やあり 南東側と中央部が最も厚い 北側ではほ
とんどなし 10～50cm

III 層 10YR2/2黒褐色土主体 10YR4/3にぶい黄
褐色土（IV層）との混合土 下位ほど砂質 粘性
ややあり しまりややあり 南東側一部と中央部
に残っているのみ（漸移層） 0～20cm

IV 層 10YR4/3～10YR5/6にぶい黄褐色～黄褐色
砂質土と礫との混合層 下位ほど礫多い（砂
礫層） <遺構検出面>



第2図 調査区の位置図

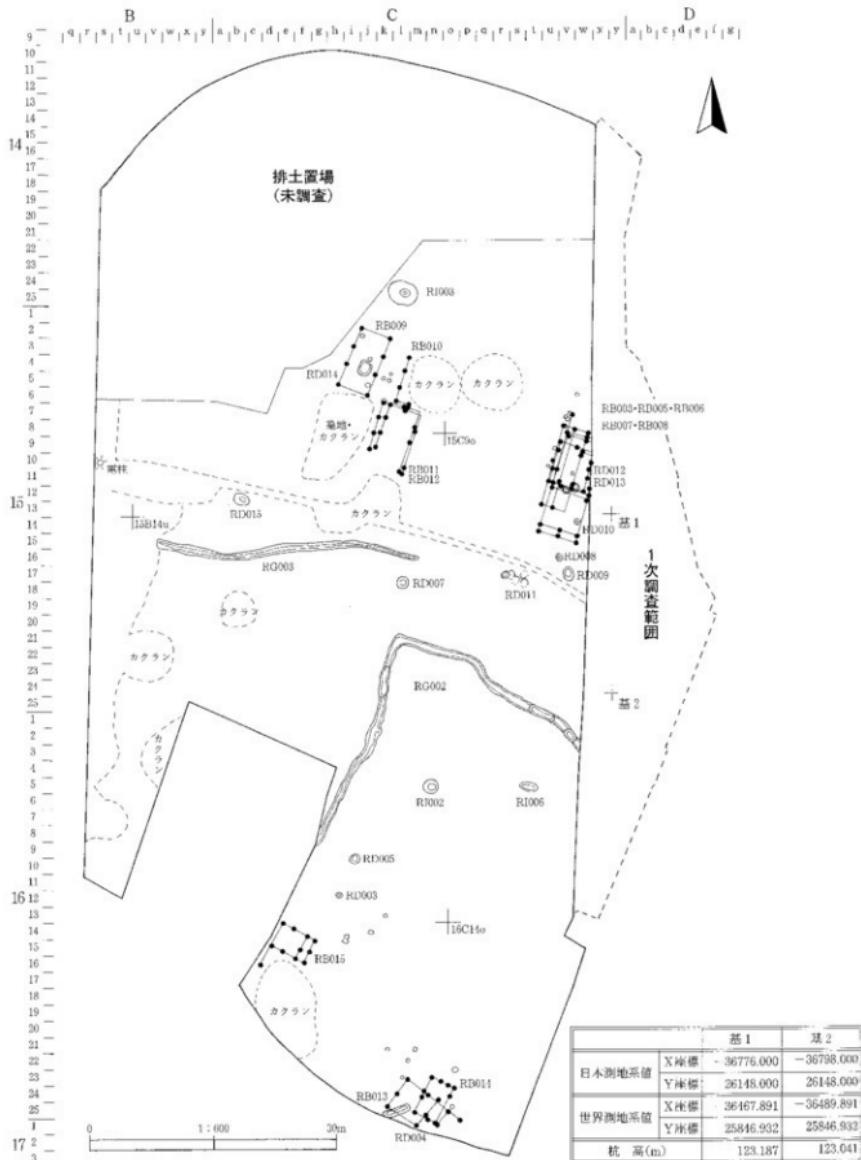


第3図 基本土層図（中央）

4 調査の概要

調査区のグリッド設定は、他の盛南開発に伴う調査遺跡同様、盛岡市教育委員会が定めたものに従った。平面直角座標第X系（日本測地系）に則り、50×50mを大グリッド、これを2×2mで分割したものを小グリッドとし、北から南に向かってアラビア数字、西から東に向かってアルファベットを付した。グリッドや標高の基準となる杭点は別図に示したとおり前調査次の杭点を利用した。

当初示された調査区の北側部分は堆土置場としたため、今回は未調査である。前調査次と同様、南東側はⅡ層およびⅢ層が残っているが、遺構は確認できなかった。ほとんどが礫層での検出であり、調査区中央に水道管が横断しているほか多くの搅乱を受け、遺構の残存状態は良いとはいえない。数個の墓石があったところは、墓石数以上の墓壙があるようである。今回は未改葬の1基のみ精査をおこなった。掘立柱建物跡などの遺構は、前調査次の遺構集中区から続く中央部分の微高地に集中して検出された。また、搅乱を間に挟んだ西側および調査区南側の2箇所からも同様に掘立柱建物跡が検出している。これらの遺構の間、中央部分では2条の溝が見つかっている。



第4図 遺構配置図

(1) 遺構

第2次調査で確認された遺構は、掘立柱建物跡12棟（4棟は前調査次と重複）、土坑13基、井戸跡2基、溝跡2条、柱穴状土坑29個が検出した。

<掘立柱建物跡>（第5～9図、写真図版1・2）

遺構名	位置(グリッド)	規模(桁行×梁間総長)	軸方向(桁方向)	柱間寸法(桁行・梁間)	出土遺物・その他
RB003	15C10w付近	4×2間(7.1×3.8m)	N-72°-W	2.4m(1.6)・1.9m	遺物なし 1次調査区へ延長 1次のRB002と重複 当遺構が新
RB005	15C7w付近	4×2間(11×4.8m)	N-19°-E	4.6m(2.5)・2.3m(2.5)	遺物なし 1次調査区へ延長 RB002・006と重複
RB006	15C9e付近	4×2間(12.4×4.8m)	N-17°-E	5.0m(6.4)・2.35m	遺物なし 1次調査区へ延長 RB003・005・007と重複
RB007	15C9e付近	3×2間(5.3×4.6m)	N-14°-E	1.7m(2.0)・2.15m(2.4)	遺物なし 1次調査区へ延長 RB006と重複
RB008	15C9u付近	3×2間(11×3.2m)	N-13°-E	4.4m・1.6m	遺物なし
RB009	15C4l付近	3×1間(7.5×4.05m)	N-22°-E	2.3m(2.7)・4.05m(3.6)	遺物なし
RB010	15C5l付近	3×1間(5.7×1.65m)	N-18°-E	1.8m(2.0)・1.65m	遺物なし
RB011	15C7k付近	3×2間(5.9×4.7m)	N-17°-E	1.9m(2.0)・2.7m	遺物なし RB012と重複
RB012	15C7k付近	4×2間(7.6×3.8m)	N-20°-E	1.8m(1.9)・1.75m	遺物なし RB011と重複
RB013	16C2d付近	4×2間(8.2×4.1m)	N-128°-E	1.9m(2.6)・2.1m	近世陶磁器出土 RB014と重複
RB014	16C23n付近	3×3間(4.8×3.0m)	N-30°-E	1.0m(2.0)・0.9m(1.1)	遺物なし RB013と重複
RB015	16C14d付近	3×3間(4.6×5.75m)	N-63°-W	1.5m(1.9)・1.6m(3.2)	遺物なし

掘立柱建物跡は、4箇所に集中して検出された。RB015のみが単独で、他は全て同じような場所に建てられている。1次調査で検出された遺構と関連しているものは、RB003、RB005～008で、同区域では1次調査分も含めて8棟確認した。柱同士の重複からわかる新旧関係は下記のとおりである。

RB006>RB003・RB004(1次調査分)・RB005・RB007>RB002(1次調査分)(新>古)

RB003と004、またはRB004とRB007は同時存在可能である。規模としては、同規模のものが多く、母屋や小屋などの区別はしにくい。ただし、RB006については、南側に縁を設けており、他の建物とは若干異なっている。

調査区中央のやや北寄りで検出されたRB009～RB012については、重複している柱で新旧の明確だったものは、P113とP114のみである。このことを生かすとRB012>RB011(新>古)となる。

調査区最南端で検出したRB013とRB014、柱の重複関係からRB014>RB013(新>古)の関係である。RB013は柱あたりを確認できた柱もあり、他の建物よりもやや深く掘られている。P2とP42からは、肥前の陶磁器が出土している。

調査区南西側で検出したRB015は、南側に位置するP31を同一遺構とした。しかし、他の建物の構造や縁らしいもの位置関係、間尺などから西側もしくは南側に延びる別遺構の可能性もある。確認できた規模では他の建物跡よりも間尺が小さく時期差が考えられる。

これらの遺構からはRB013を除いて遺物が出土しておらず、明確な時期は不明である。埋土状況や周辺からの出土遺物などから、いずれも近世以降(18世紀以降)の掘立柱建物跡と考えられる。

<土坑>（第10・11図、写真図版2・3） 土坑は13基検出した。各土坑の詳しい規模は下記表のとおりである。この中で、RD003土坑とRD005土坑は埋土状況から他の土坑よりも新しい遺構と考えられる。RD004土坑およびRD006土坑は掘立柱建物跡と同様の埋土の様相であったが、底部状況から植生根の可能性もある。RD011土坑は墓壙である。調査前に墓石3基があった付近である。その部分については調査前に改葬済みであるが、この遺構については未改葬であった。検出面では円形に確認でき、ほぼ垂直に掘り込まれ、底部では若干変色が認められる隅丸方形となっており、方形の棺材の痕と考えられる。底部から紅皿が1点出土した。この土坑と重なる様に他4基の墓壙が確認できた（確認のみ）。墓石の銘などは不明瞭だったが、18世紀後半から19世紀にかけてと思われるキセル片や紅皿、猪口などの副葬品が出土し、同時期の墓壙と考えられる。RD012土坑とRD013土坑は、掘立柱建物跡の集中している区域に位置している。これらは梢円形を呈し、埋土底部に焼土粒が認められ、一度に埋まつた人為堆積と考えられる。RD013土坑では、埋土中位と底部からキセル2点が出土し墓壙の可能性が高い。掘立柱建物跡の一部柱穴と重複しており、これらより古い遺構である。キセルは18世紀後半と見られ、重複している建物跡はそれよりも新しい遺構となる。RD014土坑からは遺物は全く出土していないが、形状や埋土、改葬された墓壙が接することなどから、この遺構も墓壙の可能性がある。

遺構名	位置（グリッド）	規模（長径×短径×最深）	平面形	断面形	出土遺物・その他
RD003	15C12h	80×66×26cm	円形	縦鉢状	遺物なし
RD004	15C25k・25l	(240)×104×58cm	不整形	縦鉢状	遺物なし
RD005	15C10i	119×95×40cm	隅丸方形	縦状	遺物なし
RD006	16C5a・5t	235×90×44cm	長梢円形	縦鉢状	遺物なし
RD007	15C18l	121×108×32cm	円形	縦状	遺物なし
RD008	15C16u	90×81×26cm	円形	縦鉢状	近世陶器器出土
RD009	15C17v	197×127×57cm	梢円形	縦状	遺物なし
RD010	15C14v・14w	82×75×38cm	円形	縦鉢状	遺物なし
RD011	15C17r	75×70×76cm	円形	ビーカー状	紅皿、キセル出土 墓壙 周辺に4基以上あり
RD012	15C12v	120×110×24cm	梢円形	縦状	15号土坑と類似 墓壙に焼土粒含む 墓壙？
RD013	15C12v	94×65×25cm	梢円形	縦状	キセル出土 14号土坑と埋土粒含む 墓壙？
RD014	15C4i・4j	217×115×40cm	長方形	縦状	遺物なし 墓壙？
RD015	15C12h・12c	220×162×48cm	梢円形	縦鉢状	遺物なし

<井戸跡>（第11図、写真図版4） 井戸跡は2基検出された。1次調査でも底部に桶を設置した井戸跡が検出されたが、本調査区からも規模は小さいながら同形状のRIO02井戸跡が見つかっている。長径1.95m、短径1.62mの不整形で、最下部は径30cm、深さ22cmほどさらに掘られている。井戸側の材は確認できなかった。底部から陶器片が出土しているが、明確な産地や時期は不明である。中央北寄りから出土したRIO03井戸跡は長径3.35mで、さらに内径1.2mの20cm前後の礫を使った石組みとなっている。石組みは1mの深さまで全面に組まれ、それより下位は35cmほどの素掘りされている。桶などの井戸側の材などは確認されなかった。石組み上位から須恵器片が見つかっているが、周辺の遺構状況や他の遺物などから客土からの流れ込みによるものと思われ、周辺の掘立柱建物跡と同時期以降の井戸と考えられる。

<溝跡>（第12図、写真図版4） 溝跡は2条確認できた。2条とも調査区のやや低い中央に位置し、東西方向の軸を持つが、RG002溝跡は遺構半ばで90度に折れ、南北方向の軸となる。RG002溝跡は、

一部搅乱を受けているものの全体的に浅く区画溝であると考えられる。東へ行くほど深さはなくなり、1次調査区へ延びてはいるが調査時には確認できなかった。RG003溝跡は、全長31.8m計測された。搅乱により確認できなかったが更に西に延びていたものと思われる。RG002溝跡と異なりややV字の断面を呈している。性格は不明である。

(2) 遺物 (写真図版5)

遺物は小コインテナで1箱弱出土した。中央の水道管が埋設された黒色土の厚く堆積しているところからは、縄文時代の土器片や石器が若干出土した。1次調査でも縄文時代の上器や石器は確認しているが、客土によるものと考えられる。掘立柱建物跡の検出位置周辺からは近世陶磁器が中心に出土した。また前述したように墓壙からはキセルが、墓壙周辺からは寛永通宝や土人形片が見つかった。近世陶磁器は破片が多く、在地系と見られる陶磁器のほか、18世紀から19世紀にかけての肥前産や瀬戸産のものも出土している。また、墓壙から出土したキセルも形状から同時期と考えられる。土人形は、掲載してあるもののほか、2点破片で出土しており、掲載したものと対の雑人形と思われる。

5まとめ

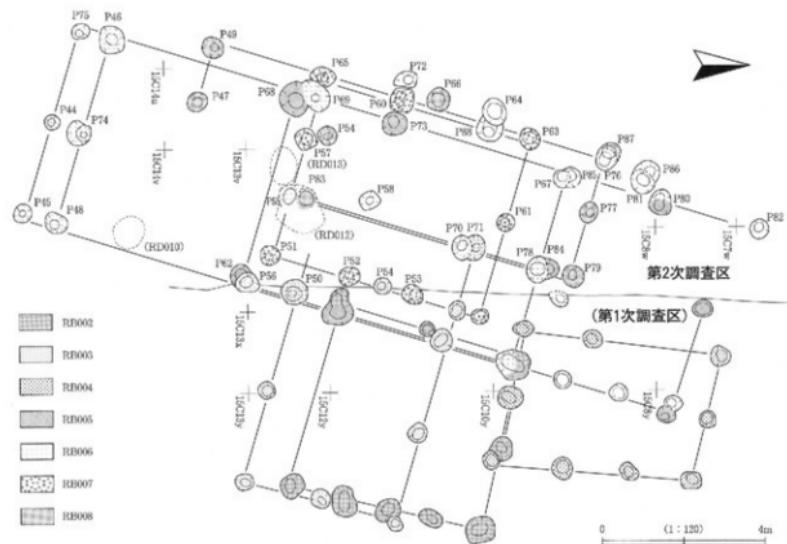
今回の調査では、調査区の微低地で溝跡が、微高地4箇所に集中して掘立柱建物跡が見つかった。また、墓壙や井戸跡が確認されたことで、1次調査と同様、近世以降の集落地が広がっていることがわかった。

なお、焼野遺跡第2次調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

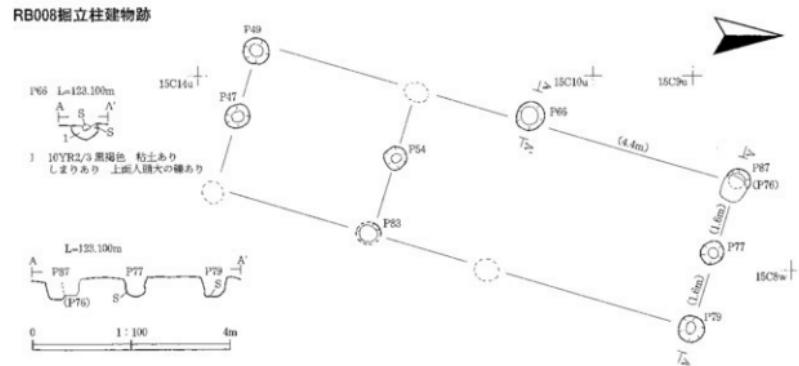
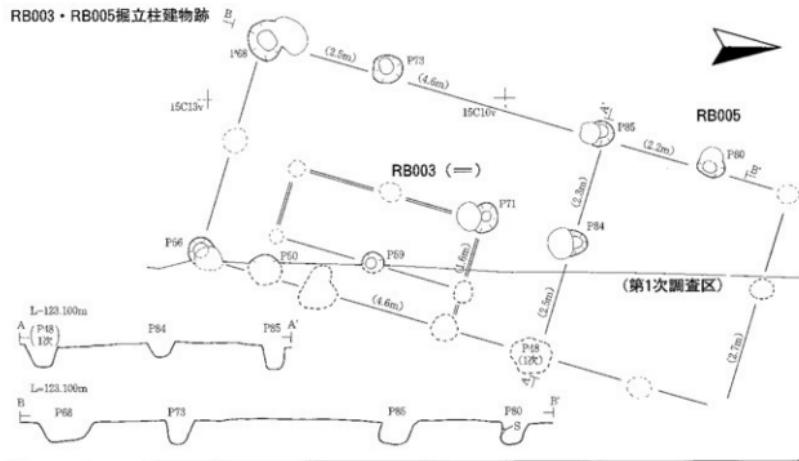
<参考文献>

九州陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』

江戸遺跡研究会(編) 2001『図説 江戸考古学事典』



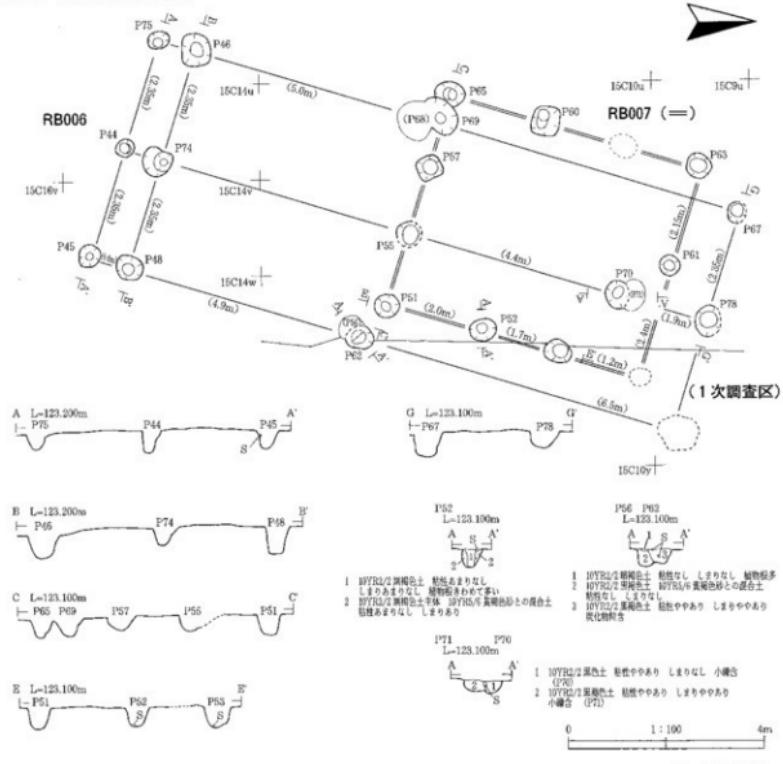
第5図 RB002～RB08掘立柱建物跡 造構集中区



遺構名	建物名	長径(cm)	短径(cm)	最深(cm)	断面形(□)	埋 土 状 況		
						10YR2/1黒褐色土と10YR2/3黒褐色土との混合土 粘性ややあり しまりややあり	10YR2/2黒褐色土 粘性あまりなし しまりなし	10YR2/2黒褐色土 粘性ややあり しまりややあり 壓實物粒合 P62と重複 (II)
P50	RB003	69	60	60	122.419			
P59	RB003	43	41	38	122.622			
P71	RB003	63	56	26	122.716			
P56	RB005	50 (32)	31	122.685	10YR2/2黒褐色土 粘性ややあり しまりややあり	しまりややあり 壓實物粒合 P62と重複 (II)		
P68	RB005	83	72	36	122.570	10YR2/2黒褐色土 粘性ややあり しまりややあり 小礫、植物根多		
P73	RB005	65	58	45	122.500	10YR2/2黒褐色土 砂混やや砂質 粘性ややあり しまりややあり 小礫あり		
P80	RB005	61	56	48	122.420	10YR2/3黒褐色土 粘性あまりなし しまりあまりなし 中位拳大疊あり 底部砂混じり		
P84	RB005	57	50	23	122.702			
P85	RB005	52	49	45	122.450			
P47	RB008	54	47	32	122.725	10YR2/2黒褐色土 粘性ややあり しまりややあり 小礫あり		
P49	RB008	56	52	41	122.580	10YR2/2黒褐色土 粘性ややあり しまりややあり 中位一下位やや砂質 小礫多		
P54	RB008	48	43	35	122.632	10YR2/2黒褐色土 粘性ややあり しまりややあり		
P66	RB008	61	56	31	122.635	10YR2/3黒褐色土 粘性あり しまりややあり 上面人頭大の縛あり		
P77	RB008	51	42	36	122.560	10YR2/3黒褐色土 粘性あまりなし しまりあまりなし 小礫あり		
P79	RB008	55	51	40	122.550	10YR2/3黒褐色土 粘性あまりなし しまりあまりなし 草大疊、植物根あり		
P83	RB008	38	34	38	122.640			
P87	RB008	52 (40)	37	122.518	-			

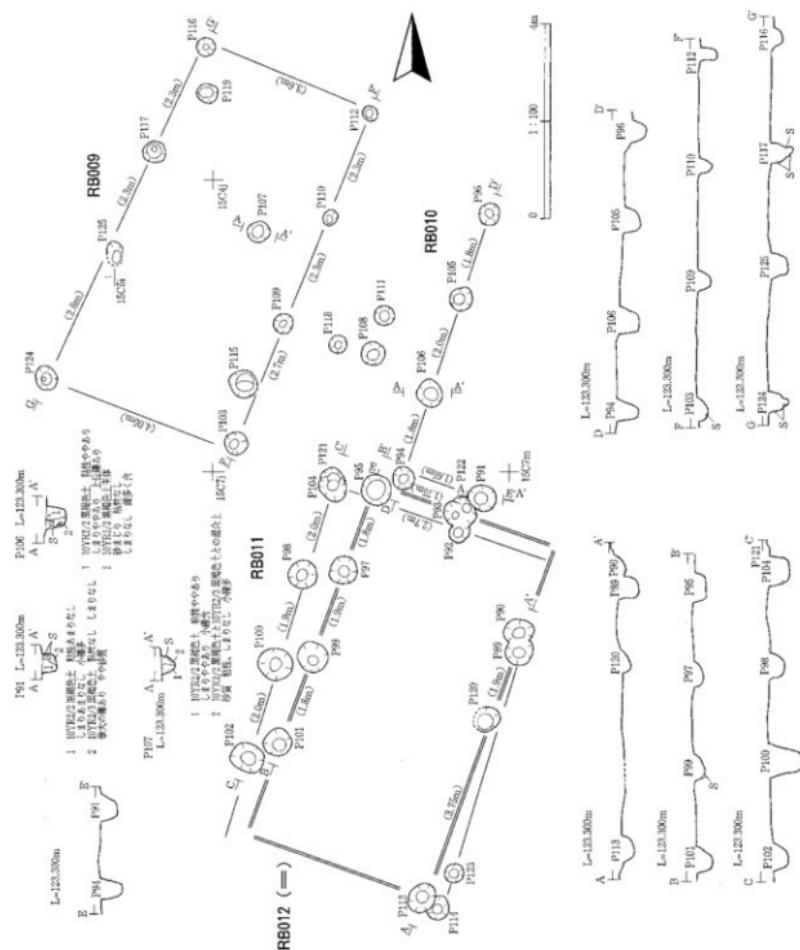
第6図 RB003・RB005・RB008掘立柱建物跡

RB006 • RB007 捷立柱建物跡



選択名	被物名	基長(cm)	基幅(cm)	最深(cm)	基面高(cm)	埋土状況
P 44	RB006	40	36	47	122.683	10YR2/1黒色土 基性ややあり しまりやまろなし 小灌、植物很多
P 45	RB006	51	41	37	122.734	10YR2/1黒色土 基性ややあり しまりやまろなし 小灌、植物很多 上面花柄物あり
P 46	RB006	75	61	49	122.530	10YR2/2黒褐色土 基性ややあり しまりやまろなし やや砂質 小灌多く含
P 48	RB006	60	50	59	122.520	10YR2/1黒色土 基性ややあり しまりやまろなし 植物あり 小灌若干含
P 55	RB006	41	31	36	122.655	10TR2/1黒色土 基性ややあり しまりやまろなし RD012と重複
P 62	RB006	56	(45)	46	122.520	10TR3/2黒褐色土 基性なし しまりなし 植物樹木 P56と重複 (新)
P 67	RB006	45	37	46	122.445	10YR2/2黒褐色土 やや砂質 基性ややあり しまりなし 稠灌
P 69	RB006	83	56	37	122.596	10YR2/1黒褐色土 基性ややあり しまりなし 小灌
P 70	RB006	58	48	30	122.680	-
P 74	RB006	61	55	56	122.749	10YR2/1黒色土 基性ややあり しまりやまろなし 小灌含
P 75	RB006	46	36	28	122.748	10YR2/2黒褐色土 基性なし しまりなし やや砂質
P 78	RB006	65	52	39	122.615	10YR2/2黒褐色土 基性ややあり しまりややあり 植物豊あり 稠灌若干含
P 51	RB007	51	48	44	122.585	10YR2/2黒褐色土 基性ややあり しまりややあり
P 52	RB007	54	44	40	122.585	-
P 53	RB007	58	45	42	122.562	10YR2/2黒褐色土 基性なし しまりやまろなし 植物根柢みて多
P 57	RB007	60	49	38	122.702	10YR2/2黒褐色土 基性ややあり しまりやまろなし 10YR2/6 褐色砂含
P 60	RB007	74	55	52	122.445	10YR2/2黒褐色土 基性なし しまりなし 小灌若干含
P 61	RB007	46	42	7	121.915	10YR2/1 黒色土 基性やややあり しまりややあり 小灌含
P 63	RB007	55	50	32	122.638	10YR2/2黒褐色土 基性ややあり しまりややあり 小灌含
P 65	RB007	62	51	34	122.580	10YR2/2黒褐色土 基性ありまろなし しまりやまろなし 小灌、植物根柢多

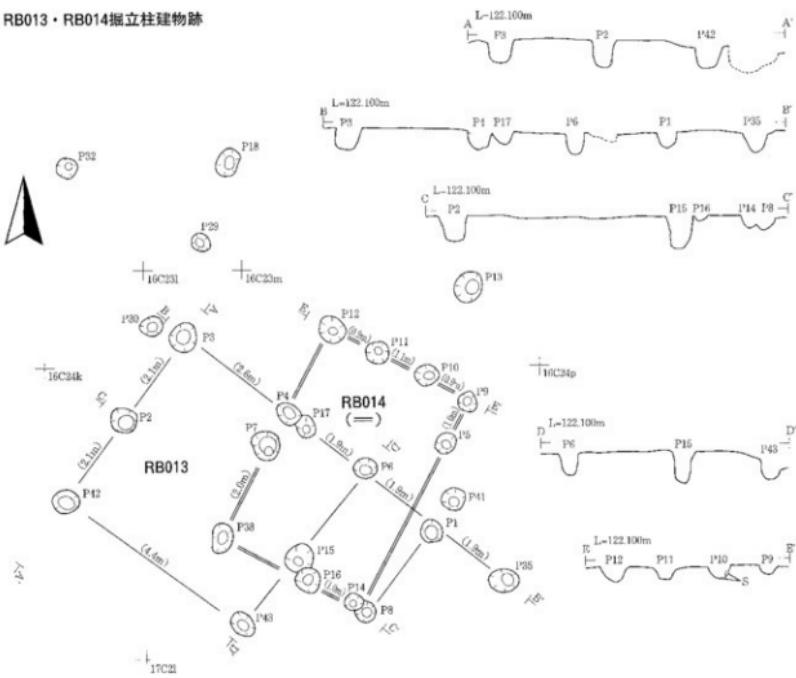
第7図 RB006・RB007掘立柱建物跡



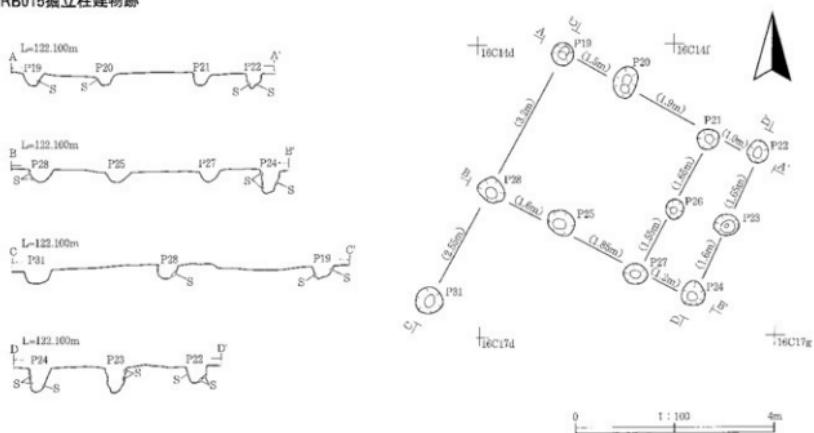
第8図 BB009・BB010・BB011・BB012掘立柱建物跡

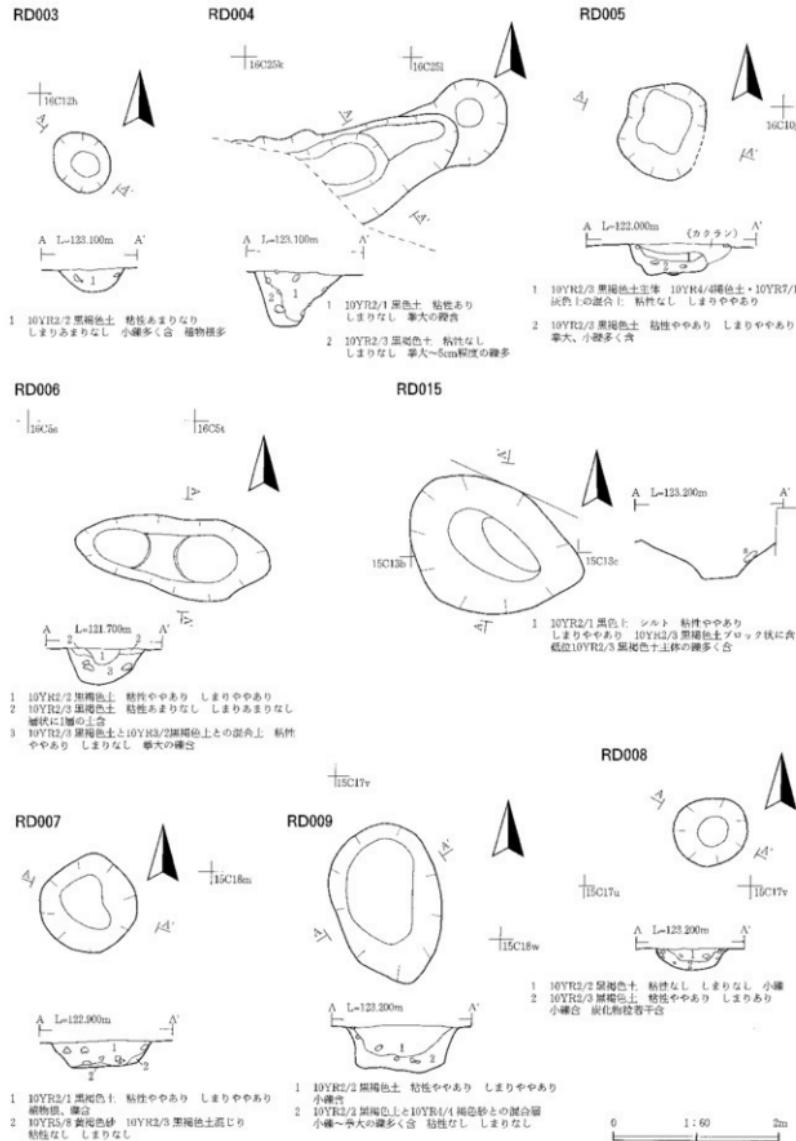
透構名	建物名	延長(cm)	短辺(cm)	横張(cm)	壁厚(cm)	理上状況
P103	R3009	47	45	23	122.952	10YR2/1黒色土 粘性あまりなし しまりあまりなし やや砂質
P109	R3009	43	40	32	122.878	10YR2/1黒色土 粘性あまりなし しまりあまりなし
P110	R3009	35	28	27	122.845	10YR2/1黒色土 粘性あり しまりあり
P112	R3009	34	28	36	122.746	10YR2/1黒色土 粘性あり しまりあり
P116	R3009	41	34	23	122.885	10YR2/1黒色土 粘性あり しまりあり 10YH5-6黄褐色ブロック状に入る
P117	R3009	50	44	47	122.659	10YR2/1黒色土 粘性ややあり しまりやや 感度砂質
P124	R3009	50	42	43	122.762	10YR2/1黒色土 粘性あまりなし しまりあまりなし
P125	R3009	(57)	(30)	34	122.760	

RB013・RB014据立柱建物跡



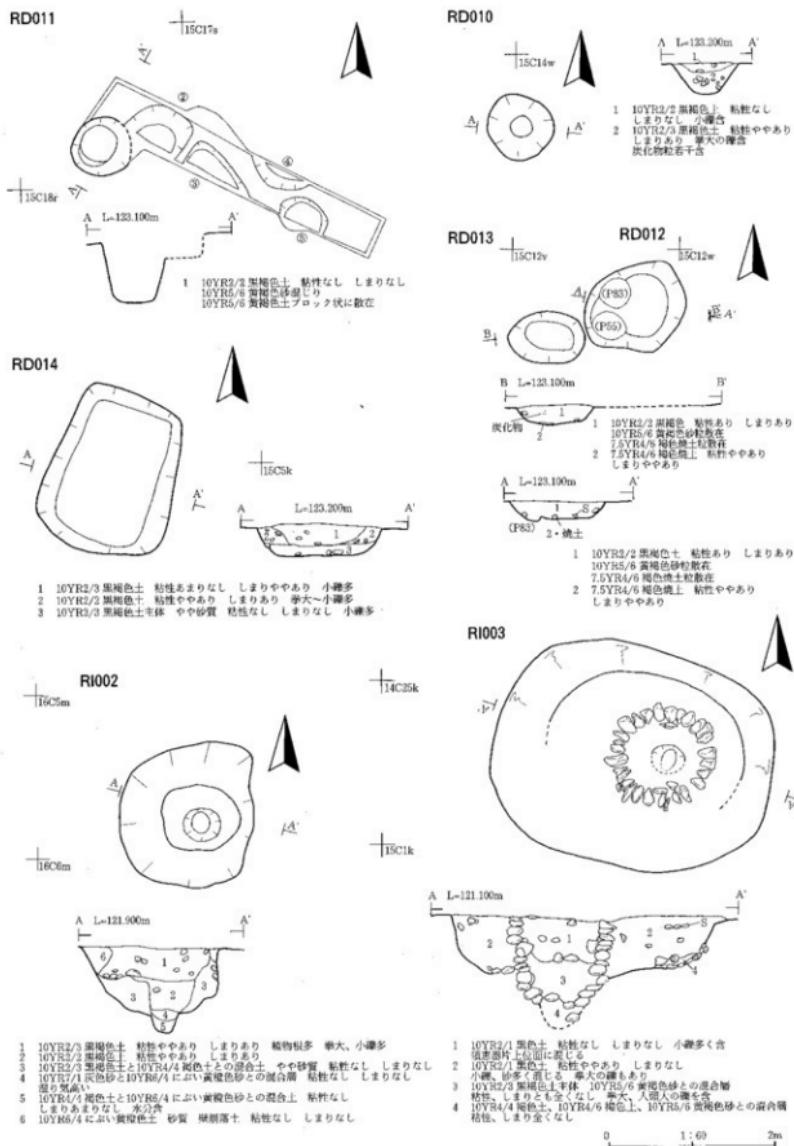
RB015据立柱建物跡



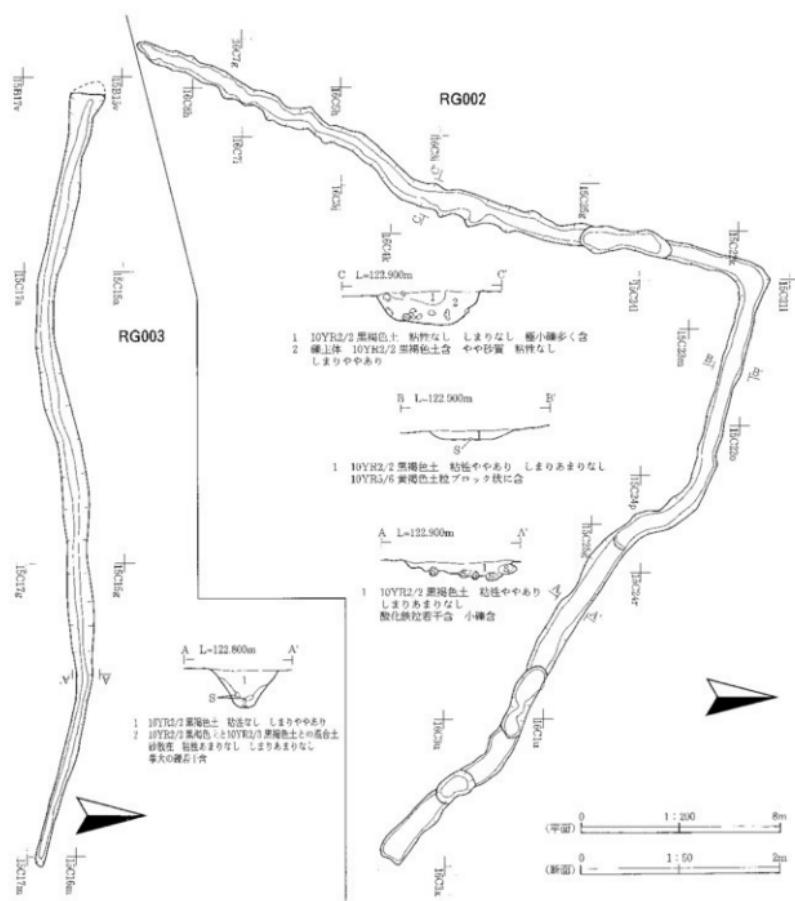


第10図 土坑(1)

(4) 焼野遺跡 第2次調査



第11図 土坑(2)・井戸跡



通構名	造物名	長径(cm)	短径(cm)	最深(cm)	重量(g)	埋 土 状 況
P'91	RB010	57	52	36	122.812	
P'94	RB010	48	44	44	122.723	10YR2/2 黒褐色土 粘性やあり しまりあまりなし 小礫多
P'96	RB010	50	38	30	122.591	10YR2/2 黒褐色土 粘性やあり しまりなし やや砂質
P'105	RB010	52	46	34	122.690	10YR2/1 黑色土 粘性やあり しまりあり 小礫や含 上面に人頭大の礫あり
P'106	RB010	68	51	42	122.709	
P'89	RB011	60	54	45	122.720	10YR2/2 黒褐色土 粘性やあり しまりあまりなし 人の頭多く含
P'92	RB011	45	35	25	122.950	10YR2/2 黒褐色土 粘性やあり しまりあり P'90と重複(断?)
P'98	RB011	60	56	31	122.812	10YR2/2 黒褐色土 粘性やあり しまりややあり 小礫多 やや砂質
P'100	RB011	71	66	61	122.625	10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまりあまりなし やや砂質
P'102	RB011	70	55	30	122.744	10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまりややあり 小礫多
P'104	RB011	54	(47)	42	122.655	10YR2/2 黒褐色土 粘性あまりなし しまりややあり やや砂質 雜多 P'121と重複(断?)
P'114	RB011	51	46	26	122.832	10YR2/2 黒褐色土 粘性あまりなし 10YR5/6 黄褐色砂多く含 粘性あまりなし やや砂質
P'123	RB011	41	37	17	122.895	10YR2/2 黃褐色土 粘性あまりなし しまりあまりなし やや砂質 小礫含

第12図 溝跡

第1表 その他 柱穴土坑表(細立柱建物跡含)

()は推定値

遺構名	建物名	長径(cm)	短径(cm)	被覆(cm)	地盤型(①)	埋土状況	
						10YR2/2黒褐色土	粘性やあり しまりややあり
P90	RB012	58	56	19	122.995	10YR2/2黒褐色土	粘性やあり しまりややあり
		(47)	(35)	38	122.825	10YR2/2黒褐色土	粘性やあり しまりややあり 小裡多 P10と重複 (旧)
P95	RB012	65	61	23	122.928	10YR2/1黒褐色土	粘性やあり しまりややあり 小裡多
P97	RB012	60	55	22	122.968	10YR2/2黒褐色土	粘性やあり しまりややあり やや砂質 小裡多
P99	RB012	68	60	24	122.919	10YR2/2黒褐色土	粘性やありなし しまりややあり やや砂質
P101	RB012	57	55	33	122.770	10YR2/2黒褐色土	粘性やあり しまりややあり 小裡多
P113	RB012	61	55	24	122.847	10YR2/2黒褐色土	粘性やありなし しまりややあり 小裡多 やや砂質
P120	RB012	56	49	22	122.892	10YR2/2黒褐色土	粘性やあり しまりややあり 第6の例あり
P1	RB013	50	46	40	122.852	10YR2/1黒褐色土	粘性やありなし しまりややあり 小裡少 やや砂質
P2	RB013	58	50	53	122.442	10YR2/1黒褐色土	粘性やありなし しまりややあり 小裡多 やや砂質
P3	RB013	61	59	49	122.514	10YR2/1黒褐色土	粘性やありなし しまりややあり 小裡多 やや砂質
P4	RB013	52	42	37	122.554	10YR2/2黒褐色土	粘性なし しまりなし 第4・小裡多・合
P6	RB013	47	44	43	122.455	10YR2/2黒褐色土	粘性やあり しまりややあり 小裡多 上面黄褐色土合
P8	RB013	44	42	26	122.670	10YR2/2黒褐色土	粘性ややあり しまりややあり 小裡多 P14と重複 P14よりH
P15	RB013	60	56	63	122.325	—	—
P35	RB013	65	47	43	122.473	10YR2/2黒褐色土	粘性ややあり しまりややあり 小裡合 上面埋没
P42	RB013	56	48	44	122.402	10YR2/2黒褐色土	粘性ややあり しまりややあり 小裡多 やや砂質
P43	RB013	55	43	43	122.342	10YR2/1黒褐色土と混合土	粘性ややあり しまりややあり 小裡多 やや砂質
P5	RB014	47	42	50	122.654	10YR2/2黒褐色土	粘性ややあり しまりややあり 小裡多
P7	RB014	64	54	50	122.644	10YR2/2黒褐色土	粘性ややあり しまりややあり 小裡多
P9	RB014	44	31	22	122.742	10YR2/2黒褐色土	粘性なし しまりなし 小裡合
P10	RB014	53	44	26	122.705	10YR2/2黒褐色土	粘性ややあり しまりややあり 小裡多 P14と重複 P14よりH
P11	RB014	48	46	24	122.685	10YR2/2黒褐色土	粘性なし しまりなし 小裡合 低位埋あり
P12	RB014	62	55	29	122.656	10YR2/2黒褐色土	粘性なし しまりなし やや砂質 上位而埋多
P14	RB014	38	35	24	122.700	10YR2/2黒褐色土	粘性なし しまりなし 小裡多 P3と重複 P3より新しい
P16	RB014	56	47	20	122.754	10YR2/2黒褐色土	粘性なし しまりややあり 小裡合
P38	RB014	62	42	34	122.576	10YR2/2黒褐色土	粘性ややあり しまりややあり 小裡合
P19	RB015	49	45	27	122.712	10YR2/2黒褐色土	粘性なし しまりややあり 小裡多
P20	RB015	66	46	21	122.712	10YR2/2黒褐色土	粘性なし しまりややあり 小裡多 事人埋多
P21	RB015	43	39	24	122.700	10YR2/2黒褐色土	粘性なし しまりややあり 小裡多
P22	RB015	45	42	33	122.621	10YR2/2黒褐色土	粘性ややあり しまりややあり 人に脊大の腰あり
P23	RB015	51	44	54	122.412	10YR2/2黒褐色土	粘性ややあり しまりややあり 小裡多 小理合
P24	RB015	51	46	49	122.455	10YR2/2黒褐色土	粘性ややあり しまりややあり 小裡多 小裡若干
P25	RB015	61	50	23	122.715	10YR2/2黒褐色土	粘性ややなりなし しまりややなりなし 小裡、植物很多
P26	RB015	43	35	34	122.608	10YR2/2黒褐色土	粘性なし しまりなし 小裡多
P27	RB015	50	46	27	122.668	10YR2/2黒褐色土	粘性ややなりなし しまりなし 小裡多
P28	RB015	60	51	29	122.734	10YR2/2黒褐色土	粘性ややなりなし しまりなし 小裡、植物很多
P31	RB015	57	55	29	122.655	10YR2/2黒褐色土	粘性なし しまりなし 小裡、植物很多 (追より多め)
P13		65	55	60	122.296	10YR2/2黒褐色土	粘性なし しまりなし 上位而埋多 やや砂質
P17		46	36	25	122.662	10YR2/2黒褐色土	粘性あまりなし しまりあまりなし 神合
P18		59	44	27	122.696	10YR2/2黒褐色土	粘性なし しまりなし 小裡多 やや砂質
P29		41	35	42	122.570	10YR2/2黒褐色土	粘性ややなりなし しまりあまりなし 小裡多 植物很多
P30		49	44	29	122.700	10YR2/2黒褐色土	粘性なし しまりなし 小裡、植物很多 やや砂質
P32		44	41	43	122.550	10YR2/2黒褐色土	粘性なし しまりなし 小裡、植物很多 やや砂質
P33		47	44	29	122.665	10YR2/2黒褐色土	粘性ややなりなし しまりあり 小裡多 植物很多 P34と重複
P34		44	41	29	122.744	10YR2/2黒褐色土	粘性あまりなし しまりあり 小裡多 植物很多 P33と重複
P36		47	37	39	122.586	10YR2/2黒褐色土	粘性あまりなし しまりなし 小裡多 植物很多
P37		40	38	24	122.730	10YR2/2黒褐色土	粘性あまりなし しまりなし 小裡合 P40と重複 (旧)
P39		42	37	26	122.720	10YR2/2黒褐色土	粘性ややあり しまりなし
P40		65	41	26	122.672	10YR2/2黒褐色土	粘性なし しまりあり やや砂質 多 P37と重複 (新)
P41		48	44	36	122.558	10YR2/2黒褐色土	粘性なし しまりなし やや砂質 踵多く入る
P58		52	42	51	122.522	—	—
P64		63	57	61	122.598	—	—
P72		62	49	19	122.754	10YR2/2黒褐色土	粘性ややあり しまりややあり
P76		55	45	27	122.628	10YR2/2黒褐色土	粘性ややあり しまりややあり
P81		69	(56)	40	122.525	10YR2/2黒褐色土	粘性あまりなし しまりあまりなし 小裡合
P82		50	45	43	122.395	10YR2/2黒褐色土	粘性あまりなし しまりあまりなし 砂質じり小裡合
P86		65	(37)	38	122.520	—	—
P88		65	62	59	122.370	—	—
P107		46	43	33	122.838	—	—
P108		48	46	46	122.692	10YR2/2黒褐色土	粘性ややあり しまりややあり
P111		44	40	21	122.935	10YR2/2黒褐色土	粘性ややあり しまりあり シルト質
P115		61	54	26	122.945	10YR2/2黒褐色土	粘性あまりなし しまりあまりなし やや砂質 小裡合
P118		38	35	20	122.962	10YR2/2黒褐色土	粘性ややあり しまりあまりなし 小裡多
P119		46	40	31	122.840	10YR2/2黒褐色土	粘性ややあり しまりややあり
P121		58	36	42	122.753	P104と重複 (旧)	—
P122		(61)	(24)	37	122.825	P91・P93と重複	—



調査区遠景（南から）



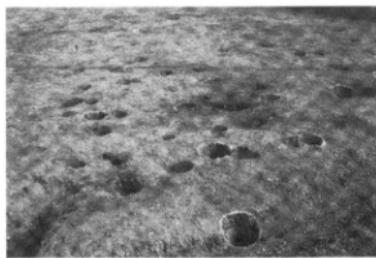
調査前風景



RB006 完掘（北から）



RB006 完掘（南から）

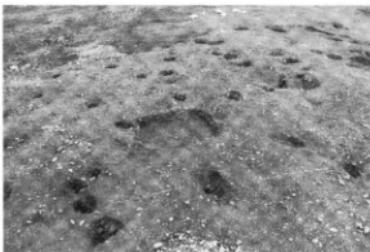


RB013、RB014 完掘

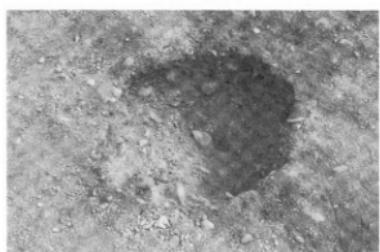
写真図版1 航空写真・調査前風景・検出遺構（1）



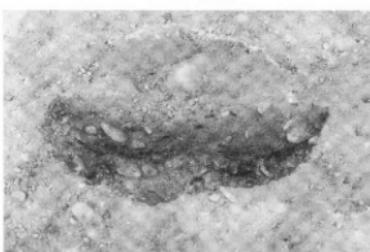
RB015 完掘



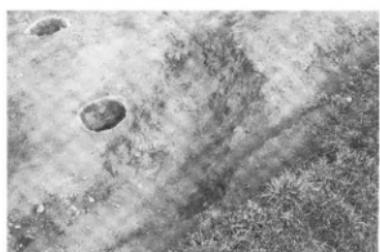
RB009 完掘



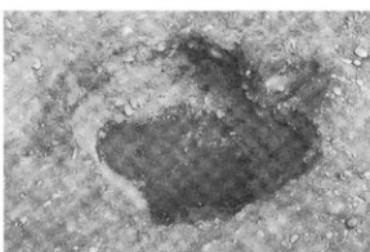
RD003 完掘



RD003 断面



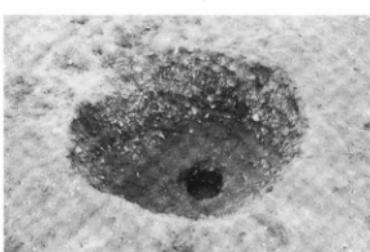
RD004 完掘



RD005 完掘

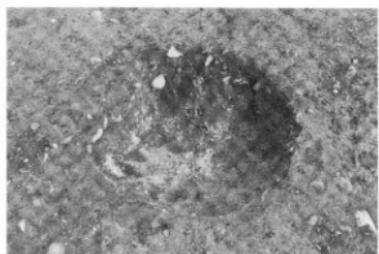


RD006 完掘

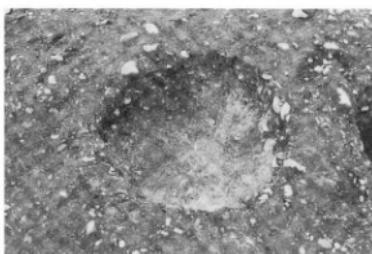


RI002 完掘

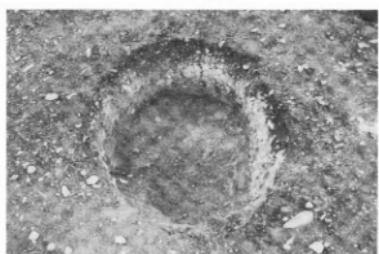
写真図版2 掘出遺構(2)



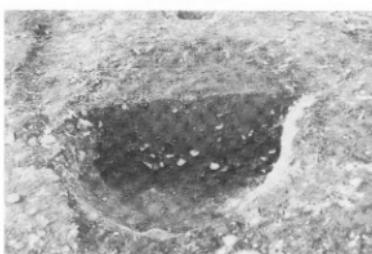
RD007 完掘



RD008 完掘



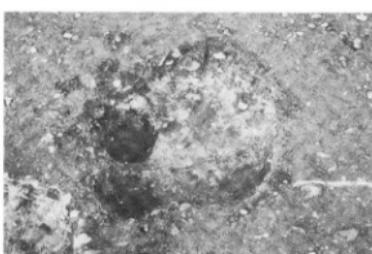
RD009 完掘



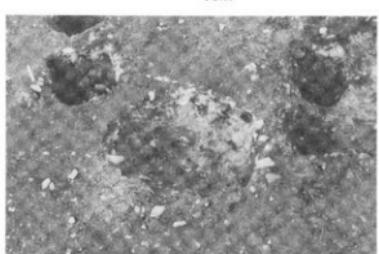
RD009 断面



RD011 完掘



RD012 完掘



RD013 完掘



RD013 断面



RI003 完掘



RI003 断面



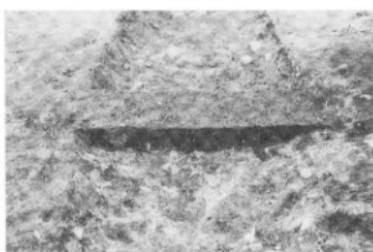
RD014 完掘



RG002 完掘



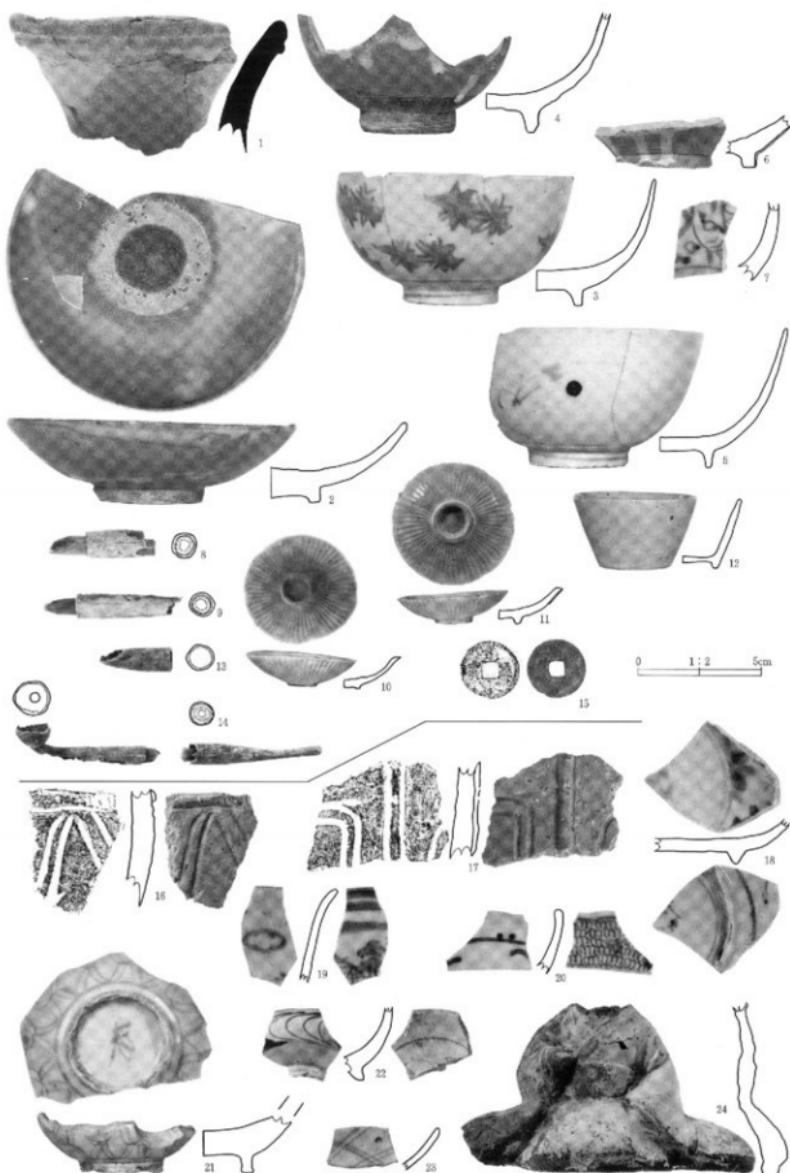
RG003 完掘



RG002 断面



RG003 断面



写真図版5 出土遺物（上段：遺構内、下段：遺構外出土）

(4) 焼野遺跡 第2次調査

第2表 遺物観察表

掲載番号	登録番号	出土地点	附位	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)	時代	産地	()は推定値 []は残存値	
1	7	R1003	埋土	須恵器	長颈瓶	頸部	(8.8)	—	[5.4]	93.5	IV期	肥前	見立ゾノ目袖ハギ	縄縹模
2	10	P20(RB013)	埋土	須恵器	皿	口～底	(11.6)	4.2	3.2	104.3	IV期	肥前	見立ゾノ目袖ハギ	縄縹模
3	11	P20(RB013)	埋土	須恵器	碗	口～底	(9.8)	3.8	5.2	111.1	IV～V	肥前	柴付	紅葉文
4	12	F40(RH053)	松山田	須恵器	碗	口～底	—	4.0	[4.9]	82.7	IV期	肥前	舟子褐色	
5	13	F40(RH053)	松山田	須恵器	碗	口～底	(10.2)	(4.2)	5.8	69.4	IV期	肥前	舟付	見立便ノ舟袖ハギ 紅葉文
6	8	RJ002	埋土	須恵器	碗?	底部	(5.4)	[2.1]	25.3	IV期	肥前	舟付	見立便ノ舟袖ハギ 紅葉文	灰釉 平底水?
7	9	RJD008	埋土	須恵器	碗	体部	—	—	—	9.0	19c～	浦戸	染付	草花文
10	20	RJD011	底部	須恵器	豆皿	光形	4.5	1.2	1.3	8.4	V期	肥前	肥前?	
11	23	RJD011(5)	埋土	須恵器	豆皿	光形	4.9	1.6	1.3	14.0	V期	肥前	肥前?	
12	24	RJD011(5)	埋土	須恵器	豆皿	元形	5.1	2.1	2.9	26.4	V期	肥前	透明白釉	
16	2	15C1617	日置下	須文士西	深鉢	側部	—	—	—	19.0	中古後半	日置下	平行文線	
17	4	15C1617	日置下	須文士西	深鉢	側部	—	—	—	29.0	中古後半	日置下	平行文線 棚位の鏡沈継	
18	14	15C1514	日置下	須恵器	皿?	底尾	(8.5)	[1.8]	19.6	IV期	肥前	見立五輪花「人頭化文」?鏡		
19	15	15C208～t	袖山田	須恵器	大皿	口～体	—	—	[4.1]	5.0	IV期	肥前	舟付	風景文
20	16	15C208～t	袖山田	須恵器	皿?	口縁部	—	—	[2.7]	5.4	IV期	在地	朱付唐草文	輪花
21	17	15C208～t	袖山田	須恵器	小皿?	口～底	(4.1)	[2.8]	78.9	V期	浦戸	二重圓口文	昆蟲文?	
22	18	15C208～t	袖山田	須恵器	小皿	体部	—	—	[3.0]	8.9	19c	在地	菊?	
23	19	15C13(5)付	日置下	須恵器	皿	口縁部	—	—	[1.7]	5.4	IV期	肥前	舟付	重格子文
24	28	15C13(5)付	日置下	須恵器	人形	体部	幅12.1	高7.0cm	—	73.8	IV期	肥前	厚さ	0.7～1.0cm 輪

掲載番号	登録番号	出土地点	附位	種別	器種	部位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(mm)	重量(g)	()は推定値		備考
											推定値	残存値	
15	27	15C7H付	検出面	古戦	瓦束	略元	3.45	—	1.0	3.29	厚感著しい		

掲載番号	登録番号	出土地点	附位	種別	器種	部位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(mm)	重量(g)	()は推定値		備考
											推定値	残存値	
8	21	RD011②	底部	須恵器	網製品	キセル	肩	(4.0)	1.0	0.5	2.3	繩文の竹の一方に加工痕あり	
9	22	RD011②	底部	須恵器	網製品	キセル	肩	(5.6)	[9.5]	[1.0]	3.1	IV～V期 (18c後半～9c中)	
13	25	RD013	埋土	須恵器	網製品	キセル	肩	(3.1)	1.1	1.0	3.7	IV期～ (18c後半～)	背腹張り
14	26	RD013	底部	須恵器	網製品	キセル	腰完	(12.1)	0.9	1.0	6.3	IV期 (18c後半)	背腹張りなし 肩付なし

報告書抄録

ふりがな 書名 副書名 巻次 シリーズ名 シリーズ番号 編集者名 編集機関 所在地 発行年月日 ふりがな 所収遺跡名	heiisei ni jiyuu ne nondo hattukuchouうさほうこくしょ 平成20年度発掘調査報告書 焼野遺跡 第2次調査 第1回 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第546集 木戸口俊子 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001 西暦 2009年3月18日 ふりがな 所収遺跡名	コード 市町村 遺跡番号 北緯 東経 調査期間 調査面積 調査原因											
やの の いせき 焼野遺跡 じょうの じけき 第2次調査	いわて けんぶんじぎ 岩手県盛岡市 まちのなかでんじせんじょ 4地割焼野 53-3ほか	03201	LE26-0271	39度	141度	2008.09.08	~	5,019m ²		盛岡新都市 土地区画整理 事業			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構 主な遺物 特記事項										
焼野遺跡 第2次調査	集落跡	近世 ～現代	掘立柱建物跡12棟 土坑 井戸跡 溝跡 柱穴状土坑	須恵器 近世陶磁器 古墳時代中期の土器や石器	縄文土器・石器 須恵器 近世陶磁器 古墳時代中期の土器や石器								
要約	同年に行われた焼野遺跡の西隣地での調査である。焼野遺跡で検出された掘立柱建物跡の一部が見つかった集中区では5棟、そのほか3箇所に集中して掘立柱建物が見つかった。また土坑や井戸跡、墓壙も確認された。周辺では黒色土中から縄文時代中期の土器や石器が見つかったが、同時代の遺構は検出されず、第1次調査同様、近世以降の集落地が広がっていることがわかった。												

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

いいおかいかわ
(5) 飯岡才川遺跡 第15次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田2地割110-1ほか
委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間 平成20年11月6日～11月14日

遺跡コード・略号 LE16-2291・ISW-08-15
調査対象面積 410m²
調査終了面積 410m²
調査担当者 金子昭彦・木戸口俊子

1 調査に至る経過

盛岡南新都市土地区画整理事業は、平成2年9月に岩手県、盛岡市、都南村（当時）の三者が地域振興整備公団（現、独立行政法人都市再生機構）に対して事業要請を行い、これを受け公団が実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成3年度から面積約313haを対象とした土地区画整理事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取扱についても協議が重ねられた。その結果、本調査に関しては、盛岡市教育委員会が試掘調査を行って本調査を必要とする範囲を確定した上で、財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

飯岡才川遺跡第15次調査については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成20年度の事業として確定した。これを受け、平成20年6月3日に財団法人岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長の間で委託契約を締結した。

（盛岡市都市整備部盛岡南整備課）



第1図 遺跡の位置

2 遺跡の位置と立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南に約2kmに位置し（第1図）、零石川によつて形成された冲積段丘上および周開の旧河道に立地する。推定面積は約62,000m²、標高は120～124mである。

3 基本層序

I層 表土（耕作土）。層厚20～30cm。

II層 黒褐色土。クロボク土。旧河道にしか残っていなかった。層厚0～40cm。平安時代の遺構は、本来的には、この層の上部で検出されるはずである。

III層 暗褐色土。漸移層。層厚0～20cm。

IV層 黄褐色土。粘土質だが地点により砂質。層厚0cm～不明。

V層 黄褐色砂礫。黒褐色部分もある。層厚不明。

4 調査の概要（第3図）

調査区は道路予定地で、現況は、大部分が畠、北端は板金工作所の一部だったらしい。南半分に北東～南西方向に延びる旧河道を検出、その北側は、北西から南東に下る斜面になっていたが、北端は深くカクランされている。カクラン手前、調査区で最も高い地点は、削平されて砂利が露出していた。遺構は、旧河道とカクランの間に平安時代の土坑1基が検出された。遺物は、近世末以降の陶磁器を除けば、平安時代の土師器、須恵器のみで、ほとんどが表土、カクランからの出土であり、旧河道からは1点出土しただけである。調査区内の標高は122m前後。

旧河道は、最深で60cm程度、底は広く平ら、II層で覆われ、斜面に古い風倒木痕が認められた（深さ50cmまで下げたが、底未確認）。北端のカクランは、深さ1mにもおよぶ穴になっていた。底部直上20～30cmは黄褐色砂層がてん压されているようで、底部は酸化鉄が認められ水につかっていたと思われる。この他にも、旧河道に面する高い部分には水道管や耕作時のものと思われるカクランが多い。

（1）遺構

RD159土坑（第4・5図）

＜位置・検出状況＞北寄りの斜面上方。旧河道のクロボク土が途切れた、北端のカクラン手前で検出。表土直下20cm、IV層面で明瞭に検出。-1H1～21グリッド。＜重複＞ないと思うが、耕作時のカクランを大きく受け、検出状況から、大きく削平されているようだ。＜精査状況・図＞半段時、底がカクランを受けていて不明瞭だったので、サブトレーナーを入れた。A側の上場、完掘時掘り広がったため、断面図と合わない。＜覆土＞含有物の違いで二層に分けられるが、単層に近いか。＜平面形・規模＞直径約80cmのほぼ円形。＜断面形・深さ＞浅皿状。約15cm。＜壁・底＞斜面のため、壁は、北西側V層砂利層、他はⅢ～IV層。底はIV層。根穴の黒ボツが見られた。＜出土遺物＞土師器坏小片が出土（第5図1）。＜時期＞覆土と出土遺物から、平安時代と思われる。

（2）遺物（第5図）

土師器が十数片202.65g、須恵器が十数片811.96g出土した。土師器の、RD159土坑5.34g（第5図1）、II層31.18g（第5図2）以外、全て表土、カクランの出土である。ほとんどが9世紀後半～10世紀前半と思われる。不掲載土師器は、細片ばかりで、2～3片の坏片を除けば壺がほとんど（底1点、他は胴部）、不掲載須恵器は、比較的大きな破片が多い（2点壺胴部片、他は大壺の胴部片）。

5 まとめ

今回の調査区は、遺跡の北端に近く、遺構、遺物の出土は僅かだったが、これまで旧河道南側には多く認められている（第2図）。詳細は、当センターの報告書第393・494・515集等を参照。

なお、飯岡才川遺跡第15次調査に関わる報告は、これをもって全てとする。

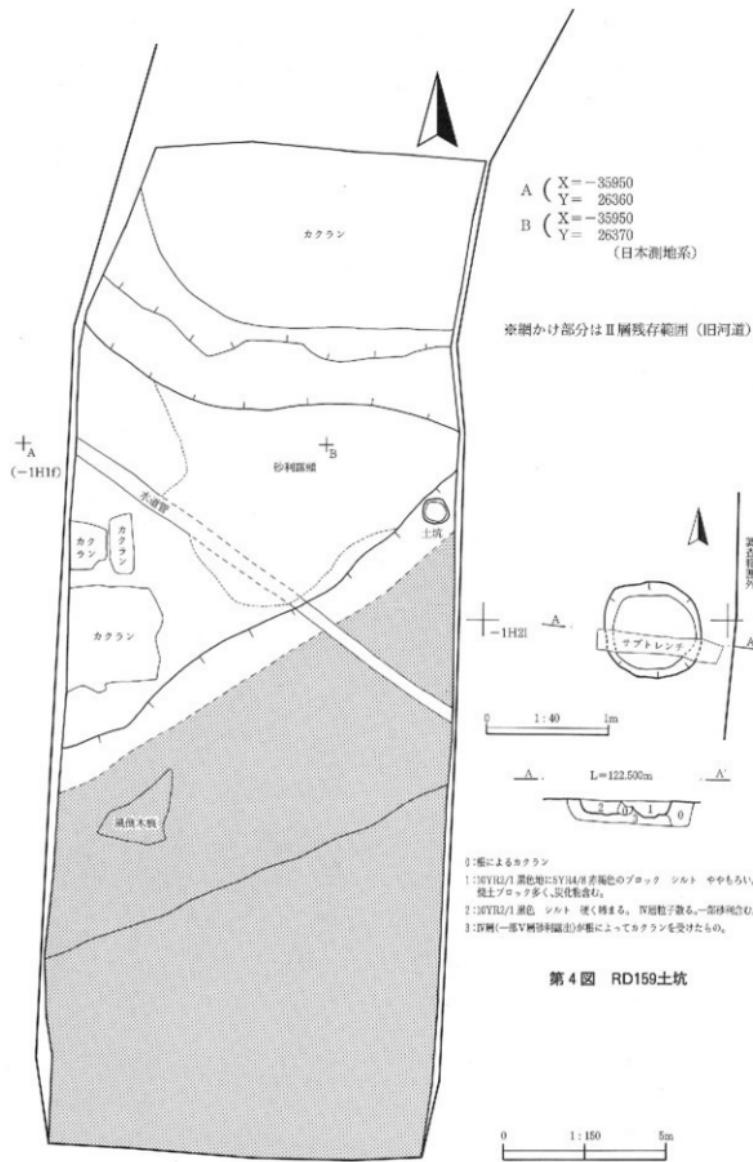
報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうねんどはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成20年度発掘調査報告書							
副書名	飯岡才川遺跡 第15次調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第546集							
編集者名	金子昭彦							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦 2009年3月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
いわきあいせき 飯岡才川遺跡 だいじゅうご 第15次調査	もりおかし いわき市 盛岡市飯岡 みどり みどり 新田2地割 110-1ほか	03201	LE16-2291	39度 40分 45秒	141度 08分 04秒	2008.11.06 ~ 2008.11.14	410m ²	盛岡南新都市 土地区画整理 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
飯岡才川遺跡 第15次調査	集落跡	平安時代	土坑 1基	土器片十数片 202.65 g 須恵器片数片 811.96 g				
要約	今回の調査区は、南半は旧河道、北半は大きく削平され、その境界に当たる位置から土坑が検出されたのみである。							

※緯度・経度は世界測地系における数値である。



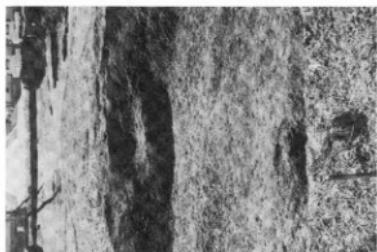
第2図 調査箇所（網部分）と周辺の調査区（上が北、1:2,000）（太線は遺跡推定範囲）



第4図 RD159土坑



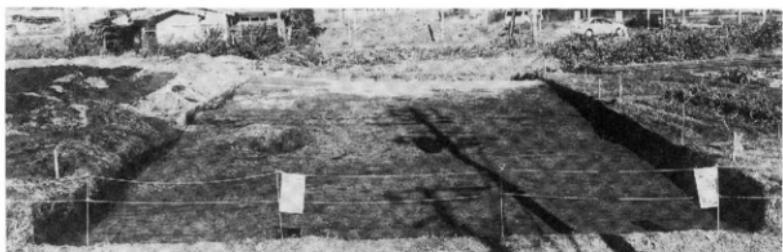
調査区全景（西から）



調査区南端



調査区中央



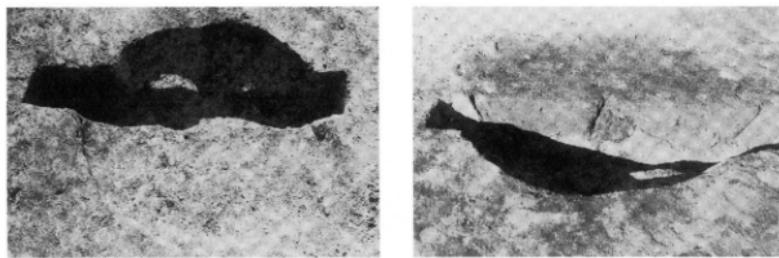
調査区南端（旧河道）



調査前風景（北から）

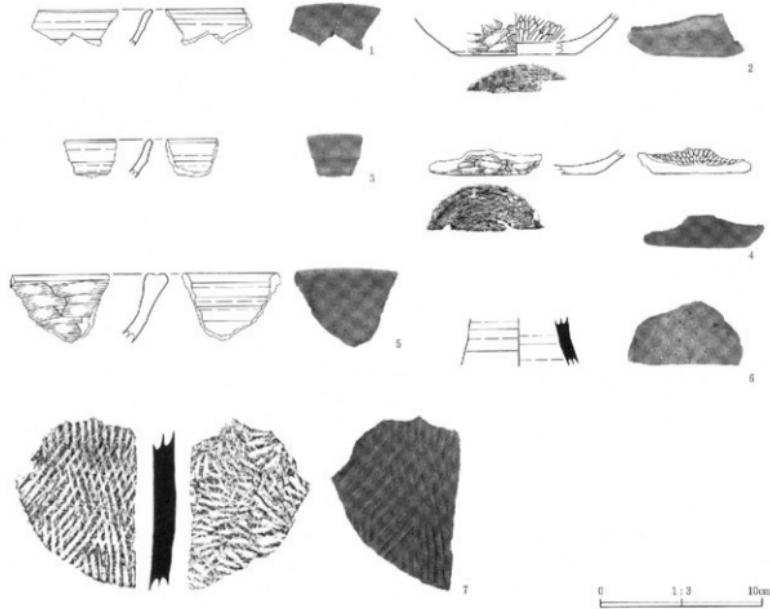


調査前風景（南東から）



RD159土坑

写真図版2 第15次調査区(2)



飯岡才川遺跡遺物観察表

No.	出土地点・層位	土種・部位	残存状況	外曲(口縁部/腹部/底部)	内面(口縁部/胴部/底部)	備考
1	第1号土坑、表土(側面3:2)	土頭、环・口縁	小片	ロコロナデ	ミガキ	粘土に沙・内面や少少剥・二片合
2	裏層(田河底)	土頭、环・底	1/4周	ロコロナデ?底:目地へラケズ!	ミガキ	粘土全周目立つ・内面黒色處理・外や少少毛
3	表土	上頭、环・口縁	小片	ロコロナデ	ロコロナデ	内面黒色
4	表土	土頭、环・底	1/3周	ロコロナデ?底:剥離系剥	ミガキ?	内面黒色處理
5	表土	上頭?、瓶?, 口	小片	ロコロナデ	ロコロナデ	粘土全周目立つ・表面黒質・壁に鉛付石
6	トレンチ準備・表土	須無、瓶・底	1/3周	ロコロナデ	ロコロナデ	内面黒色物付石・外全黒質
7	表土	須無、大環・脚	小片	平行テクノ目状並て具眼	平行テクノ目状並て具眼	

第5図 出土遺物

(6) 上平Ⅲ遺跡

所 在 地 二戸市米沢字上村104ほか
委 託 者 農林水産省東北農政局馬淵川沿岸農業水利事業所
事 業 名 国営馬淵川沿岸農業水利事業
発掘調査期間 平成20年4月9日～4月30日

遺跡コード・略号 IE99-2218 • KTⅢ-08
調査対象面積 250m²
調査終了面積 250m²
調査担当者 北田 熊・佐藤あゆみ

1 調査に至る経過

上平Ⅲ遺跡は、「国営馬淵川沿岸農業水利事業 男神支線用水路（その1）工事と（その2）工事」の施行に伴い、その事業区域内に埋蔵文化財が存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

男神支線用水路は、一級河川馬淵川から米沢揚水機場のポンプアップにより取水されたかんがい用水を米沢吐出水槽へ送水する左岸幹線用水路から直接分水される。支線用水路途中で二戸市米沢地内で約30ha、途中、男神加圧機場により男神吐出水槽へ加圧、以降自然流下により、二戸市男神地内約30haの畑にかんがいするためのパイプラインである。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成19年6月13日付19馬淵第264号「馬淵川沿岸農業水利事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成19年9月11日、10月4日、11月27日に試掘調査を実施し、工事に着手するには上平Ⅲ遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成19年12月5日付教生第1036号「馬淵川沿岸農業水利事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当事業所へ回答してきた。

その結果を踏まえて当事業所は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成20年4月1日付で財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することになった。

（農林水産省東北農政局馬淵川沿岸農業水利事業所）

2 遺跡の位置と立地

上平Ⅲ遺跡は、二戸市役所の北西約2.1kmに位置し、馬淵川によって形成された河岸段丘上に立地している。調査区の標高は136～143m、現況は道路（市道上平上村線など）・畑地である。



第1図 遺跡の位置

3 基本層序

調査区内の基本層序は下記の通りである。

基本層序は I ~ XIV 層。I 層は盛土、アスファルト・碎石敷きの舗装道、10YR2/3 黒褐色の耕作土などの表土、II 層 10YR2/2 黒褐色や 10YR1.7/1 黒色などの旧表土、III 層 10YR8/2 灰白色の十和田八戸 (To-a) 純層、IV 層 十和田八戸 (To-b) ・十和田中振 (To-Cu) ・十和田南部 (To-Nb) の火山灰を含む黒褐色土、V 層 黄褐色粘土質土の地山再堆積層 (自然災害層か)、VI 層 To-b を含む 10YR2/1 黑色土 (縄文時代後期前半遺物包含層)、VII 層 To-Cu を含む 10YR2/2~3 黑褐色土、VIII 層 10YR7/6 明黄褐色の To-Cu 純層 (粒径 1~3mm)、IX 層 To-Nb を含む 10YR2/1 黑褐色土、X 層 To-Nb 純層 (粒径 3~30mm)、XI 層 黄橙色の十和田八戸 (To-H) を含む 10YR2/2 黑褐色土、XII 層 黄橙色バミス (To-Hか) を含む 10YR3/3 暗褐色土、XIII 層 灰白バミス (To-Hか) を含む 褐色粘土、XIV 層 黄橙色粘土。

4 調査の概要

(1) 遺構

調査区は林道部分 1.2 × 80m、市道舗装道路部分 1.2 × 41m、ポンプ施設部分 約 100m² に分けられる。林道部分の標高の高い箇所は山裾を削平して造られており、遺構・遺物は確認されなかった。標高が低い箇所は上位を削出した上で 1~2m 盛土が成されており、下位には旧表土が確認されたがこの部分も遺構・遺物は認められなかった。

市道舗装道路部分は調査区で最も標高が低い区域である。調査区は約 5m 幅の市道の西端の舗装を約 1m 幅でカットしたもので、約 3cm 厚のアスファルト下には約 60cm の碎石が敷設されている。旧表土以下は良好に残存しており、To-a・To-Cu・To-Nb の各テフラが面的に堆積している。このうち VI 層下位～VII 層直上から少量の遺物が出土したが、遺構は認められなかった。

ポンプ施設部分は面的に抜げられた唯一の調査区で、約 10 × 10m の四角形の範囲である。包含層である VI 層までは地表から 1~1.5m と深い。この区域にも V 層 地山再堆積層が顕著に認められ、VI 層との不整合性と上部が波状となることから土石流などの自然災害層ではないかと考えられる。VI 層は層厚 20~30cm で、VII 層との境界に遺物が集中する傾向にある。これより下位からは遺物・遺構ともに確認されなかった。

以上の状況から、斜面下位の 1~4・A~E グリッドでは VI 層の遺物包含層 200m² が確認されたが、その他の遺構については見つからなかった。

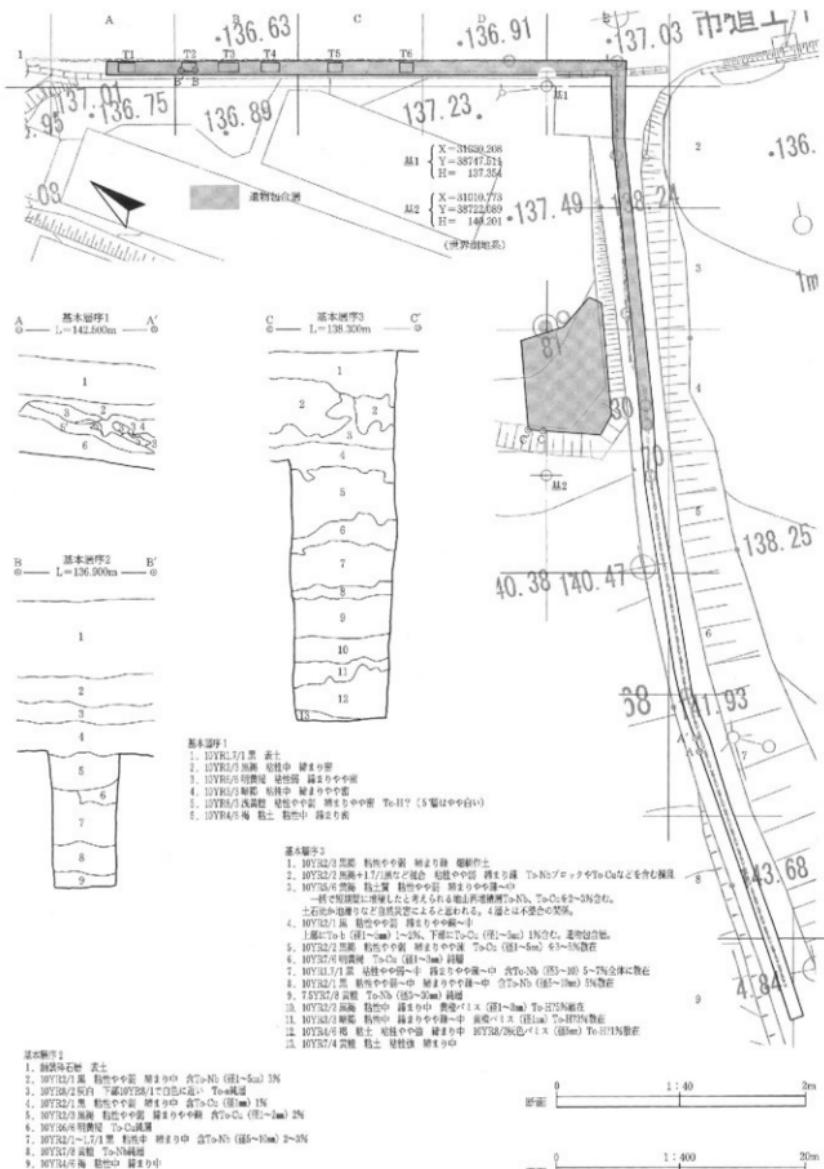
(2) 遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器中コンテナ 1 箱 (約 1,000 片・7642.8g)、土製品 7 点、石器 8 点、平安土器 1 袋である。このうち、1~21 縄文土器、22 土偶、23~28 土製品、29~35 石器、36~38~41 土師器、37 須恵器の計 41 点を掲載した。縄文土器は破片資料が多く器形や文様など不明なものばかりであるが、大半が縄文時代後期初頭～前葉に位置付けられる。2~4 は縄文時代中期前葉と思われる。22 は土偶と思われる脚部、29~32 は剥片石器、33 は磨製石斧の刃部、34・35 は敲磨器類ではなくに特殊磨石 1 点が出土している。36~41 はすべてクロ成形で、36 は土師器環、37 は須恵器環、38~41 は土師器長胴壺であり、いずれも平安時代と考えられる。

5 まとめ

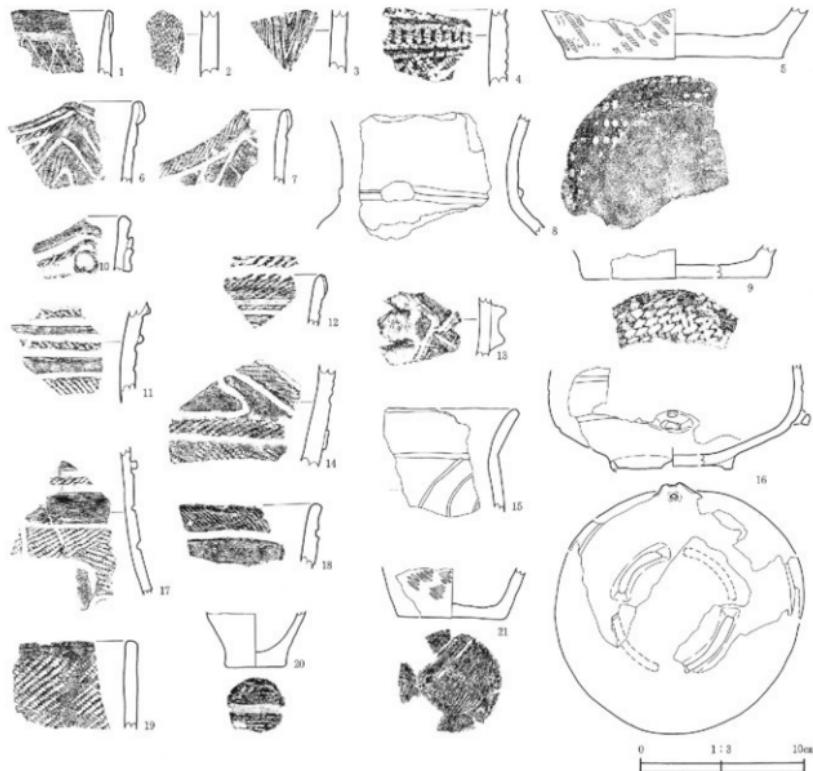
今回の調査は調査区が狭く、遺構は確認されなかったが、縄文時代中期～後期と平安時代の遺物が出土した。遺構は傾斜の緩い調査区東側に抜がっていると見られ、縄文時代と平安時代の複合遺跡である。

なお、上平Ⅲ遺跡平成 20 年度調査に関する報告は、これをもって全てとする。



第2図 諸機配置図・基本層序

(6) 上平三遺跡

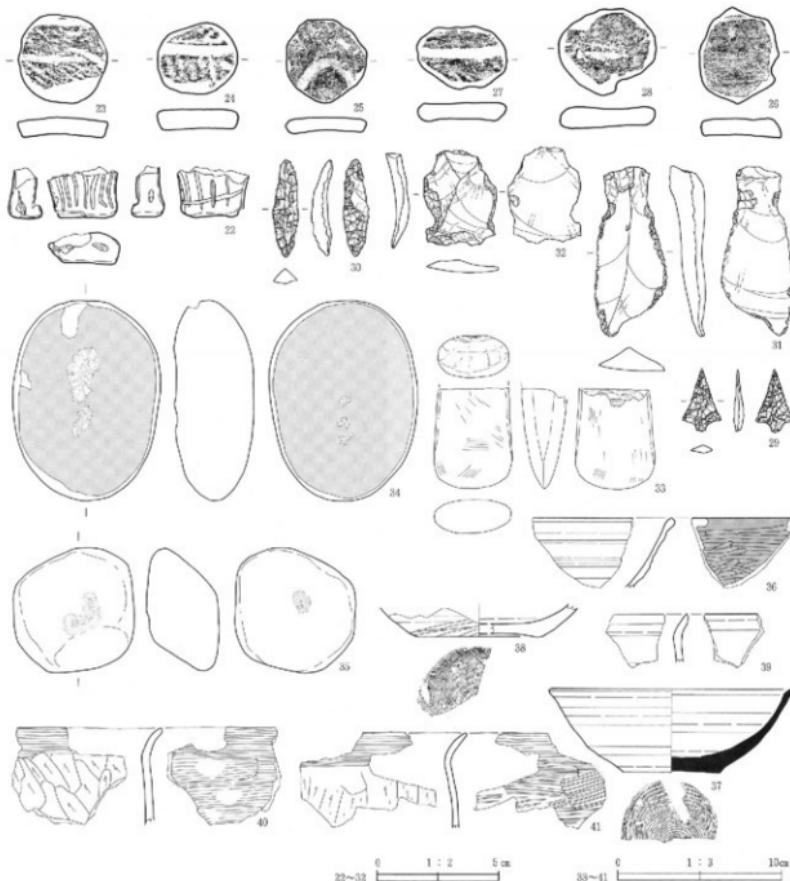


縄文土器觀察表

土製品觀察表

編	出土地点	井位	岩相	残存位置	計測値(cm)			測定(回)	測定・説文など	備考
					長さ	幅	厚さ			
22	4B13	VI面下-中段	上層	下部	(2.2)	(2.2)	(0.9)	0-1-3	0.5	洗浄・端文に直角切削
23	IIC4	VI面-(10-13)上層風化带	上層	先端	3.9	3.7	0.6	0-2-7	0.5	洗浄・端文
24	IIC4	VI面-(10-13)上層風化带	上層	先端	2.9	3.3	0.65-0.8	0-2-7	0.7	洗浄・端文
25	4B22	VI面下-中段	上層	先端	3.6	3.3	0.6-0.8	0-2-7	0.6	洗浄・端文
26	IV面下-中段	上層	先端	4.9	3.6	0.6-0.8	0-2-7	10.5	洗浄・端文	
27	IV面下-中段	上層	先端	5.6	3.6	0.6-0.9	0-2-7	6	洗浄・端文	
28	IV面及-(10-13)上層風化带	上層	先端	5.9	3.0	0.6-0.9	0-2-7	6	洗浄・端文	

第3図 出土遺物（1）



石器觀察表

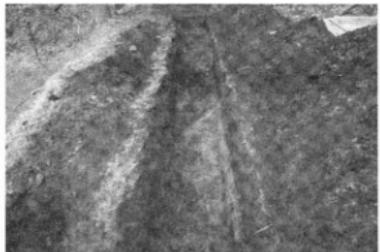
No.	出土地点	場位	器種	石材	計測値(cm)				欠損	自然面	備考
					長さ	幅さ	厚さ	重さ(g)			
29	4B6	遺跡上位	石刃	花崗岩	2.8	1.1	0.7	2.6	無	有	
30	1A25	Ts-Cgに石器搬出上位	石核	花崗岩	3.0	1.1	0.7	2.6	無	無	
31	4ンブ断面北側	粘土下黒褐色土上位	石核	花崗岩	6.9	3.0	1.6	17.3	無	無	
32	4B2	VII層上位	スクレーパー	花崗岩	3.9	2.9	0.8	6.1	無	無	
33	4B11	VII層上位	磨製石斧	閃緑岩	(6.2)	4.9	(2.7)	119.2	基端部	無	切り・削り
34	4B11	VII層上位	磨製石斧	閃緑岩	13.0	9.7	4.8	26.8	無	無	
35	4D10	VII層下位	磨製石斧	ディライト	7.7	7.4	4.6	34.0	有	有	

平安土器觀察表

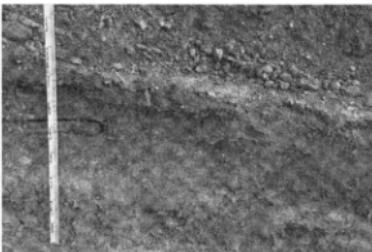
No.	出土地点	場位	器種	石材	残存位置	口径	底径	高さ	重さ	調群・施文など	備考
36	1B5	手取川河岸斜面	土器	粘土	口縁	—	—	—	—	有目	無
37	4C11	河岸斜面	土器	粘土	口縁	—	—	—	—	有目	無
38	1A5	手取川河岸斜面	土器	粘土	口縁	—	—	—	—	有目	無
39	1B5~22	手取川河岸斜面	土器	粘土	口縁	—	—	—	—	有目	無
40	4B1	手取川河岸斜面	土器	粘土	口縁	—	—	—	—	有目	無
41	4D6	手取川河岸斜面	土器	粘土	口縁	—	—	—	—	有目	無

第4図 出土遺物(2)

(6) 上平Ⅲ遺跡



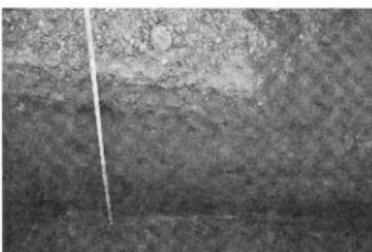
7~8 F区全景（東から）



基本層序1断面（南から）



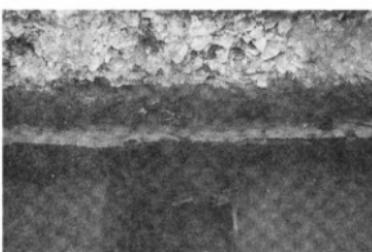
2 E区全景（西から）



2 E区断面（南から）



1 A~C区全景（北から）



基本層序2断面（東から）



4 D~E区VII層上面全景（西から）



基本層序3断面（東から）

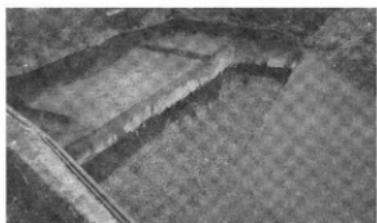
写真図版1 検出遺構（1）



4 D + E 区 VI層遺物出土状況（北から）



4 D + E 区 VI層遺物出土状況（南から）



4 D + E 区トレンチXI層上面まで断面（南西から）



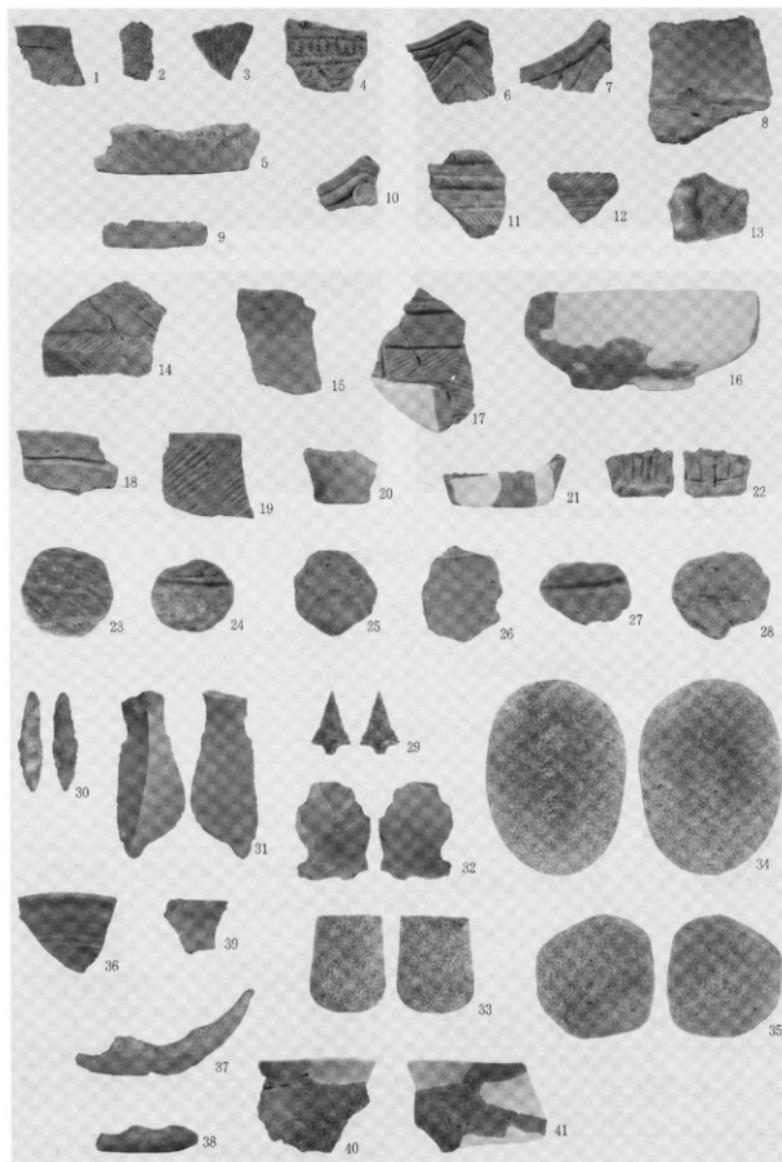
1 A ~ C 区作業風景（南から）

写真図版2 検出遺構（2）

報告書抄録

ふりがな 書名	へいせいにじゅうねんどはくつちょうさほうこくしょ 平成20年度発掘調査報告書						
副書名	上平Ⅲ遺跡						
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第546集						
編集者名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
編集機関	北田 繁・佐藤あゆみ (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	西暦 2009年3月18日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
上平Ⅲ遺跡	二戸市米沢 字上村104	3213	IE99-2218	40度 16分 42秒	141度 17分 20秒	2008.04.09 ～ 2008.04.30	250m ² 国営馬淵川沿岸農業水利事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
上平Ⅲ遺跡	散布地	縄文時代 平安時代	遺物包含層 遺物包含層	土器、石器、土製品 土師器・須恵器	縄文時代後期		
要約	上平Ⅲ遺跡は馬淵川西岸に立地する縄文時代と平安時代の複合遺跡である。今回の調査区は狭小であるため、明確な遺構は認められなかったが、縄文時代後期前半の遺物包含層約200m ² が確認された。少量ながら、平安時代の遺物も出土していることから、遺跡は調査区から傾斜の緩い東側に拡がっていると見られる。						

※緯度・経度は世界測地系における数値である。



写真図版3 出土遺物

(7) 火行塚遺跡

所 在 地	岩手県二戸市右切所字火行塚47ほか	遺跡コード・略号	JE09-1211・HGZ-08
委 託 者	農林水産省東北農政局馬淵川沿岸農業水利事業所	調査対象面積	250m ²
事 業 名	国営馬淵川沿岸農業水利事業	調査終了面積	250m ²
発掘調査期間	平成20年6月5日～6月30日	調査担当者	米田 寛・佐藤里恵

1 発掘調査に至る経過

火行塚遺跡は、「国営馬淵川沿岸農業水利事業 男神支線用水路（その3）工事」の施行に伴い、その事業区域内に埋蔵文化財が存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

男神支線用水路は、一級河川馬淵川から米沢揚水機場のポンプアップにより取水されたかんがい用水を米沢吐出水槽へ送水する左岸幹線用水路から直接分水される。支線用水路途中で二戸市米沢地内で約30ha、途中、男神加圧機場により男神吐出水槽へ加圧、以降自然流下により、二戸市男神地内約30haの畑にかんがいするためのパイプラインである。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成19年6月13日付19馬淵第264号「馬淵川沿岸農業水利事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成19年9月11日に試掘調査を実施し、工事に着手するには火行塚遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成19年12月5日付教生第1036号「馬淵川沿岸農業水利事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当事業所へ回答してきた。

その結果を踏まえて当事業所は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成20年4月1日付けで財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することになった。

（農林水産省東北農政局馬淵川沿岸農業水利事業所）

2 遺跡の位置と立地

火行塚遺跡は、JR東北新幹線二戸駅から西へ約1.4kmに位置する。馬淵川支流によって開析された丘陵地に立地している。今回の調査区は丘陵地の先端にあたり、標高は140～152mで調査前現況は砂利敷きの市道で、舗装はされていなかった。調査区中央に沢が流れ、その北側は緩斜面地で主に畠地が広がっており、南側は宅地、果樹園となっている。なお、昭和54年度調査区は今回の調査区の東側にあたる平坦地で、弥生時代と古代の集落跡が確認されている。

3 基本土層

中央の沢を挟んで北側と南側の調査区では堆積層に一部欠落も見られたが、大枠として7層に分離できた。遺物包含層であるIV・V層は場所によってさらに細分可能であった。G3グリッド付近では部分的にIV層下位にTo-Hpが約80cm堆積していた（写真図版1）。以下に調査区南端のS1グリッドの土層注記を示す。

第I層 10YR3/1 黒褐色土層（表土）粘性微 しまり粗 砂利混入

第II層 10YR2/2 黒褐色土層 粘性弱 しまり粗

第III層 10YR6/2 灰黄褐色火山灰層（To-a）粘性なし しまり粗

第IV層 10YR2/1 黒褐色上層（遺物包含層：主体時期は繩文後期～弥生中期）粘性微 しまり粗

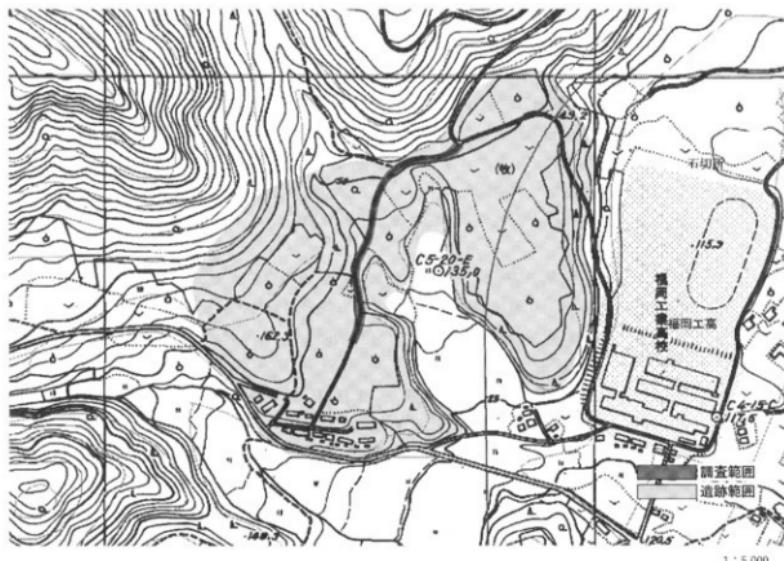
To-Nbブロック 1cm以上1%包含、炭化物粒1%包含。特に調査区北側のIV層相当層から大量の遺物が回収された。

(7) 火行塚遺跡



1 : 25,000 鹿児島県

第1図 遺跡の位置



第2図 遺跡調査範囲

第V層 10YR2/1 黒褐色土層（遺物包含層 繩文）粘性微 しまりやや粗
To - Nb ブロック 1cm 大5% 包含

第VI層 10YR5/8 黄褐色火山灰層（To-Nb）粘性なし しまり粗

第VII層 10YR4/6 褐色土層

4 調査概要

調査範囲は幅1m程度と狭く、軟質土壤であった。工事掘削深度は最大で地表から1.5m程度であることから、作業上の安全確保のため、地表から1.6mの深さまで一律で掘削し、さらにサブトレンドで深さ1.9m付近まで掘り下げて遺物の有無を確認し、調査を終了している。調査方法は、調査区が周辺住民の通勤路であることから、1日あたりの調査範囲を約10m程度に定めてその日のうちに埋め戻すことで調整された。そのため、調査は1日ごとのトレンド調査として行った。1.9mまで掘り下げても遺物包含層に達しなかった沢付近と急斜面については部分的に調査した。地層ごとに検出を繰り返し、最終的にはVII層上面の検出作業をもって1日ごとの調査を終了している。

（1）検出遺構：遺物包含層約180m²

沢の南北に広がる。IV層を中心に遺物が出土している。IV層は沢に向かって緩やかに傾斜し、北側ではB～Eグリッドまでが最も遺物分布密度が高く、縄文・弥生土器が出土した。

IV層の堆積は一律ではないが、約30～80cmある。沢より南側では遺物分布密度が低かったが、III層（To-a）の堆積が認められた。なお、調査区南端より南側範囲について、県教育委員会生涯学習文化課によって工事立会が行われ、古代の竪穴住居跡を確認している。

（2）出土遺物：土器（縄文早期、縄文後期、縄文晩期～弥生、土師器）は大コンテナ2.5箱分、石器は石鏃、尖頭器、楔形石器、剥片、碎片、磨石、敲石、凹石が出土している。鹿角は1個体分出土した。遺物は調査区北側のIV層出土量が最も多い。

土器は以下のとく9群に大別した。判別不明なものは第IX群として一括した。それぞれ観察表備考欄に可能性のある所属時期を記載した。

I群 縄文早期中葉の土器 1・2。1は第VII層（To-Nb）直下から出土した。2はIV層出土で田戸下層式に類似。

II群 縄文中期後半の土器 3～9。大木9式相当。第IV・V層から出土している。

III群 縄文後期の土器でIV・V層から出土した。

III a 後期中葉の土器 11～33。十腰内2～4式相当。

III b 後期後葉の土器 34～54。所謂瘤付土器群とそれと同胎土の土器を一括した。

IV群 縄文晩期の土器でIV層から出土した。遺物の垂直分布ピークはIV層中部～下部にある。

IV a 晩期前葉の土器 55～58。大洞B1～BC式相当。

IV b 晩期中葉の土器 59～72。大洞C1～C2式相当。60は北陸系か。

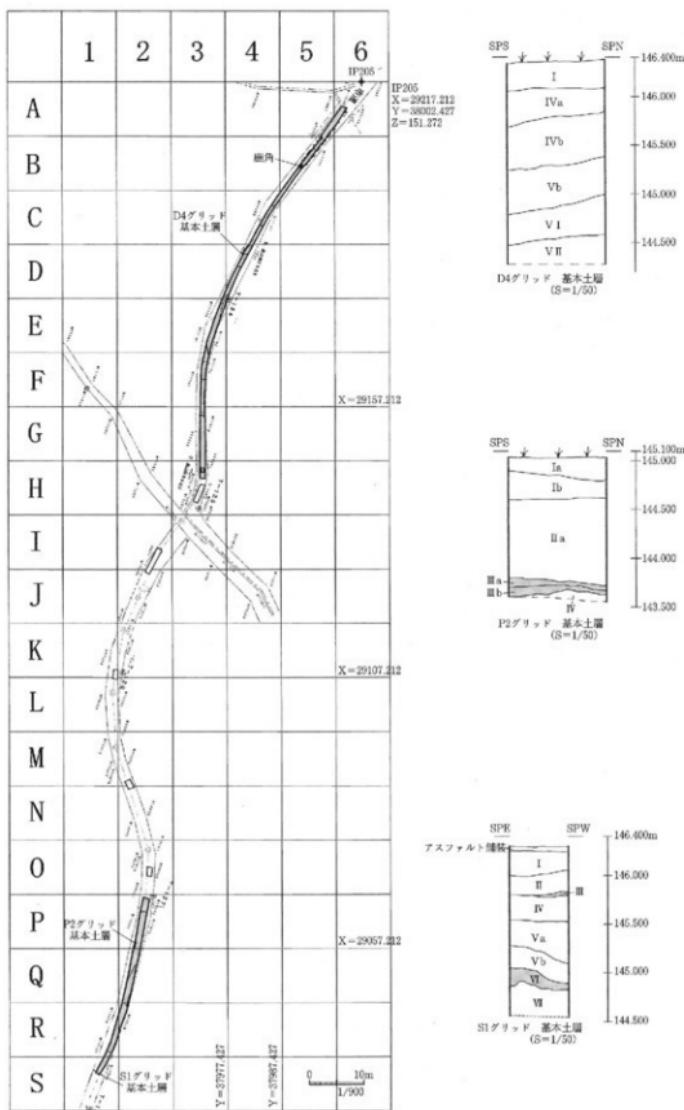
IV c 晩期後葉の土器 74～75。大洞A1～A2式相当。

V群 縄文晩期末葉～弥生前期の土器 76～88・92～96・98・99・108。大洞A'～砂沢式相当。粗製土器は精製土器と同胎土の白色砂粒微量のものを一括した。98は浮線網状文土器のモチーフを沈線で描出する。

VI群 弥生中期の土器 73・97・100～107・109～116・123・124・127～129・132～135・137～150・152～159。磨消縄文、沈線、刺突などを特徴とする土器群で胎土の白色砂粒がV群に比べて粗く大きい。津軽・下北地方の五所式、田舎館1～3式相当。73は五所式相当の無頸壺。106は北上川下流域の山王Ⅲ層式相当で金雲母が顕著。132は縄文の節が大きく縄文時代的だが、器形から本群に含めた。137～146は沈線で波状文ないしは山形文を描出。155の重菱形文は青森県大石平遺跡に類例がある。中期後半段階。159は肩部RLが附加条文であれば弥生後期か。

VII群 VないしはVI群に分離しがたい粗製土器を本群とした。117～122・125・126・130・131。

(7) 火火塚遺跡



第3図 調査区と基本土層

- V群 土師器 161・162。調査区南端で出土している。
 IX群 その他・不明の土器 10は円形刺突を特徴とする。縄文後期初頭か。91と136は胎土がV群類似。160はスコゲのため、不明瞭。VI群土器か。

土製品は161の1点のみである。

石器は尖頭器(164)、石鎌(165・166)、楔形石器(167)、搔器(169)、石錘(168)、石皿(170)、凹石(171・173)、敲石(172)、磨石(174~178)などが出土している。

鹿角(179~182)は一個体と考えられる。D4グリッド出土。鹿角は上ごと取り上げ、室内で洗浄後、パラロイド溶液で形態保存処理をおこなった。重なりあう角の間からはV群土器が出土している。角の先端部は遺存していなかったが、根元部分には頭骨部分が残存していた。

まとめ

今回の調査では遺物包含層が検出された。明確な遺構を確認できなかった。遺物はIV層を中心に出上した。火行塚遺跡は、昭和54年度調査で縄文時代晩期~弥生時代の遺構・遺物が確認されており、岩手県における弥生時代の貴重な集落遺跡であることが明らかとなっている。今回の調査区は、丘陵地と段丘面上で、昭和54年度調査区の西側にある。昭和54年度調査と同様、縄文時代晩期~弥生時代の遺物が多く出土した。特に調査区北側には、分布密度の高い遺物包含層が形成されていた。

なお、火行塚遺跡平成20年度調査に関する報告はこれをもって全てとする。

また、紙面の都合上、引用・参考文献を割愛させていただく。

報告書抄録

ふりがな 書名	へいせいにじゅうねんどはっくつちょうさほうこくしょ 平成20年度発掘調査報告書							
副書名	火行塚遺跡							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第546集							
編集者名	米田 寛・佐藤里恵							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦 2009年3月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所収遺跡名	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 °'.'	調査期間	調査面積	調査原因	
火行塚遺跡	岩手県二戸市石切所字 火行塚47 ほか	03213	JE09-1211	40度 15分 43秒	141度 16分 47秒	2008.06.05 ~ 2008.06.30	250m ²	国営馬淵川沿岸農業水利事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
火行塚遺跡	集落	縄文時代 弥生時代	遺物包含層 約180m ²	縄文土器 弥生土器 石鎌、搔器、磨石 鹿角				
要約	JR東北新幹線二戸駅から西へ約1.4kmに位置する。馬淵川支流によって開析された丘陵地に立地している。今回の調査区は丘陵地の先端にあたり、標高は140~152mである。本遺跡では昭和54年に二戸バイパス工事に係わり第1次調査が行われており、弥生時代と古代の遺構・遺物が確認されている。今回の調査では縄文時代晩期と弥生時代を中心として、縄文早期~弥生後期の遺物が出土している。明確な掘り込みのある遺構は確認できなかった。							

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

紙面の都合上、分析委託報告書を編集した。分析内容のうち、測定結果のみ掲載する。（米田）

火行塚遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1 测定対象試料、2 测定の意義、3 化学処理工程、4 测定方法、5 算出方法

6 测定結果 遺物包含層IV層から出土した土器付着炭化物の¹⁴C年代は、No.1が2180±40yrBP、No.2が2100±40yrBPである。No.3は、炭素含有率が低く（4.78%）、炭化物ではないと判断された。十分な炭素重量が得られず、測定できなかった。No.1・2は炭素含有率が60%以上であり、十分な値であった。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と判断される。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					(AMS)	Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-82546	No.1	Ⅲ層	土器付着炭化物（土器外面に付着）	AaA	-27.58±0.78	2,180±40	76.27±0.36
IAAA-82547	No.2	Ⅲ層	土器付着炭化物（土器外面に付着）	AaA	-21.02±0.92	2,100±40	77.03±0.37
IAAA-82548	No.3	Ⅲ層	土器付着炭化物（土器外面に付着）	AaA		炭素量不足により測定不可	

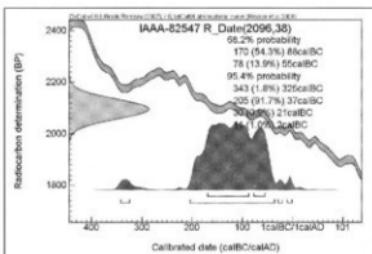
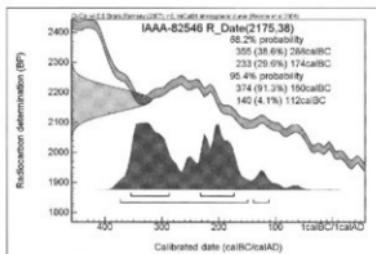
[#2684]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		層年較正用 (yrBP)	1σ 滴年代範囲	2σ 滴年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-82546	2,220±40	75.87±0.34	2,175±38	355BC - 288BC (38.6%) 233BC - 174BC (29.6%)	374BC - 150BC (91.3%) 140BC - 112BC (4.1%)
IAAA-82547	2,030±40	77.66±0.34	2,096±38	170BC - 88BC (54.3%) 78BC - 55BC (13.9%)	343BC - 325BC (1.8%) 205BC - 37BC (91.7%) 30BC - 21BC (0.9%) 11BC - 2BC (1.0%)

[参考値]

＜参考文献＞

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, Radiocarbon 19, 355-363
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37 (2), 425-430
 Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355-363
 Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43 (2A), 381-389
 Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

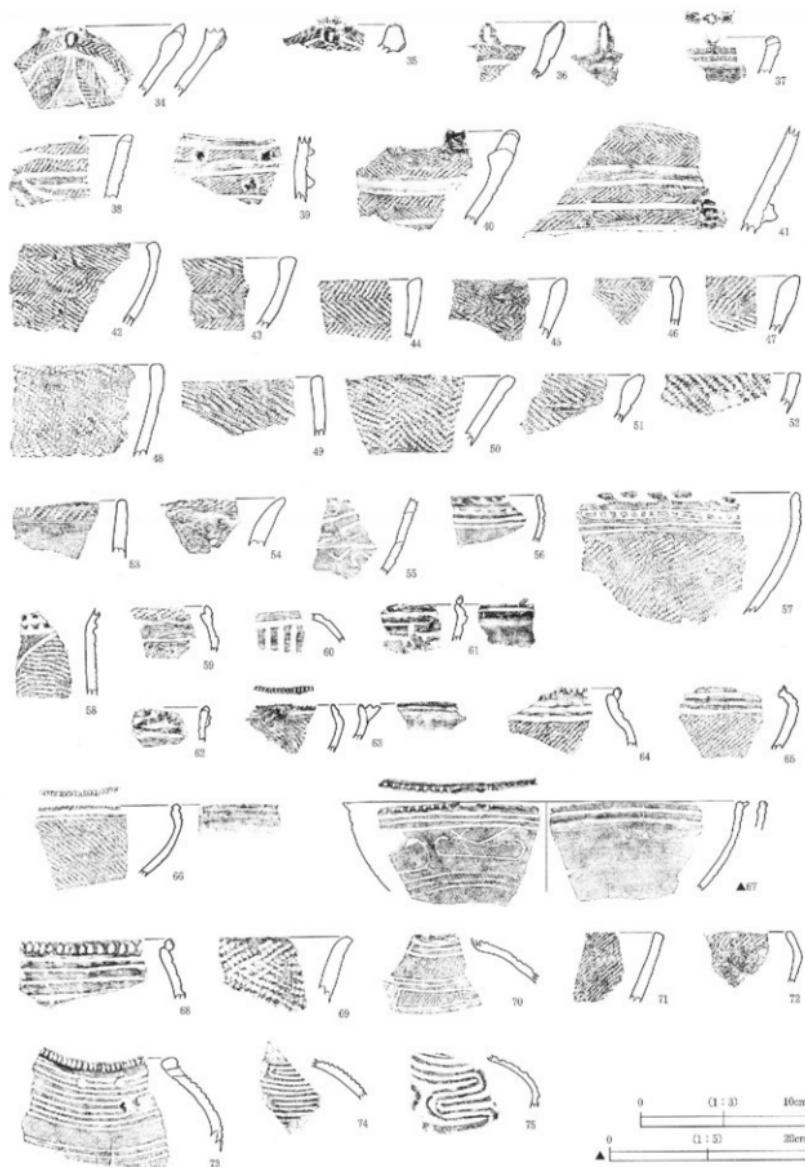


[参考] 層年較正年代 クラブ

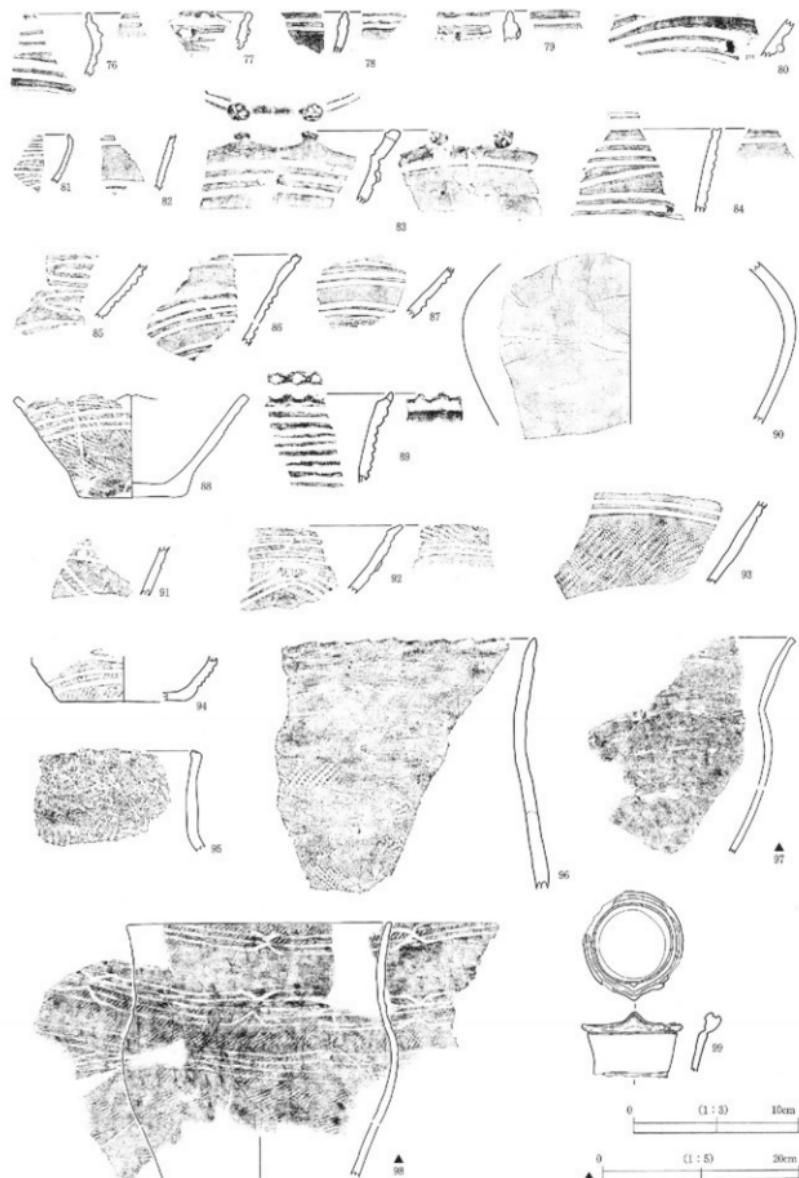


第4図 出土遺物①

(7) 火行塚遺跡



第5図 出土遺物②

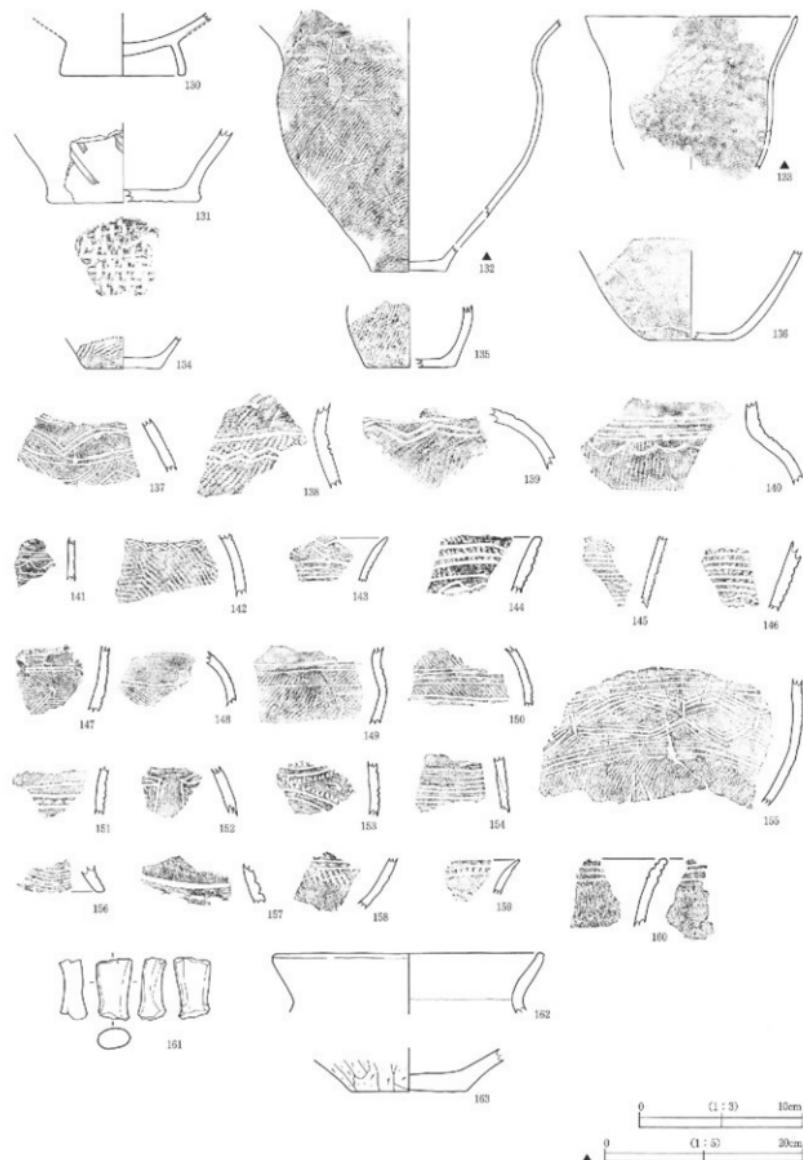


第6図 出土遺物③

(7) 火行塚遺跡

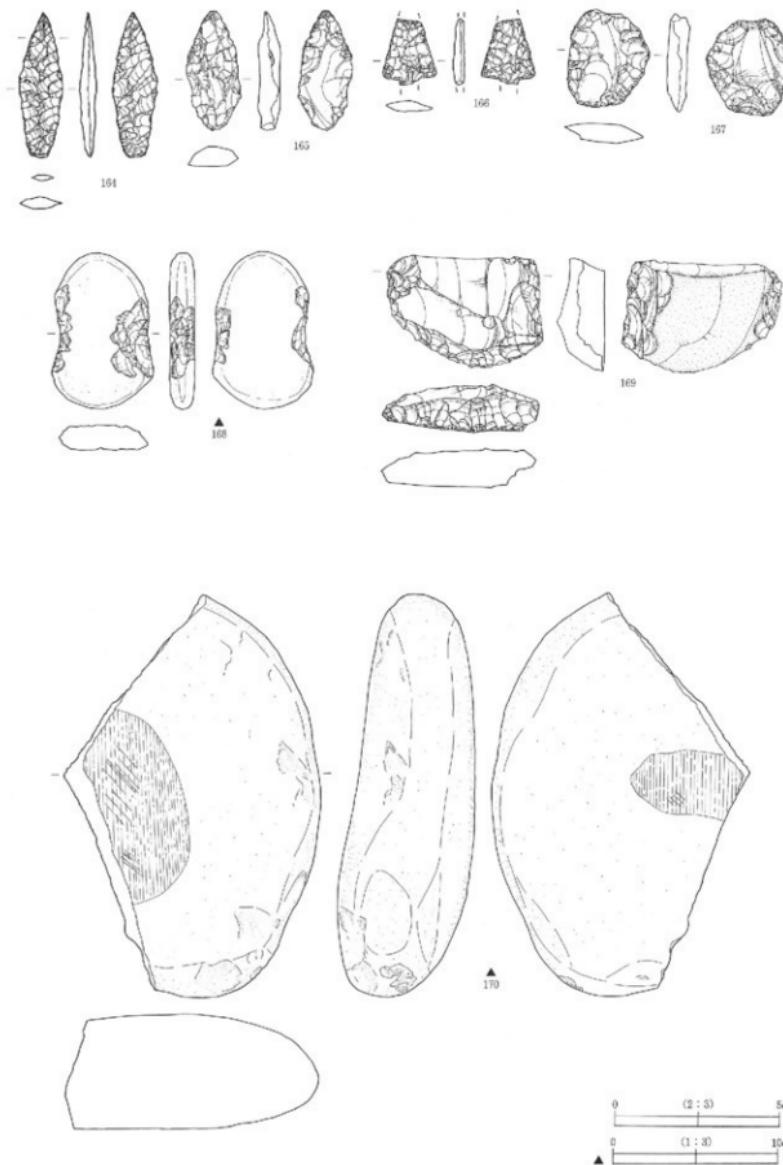


第7図 出土遺物④



第8図 出土遺物⑤

(7) 火行塚遺跡



第9図 出土遺物⑥



第10図 出土遺物⑦

表1表 火行塚跡遺物観察表①

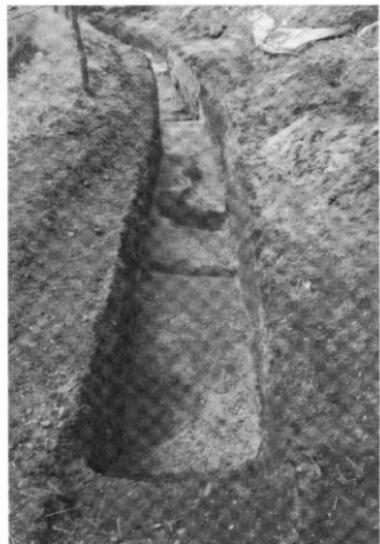
No.	種別	器種	部位	位置・層位	分類	備考
1	土器	深鉢	腹部	D4・IV層	I	尖底、外面ミガキ
2	土器	深鉢	腹部	Q2・IV層	I	沈縞、刺突、外面ミガキ、田口下層式鉢
3	土器	深鉢	口縁	E3・IV層	II	L.R.、U字状沈縞、磨消
4	土器	深鉢	口縁	D4・IV層	II	L.R.、U字状沈縞、磨消
5	土器	深鉢	腹部	C4・IV層	II	L.R.、沈縞、磨消
6	土器	深鉢	口縁	未記	II	隆脊、刺突、磨消
7	土器	深鉢	口縁	Q2・IV層	II	R.L.R.、沈縞、刺突
8	土器	深鉢	腹部	Q2・IV層	II	R.I.、沈縞、磨消
9	土器	深鉢	口縁	R1・IV層	II	R.L.、沈縞、磨消
10	土器	深鉢	腹部	D4・IV層	III	L.R.、刺突、沈縞、後期初頭?
11	土器	深鉢	腹部	D4・IV層	IIIa	R.L.、沈縞、内面ミガキ(十種内2併行)
12	土器	深鉢	腹部	D4・IV層	IIIa	R.L.、沈縞、刺口、磨消、内面ミガキ
13	土器	深鉢	腹部	Q2・IV層	IIIa	梅縞状底面
14	土器	鉢類	腹部	D4・IV層	IIIa	羽伏縞文R.L-R.L.、R.I.、沈縞、磨消
15	土器	深鉢	腹部	D4・IV層	IIIa	羽伏縞文R.L-R.L.、沈縞、磨消
16	土器	鉢類	腹部	D1・IV層	IIIa	R.L.、沈縞、磨消
17	土器	盃類	腹部	D4・IV層	IIIa	前々段多条R.L.、沈縞、磨消、内面ミガキ
18	土器	鉢	口縁	D4・IV層	IIIa	前々段多条R.L.、沈縞、刺目、内外面ミガキ
19	土器	鉢	口縁	D4・IV層	IIIa	前々段多条R.L.、沈縞、刺目、内外面ミガキ
20	土器	深鉢	口縁	B5・IV層	IIIa	前々段多条LR.、沈縞、内外面ミガキ
21	土器	鉢	腹部	C4・IV層	IIIa	羽伏縞文R.L-R.L.、沈縞、刺目、内外面ミガキ
22	土器	深鉢	口縁	D4・IV層	IIIa	羽伏縞文R.L-R.L.、沈縞、内面ミガキ
23	土器	鉢	腹部	B5・IV層	IIIa	羽伏縞文R.L-R.L.、沈縞、内外面ミガキ
24	土器	深鉢	腹部	B5・IV層	IIIa	R.L.、沈縞、刺目
25	土器	鉢	腹部	C4・IV層	IIIa	沈縞、外曲ミガキ、脚下部摩耗?
26	土器	深鉢	口縁	D4・IV層	IIIa	沈縞、刺目、内外面ミガキ
27	土器	深鉢	口縁	D4・IV層	IIIa	沈縞、刺目、内外面ミガキ、口径40.2cm
28	土器	注口	腹部	D4・IV層	IIIa	L.R.、沈縞、磨消、胴部最大径1.1cm
29	土器	深鉢	底部	B5・IV層	IIIa	外底ミガキ、底面磨り目、底径8.0cm
30	土器	盃?	底部	B5・IV層	IIIa	L.R.、底径8.0cm
31	土器	深鉢	底部	D4・IV層	IIIa	L.R.、沈縞、外曲ミガキ、底径5.4cm
32	土器	深鉢	底部	D4・IV層	IIIa	羽伏縞文L.R.、沈縞 内外面ミガキ、底径5.6cm
33	土器	深鉢	口縁～ 腹部	D4・IV層	IIIa	羽伏縞文R-L-R.L-R.L-R.L.、沈縞、 密角、口徑37.4cm
34	土器	浅鉢	口縁	D4・IV層	IIIb	羽伏縞文R-L-R.L.、沈縞、梅縞状縫、磨消
35	土器	鉢類	口縁	D4・IV層	IIIb	羽伏縞文R.L-R.L.、沈縞、密角縫、磨消
36	土器	深鉢	口縁	B5・IV層	IIIb	羽伏縞文R.L-R.L.、沈縞、口縫部山形突起、磨消
37	土器	鉢類	口縁	C4・IV層	IIIb	羽伏縞文R.L-R.L.、沈縞、口縫部突起、磨消
38	土器	深鉢	口縁	C4・IV層	IIIb	R.L.、沈縞、磨消、口縫部突起
39	土器	深鉢	腹部	D4・IV層	IIIb	L.R.、沈縞、貼付状突起、内外面ミガキ
40	土器	深鉢	口縁	D4・IV層	IIIb	羽伏縞文R.L-R.L.、沈縞、口縫部突起、磨消
41	土器	深鉢	腹部	D4・IV層	IIIb	羽伏縞文R-L-R.L.、沈縞、贴付状突起、磨消
42	土器	鉢類	口縁	D4・IV層	IIIb	羽伏縞文R-L-R.L.、R.L-R.L
43	土器	深鉢	口縁	B5・IV層	IIIb	羽伏縞文R-L-R.L
44	土器	深鉢	口縁	B5・IV層	IIIb	羽伏縞文類々段多条R.L-R.L
45	土器	深鉢	口縁	C4・IV層	IIIb	R.Lタテ・ヨコ
46	土器	深鉢	口縁	B5・IV層	IIIb	羽伏縞文類々段多条R.L-R.L
47	土器	深鉢	口縁	D4・IV層	IIIb	R.Lタテ・ヨコ、内面ミガキ
48	土器	深鉢	口縁	D4・IV層	IIIb	R.L.R.、内面ミガキ
49	土器	深鉢	口縁	D4・IV層	IIIb	前々段多条R.L.、口縫・内面ミガキ
50	土器	深鉢	口縁	D4・IV層	IIIb	前々段多条R.Lタテ・ヨコ
51	土器	深鉢	口縁	D4・IV層	IIIb	前々段多条R.L.、内面ミガキ
52	土器	深鉢	口縁	D4・IV層	IIIb	前々段多条R.L
53	土器	深鉢	口縁	B5・IV層	IIIb	L.R.、沈縞、磨消
54	土器	深鉢	口縁	C4・IV層	IIIb	RL
55	土器	深鉢	腹部	D4・IV層	IVa	沈縞、内外面ミガキ
56	土器	深鉢	口縁	B5・IV層	IVa	平行沈縞、羊齒状紋
57	土器	鉢	口縁	D4・IV層	IVa	B突起、沈縞、刺突
58	土器	深鉢	腹部	B5・IV層	IVa	前々段多条R.L.、刺突、沈縫
59	土器	深鉢	口縁	Q2・IV層	IVb	RL.、沈縞
60	土器	盃?	腹部	未記	IVb	沈縞、外曲ミガキ、北陸系?
61	土器	深鉢	口縁	F3・IV層	IVb	沈縞、口縫部刺目、RL?
62	土器	鉢類	口縁	F3・IV層	IVb	沈縞、口縫部突起
63	土器	鉢	口縁	B5・IV層	IVb	口唇部刺目、肩部に突起、RL.、沈縞、磨消
64	土器	深鉢	口縁	B5・IV層	IVb	口唇部刺目、LR.、沈縞、磨消
65	土器	鉢	腹部	B5・IV層	IVb	L.R.、沈縞、磨消
66	土器	浅鉢	口縁	B5・IV層	IVb	口唇部刺目、RL.、沈縞、赤彩

表2表 火行塚遺跡遺物観察表②

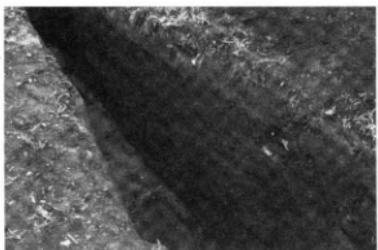
No.	種別	器種	部位	位置・層位	分類	調査・特徴・備考
67	土器	浅鉢	口縁	D4・IV層	IVb	口縁部次に刻目、RL、沈線、磨消、口径40.0cm、施糸痕痕赤彩、外面付着コゲで庶民年代測定：試料No.2
68	土器	深鉢	口縁	P3・IV層	IVb	口縁部刻目、沈線、IV群？
69	土器	深鉢	口縁	Q2・IV層	IVb	半吹鑄文LR-RL
70	土器	壺	肩部	D4・IV層	IVb	LR、沈線、磨消
71	土器	深鉢	口縁	D4・IV層	IVb	LR
72	土器	鉢類	口縁	C4・IV層	IVb	磨消
73	土器	壺	口縁	D1・IV層	VII	有孔無頭蓋、口部刻目、内外面ミガキ、五所式相当
74	土器	壺	肩部	B3・IV層	IVc	T字文
75	土器	壺	肩部	H3・IVb層	IVc	丁字文
76	土器	浅鉢？	口縁	C1・IV層	V	沈線、内面ミガキ
77	土器	浅鉢？	口縁	未探	V	沈線、瘤状突起
78	土器	浅鉢？	口縁	B3・IV層	V	沈線、内外面ミガキ、内外面赤彩
79	土器	浅鉢？	口縁	C1・IV層	V	沈線、瘤状突起、内外面ミガキ
80	土器	浅鉢？	肩部	B5・IV層	V	沈線、瘤状突起、内外面ミガキ
81	土器	浅鉢？	口縁	C4・IV層	V	沈線
82	土器	高环？	肩部	C1・IV層	V	沈線、内外面ミガキ
83	土器	浅鉢	口縁	未探	V	沈線、瘤状突起、内外面ミガキ
84	土器	浅鉢？	口縁	C4・IV層	V	変形T字文、瘤状突起、内外面ミガキ
85	土器	浅鉢？	肩部	Q2・IV層	V	変形T字文、内外面ミガキ
86	土器	浅鉢？	口縁	D4・IV層	V	花瓶
87	土器	浅鉢？	肩部	IVb層	V	沈線、LR？、内外面ミガキ
88	土器	浅鉢	口縁～底部	B5・IV層	V	沈線、LR、磨消、口縁4部位、口径14.4cm、底径6.6cm、高さ3cm、内面に条紋、内面付着物を年代測定：試料No.3
89	土器	鉢？	口縁	D4・IV層	IVorV	沈線、口部蓋刻目
90	土器	壺	肩部	F3・IV層	IVorV	外面ミガキ、肩部最大径20.2cm
91	土器	浅鉢？	肩部	IV層	IX	沈線、LR、内外面ミガキ
92	土器	浅鉢	口縁	C4・IV層	V	内面口部にRL、沈線、貼付座上に刻目、内外面ミガキ
93	土器	浅鉢	肩部	C4・IV層	V	沈線、RL、内外面ミガキ
94	土器	浅鉢	底部	C4・IV層	V	沈線、LR、刻突、内外面ミガキ
95	土器	深鉢	口縁	B5・IV層	V	口部蓋刻目、LR
96	土器	深鉢	口縁～肩部	B5・IV層	V	口部肩部刻目、LR
97	土器	壺	口縁～腹部	B5・IV層	VII	外面部上部スス付着
98	土器	深鉢	口縁～肩部	B3,D4・IV層	V	齊腰網状文系土器のモチーフを残す沈線文系土器、LR、肩崩、人刺A、併行、口径35.5cm 外面付着コゲを年代測定：試料No.1
99	土器	壺	口縁	H3・IVb層	VII	沈線、外外面ミガキ、口径6.1cm
100	土器	甕	口縁	B5・IV層	VII	沈線、内外面ミガキ、V群？
101	土器	運搬鉢	肩部	B5・IV層	VII	沈線、RL、磨消、内外面ミガキ
102	土器	甕	口縁	D4・IV層	VII	沈線、内外面ミガキ
103	土器	甕	口縁	B5・IV層	VII	沈線、RL、磨消、103と同胎土
104	土器	甕	口縁	B5・IV層	VII	外曲ハケメ、103と同胎土
105	土器	鉢類	口縁	B5・IV層	VII	沈線、口部蓋刻目、IV層土器？、RL
106	土器	浅鉢？	口縁	B5・IV層	VII	沈線、全表面頗著者、内外面ミガキ付着 内外面ミガキ、山字型式頗似
107	土器	甕	口縁	F3・IV層	VII	沈線、RL、内外面ミガキ付着
108	土器	鉢類	口縁	C4・IV層	VII	沈線、内面コゲ付着、IV群？
109	土器	高环？	肩部	B5・IV層	VII	沈線
110	土器	甕	口縁	B5・IV層	VII	沈線、内外面ミガキ、外側コゲ付着
111	土器	鉢	口縁	E5・IV層	VII	沈線、LR、磨消、内外面ミガキ
112	土器	運搬鉢	口縁	C4・IV層	VII	口部蓋刻目、RL？、沈線、磨消、内外面ミガキ
113	土器	甕・壺類	口縁	B5・IV層	VII	口部刻目、RL？、沈線、磨消、内外面ナダ・ケズリ
114	土器	甕	口縁	B3・IV層	VII	口部部R、内外面ナダ・ケズリ
115	土器	甕	口縁	B5・IV層	VII	外側スス付着
116	土器	甕	口縁	B5・IV層	VII	RL、磨消
117	土器	甕	口縁	B5・IV層	VII	外曲スス付着、外面部にハケメ
118	土器	甕	肩部	B5・IV層	VII	ナデ調整
119	土器	甕	口縁	B5・IV層	VII	口縁部ナデ調整横方向
120	土器	甕	口縁	B5・IV層	VII	LR、内外面ミガキ横方向
121	土器	甕	口縁	D4・IV層	VII	内外面ミガキ横方向、口径13.4cm
122	土器	甕	口縁	B5・IV層	VII	短縦無文、内外面ミガキ
123	土器	甕	口縁	B5・IV層	VII	外曲スス付着、内外面ミガキ横方向
124	土器	甕	口縁	B5・IV層	VII	LR、口縁部ナデ調整横方向、海綿状骨針參差
125	土器	壺・鉢類	口縁	C4・IV層	VII	口部部網文系、沈線、口縁部ナデ調整横方向

表3表 火行塚遺跡遺物観察表③

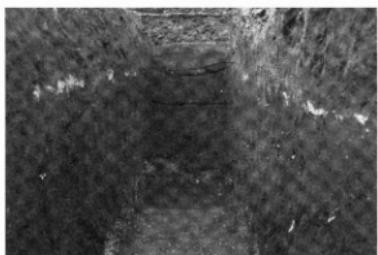
No.	種別	器種	部位	位置・部位	分類	調査・特徴・備考
126	土器	甕	口縁	B5・IV層	VI	内外面ミガキ
127	土器	壺	側部	B5・IV層	VI	沈線、RL、磨消、赤彩
128	土器	壺	肩部	B5・IV層	VI	沈線、RL、磨消
129	土器	甕	口縁～底部	B5・IV層	VI	内外面ナダ 口径7.6cm、底径3.5cm、高さ6.4cm
130	土器	盃型埴	台部	C4・IV層	VI	内外面ミガキ、底径7.5cm
131	土器	盃型埴	底部	E5・IV層	VI	底面削り底、外侧面ナダ、底径9.4cm
132	土器	甕	肩～底部	B5・IV層	VI	LR、底径7.6cm、磨消
133	土器	甕	口縁～肩部	D4・IV層	VI	LR、磨消、口唇部削り 口径21.4cm
134	土器	盃型埴	底部	B5・IV層	VI	LR、底径、底径4.6cm
135	土器	甕	底部	C4・IV層	VI	RL、磨消、底径5.0cm
136	土器	甕	底部	D4・IV層	IX	内外面ナダ、底径5.0cm、厚壁？
137	土器	盃型埴	肩部	D4・IV層	VI	沈線、内面スヌ付着
138	土器	甕	肩部	Q2・IV層	VI	沈線、山形文、LR
139	土器	盃型埴	肩部	B5・IV層	VI	LR、山形文、磨消
140	土器	甕	肩部	B5・IV層	VI	RL、沈線文、波状文、磨消
141	土器	盃型埴	肩部	F3・IV層	VI	沈線、波状文、内面スヌ付着
142	土器	甕	肩部	F3・IV層	VI	LR、波状文、磨消、内面スヌ付着
143	土器	盃型埴	口縁	C4・IV層	VI	山形文、沈線
144	土器	盃型埴	口縁	B5・IV層	VI	前後段多条？LR、沈線、波状文、磨消
145	土器	盃型埴	肩部	B5・IV層	VI	RL、沈線、波状文、刻突、磨消
146	土器	盃型埴	肩部	B5・IV層	VI	RL、沈線、波状文、磨消
147	土器	甕	肩部	B5・IV層	VI	LR、沈線、磨消
148	土器	甕	肩部	B5・IV層	VI	RL、沈線、磨消
149	土器	甕	肩部	B5・IV層	VI	LR、沈線、磨消
150	土器	甕	肩部	B5・IV層	VI	RL、沈線、磨消
151	土器	盃型埴	肩部	B5・IV層	IX	沈線、刻突、VI群？
152	土器	盃型埴	肩部	B5・IV層	VI	RL、沈線、刻突、磨消
153	土器	盃型埴	肩部	D4・IV層	VI	LR、沈線、刻突、磨消
154	土器	甕	肩部	B5・IV層	VI	沈線、波状文、刻突、磨消
155	土器	盃型埴	肩部	D4・IV層	VI	LR、沈線、重豪文、刻突、磨消、赤彩
156	土器	盃型埴	台部	B5・IV層	VI	沈線
157	土器	盃型埴	肩部	B5・IV層	VI	沈線、刻突、磨消
158	土器	盃型埴	肩部	C4・IV層	VI	RL、沈線、山形文、刻突、磨消
159	土器	盃型埴	口縁	Q2・IV層	VI	RL、附加条？沈線、刻突、磨消、乳牛頭跡？
160	土器	甕	肩部	B5・IV層	IX	内外面スヌコガリ竹条多孔、沈線、内外面条纹、VI群？
161	土製品			G3・IVb層		長3.6cm、幅2.2cm、厚1.6cm
162	土器	十師器	口縁	Q2・IV層	VI	口縁部ヨコナタ、口径15.8cm
163	土器	上唇沿焼	底部	P2・IV層	VI	外側ケズリ、底径7.2cm
164	石器	尖頭器		B4・IV層		長4.5cm、幅1.3cm、厚0.4cm、重量2.3g、頁岩製
165	石器	石鍬		B5・IV層		長3.7cm、幅1.7cm、厚0.7cm、重量3.8g、飞鶴製
166	石器	石鍬		P2・IV層		長2.05cm、幅1.6cm、厚0.35cm、重量1.0g、頁岩製
167	石器	楔形石器		K3・IV層		長3.1cm、幅2.5cm、厚0.65cm、重量6.4g、頁岩製
168	石器	石鍬		D3・IV層		長9.7cm、幅6.1cm、厚1.5cm、重量150g、安山岩製
169	石器	掃器		D4・IV層		長3.4cm、幅4.6cm、厚1.35cm、重量25.8g、頁岩製
170	石器	石皿		C4・IV層		長24.7cm、幅15.6cm、厚3.3cm、重量320g、安山岩製
171	石器	凹石		B5・IV層		長10.0cm、幅8.9cm、厚5.6cm、重量637.9g、安山岩製
172	石器	敲石		P2・IV層		長10.8cm、幅4.0cm、厚3.7cm、重量370.9g、砂岩製
173	石器	凹石		D4・IV層		長8.0cm、幅7.9cm、厚5.5cm、重量462.1g、安山岩製
174	石器	磨石		B5・IV層		長8.2cm、幅6.6cm、厚3.7cm、重量168.6g、砂岩製 敲打跡あり
175	石器	磨石		P2・IV層		長8.9cm、幅8.3cm、厚4.7cm、重量493.1g、安山岩製
176	石器	磨石		Q2・IV層		長8.8cm、幅7.1cm、厚5.5cm、重量480.4g、安山岩製 敲打跡あり
177	石器	磨石		H3・IVb層		長6.3cm、幅8.9cm、厚6.15cm、重量495.1g、安山岩製 敲打跡あり
178	石器	磨石		B5・IV層		長33.9cm、幅8.8cm、厚6.4cm、重量2250g、安山岩製 表面赤化、砾石に転用か
179	鹿角			D4・IV層		長19.6cm、幅5.8cm、厚3.7cm
180	鹿角			D4・IV層		長18.5cm、幅5.4cm、厚3.6cm
181	鹿角			D4・IV層		長19.3cm、幅8.3cm、厚6.5cm
182	鹿角			D4・IV層		長12.9cm、幅4.3cm、厚2.4cm



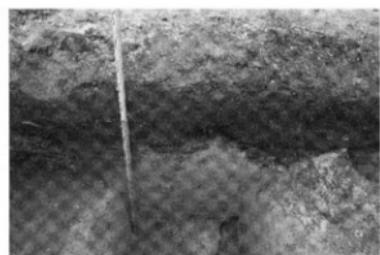
D4グリッド 完掘



D4グリッド 基本土層



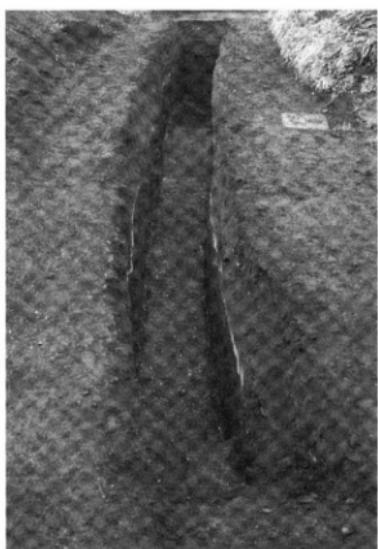
S1グリッド 基本土層



To-Hpの堆積 (G3グリッド)

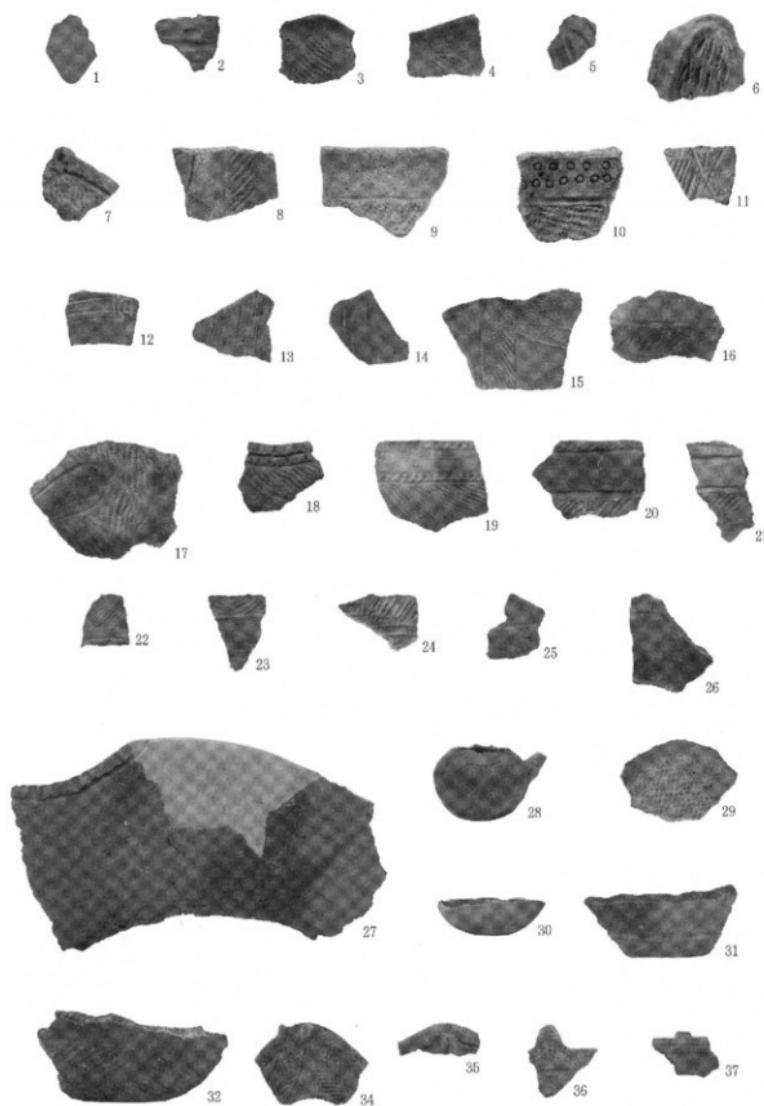


鹿角出土状況 (D4グリッド)

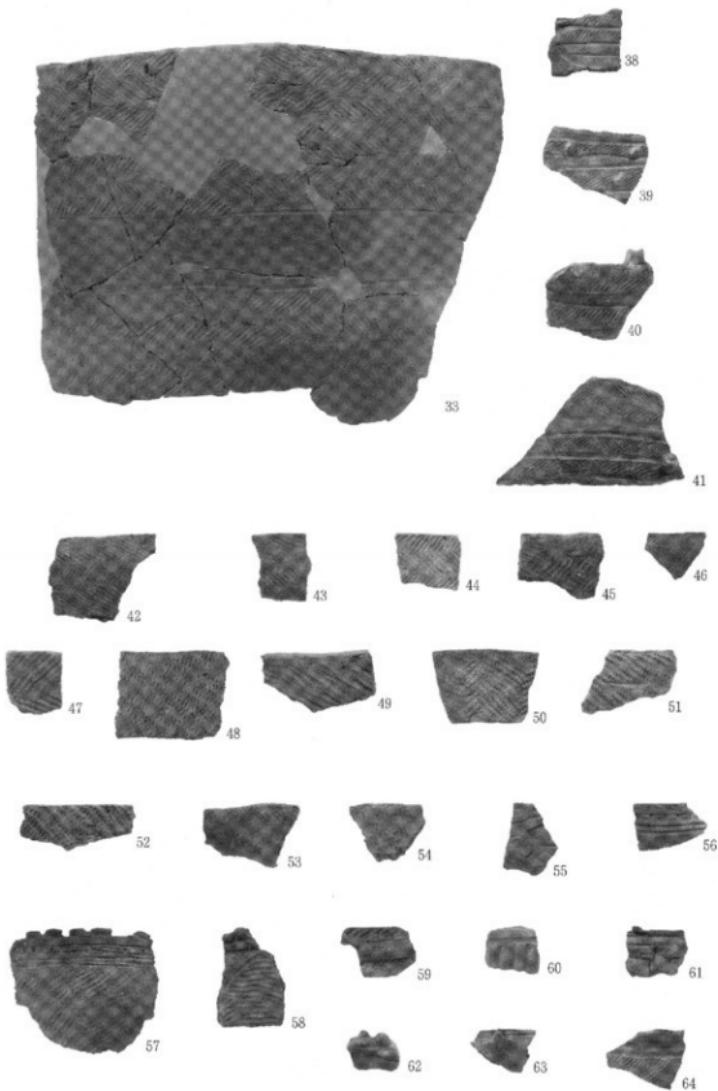


Q2,R1グリッド 完掘 (V2層上面)

(7) 火行塚遺跡

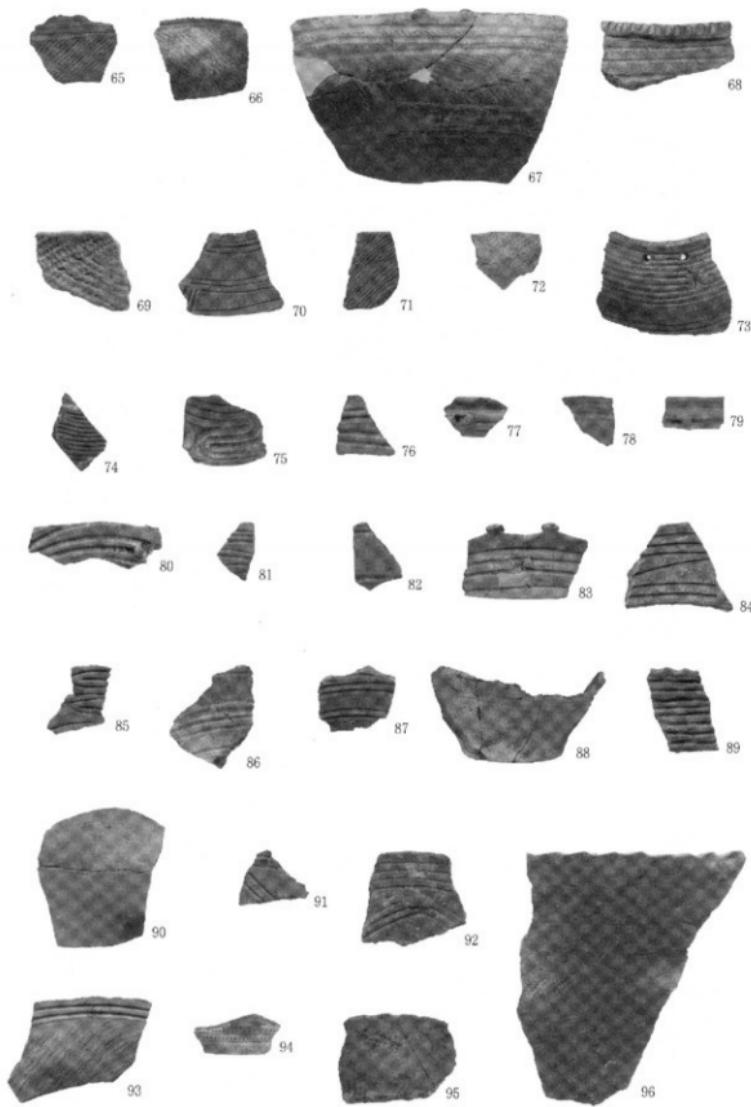


写真図版 2

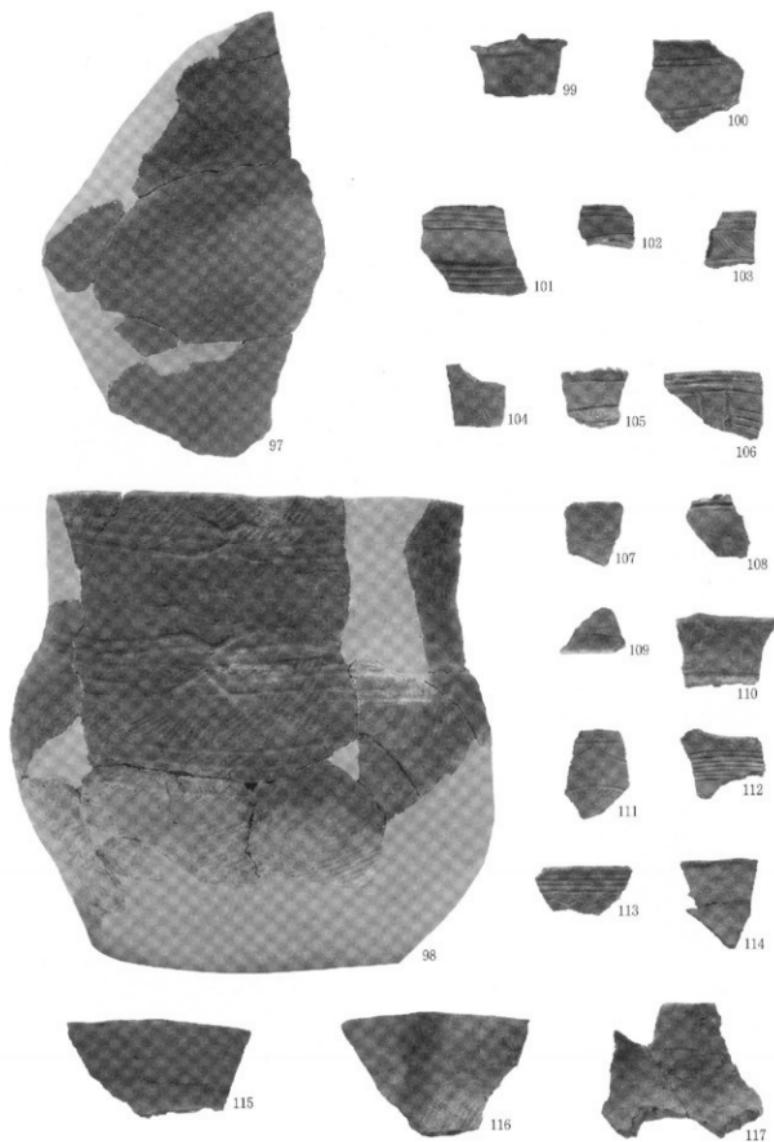


写真図版 3

(7) 火行塚遺跡



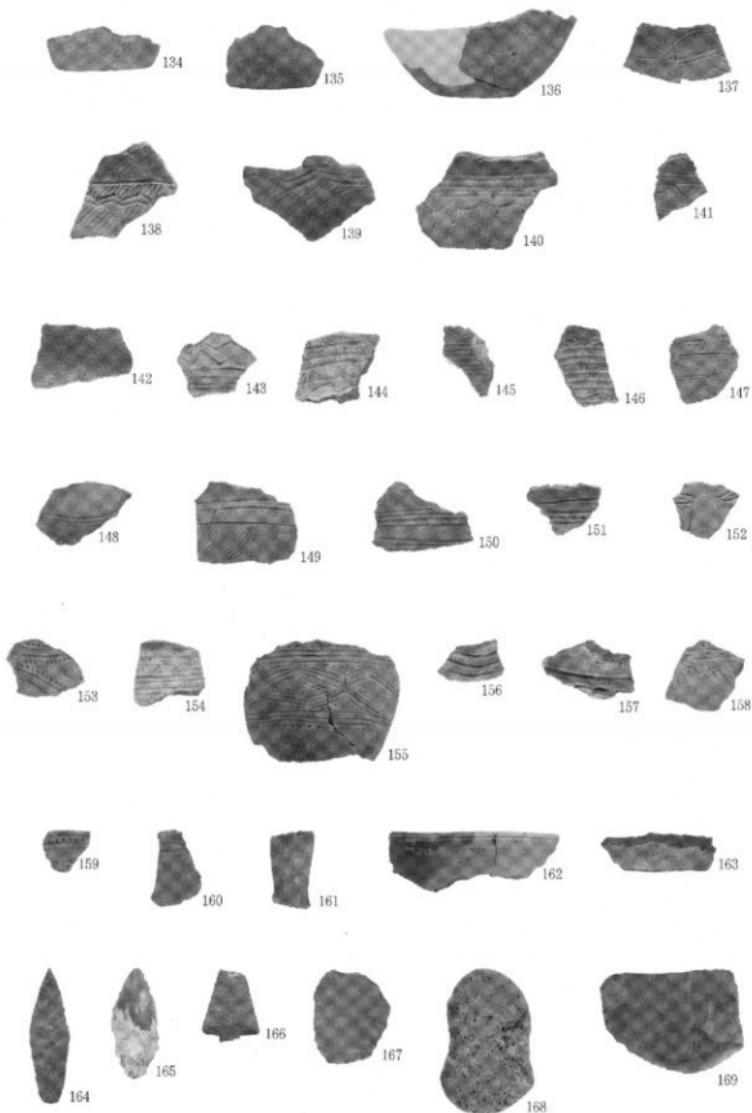
写真図版 4



写真図版 5

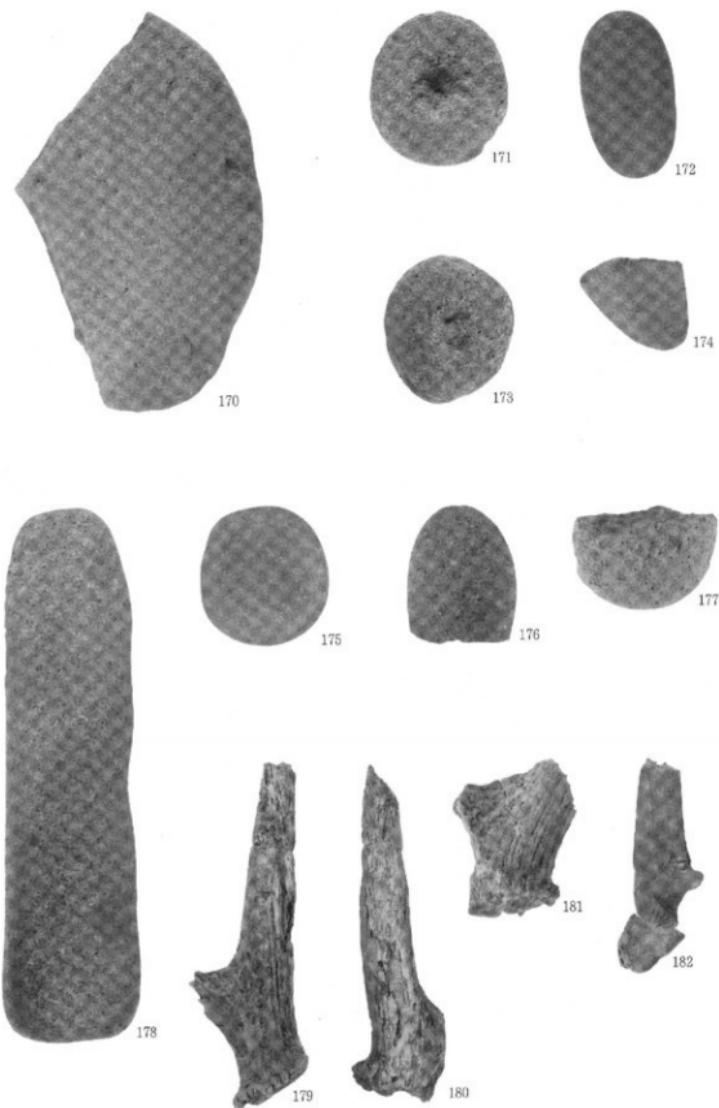


写真図版 6



写真図版 7

(7) 火行塚遺跡



写真図版 8

(8・9) 小沢V神籠石遺跡・小沢VI遺跡

所 在 地	小沢V：宮古市小沢2丁目253-2ほか 小沢VI：宮古市小沢2丁目6-6ほか	遺跡コード・路号	小沢V：LG23-2325・KZWV-08 小沢VI：LG23-2318・KZWI-08
委 託 者	宮古市都市整備部	調査対象面積	小沢V：4,075m ² 小沢VI：820m ²
事 業 名	宮古市北部環状線整備事業	調査終了面積	小沢V：4,075m ² 小沢VI：820m ²
発掘調査期間	平成20年9月1日～11月7日	調査担当者	村田 淳・高橋聰子

1 調査に至る経過

遺跡名「小沢V神籠石遺跡」及び「小沢VI遺跡」は、宮古市道北部環状線道路改良事業に伴い、発掘調査を実施することになったものである。

北部環状線は、県道宮古岩泉線の山口地区と国道45号の佐原地区を結ぶ延長2,331mの路線で、市街地の渋滞解消と非常時における国道45号の代替道路、市街地から県立宮古病院へのアクセス道路としての機能を併せ持つ地城幹線道路である。

本事業は平成5年度に着手し、今日まで事業用地の取得と埋蔵文化財調査が進められてきた。用地取得は平成20年度に、埋蔵文化財調査は21年度に完了する予定である。工事については22年度以降、県代行での実施を岩手県に依頼しており、その為の準備をしているところである。

埋蔵文化財調査は平成6年度から市教育委員会が実施しているが、この間、調査の進捗を図るために平成8・9・15・16・19年度において、岩手県教育委員会及び財團法人岩手県文化振興事業団から調査の協力を頂いている。

平成20年度においても、調査の進捗を図るべく岩手県教育委員会と協議し、同教育委員会に対して平成20年度7月16日付建第44号「市道北部環状線道路改良事業用地に係る埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」により発掘調査の依頼を行ったところである。

その結果、岩手県教育委員会の調整を受け、財團法人岩手県文化振興事業団は、平成20年9月1日から11月7日までの間、発掘調査を実施したものである。

（宮古市都市整備部）



第1図 遺跡の位置

2 遺跡の位置と立地

両遺跡及び小沢VI遺跡は、JR山田線宮古駅の北方約1.5km、黒森山から南東方向に向かって伸びる丘陵地帯に立地している。この丘陵は、南北方向に流れる小溪流の浸食によって形成された狭小な尾根と谷が入り組む地形となっている。両遺跡は直線距離で約150m離れており、小沢V神籠石遺跡は丘陵の谷部、小沢VI遺跡はその東側の尾根部に位置している。

両遺跡の南側には丘陵裾部に沿うように小沢II大上（第2図37、以下同）・小沢III石倉平（4）・小沢IV人形鼻（3）・小沢貝塚（7）など、縄文時代～近現代に属する遺跡が確認されている。また、小沢V神籠石遺跡の西側の尾根を挟んだ丘陵中には、製鉄炉が検出された拌殿峠遺跡（54）、鍛冶工房をもつ大規模な中世城館である山口館跡（55）など、鉄生産に関連する遺跡が確認されている。

3 小沢V神籠石遺跡

（1）調査区の概要

小沢V神籠石遺跡は、調査区の南東側にある民家の畑で縄文時代晚期の土器・石器・遮光器土偶が採集されていたことから、その周辺のみが周知の遺跡として登録されていた。しかし、平成19年に宮古市教育委員会が遺跡範囲外の北西側で実施した「北部環状線関係試掘調査C地区」の試掘調査で遺構・遺物が検出されたことにより、小沢V神籠石遺跡の範囲が広がることが確認されている。

今回の調査区は試掘調査範囲及び南北を流れる沢を挟んだ東側の斜面部であり、現流する沢を挟んでいたことから、沢の西側を西側調査区、東側を東側調査区とした（第4・5図）。なお、基本層序はそれぞれの調査区で作成しているが（第3図）、最終的にI～III・VII層は両調査区に存在すること、V層は沢跡堆積土であり西側調査区にのみ堆積していること、色調は異なるが西側調査区IV層と東側調査区IV b層、西側調査区VI層と東側調査区VI b層がそれぞれ対応することを確認している。

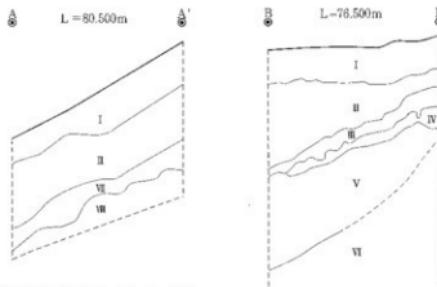


第2図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡コード	遺跡名	時代	No.	遺跡コード	遺跡名	時代
1	LG23-2355	小沢V神籠石	縄文・古代	33	LG24-1069	佐原	縄文
2	LG23-2318	小沢VI	縄文	34	LG24-2087	沢田II	—
3	LG23-2336	小沢IV人形彌	縄文・古代	35	LG24-2190	小山根	縄文・弥生・古代
4	LG23-2346	小沢Ⅴ石畠平	縄文	36	LG34-0025	黒田館	中世
5	LG23-2353	拌殿ヶ沢	縄文・古代	37	LG24-2088	小沢V大I	縄文
6	LG23-2362	黒森町I	近世	38	LG33-0213	青淵III	縄文・古代
7	LG23-2377	小沢目塚	縄文	39	LG33-0226	長根V	—
8	LG23-2215	赤煙	縄文・近世	40	LG33-0225	長根IV	—
9	LG33-2231	山口駒込I	縄文・奈良	41	LG33-0222	背後II	糸牛・平安
10	LG23-2241	山口駒込II	縄文・奈良	42	LG33-0221	青淵I	縄文・平安
11	LG23-2346	大神山	縄文・古代・弥生	43	LG33-0158	近内寺本I	縄文・古代
12	LG23-2282	延所	縄文	44	LG23-2197	近内白石II	縄文・古代
13	LG33-0207	孤崎	縄文・奈良・平安	45	LG23-2196	近内大原	中世
14	LG24-2003	日の出町I	縄文	46	LG34-0124	駒ヶ輪上町	縄文
15	LG24-2033	日の出町II	縄文	47	LG33-0258	反懸吉II	縄文
16	LG23-1216	小平I	縄文	48	LG33-0218	東川原孤崎II	縄文・奈良・平安
17	LG23-1255	小平II	縄文	49	LG33-0229	東川原孤崎III	—
18	LG23-1234	小平III	縄文	50	LG33-0321	京明孤崎I	古代
19	LG23-1253	高根	縄文	51	LG33-0312	鶴崎I	古代
20	LG23-1255	小平I	縄文	52	LG33-0323	鶴崎II	古代
21	LG23-1295	赤堀東	縄文・近世	53	LG24-2111	熊野町	中世
22	LG34-2044	日の出町III	縄文	54	LG23-2310	山口館(越山)	中世・古代
23	LG24-2076	沢田I	古代	55	LG23-2323	拌殿II	縄文
24	LG23-0369	早稲田II	縄文	56	LG24-2160	日影町I	縄文
25	LG24-0081	早稲田IV	—	57	LG24-2173	日影町II	—
26	LG24-1000	南沢I	—	58	LG24-2184	駒ヶ輪宿(越山)	中世
27	LG23-1326	黒森	—	59	LG34-0109	駒ヶ輪町	縄文
28	LG23-1332	黒森山	—	60	LG34-0123	夏保	縄文
29	LG23-1349	寒風	縄文・古代	61	LG24-1166	平松I	縄文
30	LG23-1364	黒森マボ沢	縄文	62	LG33-0149	近内寺本II	古代
31	LG21-1010	早稲田V	縄文	63	LG33-0235	長根III	古代
32	LG24-1020	早稲田VI	縄文				

西侧調査区



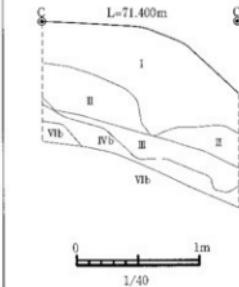
西側調査区基本層序 (A-A' - B-B')

- I. 10YR3/3暗褐色シルト しまりやや疊、粘性やや弱 硬土
 II. 10YR3/3暗褐色シルト しまりやや疊、粘性やや弱 硬土
 III. 10YR2/2黒褐色シルト しまりやや疊、粘性やや弱 硬土
 IV. 10YR2/1黑色シルト しまり中、粘性やや弱
 V. 10YR1.7/1深褐色シルト しまり、粘性とともに中 風化花崗岩 ($\phi 1 \sim 3$ mm) 10%混入
 VI. 10YR2/2黒褐色シルト しまり、粘性とともに中 風化花崗岩 ($\phi 1 \sim 3$ mm) 7%混入
 VII. 10Y4/6.5/リープド田畠砂質シルト しまりやや疊、粘性やや弱
 VIII. 10Y4/6.5/リープド田畠砂質シルト しまりやや疊、粘性やや弱 風化花崗岩層 (堆山)

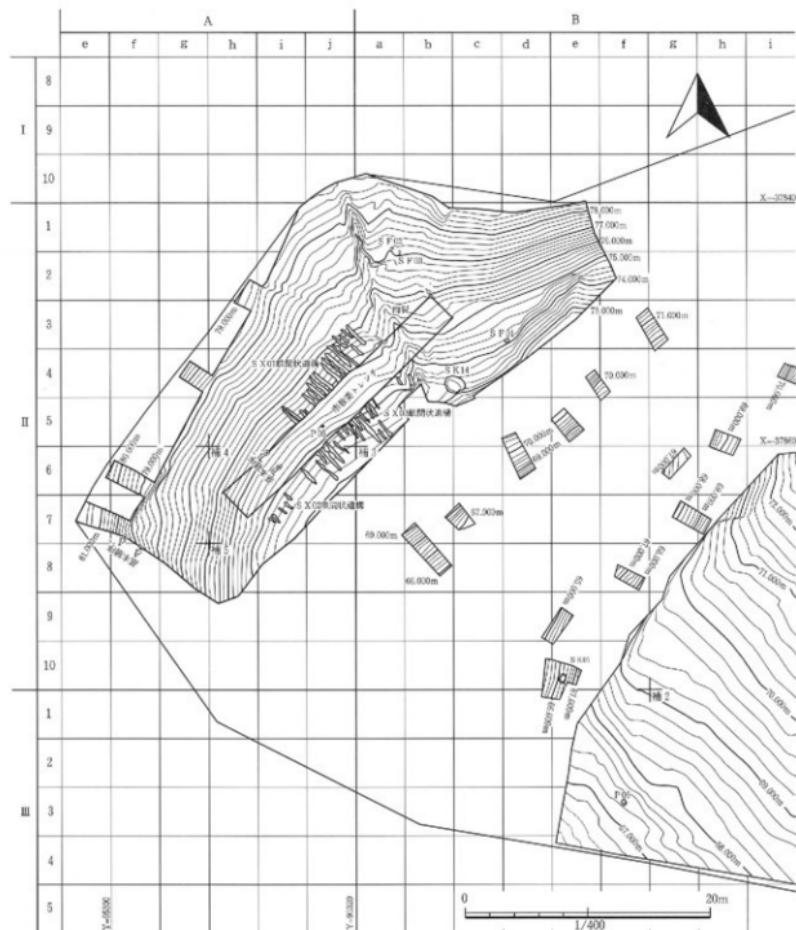
東側調査区基本層序 (C-C')

- I. 10YR3/1-2深褐色 しまりやや疊、粘性やや弱 表・盛土
 II. 10YR3/2褐色～10YR4/1にかい黄褐色 しまり、粘性とともに中 鉄層斜葉岩によって形成 (人為か自然かは判断し難い)
 III. 10YR2/2褐色 しまり、粘性とともに中 河底堆積土 (古代～縄文時代廢物台面)
 IV. b. 10YR4/2深黃褐色 しまり、粘性とともに中
 V. b. 10YR7/9-7.5YR7/5褐色 しまり、粘性とともに中 鋼層より粘性強い (地山)
 VI. b. 10YR8/4浅褐色 しまり中、粘性やや弱 風化花崗岩層 (地山) 調査区中央～東側に分布)

東側調査区



第3図 小沢V神籠石遺跡基本層序

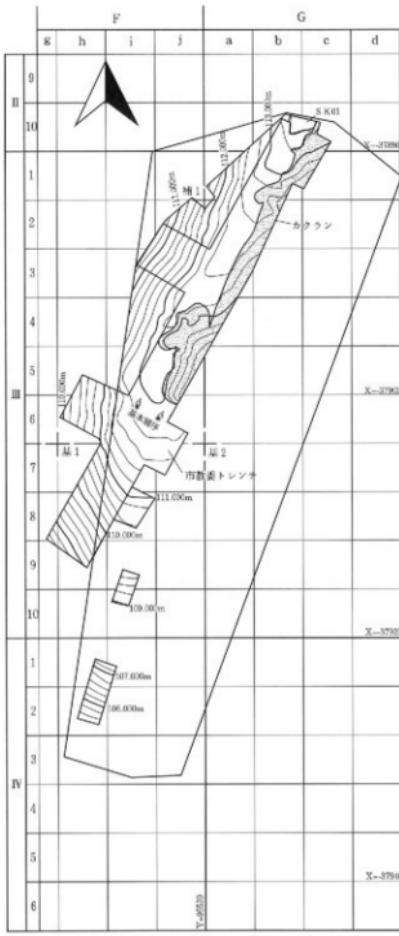


第4図 遺構配置図(1)



小沢V神籠石

基1	X=-37880.000	Y=95360.000
其2	X=-37852.000	Y=95372.000
補1	X=-37892.000	Y=95360.000
補2	X=-37880.000	Y=95344.000
補3	X=-37860.000	Y=95320.000
補4	X=-37860.000	Y=95308.000
補5	X=-37868.000	Y=95300.000
補7	X=-37852.000	Y=95380.000



小沢VI

基1 X=-37904.000 Y=95508.000
 基2 X=-37904.000 Y=95520.000
 補1 X=-37884.000 Y=95520.000
 (世界測地系)

第5図 遺構配置図(2)

上方の緩斜面部と下方の急斜面部からなる西側調査区は、調査区中央に近世以前に埋没した沢跡があり、遺構のほとんどはこの沢跡内で検出している。また、沢跡の北縁部には近世以降に形成されたと考えられる雨裂があり（第11図）、遺物はこの部分からの出土が最も多い。検出面は沢跡内では3面あり、高いほうからII～III層、IV層、VI層である。なお、検出面標高は第一検出面が69～76m、第二検出面が73～75m、第三検出面が71～74mである。

階段状に整形された平坦部と沢付近の急斜面部からなる東側調査区は、調査前は山林及び畠地であった。平坦部はほとんどの部分で地形の改變が行われており、遺構・遺物の遺存状況は良くない。遺構は調査区南側の中位平坦部で土坑が密集しているが、その他は散漫な分布である。遺物は、中位平坦部と下位平坦部の間の斜面と下位平坦部南側のII層中からの出土がみられた。

なお、両調査区とも急斜面部についてはI層中に直径1m以上の巨石が多量に含まれており崩落の危険性が高いことから、トレント調査を基本として遺構・遺物が確認された場合に範囲を拡張するという方法で調査を行った。結果としては土坑1基と遺物がごく少量出土したのみであり、岩手県教育委員会生涯学習文化課との協議の結果、安全面を考慮して斜面部約1,500m²についてはトレント調査で終了することになった。

（2）検出遺構

土坑27基、炭窯1基、溝1条、柱穴8個、焼土3基、畝間状遺構3面を検出した。

＜土坑（SK）＞ 形状・規模は第2表の通りであり、ここでは検出状況などについて記載する。

西側調査区では1基（SK14）検出している。先述の雨裂より先に埋没していることと、堆積土巾から土師器・鉄滓が出土していることから古代に属すると考えられる。

東側調査区では26基検出している。調査区南東側（III C 1～4a～cグリッド）の平坦部にまとまっている、この地点では円形プランの重複が著しかったことと検出中に煙管（第13図37・38）が出土したことから、近世墓坑が重複して構築されている可能性を考えて精査を行った。しかし、精査の結果プランの約半分が現代のビニールを含むゴミ穴であること、土坑としたものについても出土遺物が皆無であったことから性格を明らかにすることはできなかった。

出土遺物と検出面から土坑の掘削時期を推定すると、繩文土器が出土したSK17とIV層で検出したSK23が古代以前、II層で検出したSK02～05・07・08・10・15・16・21・22が近世以降と考えられる。ただし、検出面及び堆積土最上位から近代の磁器が出土したSK24・26は近代の可能性がある。

＜炭窯（SW）＞ SW01は、II C 2 c グリッドに位置する。検出面はVI b層で、炭化物を含む不整形な黒色プランとして検出した。平面形は隅丸方形で、上面規模は1.29×1.24mである。断面形は箱形で、深さは0.49mである。堆積土は黒褐色土主体で、炭化物の混入程度などから4層に細分した。底面上直層（第4層）は、小炭を多量に含む黒色土層で、上面には長さ10～30cmの炭化材（樹種：クリ）が散布していた（附編1）。底面と北壁面には直径6～9cmの焼土が形成されているが、色調は暗く（2.5YR6/4に近い橙色）、被熱深度も2cmと浅い。炭化材以外の出土遺物は皆無であるが、この炭化材についてAMS年代測定を実施したところ、1,200±30yrBPという結果が得られた（附編2）。

以上のことから、本遺構は奈良時代後半に属する炭窯と考えられるが、焼土の形成状況をみると使用頻度は低かったものと考えられる。

＜溝（SD）＞ SD01は、II B 9・10 j グリッド内、斜面の裾部に並行して掘削されている。検出面はVI b層で、北側は削平によって消失しているため現存長は3.7m、幅は最大で0.41mである。主軸方向はN-10°-Eである。堆積土は黒褐色土の単層である。斜面裾部付近に位置することから区画溝と考えられるが、出土遺物が無いため年代を含めて詳細は不明である。

第2表 土坑観察表

遺構名	地 点	検出 層位	形 状		規模(cm)		堆積土	出土遺物 (No.は荷物No.)	備 考
			平面	断面	上面	深さ			
SK01	II B 10 c	VII層	長楕円形	皿形	75×55	15	単層	無	
SK02	III C 3 + 4 a	II層	円形	箱形	92×85	32	単層	無	SK10を切る
SK03	III C 4 b	II層	円形	逆台形	85×82	21	単層	無	
SK04	III C 4 b	II層	不整形	皿形	65×62	26	3層	無	
SK05	III C 4 a	II層	椭円形	箱形	119×81	35	2層	無	西壁オーバーハング
SK06	II C 10 c	VII層	椭円形	箱形	87×68	63	単層	無	上面に擾乱
SK07	III C 4 a	II層	不整円形	不整形	77×74	45	2層	無	上面に擾乱
SK08	III C 1 a	II層	円形	箱形	78×66	45	3層	無	底面根拠乱多い
SK09	III C 3 c	VII層	円形?	箱形?	85×[64]	26	単層か	無	SK20を切る、断面図無
SK10	III C 3 + 4 a	II層	円形	逆台形	[76]×72	32	単層	無	SK02に切られる
SK11	III C 4 b	VII層	円形	箱形	74×72	53	単層	無	周辺に擾乱多い
SK12	III C 4 c	VII層	円形	不整形	107×94	48	単層	無	P04を切る
SK13	III C 4 c	VII層	円形	箱型	81×74	41	単層	無	
SK14	II B 4 b + c	IV層	長楕円形	逆台形	164×134	76	4層	縄文6.4g No.1 鉄滓 273.1g	
SK15	III C 3 + 4 a	II層	長楕円形	不整形	145×94	51	単層	無	2基の土坑が重複?
SK16	III C 1 a	II層	不整円形	箱形	83×79	53	3層	陶製玩具1 1肩から出土	
SK17	III C 1 a	III層	円形	逆台形	69×61	31	2層	縄文28.7g No.2+3	
SK18	III C 1 a	III層	円形	箱形	88×79	35	2層	無	
SK19	III C 2 c	VII層	円形?	逆台形?	90×[62]	42	単層	無	南東側斜平
SK20	III C 3 c	VII層	円形?	箱形?	[30]×[15]	13	単層か	無	SK09に切られる、断面図無
SK21	III C 3 a	II層	円形?	箱形?	84×[54]	72	3層	無	南側削平
SK22	II C 10 b	II層	円形	箱形	83×81	31	単層	鉄小片2.3g	
SK23	III C 2 a	IV b 層	不整形	不整形	98×95	31	2層	無	
SK24	II C 9 a	VI b 層	円形	箱形	70×74	35	2層	No.49	SK25を切る 近代?
SK25	II C 9 a	VI b 層	椭円形	不整形	67×[65]	53	3層	無	裏に塗り込み、SK2に切られる
SK26	II C 8 a	VI b 層	円形	皿形	68×61	23	単層	No.50	近代?
SK27	II C 4 c	VI b 層	円形	逆台形	83×76	37	2層	無	上面に炭化物含む黒色土散布

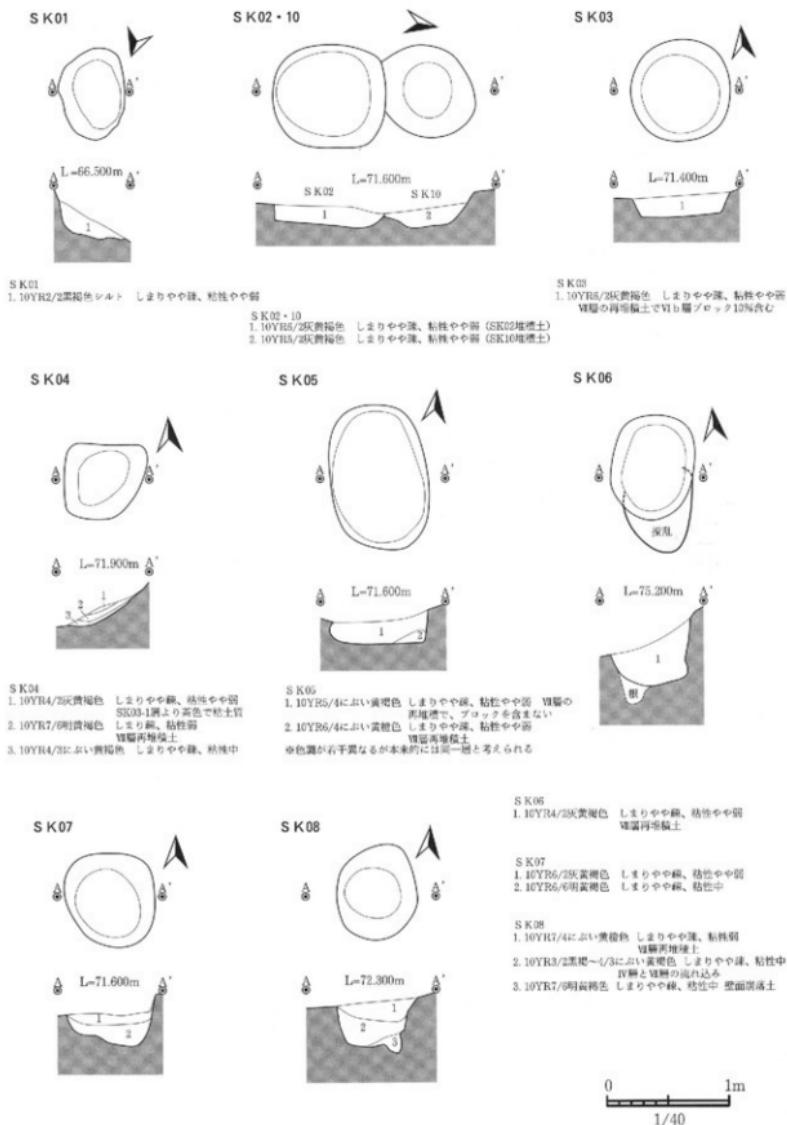
<柱穴 (P)> 西側調査区で1個、東側調査区で7個検出した(第12図、第3表)。建物を構成するようなものは無く、出土遺物も皆無であるため掘削年代・性格については不明である。

<焼土 (S F)> S F01は、II B 3 d グリッドに位置する。検出面はIV層下位で、楕円形状プランとして確認した。南東-北西方向に長軸を持ち、平面規模は42.3×29.9cmである。断面形は皿状で、被熱深度は8cmである。IV層相当の暗褐色シルトが被熱により赤化していることから、現地性の焼土であると考えられる。なお、出土遺物が無いため時期は不明である。

S F02は、II B 1 a グリッドに位置する。検出面はV層上面で、三角形状プランとして確認した。東西方向に長軸を持ち、平面規模は24.2×22.2cmである。赤化した焼土の堆積であり、V字形となる断面形状や周囲の地形を鑑みると、雨裂により生じた窪地に他の場所から焼土が流入し堆積したものと考えられる。なお、出土遺物が無いため時期は不明である。

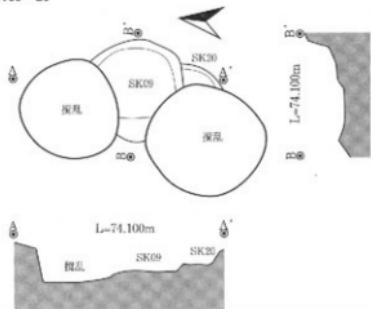
S F03は、II B 2 a グリッドに位置する。検出面はV層上面で、楕円形状プランとして確認した。南北方向に長軸を持ち、平面規模は40.2×10.6cmである。赤化した焼土の混入具合により2層に細分しているが、断面形や周囲の地形を鑑みると、雨裂により生じた窪地に他の場所から流入し堆積したものと考えられる。なお、出土遺物が無いため時期は不明である。

<畝間状遺構 (S X)> S X01は、II A 3 ~ 5 j + 5 i 、II B 3 a グリッドに位置する。S X03と重複関係にあり、本遺構がS X03を切るかたちで掘削されている。検出面はIII層上面で、縞状プラン

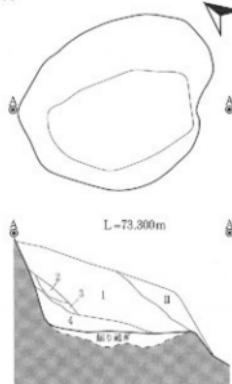


第6図 SK01~08・10

SK09・20



SK14



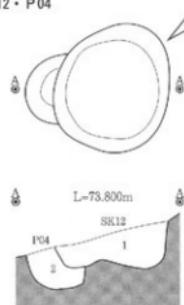
SK09・20
1. 10YR5/4に近い黄褐色 しまり、粘性ともに無 韻富再堆積土(断面図)

SK14
1. 10YR2/2褐褐色シルト しまり中、粘性やや弱

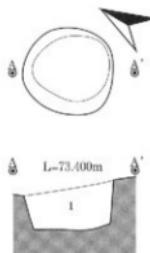
2. 10YR3/3褐褐色シルト しまりやや弱、粒径やや粗、葉化花崗岩($\phi 2\sim 3$ mm) 50%混入
3. 2.5Y4/4オーラープ褐色の風化花崗岩 10YR2/2褐褐色シルトが7:3の割合で混合
しまりやや弱、粘性やや弱

4. 10YR3/2褐褐色シルト しまり中、粘性やや弱、風化花崗岩($\phi 2\sim 3$ mm) 5%混入

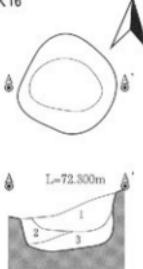
SK12・P04



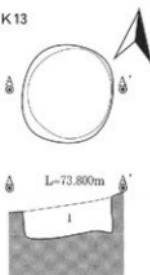
SK11



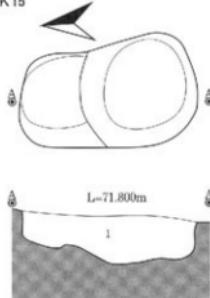
SK16



SK13



SK15



SK11

L. 10YR4/3灰黄褐色 しまり、粘性ともに 中 灰化物ごく微混合

SK12・P04

1. 2.5Y4/4淡褐色 L.まろ謎、粘性弱
韻富再堆積土(SK12再堆積土)
2. 10YR3/2灰褐色 しまりやや強、粘性やや弱
粒子細かい黒色土で風化
花崗岩ブロック埋蔵

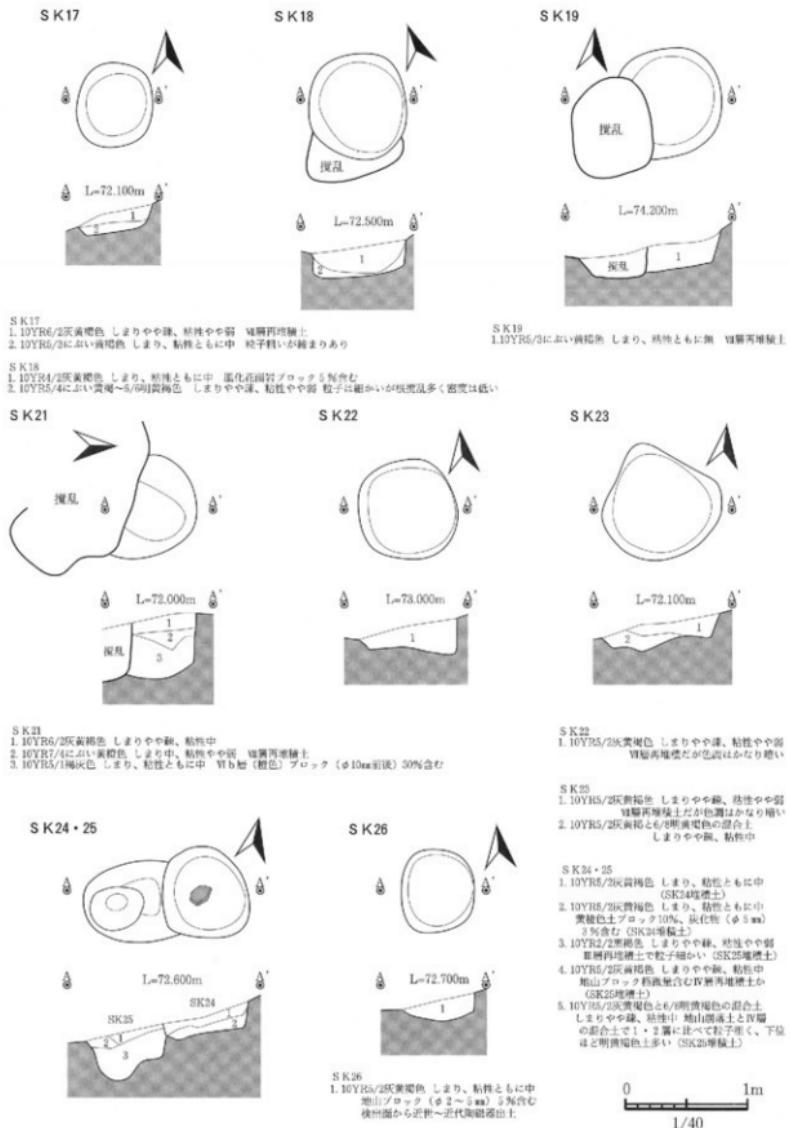
3. 10YR5/4に近い黄褐色 しまりやや強、
粘性やや弱、葉面削落土で粒子
細かくに近い黄褐色土少混合

SK13
1. 10YR4/3灰黄褐色 しまり、粘性ともに 中 灰化物ごく微混合

SK15
1. 10YR5/2灰黄褐色 しまり中、粘性やや弱

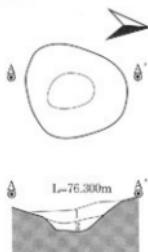
0 1m
1/40

第7図 SK09・11~16・20、P04

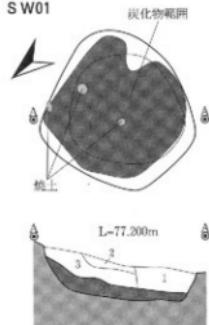


第8図 SK17~19・21~26

SK27



SW01



SK27

1. 10YR2/2黒褐色 しまり、粘性とともに中炭化物3%含む
2. 10YR4/2灰黄褐色 しまり、粘性とともに中炭化物ブロック5%含む

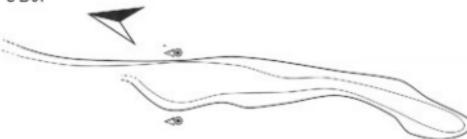
SW01

1. 10YR2/2黒褐色 しまり、粘性とともに中炭化物3%含む
2. 10YR4/2灰黄褐色 しまり、粘性とともに中炭化物ブロック5%含む
3. 10YR3/2黒褐色 しまり中、粘性やや強炭化物層と疊棲しているため被下位に微量の炭化物含む
4. 10VR1/7/1褐色 しまりやや強、粘性中混さ3~15mmの小鉢を30%含む炭化物層上面はやや弱く剥まる

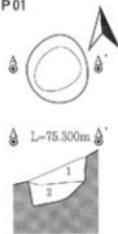
SD01

1. 10YR3/2黒褐色 しまり、粘性とともに中炭化物少量と炭化物混合ブロック(φ 1~2mm) 5%含む

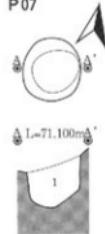
SD01



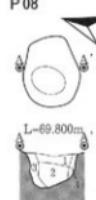
P01



P07



P08



1. 10YR5/4において黄褐色 しまり、粘性とともに中炭化物少々含む
2. 10YR5/9明褐色 しまり、粘性中

P07

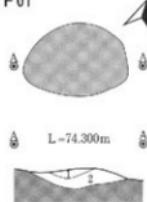
1. 10YR5/2灰黄褐色 しまり、粘性とともに中炭化物種々か下位に黄色土ブロック3%含む

P08

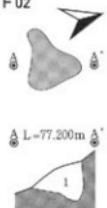
1. 10YR5/2灰黄褐色 しまり、粘性とともに中炭山地ブロックと炭化物含む
2. 10YR2/1黑色 しまり中、粘性中炭山地ブロック混合含む
3. 10YR5/3において黄褐色 しまりやや強、粘性やや強IV層剥離土で底土置



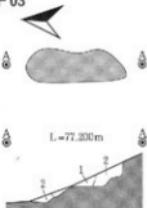
SF01



SF02



SF03



S F01

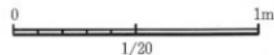
1. 7SYR4/4褐色シルト しまりやや強、粘性やや弱
2. 10YR2/2黒褐色シルト しまり中、粘性やや弱

S F02

1. 7SYR4/4褐色シルト しまり中、粘性やや弱 10YR2/2黒褐色シルト10%混入

S F03

1. 7SYR4/4褐色粘土 しまり、粘性とともに中
2. 10YR2/2黒褐色シルト しまり中、粘性やや弱 1層粘土ブロック(φ 1~3cm) 20%混入



第9図 SK27・SW01・SD01・P01・07・08・SF01~03

第3表 柱穴観察表

遺構名	地 点	検出層位	計測値(cm)		堆積土	備 考
			長軸×短軸	深さ		
P01	III C 7・8 c	VII b 層	53.5×50.9	23.5	黄褐色主体の2層	断面図掲載
P02	III C 7 c	VI b 層	65.2×63.9	46.4	10YR5/4に近い黄褐色 しまり、粘性とともに中	
P03	III C 7 c	VI b 層	58.6×44.7	34.0	10YR5/4に近い黄褐色 しまり、粘性とともに中 中位に地山ブロック30%	
P04	III C 4 b・c	VII 層	[55.4×21.0]	39.4	10YR3/2黒褐色 しまり、粘性とともに中 地山ブロック含む	S X12に切られる
P05	II A 5 j	IV 層	26.4×23.2	19.2	10YR1.7/1黒色シット	
P06	III B III f	VI b 層	45.9×34.0	24.6	10YR3/2黒褐色 しまり、粘性とともに中 地山ブロック5%	
P07	II B 9・10 j	VI b 層	50.2×50.3	42.8	灰黄褐色土厚層	断面図掲載
P08	III B 2 j	VI b 層	57.0×47.4	37.2	崩落土含む	断面図掲載

〔 〕は残存値を表す

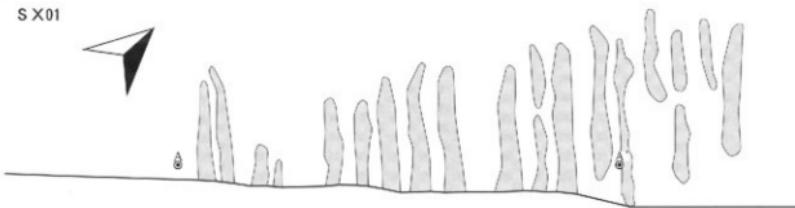
として確認した。前年度試掘トレンチにより遺構中央部は既に削平されていたが、トレンチを挟んだ東西の歓は検出写真によると一連のものと考えられる。歓の長軸方向はN-42°-W、歓幅は概ね24cm前後、歓の高さは残存値で7~11cm前後で、面積は約75m²である。調査区中央を流れる沢に対し直行するように掘削されており、歓の西端と東端との比高差は約2.5mである。耕作土はIII層黒褐色土であり、歓間にII層起源の砂質シルトが堆積していた。出土遺物には縄文土器片、土師器片、鉄滓、鉄釘がある。なお、歓及び歓間堆積土の種実遺体分析及び花粉分析を実施しており、分析の結果ソバ種の花粉が検出されている(附録2)。以上のことから、本遺構は出土遺物及び検出面から古代以降に属し、自然科学分析の結果からソバ栽培が行われていた畑である可能性がある。

S X02は、II A 6・7 i グリッドに位置する。S X01・03と近接しているが、直接的な重複関係はない。検出面はII層下位で、縞状プランとして確認した。規模をみると、歓の長軸方向はN-54°-W、歓幅は一様でなく、歓間は概ね18cm前後、歓の高さは残存値で約5cm、面積は約3.0m²である。調査区中央を流れる沢に対し直行するよう掘削されており、歓の西端と東端との比高差は約0.5mである。耕作土はII層暗褐色土であり、歓間には斜面上方からの流入と考えられるVII層起源の砂質シルトが堆積していた。なお、遺物は出土していないが、S X01との類似点が多いことから古代以降の畑である可能性がある。

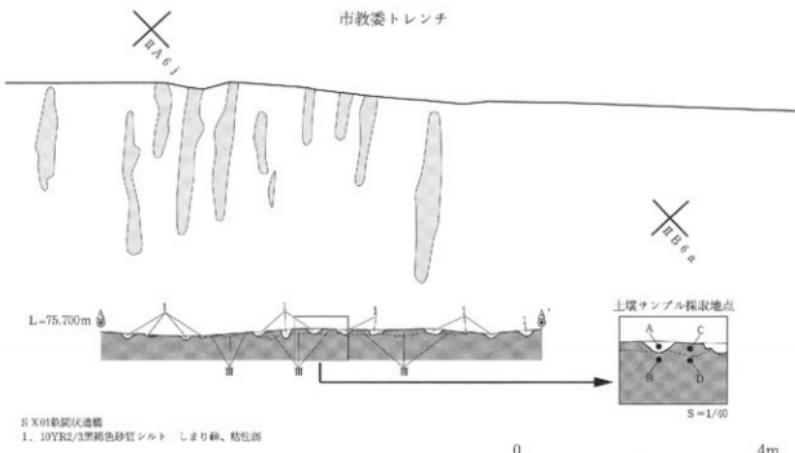
S X03は、II B 4 a・b・5 a、2 a 5 j グリッドに位置する。S X01と重複しており、S X01に本遺構が切られている。検出面はIII層で、縞状プランとして確認した。規模をみると、歓の長軸方向はN-33°-W、歓幅は一様でなく、歓間は約17~22cm、歓の高さは残存値で約5~8cm、面積は約17m²である。調査区中央を流れる沢に対し直行するよう掘削されており、歓の西端と東端との比高差は約0.85mである。耕作土はIII層黒褐色土であり、歓間には斜面上方からの流入と考えられるVII層起源の砂質シルトが堆積していた。なお、遺物は出土していないが、検出面及び重複関係からS X01より古い時期の畑である可能性がある。

<埋設大甕> 遺構として登録していないが、陶製の大甕がII B 10 j グリッドとIII C 1 c グリッドで各1点出土している(写真図版12)。昭和以降に埋設され、水甕または肥溜めとして使用されたものと考えられる。両者とも遺存状況が極めて良好であり、民俗資料としても価値があると考えられた為、調査終了間際に回収を行った。ただし、運搬途中に崩壊する危険性があった為、埋蔵文化財センター(盛岡市所在)には持ち帰らず、写真撮影を行った後に宮古市教育委員会に保管をお願いした。

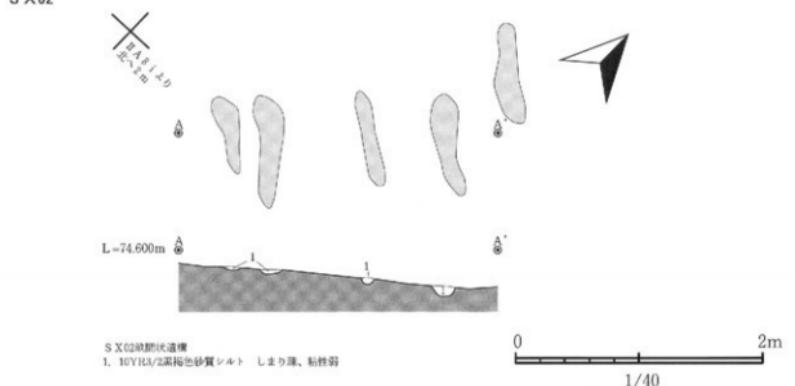
SX01



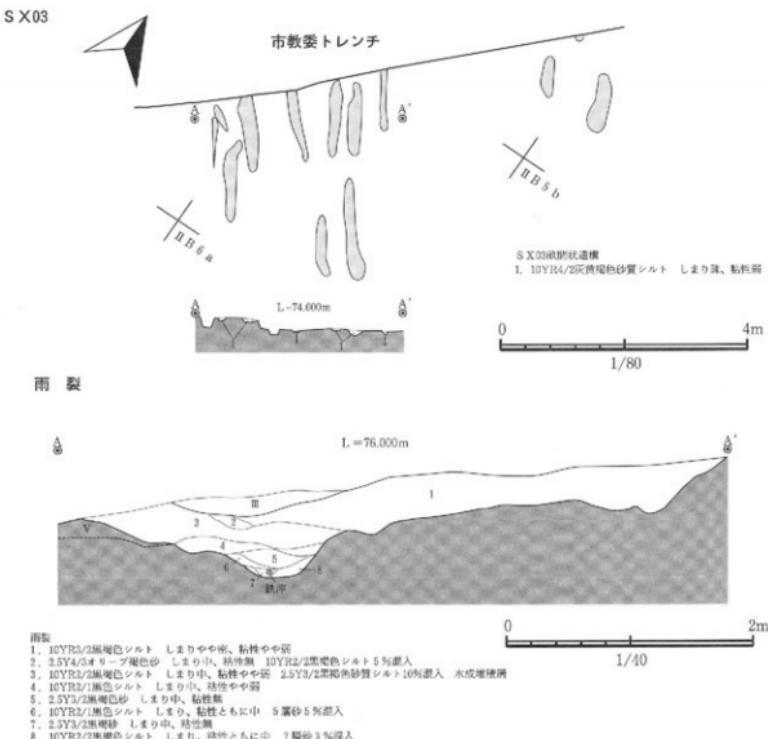
市教委トレンチ



SX02



第10図 SX01・02



第11図 SX03、雨裂断面

(3) 出土遺物

昨年度試掘調査分も含めて小コンテナ4箱分の遺物が出土している。以下では種別ごとに概要を記すこととする。

<土 器> 総破片数で152点(881.6g)出土した。このうち遺構内からの出土は3点(35.1g)のみで、その他は遺構外からの出土である。遺構外出土のものは、西側調査区では中央付近に位置する沢跡の堆積土中、東側調査区では南東側(III区)からの出土が多い。層位ごとの出土量をみると、II層が33点(151.1g)、III層が10点(58.8g)、IV層が17点(94.6g)、V層が36点(200.8g)となっている。文様の特徴から大木9式に属すると考えられる破片が数点確認できるが(7・14・17~19)、ほとんどが地文のみの破片であり時期の特定は困難である。

なお、その他の時代の土器は掲載した土師器2点(23・24)のみである。

<石 器> 剥片石器・磨製石斧・敲磨器類が出土している。

剥片石器は8点(18.66g)出土しており、5点を掲載した。石鏃は、基部形態から有茎鏃(25・26)と平基無茎鏃(27・28)に分類できる。29は摘み部まで二次加工が施された石錐で、1点のみの出土である。なお、剥片石器は不掲載のメノウ製剥片1点を除いて全て頁岩製である。

磨製石斧は3点(700.6g)出土しており、2点を掲載した(30・31)。いずれも蛇紋岩製で、器面全体が研磨されている。なお、30は先端部に敲打痕が認められる。

敷磨器類は6点(1659.6g)出土しており、2点を掲載した(32・33)。いずれも流紋岩製で、片面にのみ磨痕が認められる。

＜陶器＞ 東側調査区を中心に出土しているが、大半が近現代に属するものであり、搅乱または遺構外からの出土が多数を占める。今回は遺構内出土資料と遺構外出土で特徴的なものを中心に登録し、11点を掲載した(40~50)。胎上・釉薬の特徴から肥前窯・瀬戸窯窯・その他東北地方窯と考えられるものに分類でき、比較的瀬戸窯産製品が多く認められる。肥前窯製品は18世紀後半代、瀬戸窯・東北地方窯製品は19世紀代に属するものが多い。ただし、48は湯たんぼなどに付属する陶器栓であり、近現代に属すると考えられる。

埋設された大甕(大甕1・2、写真図版12)は、大甕2の口縁部がわずかに欠損している以外は完形である。大甕1は体部中位に最大径をもつ倒卵形で、底部は平底である。頸部は直立し、口縁部は折り返されて縁帯を形成する。体部内外面にはコテを使用した横ナデ調整が施されているが、輪積み成形の痕跡(粘土帶接合部)が明瞭に残る。釉薬は柿釉で、底部外面を除いて全面に施される。計測値は、器高83cm、口縁部は若干歪んでいるため直径72×65cm、底径25cm、厚さ1.0~2.0cmである。大甕2は体部が平底の底部からわざかに丸みをもって立ち上がり、最大径は頸部付近にある。頸部は直立し、口縁部は折り返されて縁帯を形成する。内外面にはコテを使用した横ナデ調整が施されており、輪積みの痕跡は大甕1ほど明瞭ではない。釉薬は底部周辺を除いて鉄釉が施され、さらに口縁部から体部中位に海鼠釉が流し掛けられる。計測値は、器高67cm、口径62cm、底径21cm、厚さ0.8~1.7cmである。なお、底部内面に方形の目積み痕が6箇所認められる。

＜金属製品＞ 鉄製品は15点(344.3g)出土しており、器形の判明する3点を掲載した(34~36)。34は角釘、35は楔で、形態から近世以降に製作されたものと考えられる。36は環状の製品で、平面形は馬蹄形で底辺部は直角に折れ曲がる。古代に属するのであれば刀装具の可能性はあるが、遺構外(II層)出土であり詳細は不明である。なお、SK22からも鉄製品が1点出土しているが、器形の判別が困難な小破片(2.3g)のため図示していない。

銅製品には煙管の雁首が2点ある(37・38)。37は火皿が小さく首が太いタイプで、わずかに羅字竹が残存している。38は小型の火皿をもち、小口に肩をもつタイプである。古泉弘による分類(古泉1987)に従うと、37は18世紀後半以降、38は17世紀前半以降に製作されたものと考えられる。

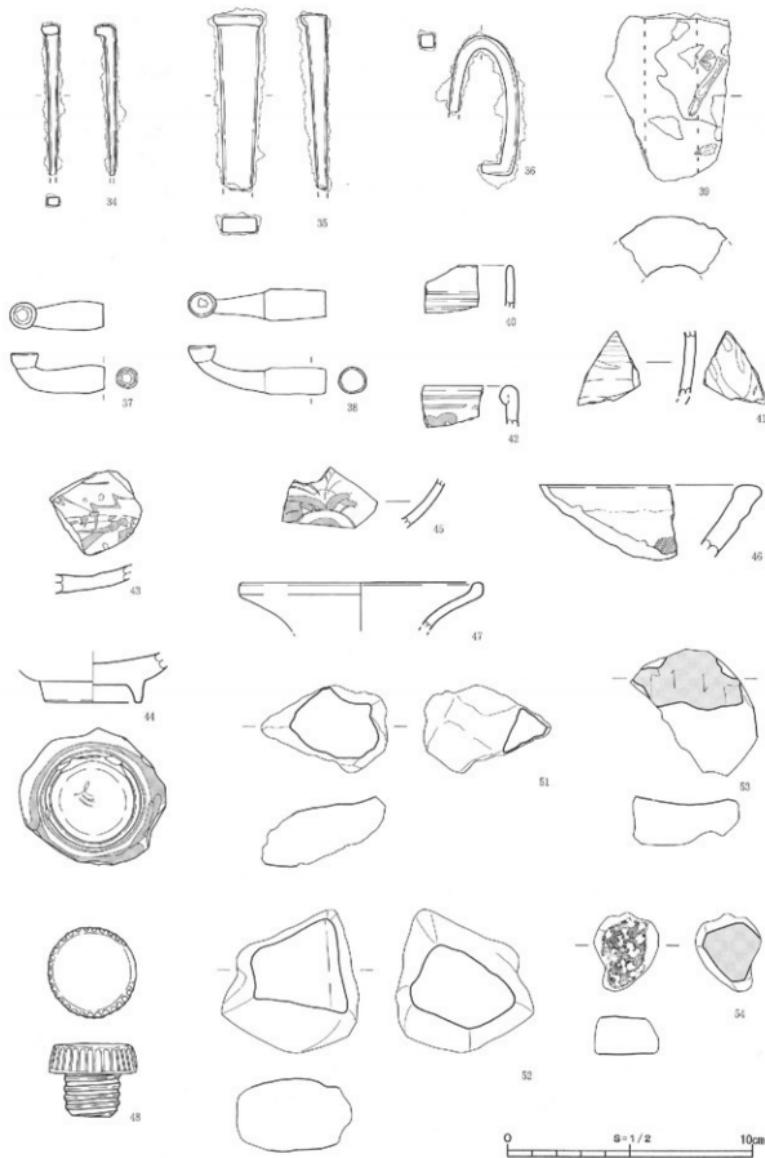
＜羽 口＞4点(162.5g)出土しており、1点を掲載した(39)。先端部の破片で、灰色の胎土に約1mm弱の白色砂粒を多量に含む。還元作用により外面は灰色化しており、鉄滓も付着している。

＜鉄 淚＞ 5,696.6g(小コンテナ1箱分)出土している。このうち約半数が西側調査区の雨裂部分からの出土である。鉄滓の種類としては流動滓が最も多く、全体の約75%を占める。以下含鉄鉄滓10%、炉底滓・椀形滓・流状滓4%、鉄塊系遺物3%となる。

＜土製品＞ 用途不明の製品が4点出土している(51~54)。51~53は軟質な焼き上がりの製品で、淡橙色の胎土に約0.5~2mmの砂粒を含む。いずれも表裏面にナデ調整が施され、52は片面が黒く変色している。54は内外面ともに黒色処理が施されており、片面には何らかの圧痕が認められる。



第12図 小沢V神籠石遺跡出土遺物（1）



第13図 小沢V神籠石遺跡出土遺物（2）

4 小沢VI遺跡

(1) 調査区の概要

小沢VI遺跡は、平成19年に宮古市教育委員会が「北部環状線関係試掘調査F地区」として試掘調査を実施した際に遺構・遺物が検出されたことから新規登録された遺跡である。

調査区は南北方向に走る尾根頂部に位置しており、調査前現況は山林であった。検出面標高は105～113mである。基本層序は第15図の通りで、地山を含めて3層に細分した。ただし、II層は西側斜面部にのみ堆積しており、ほとんどの地点ではI層直下でIII層が露出する状況であった。前年度試掘調査によって調査区内約140m²の表土除去が行われていた為、調査はこの範囲を中心に遺構・遺物の出土した範囲を拡張する方針で実施した。掘り下げの結果、調査区北端で土坑1基、西側斜面部で縄文土器を検出した。なお、尾根頂部から東側斜面については前年度の試掘調査と同様重機により削平されている状況が確認されたため、この付近については掘削の必要はない判断した。また、南側の緩斜面部についても今年度新たに2本のトレンチ(T01・02)を設定したが、I層直下でIII層が露出したのみであり、遺構・遺物は検出されなかった。したがって、最終的には調査対象面積820m²のうち280m²(全体の約34%)の掘り下げを行って調査を終了した。

(2) 検出遺構

<SK01> II G10 b グリッドに位置する。検出面はIII層で、上面及び東側は造成の際に大幅に削平されている。北側が調査区外へ延びているため全形は不明であるが、平面形は不整な方形ないし長楕円形、上面規模2.13×1.56m、深さ0.2mである。堆積土はIII層の再堆積土が主体であり2層に細分した。なお、2層中に微量の炭化物が混入していたため、サンプルを採取してAMS年代測定を実施したところ、4150±30yrBPという結果が得られた。出土遺物は全て縄文土器で、底面直上からの出土が多い。総破片数23点(381.8g)のうち7点を掲載した。出土遺物及び年代測定の結果から、本遺構は縄文時代中期に属すると考えられるが、用途については不明である。

(3) 出土遺物

縄文土器35点(546.5g)が出土しており、10点掲載した(第17図)。出土地点はSK01及びその周辺、北西側斜面(III F 2・3 j グリッド)である。全形を知りうるものはないが、文様の特徴から縄文時代中期(大木8式)に属する破片が確認できる。

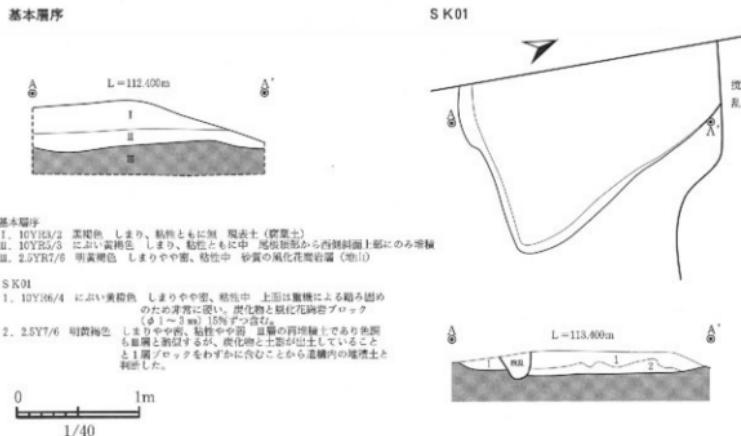
5 調査のまとめ

今回の調査により、小沢V神籠石遺跡は縄文時代～近現代、小沢VI遺跡は縄文時代に属する遺跡であることが確認できた。最後に今回の調査成果について時代ごとに列記していきたい。

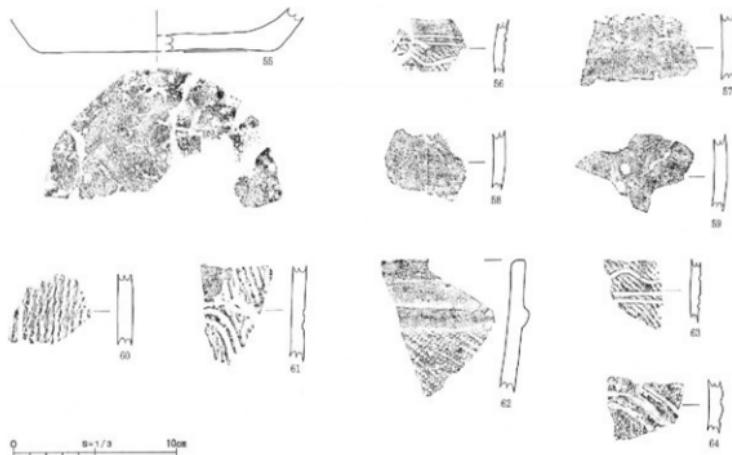
<縄文時代> 遺構は小沢VI遺跡で検出した土坑1基のみで、年代測定の結果から中期に属する遺構とは判断できるが、性格について明らかにすることはできなかった。遺物は両遺跡とも中期(大木8・9式)のものが主体である。小沢V神籠石遺跡では土器とともに石器も比較的多く出土しており、陥し穴は検出されていないが調査区内には沢が走っていたことを勘案すると、調査区内はこの時期水を飲みに来る動物の狩猟場として利用されていたと考えられる。

なお、地権者の御好意により小沢V神籠石遺跡の調査区南側の標柱付近の畑から出土した遺物を実見させて頂いたところ、後・晚期に属する遺物が多量に出土していることがわかった。現在でも耕作中に遺物が出土するということであり、遺物の質・量とともに今回の調査区の出土遺物を凌駕していることから、本来的には後・晚期が小沢V神籠石遺跡の最も栄えた時期であったと考えられる。

<古代> 上坑3基・炭窯1基・畝間状遺構3面がある。遺物には土師器と鉄滓があり、鉄滓は西側調査区の雨裂中からの出土が最も多い。今回の調査区からは炭窯以外に鉄牛産関連の遺構は検出さ



第14図 基本層序・SK01



第15図 小沢VI遺跡出土遺物

れなかったが、鉄滓の存在から調査区外に何らかの施設が存在したものと考えられる。また、出土遺物が無いため時期不明とした焼上についても全て西側調査区の雨裂周辺に位置することから、これらも鉄生産に関連して形成された遺構の可能性は考えられる。S X01歓間状遺構については、自然科学分析の結果からソバを栽培した畠跡である可能性が高いと考えられた。近接するS X02・03もS X01と同様の特徴をもった歓間状遺構であることから、これらについても畠跡であると考えられ、本遺跡内では古代以降に数回にわたる雑穀の栽培活動が行われていたものと考えられる。

＜近世（以降）＞遺構として土坑24基、溝1条、柱穴8個、焼土3基、遺物として陶磁器・鉄製品がある。東側調査区の土坑群については検出中に煙管が出土したことと形状から墓の可能性を考えていたが、出土遺物が皆無でありその性格を明らかにすることはできなかった。この他、埋設された大甕をはじめ近現代の遺物も多く出土していることから、近世以降現代まで継続的に遺跡内が利用されていたことも明らかとなった。

なお、小沢V神龍石遺跡と小沢VI遺跡の平成20年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

＜参考文献＞

古泉 弘 1987 『江戸の考古学』考古学ライブラリー48 ニュー・サイエンス社

宮古市教育委員会 1983 『宮古市遺跡分布調査報告書1』宮古市埋蔵文化財調査報告書3

2002 『小沢II大上遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書58

第4表 土器観察表（1）

掲載No.	種別	器種	残存部位	出土地点・層位	文様・特徴	外面色調	備考
1	縄文土器	深鉢	口縁部	SK14 堆積土中位	原体側面研磨	橙色	
2	縄文土器	深鉢	胴部	SK17 底面直上、HIC2a II層	LR	に赤い黄褐色	3と同一個体か
3	縄文土器	深鉢	胴部	SK17 底面直上	LR	に赤い黄褐色	2と同一個体か
4	縄文土器	深鉢	胴部	HIB3a 雨裂堆積土上位	沈線縦・L	に赤い黄褐色	
5	縄文土器	深鉢	胴部	IIA7h V層	RL	に赤い褐色	
6	縄文土器	深鉢	底部	IIA7h V層	木葉痕	に赤い黄褐色	
7	縄文土器	深鉢	胴部	IIA5i 直凹	沈線V・L?	暗褐色	外曲にスス
8	縄文土器	深鉢	胴部	IIA8h IV層	RL→ナデ	に赤い黄褐色	磨り消し？
9	縄文土器	深鉢	胴部	T23(EB6j) 唇褐色・黃褐色混合土	单輪絞糸条I類R	黒褐色	
10	縄文土器	深鉢	底部	HBC9 h IV層	木葉痕	赤褐色	
11	縄文土器	深鉢	胴部	HIC5c IV層	LR	橙色	外面風斑
12	縄文土器	深鉢	底部	T22(HIC5e) I層	脇部: RL、底部: 濃代痕	褐灰色	
13	縄文土器	深鉢	胴部	HIC5c 検出面	原体側面研磨・RL	灰青褐色	
14	縄文土器	深鉢	口縁部	IIA区(調査区外) 表探	沈線・R	黒褐色	
15	縄文土器	深鉢	胴部	H19試掘トレンチ中央 III層	無文	に赤い黄褐色	内面に強いナデ
16	縄文土器	深鉢	口縁部	H19試掘トレンチ西側 IV層	ナデ	に赤い褐色	
17	縄文土器	深鉢	口縁部	H19試掘トレンチ中央 V層	沈線区画・LR	褐色	外面にスス
18	縄文土器	深鉢	胴部	H19試掘トレンチ中央 III・V層	沈線区画・L充填	褐色	19と同一個体か
19	縄文土器	深鉢	胴部	H19試掘トレンチ中央 V層	沈線区画・L充填	に赤い橙～褐色	18と同一個体か
20	縄文土器	深鉢	胴部	H19試掘トレンチ西側 V層	RL	に赤い黄褐色	外面にスス
21	縄文I.器	深鉢	頭部	H19試掘トレンチ西側 V層	RL→ナデ	に赤い黄褐色	
22	縄文土器	深鉢	底部	調査区南側 表探	濃代痕	赤褐色	
23	土師器	甕	胴部	東側調査区南内隅(HB2区) II層	外: ケズリ/内: ハケ	に赤い黄褐色	
24	土師器	甕	口縁部	H19試掘トレンチ中央 IV層	外: 回転ナデ/内: 茶色斑塊・Lガキ	に赤い黄褐色	写真掲載

第5表 石器観察表

揭露No	器種	出土地点・層位	計測値(cm)			重量(g)	石材	備考
			長	幅	厚			
25	石鏟	H19試掘トレンチ中央西隅 V b層	(2.60)	1.05	0.30	0.53	頁岩	北上山地 先端・基部欠損
26	石鏟	T28(B-B'6 g) 黒色土ト位	(1.96)	1.30	0.40	0.77	頁岩	北上山地
27	石鏟	T24(II C'e) 暗赤色土	(2.40)	0.95	0.30	0.67	頁岩	北上山地
28	石鏟	東側窓口玄関西隅(ⅢB区) 黒色土	3.00	1.90	0.40	1.56	頁岩	北上山地
29	石鏟	西側窓口(区N.11)杭東側 黒色土	3.15	2.00	0.85	3.73	頁岩	北上山地
30	磨製石斧	II B7 j 暗褐色土	(2.60)	(4.60)	(1.75)	39.32	蛇紋岩	早池峰山周辺 刃部のみ
31	磨製石斧	II A 4 h II層	(4.00)	(3.30)	(2.10)	38.94	蛇紋岩	早池峰山周辺 柄部のみ
32	敲碎器	SF01付近 VII層直上	13.6	6.5	2.85	363.0	流紋岩	北上山地 1面使用
33	敲碎器	H19試掘トレンチ東部(海製) IV層	12.1	8.7	5.00	683.14	流紋岩	北上山地 1面使用

第6表 金属製品観察表

揭露No	器種	出土地点・層位	計測値(cm)			重量(g)	材質	備考
			長	幅	厚			
34	釘	T22(II C 5 e) I層	(6.2)	0.7	0.5	5.6	鉄	先端部欠損
35	楔	III B 3 h 暗褐色土	(7.2)	2.1	0.7	54.0	鉄	先端部欠損
36	環状鉛器	H19試掘トレンチ西郊 II層	7.0	(2.7)	0.7	18.2	鉄	一様欠損
37	移動(環)	III C 4 b II層直上	3.8	0.9	0.1	9.0	銅	
38	管首(環首)	III C 5 c I層下位	5.6	1.0	0.1	12.6	銅	羅字竹残存
39	羽口	H19試掘トレンチ中央 III層	(6.9)	(5.1)	2.0	68.69	十製	鉄淬培書

第7表 陶器観察表

揭露No	材質	器種	殘存部位	山土地点・層位	装飾		产地	年代	備考
					釉薬	繪付・文様			
40	陶器	腰鉗	口縁部	II A 3 j VII層直上	鐵輪・灰輪	掛け分け	瀬戸	瀬戸房5小期以降	
41	陶器	刷毛目碗	体部	H19年度試掘トレンチ II層	灰釉	白化粧+刷毛目	瀬戸	瀬戸房9~10小期	
42	磁器	香炉	口縁部	EC1 b-c 摂乱	透明釉	草花文	肥前	大德IV期?	
43	磁器	皿	体部	H19年度試掘トレンチ II層	透明釉	海兵風景文	肥前	大徳IV期	
44	磁器	碗	底部	西側調査区重機道	表模	透明釉	草花文	瀬戸房10小期以降	裏貼り、散垂打ち痕
45	磁器	碗	体部	EC1 b-c 摂乱	透明釉	草花文	瀬戸	瀬戸房10小期以降	
46	陶器	腰鉗	口縁部	III C 3 a II層直上	鉄輪	模様	不明		
47	陶器	利手	口縁部	EC1 b-c 摶乱	鉄輪	海鼠棘波し掛け	不明		
48	陶器	栓	光形	東側調査区土器	鉄輪	不明			型作り
49	磁器	碗	体部	SK24 I層上位	青磁釉	脂剤	不明	近代?	写真掲載
50	磁器	皿	口縁部	SK26 梵出面	透明釉	青磁・鉄輪	不明	近代?	写真掲載

第8表 土製品観察表

揭露No	種別	器種	出土地点・層位	計測値(cm)			重量(g)	色調	特徴
				長	幅	厚			
51	土製品	不明	II C 3 e I層	(3.6)	(5.2)	2.9	13.69	浅黃褐色	表面面ナテ調整
52	土製品	不明	III C 5 c VII層直上	(5.6)	(5.9)	2.9	31.77	浅黃褐色	表面面ナテ調整、被削面黒色
53	土製品	不明	III C 5 c VII層直上	(5.2)	(5.3)	(1.9)	18.18	浅黃褐色	ナテ調整、黒色処理?
54	土製品	不明	III C 5 c 鋼筋直上	(3.2)	(2.6)	1.5	13.57	褐色	両面黒色処理、片面に注痕

第9表 土器観察表(2)

揭露No	種別	器種	残存部位	出土地点・層位	計測値(cm)			文様・特徴	外面色調	備考
					長	幅	厚			
55	縞文土器	深鉢	底部	SK01 條出面・埋下位	ナデ			黒褐色		
56	縞文土器	深鉢	肩部	SK01 埋下土位	沈鈕(平行・波状)・L			にぼい褐色		
57	縞文土器	深鉢	胸鉢	SK01 埋下土位	ナデ			黒褐色		
58	縞文土器	深鉢	肩部	SK01 條出面	ナデ			暗赤褐色		
59	縞文土器	深鉢	肩部	SK01 條出面	ナデ			橙色		
60	縞文土器	深鉢	肩部	SK01 東側複混	沈鈕・單輪鉗条体・類LR			黒褐色		
61	縞文土器	深鉢	肩部	SK01 條出面・HIG1a 地山直上	沈鈕(区画)			橙色		
62	縞文土器	深鉢	口縁部	H16試掘トレンチ(III F 2・3・1+) I層	縫合・LR			にぼい褐色	黒斑	
63	縞文土器	深鉢	肩部	III C 1 c 掘混	沈鈕(平行・波状)・L			にぼい褐色		
64	縞文土器	深鉢	III C 1 c 掘混	III C 1 c 掘混	附沈鈕・LR			橙色		

附編1 小沢V神籠石遺跡より出土した炭化材の樹種

吉川純子（古代の森研究会）

はじめに

宮古市的小沢V神籠石遺跡において、SW01炭窯より炭化材が出土したため、この炭化材1試料の樹種同定を行った。炭化材はステンレス剃刀で横断面、接線断面、放射断面の3方向の断面に割り、プレパラートに固定して反射光式顕微鏡で断面を観察した。

同定結果

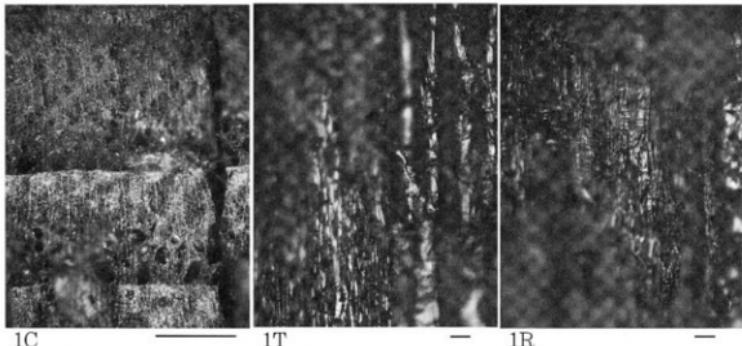
同定の結果、炭窯より出土した炭化材の樹種はクリであった。以下に炭化材の解剖学的記載をおこなう。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)：年輪最初に大きな道管が2-3列配列し、その後徐々に径を減じながら火炎状に小道管が配列する環孔材である。道管の穿孔板は単一で、放射細胞は単列で同性である。

近世の燃料材としての出土は、福島県相馬市の五台山B遺跡や福島県玉川村小半弓遺跡の製鉄遺構内からコナラ節、クヌギ節やカマツカ、カエデ属など多種の広葉樹材とともにクリが検出されている（山田 1993）。單一種のみしか出土しない炭窯はまれで、おそらく樹種をあまり選択せずに周囲の二次林を順次伐採して炭用材としていた場合が多かったと考えられる。

<引用文献>

山田昌久. 1993. 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史. 植生史研究特別第1号. 植生史研究会. 1-244.



図版1 小沢V神籠石遺跡出土炭化材の顕微鏡写真

1.クリ (SW01炭窯)

C. 横断面, T: 接線断面, R: 放射断面, スケールは 1C:1mm、1T,1R:0.1mm

附編2 小沢V神籠石・小沢VI遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

小沢V神籠石遺跡は、岩手県宮古市小沢2丁目253-2（北緯 $39^{\circ} 39' 13''$ 、東経 $141^{\circ} 56' 37''$ ）ほかに所在する。対象試料は、SW01炭窯の底面付近（4層）から出土した木炭（1：IAAA-81493）である。

小沢VI遺跡は、宮古市小沢2丁目6-6（北緯 $39^{\circ} 39' 11''$ 、東経 $141^{\circ} 56' 46''$ ）に所在する。対象試料は、SK01土坑の底面直上から出土した炭化物（2：IAAA-81494）である。

2 測定の意義

遺構の出土遺物は少なく、年代を推定する根拠としたい。

3 化学処理工程

(1) メス・ビンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

(2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA : Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80°C）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

(3) 試料を酸化銅と共に右英管に詰め、真空中で封じ切り500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。

(4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。

(6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

(1) 年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polash 1977)。

(2) ¹⁴C年代(Libby Age : yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。この値は、δ¹³Cによって補正された値である。¹⁴C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差(±1σ)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) δ¹³Cは、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(%)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により¹³C/¹²Cを測定した場合には表中に(AMS)と注記する。

(4) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。

(5) 厳年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、「下一桁を四捨五入しない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv4.0 較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

6 測定結果

小沢V神籠石遺跡のSW01底面付近から出土した木炭の¹⁴C年代は、 1200 ± 30 yrBPである。暦年較正年代 (1σ) は、780~792AD (9.6%)・805~875AD (58.6%) である。

小沢VI遺跡のSK01の底面直上から出土した炭化物の¹⁴C年代は、 4150 ± 30 yrBPである。暦年較正年代 (1σ) は、2867~2836BC (14.7%)・2815~2804BC (5.1%)・2777~2671BC (48.3%) である。

試料の炭素含有率は共に約64%であり、十分な値であった。化学処理および測定内容にも問題が無く、妥当な年代と考えられる。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 校正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-81493	1	小沢V神籠石 SW01底面付近	木炭	AAA	-25.55 \pm 0.34	1,200 \pm 30	86.17 \pm 0.29
IAAA-81494	2	小沢VI SK01底面直上	炭化物	AAA	-25.53 \pm 0.39	4,150 \pm 30	39.65 \pm 0.22

[#2175-2476]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 校正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-81493	1,210 \pm 30	86.07 \pm 0.28	1,196 \pm 26	780AD - 792AD (9.6%) 805AD - 875AD (58.6%)	722AD - 741AD (2.6%) 770AD - 894AD (92.5%) 929AD - 932AD (0.3%)
IAAA-81494	4,160 \pm 30	59.59 \pm 0.21	4,150 \pm 29	2867BC - 2836BC (14.7%) 2815BC - 2804BC (5.1%) 2777BC - 2671BC (48.3%)	2876BC - 2830BC (18.6%) 2822BC - 2628BC (76.8%)

[参考値]

<参考文献>

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, Radiocarbon 19, 355-363
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37 (2), 425-430
 Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355-363
 Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43 (2A), 381-389
 Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

附編3 小沢V神籠石遺跡歓間状遺構の自然科学分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

小沢V神籠石遺跡（宮古市小沢2丁目253-2ほか所在）は、発掘調査により古代以降の土坑、炭窯、歓間状遺構（畑跡）、近世以降の土坑、時期不明の土坑、焼土、溝、柱穴などの遺構や、縄文時代の土器、石器、近世の陶磁器、時期不明の鉄製品等の遺物が検出されている。

今回の分析調査では、古代以降の可能性が指摘されている西側調査区の歓間状遺構（畑跡）より採取された土壤試料を対象として、種実遺体分析と花粉分析を実施し、当時の作物に関する情報を得る。

1 試 料

試料は、歓間状遺構より採取された土壤4点（A,B,C,D）である。Aは歓のほぼ中間、Cは歓間のほぼ中間から採取された砂が混じる灰～黒褐色土で、B,DはA,Cより下位の地山部分から採取された黒褐色土である。

2 分析方法

(1) 種実遺体分析

試料を常温乾燥後、水を満たした容器に投入し、容器を傾斜させて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌した後、容器を傾斜させて回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（20-30回程度）。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実を抽出する。現生標本および石川（1994）、中山はか（2000）等との対照から、種実の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。炭化材は、70°C24時間乾燥後の重量(g)と最大角(mm)を表示する。分析後は、種類毎に容器に入れて保管する。種実には70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。

(2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリシス(無水酢酸9：濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数し表示する。区別が困難な複数種間は、ハイフンで結んで表示する。

3 結 果

(1) 種実遺体分析

結果を表1に示す。種実は、Aから落葉低木のキイチゴ属1個、草本のカヤツリグサ科1個、タケニグサ3個、エノキグサ4個、Cから落葉低木のニワトコ2個、草本のタケニグサ15個、エノキグサ1個が検出され、B,Dからは検出されなかった。その他に、炭化材（最大径5mm）、不明炭化物（菌類の菌核等）、昆虫などが確認された。種実の保存状態は不良である。以下に、種実の形態的特徴等を記す。

<木本>

- キイチゴ属 (Rubus) バラ科

核（内果皮）が検出された。黒褐色、径1mm程度の偏平な半円-三日月状半倒卵体。腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす。

- ニワトコ (*Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana* (Miq.) Hara) スイカズラ科ニワトコ属
核（内果皮）の破片が検出された。淡灰褐色、完形ならば長さ2.3mm、幅1.3mm程度のやや偏平な広倒卵体。背面は丸みがあり、腹面の正中線上は鈍稜をなす。基部はやや尖り、腹面正中線上に小さな孔がある。内果皮はやや硬く、表面には横皺状模様が発達する。破片は腹面を欠損し、長さ2mm、幅1mm程度。

＜草本＞

- カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が検出された。黒褐色、長さ0.8mm、径0.5mm程度の三稜状狭倒卵体。頂部の柱頭部分はやや伸び、基部は切形。果皮表面は微小瘤状突起が密布する。カヤツリグサ属 (Cyperus) と思われる。

- タケニグサ (*Macleaya coedata* (Willd.) R. Br.) ケシ科タケニグサ属

種子が検出された。淡黄褐色、長さ1.5mm、径1mm程度の狭倒卵体で基部は尖る。種皮は硬く、表面には横長楕円形の深い凹みが縦列し、網目模様をなす。

- エノキグサ (*Acalypha australis* L.) トウダイグサ科エノキグサ属

種子の破片が検出された。黒褐色、長さ1.5-2mm、径1-1.5mm程度の倒卵体。基部はやや尖り、Y字状の稜に沿って割れた個体もみられる。種皮は薄く硬く、表面には細粒状凹点が密布する。

(2) 花粉分析

結果を表2に示す。いずれの試料においても花粉化石の産出状況は良好といえず、古植生推定のための定量解析を行うのは困難である。また、検出される花粉化石の保存状態も悪く、ほとんどの花粉外膜が破損・溶解していた。A,Cは草本花粉の割合が高く、イネ科、ヨモギ属、タンポポ亜科が多く認められる。その他ではソバ属、アザ科、キク亜科を伴う。木本花粉ではマツ属が多く、スギ属、ハンノキ属、クリ属-シイノキ属が随伴する。また、シダ類胞子も多産する。B,Dは花粉の産出量が少なく、木本花粉ではマツ属、クルミ属、ニレ属-ケヤキ属が、草本花粉ではイネ科、カラマツソウ属、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科が、わずかに検出されるのみである。

4 考 察

古代以降の可能性が指摘されている畝間状造構（畑跡）の種実遺体、花粉やシダ類胞子化石の産出状況及び保存状態は悪く、花粉外膜が破損・溶解しているものが多く認められた。花粉化石の腐蝕に対する抵抗性は種類により異なり、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている（中村, 1967；徳永・山内, 1971；三宅・中越, 1998など）。よって、比較的分解に強い種類や分解が進んでも同定可能な種類が多いことを考慮すると、今回検出された種実・花粉化石は経年変化による分解・消失の影響を受けており、分解に強いものが選択的に残されている可能性がある。また、畝（A）・畝間（C）と下位の地山（B,D）で種実・花粉化石の産出状況や保存状態が異なる点については、経年変化による分解・消失の他に、後代の擾乱（自然・人為）などの堆積後の時間差を反映していると考えられる。以上の点を考慮して、当時の作物や植生を検討する。

作物の可能性が指摘される栽培種は、畝（A）・畝間（C）で確認されたソバ属の花粉が挙げられる。ソバは古くより日本各地で栽培されていることから、畑跡におけるソバ栽培の可能性が想定される。ただし、その時期は明確ではなく、近代、現代に由来する可能性も否定できない。

その他の草本類は、イネ科、ヨモギ属、タンポポ亜科の花粉が多産し、アザ科、カラマツソウ属、

キク亜科などの花粉や、カヤツリグサ科、タケニグサ、エノキグサの種実が確認された。明るく開けた場所を好む「人里植物」を含む分類群が多いことから、当時の畠跡周辺域に生育していた雑草類に由来すると思われる。

木本類は、針葉樹のマツ属、スギ属や、落葉広葉樹のクルミ属、ハンノキ属、ニレ属－ケヤキ属などの花粉が確認され、木遺跡周辺域の森林に由来するものと思われる。マツ属以外は、沢沿いや河畔、低湿地等の過湿地に生育する種を含むことから、周辺域の沢沿いなどに生育していたものに由来する可能性がある。また、歯(A)・歯間(C)で確認された落葉低木のキイチゴ属、ニワトコの種実や、局地的な植生を反映しやすい虫媒花のクリ属－シノキ属花粉は、畠跡周辺域の森林やその林縁部などに生育していたものと思われる。

<引用文献>

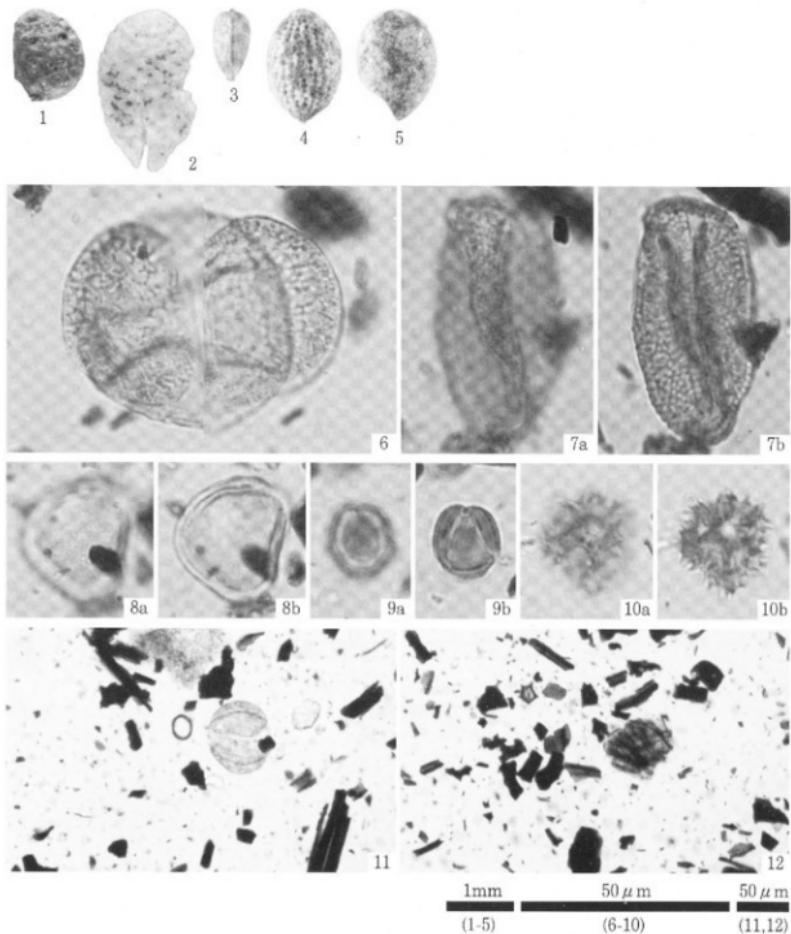
- 石川 茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
 三宅 尚・中越 信和,1998,森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態:種生史研究,6,15-30.
 中村 順,1967,花粉分析,古今書院,232p.
 中山 至大・升之口希秀・南谷 忠志,2000,日本植物種子図鑑,東北大学出版社,642p.
 德永 伸元・山内 輝子,1971,花粉・胞子・化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.

表1 種実遺跡分析結果

分類群	部位	状態	散開状造構			
			A	B	C	D
木本						
キイチゴ属	核	完形	1			
ニワトコ	核	破片			2	
草本						
カヤツリグサ科	果実	完形	1			
タケニグサ	種子	完形			2	
エノキグサ	種子	破片	3		13	
炭化材			4	4	1	4
乾燥重量		0.06g	0.06g	0.06g	0.06g	
最大径		4mm	4mm	4mm	4mm	
不明以化物(菌核等)		33				
昆虫		1				
分析量		400.75g	200.14g	400.01g	200.76g	

表2 花粉分析結果

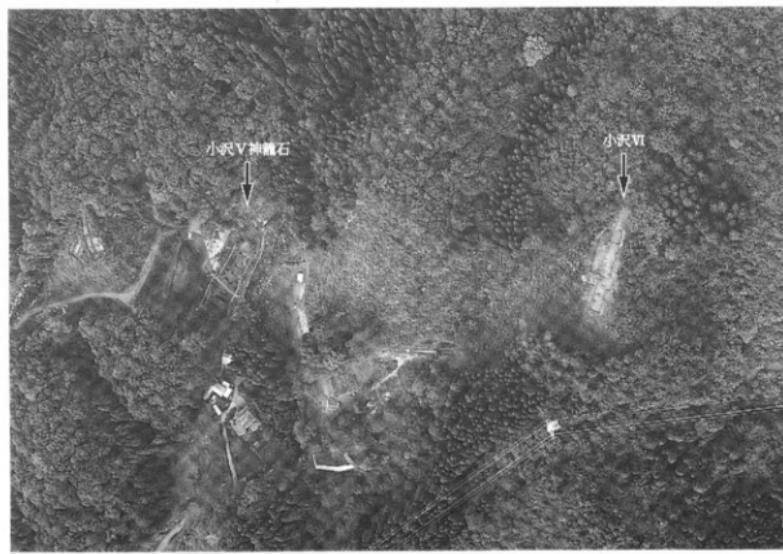
種類	散開状造構			
	A	B	C	D
木本花粉				
マツ属	14	—	16	1
スギ属	4	—	—	—
クルミ属	—	—	—	1
ハンノキ属	1	—	2	—
クリ属－シノキ属	2	—	3	—
ニレ属－ケヤキ属	—	1	—	2
草本花粉				
イネ属	12	4	29	5
ソバ属	1	—	1	—
アザガ属	1	—	—	—
カラマツソク属	—	2	—	—
ヨモギ属	2	3	26	3
キク亜科	3	—	1	1
タンボボ属	17	13	39	4
不明花粉	3	4	3	3
シダ類胞子	126	2	126	11
シダ類胞子	126	2	126	11
合計	21	1	21	4
木本花粉	36	22	96	13
草本花粉	3	4	3	3
不明花粉	126	2	126	11
シダ類胞子	183	25	243	28
総計(不明を除く)				



1. キイチゴ属 核(歛間状造構A)
 2. ニワトコ 核(歛間状造構C)
 3. カヤツリグサ科 果実(歛間状造構A)
 4. タケニグサ 種子(歛間状造構C)
 5. エノキグサ 種子(歛間状造構A)
 6. マツ属(歛間状造構A)
 7. ソバ属(歛間状造構A)
 8. イネ科(歛間状造構D)
 9. ヨモギ属(歛間状造構A)
 10. タンポポ亜科(歛間状造構A)
 11. 花粉分析プレパラート内の状況(歛間状造構A)
 12. 花粉分析プレパラート内の状況(歛間状造構B)



遺跡遠景（南東から）



調査区全景（上が北）

写真図版1 遺跡の位置



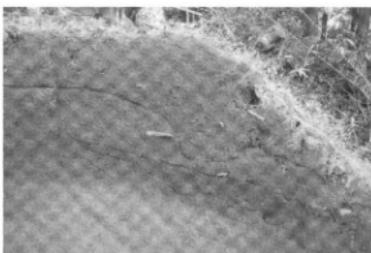
西側調査区現況（東から）



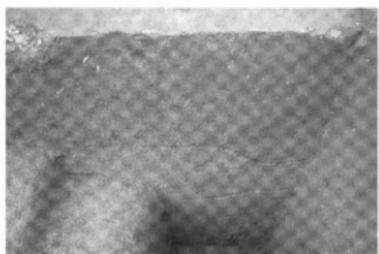
東側調査区現況（南東から）



西側調査区基本層序（北から）



東側調査区基本層序（北から）



西側調査区H19試掘 トレンチ深掘（北から）



西側調査区 トレンチ掘削状況①（東から）

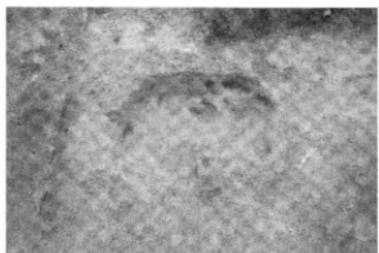


西側調査区 トレンチ掘削状況②（北東から）

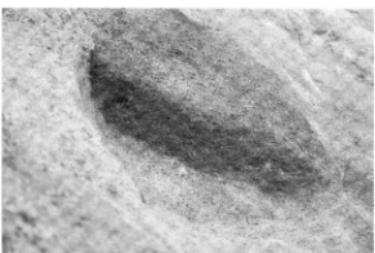


III C区土坑群完掘（南東から）

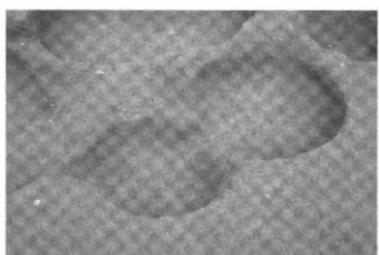
写真図版2 小沢V神籠石遺跡（1）



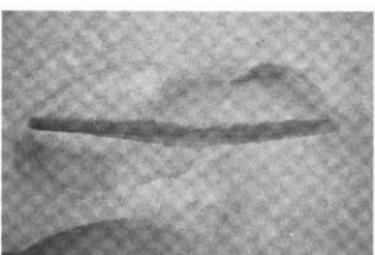
SK01完盤（西から）



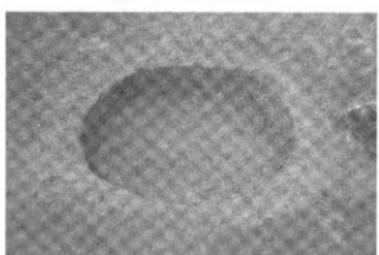
SK01断面（北から）



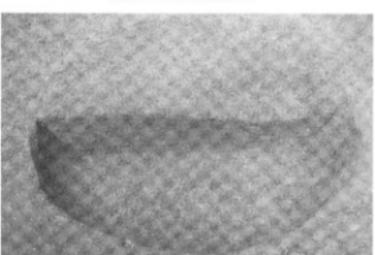
SK02・10完盤（南西から）



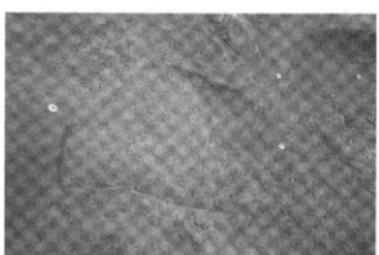
SK02・10断面（東から）



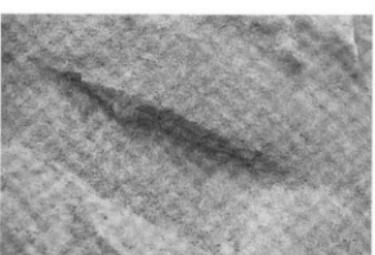
SK03完盤（南から）



SK03断面（南から）

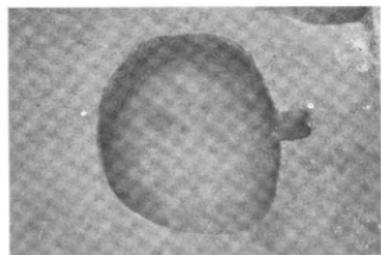


SK04完盤（北から）

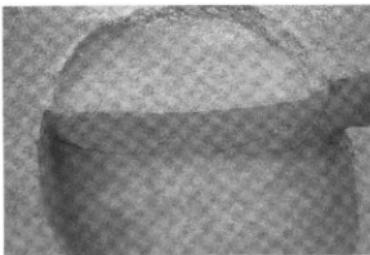


SK04断面（北から）

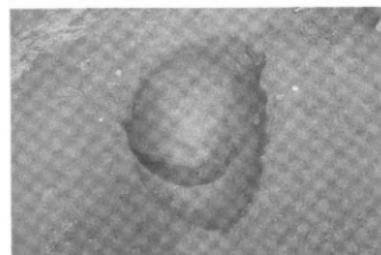
写真図版3 小沢V神籠石遺跡（2）



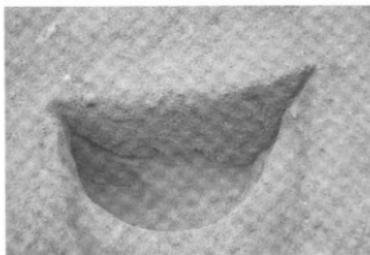
SK05完振（南から）



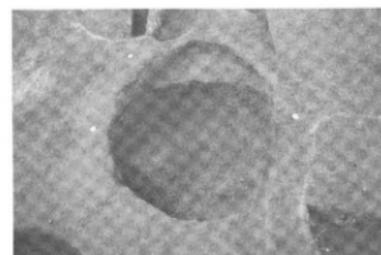
SK05断面（南から）



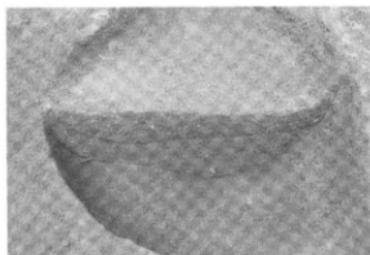
SK06完振（南から）



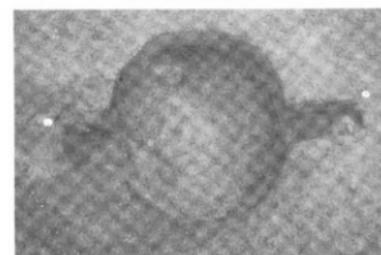
SK06断面（南から）



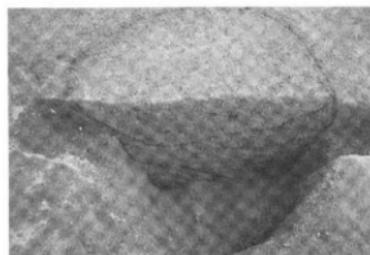
SK07完振（南から）



SK07断面（南から）

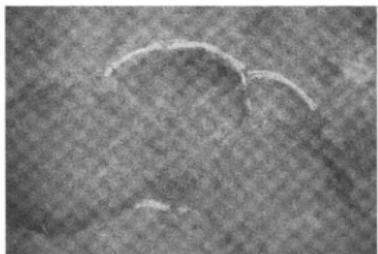


SK08完振（北から）

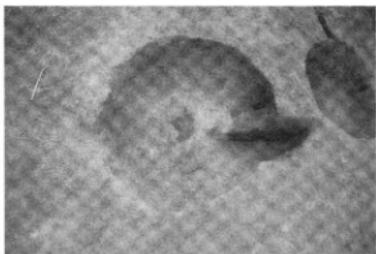


SK08断面（北から）

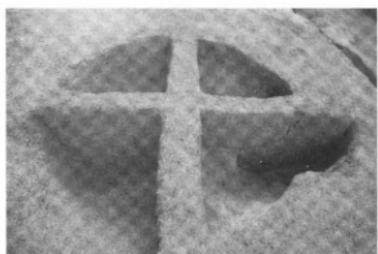
写真図版4 小沢V神籠石遺跡（3）



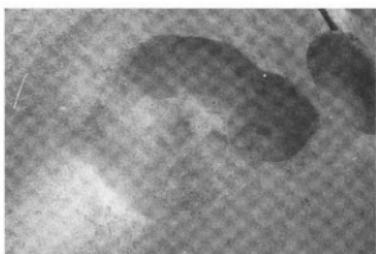
SK09・20完掘 (西から)



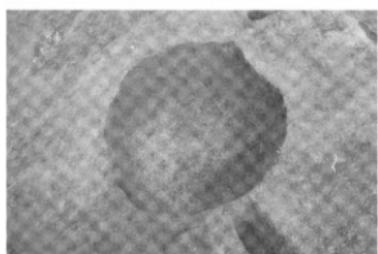
SK12完掘 (北から)



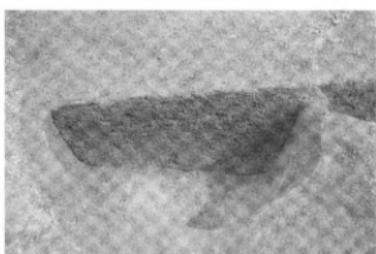
SK12・P04断面 (北から)



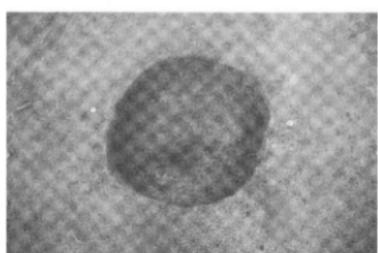
SK12・P04完掘 (北から)



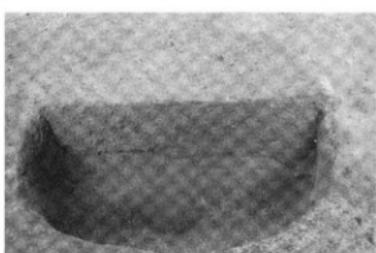
SK11完掘 (南から)



SK11断面 (西から)

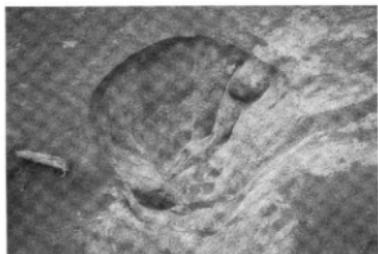


SK13完掘 (南から)

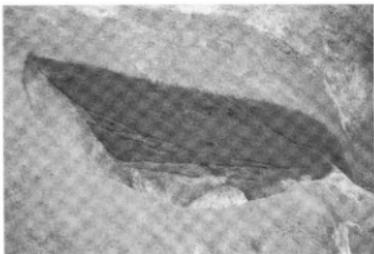


SK13断面 (南から)

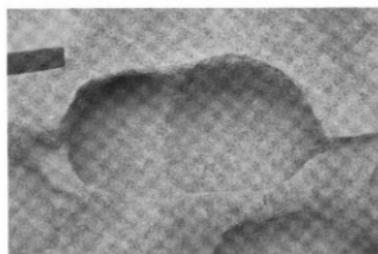
写真図版5 小沢V神龜石遺跡 (4)



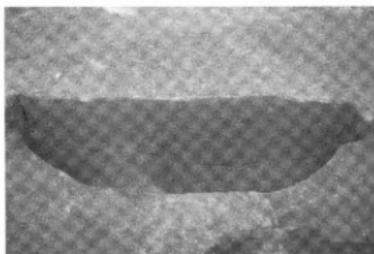
SK14完掘（東から）



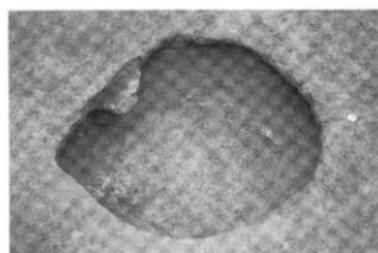
SK14断面（南から）



SK15完掘（西から）



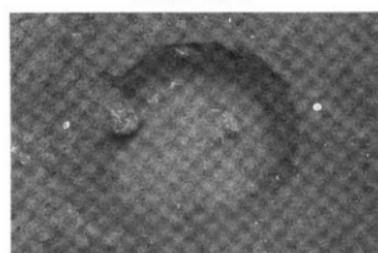
SK15断面（西から）



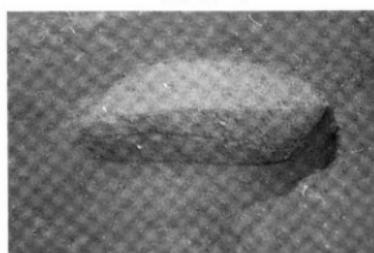
SK16完掘（南から）



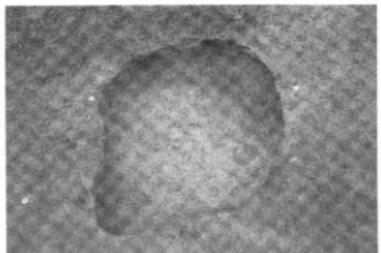
SK16断面（南から）



SK17完掘（南から）



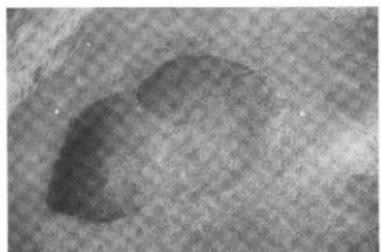
SK17断面（南から）



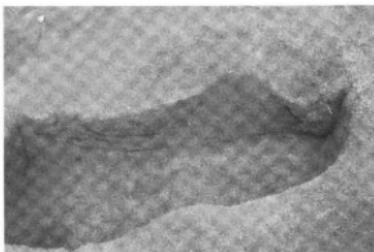
SK18完盤 (南から)



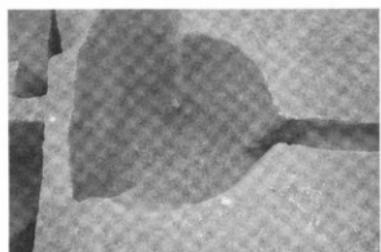
SK18断面 (南から)



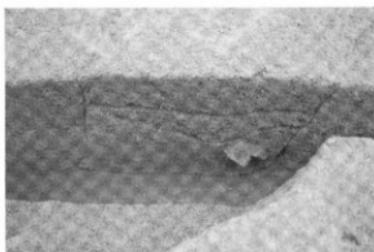
SK19完盤 (南から)



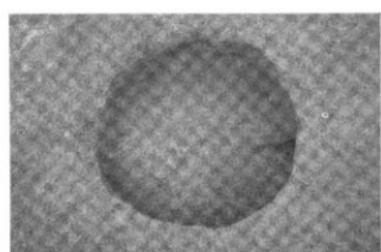
SK19断面 (南から)



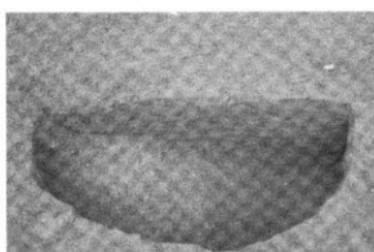
SK21完盤 (東から)



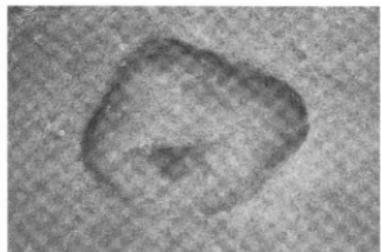
SK21断面 (東から)



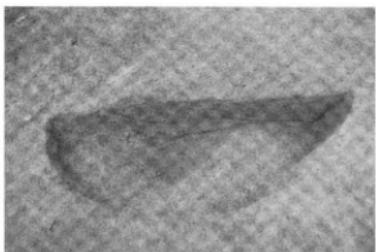
SK22完盤 (南から)



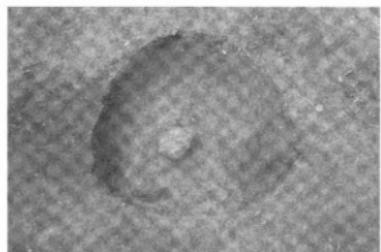
SK22断面 (南から)



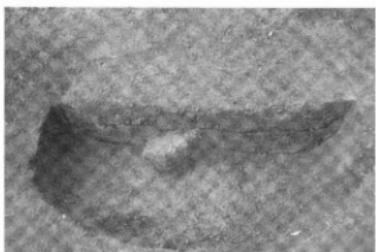
SK23完盤 (南から)



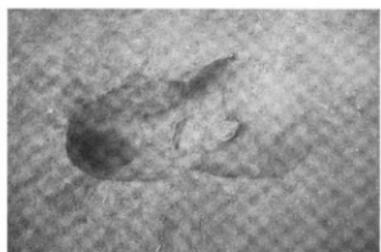
SK23断面 (南から)



SK24完盤 (南から)



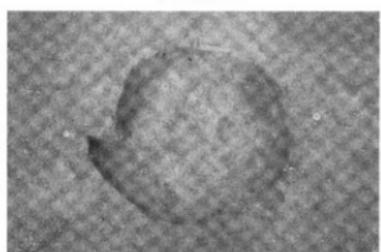
SK24断面 (南から)



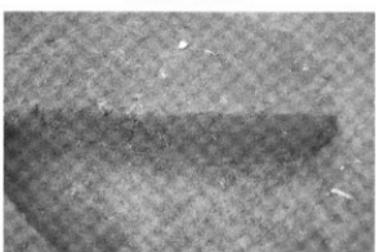
SK25完盤 (南から)



SK25断面 (南から)



SK26完盤 (南から)



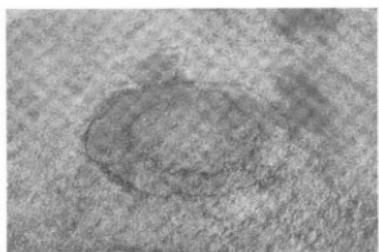
SK26断面 (南から)



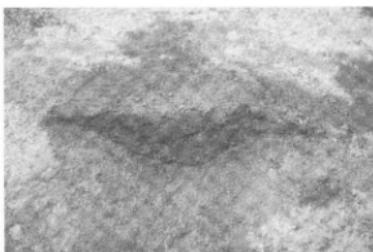
SK27完掘 (東から)



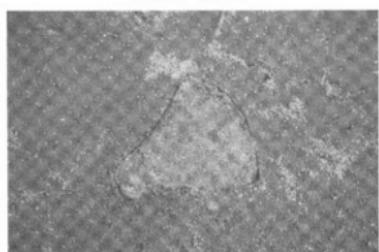
SK27断面 (東から)



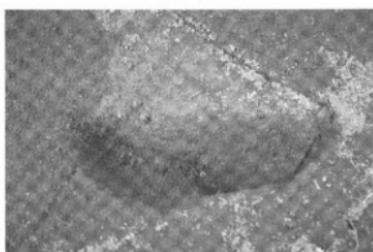
SF01検出 (東から)



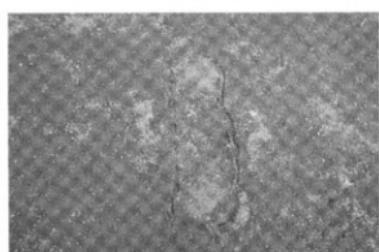
SF01断面 (東から)



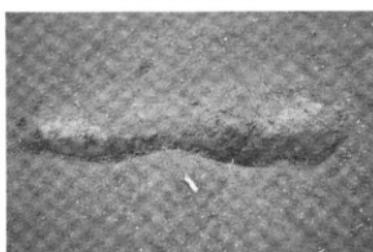
SF02検出 (南から)



SF02断面 (北東から)

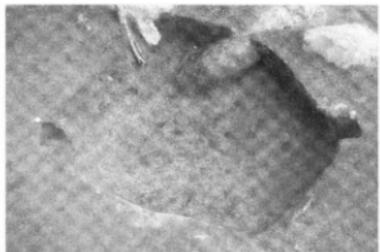


SF03検出 (南東から)

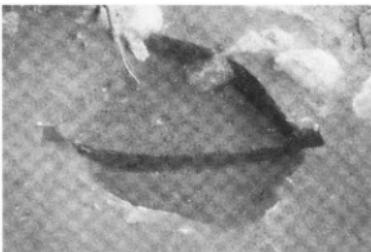


SF03断面 (北東から)

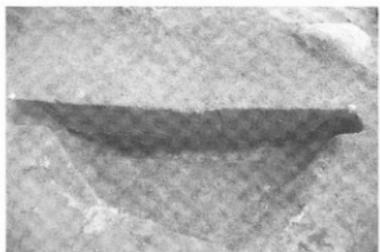
(8・9) 小沢V神籠石遺跡・小沢VI遺跡



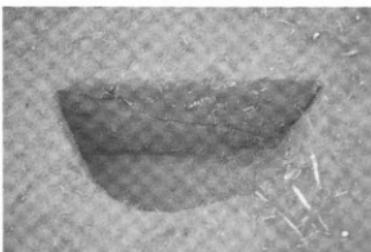
SW01完掘（西から）



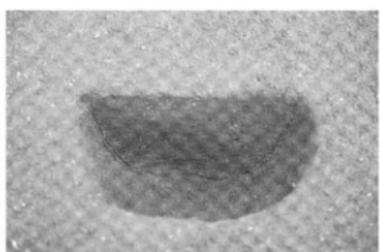
SW01炭化物層（西から）



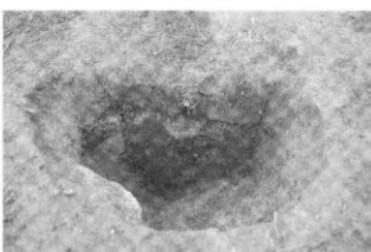
SW01断面（西から）



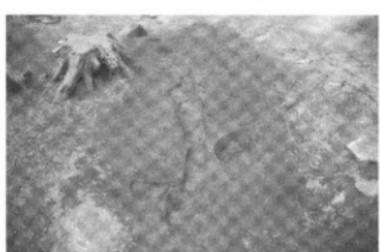
P01断面（南から）



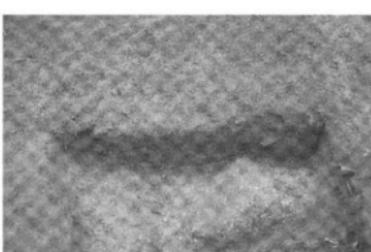
P05断面（南から）



P08断面（南から）



SD01完掘（南東から）



SD01断面（南東から）

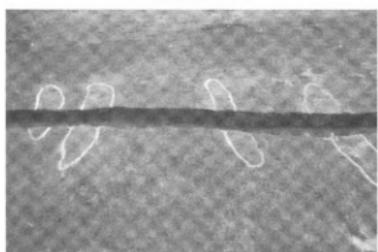
写真図版10 小沢V神籠石遺跡（9）



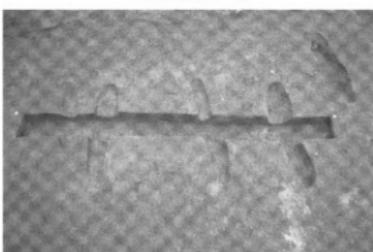
SX01完掘（北から）



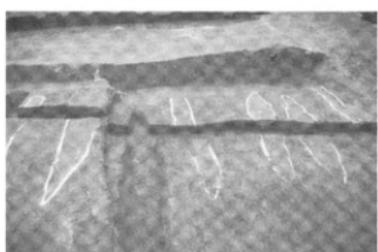
SX01断面（東から）



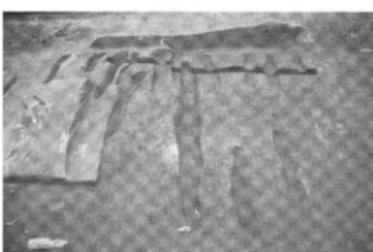
SX02断面（東から）



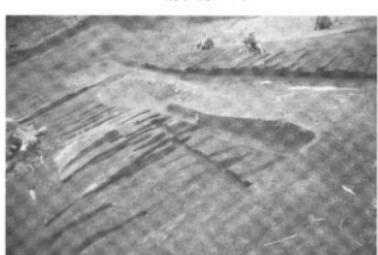
SX02完掘（東から）



SX03断面（東から）



SX03完掘（東から）



SX01~03終了全景（北東から）



SX01~03検出風景（東から）



雨製完掘（東から）



雨製断面（東から）



II B区北側終了全景（南から）



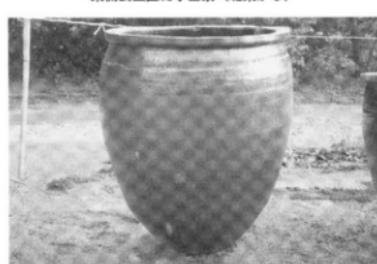
西側調査区終了全景（北から）



東側調査区終了全景（北東から）



東側調査区斜面トレンチ（南から）



大甕 1

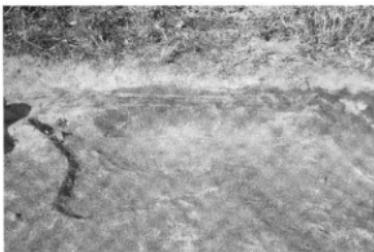


大甕 2

写真図版12 小沢V神籠石遺跡 (11)



SK01完掘 (北東から)



SK01断面 (南から)



T01完掘 (南から)



T02完掘 (南から)



基本層序 (南から)



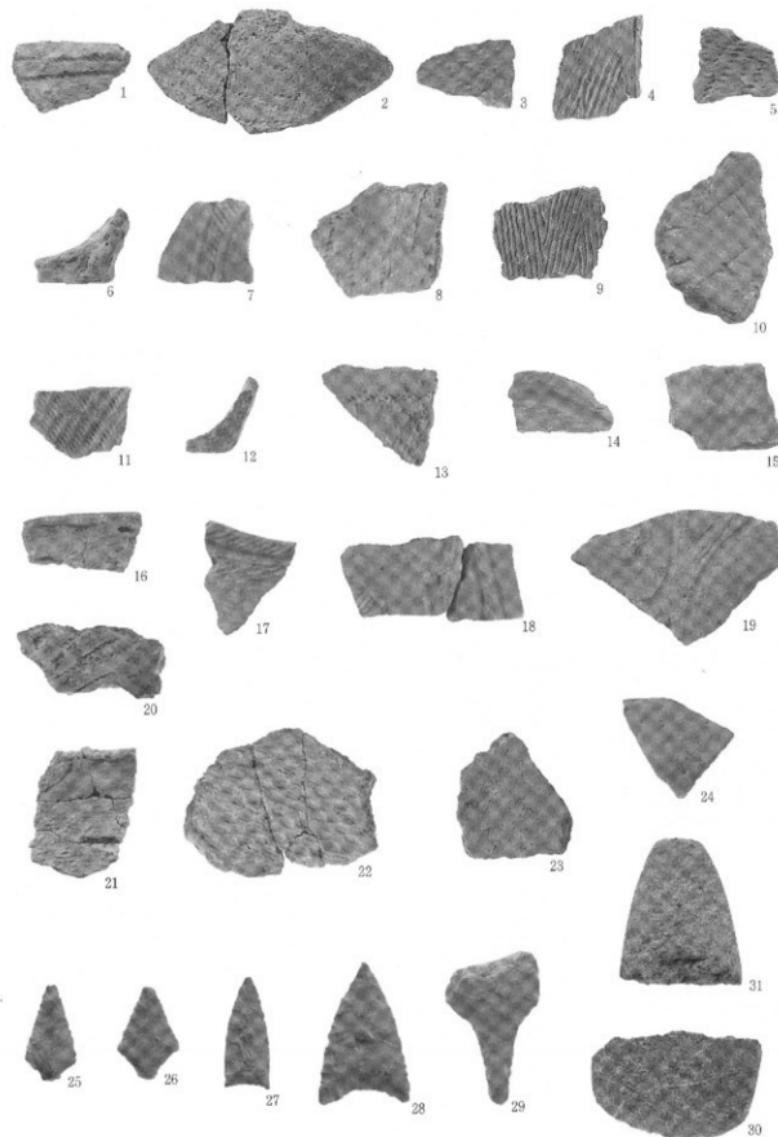
調査区北側終了全景 (北東から)



調査区中央終了全景 (北西から)



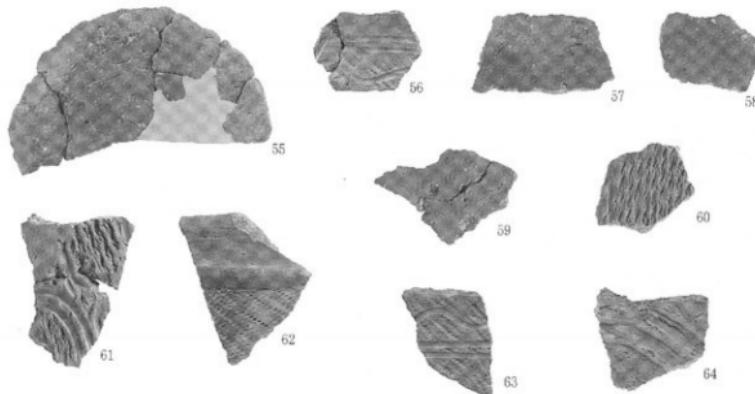
調査区南側終了全景 (北から)



写真図版14 小沢V神籠石遺跡出土遺物（1）



写真図版15 小沢V神籠石遺跡出土遺物（2）



写真図版16 小沢VI遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじょうねんどはっくつちょうさはうこくしょ						
書名	平成20年度免振調査報告書						
副書名	小沢V・神龍石遺跡・小沢VI遺跡						
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第546集						
編集者名	村田淳・高橋聰子						
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	西暦 2009年3月18日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因
小沢V・神龍石 遺跡	岩手県宮古市 小沢2丁目 253-2ほか	03202	LG23-2325	39度 39分 13秒	141度 56分 35秒	2008.09.01 ~	4,075m ²
小沢VI遺跡	岩手県宮古市 小沢2丁目 6-6ほか		LG23-2318	39度 39分 11秒	141度 56分 46秒	2008.11.07	820m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
小沢V・神龍石 遺跡	集落跡	縄文時代 古代 近世以降	土坑27・炭窯1・竪間 状遺構3・溝1・焼土 3・柱穴8	縄文土器(中期) 石器(礫・鎌・敲磨器) 土器器・鉄滓 陶磁器・鉄製品	西側調査区でソバを栽培して いたと考えられる竪間状遺構 (細跡)を検出した。		
小沢VI遺跡	散在地	縄文時代	土坑1	縄文土器(中期)			
要約	小沢V・神龍石遺跡は、畑地造成時に大部分改变されていた為残存状況は不良であったが、土坑、炭窯、ソバ栽培したと考えられる竪間状遺構(細跡)など、縄文時代～近世に属する遺構・遺物を検出した。本遺跡では過去に調査区の南側に縄文時代後期の土器と遮光土器が表探されているが、今回の調査区ではこの時期に比定できる遺構・遺物は検出されなかった。 小沢VI遺跡は、平成19年度に新規登録された遺跡である。調査区は東側の大部分が造成の際に重機によって削平されていた為残存状況は不良であり、わずかに土坑1基と縄文時代中期の上器が少量出土したのみであった。						

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

(10) 上野 I・II 遺跡

所 在 地	一関市厳美町字上野267-1 及び上野153-1	遺跡コード・略号	NE95-0181・UN I - 08 NE95-0198・UN II - 08
委 託 者	県南広域振興局一関総合支局土木部	調査対象面積	690m ² ・334m ²
事 業 名	一般国道342号厳美バイパス道路改築事業	調査終了面積	690m ² ・334m ²

発掘調査期間 平成20年7月1日～8月31日

調査担当者 北村忠昭・鳥居達人・吉田泰治

1 調査に至る経過

上野 I・II・III 遺跡は、「道路改築事業一般国道342号厳美バイパス工区」の道路改良工事に伴い、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することとなったものである。

一般国道342号は、秋田県横手市を起点とし、岩手県一関市を経由し、宮城県津山町に至る幹線道路であり、高規格幹線道路と一体的に機能する幹線道路網を定めた「岩手県広域道路整備基本計画」において、「地域形成型広域道路」に位置づけられている。また、周辺には、栗駒国定公園、須川温泉や天然記念物「厳美渓」など県内有数の観光地と、県南部の中心都市である一関市を結ぶ観光ルートにもなっている。

事業対象区域である「厳美バイパス工区」は、厳美渓に近接した幅員狭小、線形不良の険路区間となっており、行楽シーズンには交通渋滞が発生するなど、安全で円滑な交通や沿道環境に支障をきたしていることから、バイパス及び道路拡幅により交通渋滞の緩和、歩行者の安全確保、交通の円滑化を目的とし平成7年度「道路改築事業」により着手したものである。

当事業の施工にかかる埋蔵文化財試掘調査は、県南広域振興局一関総合支局土木部から平成18年11月29日付一綱上第632号「道路改築事業にかかる埋蔵文化財の試掘（依頼）」により岩手県教育委員会に対して依頼したものである。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成18年12月4日に試掘調査を実施し、工事に着手するためには上野 I・II・III 遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成18年12月8日付教生第1232号「道路改築事業予定箇所における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当土木部に回答してきた。

その結果を踏まえて当土木部は教育委員会と協議し、平成19年度に御岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結して発掘調査を実施することとなった。

平成19年度に未買収のため、発掘調査着手できなかった場所については、平成20年6月3日に契約を行い、平成20年度に発掘調査を実施することとなった。

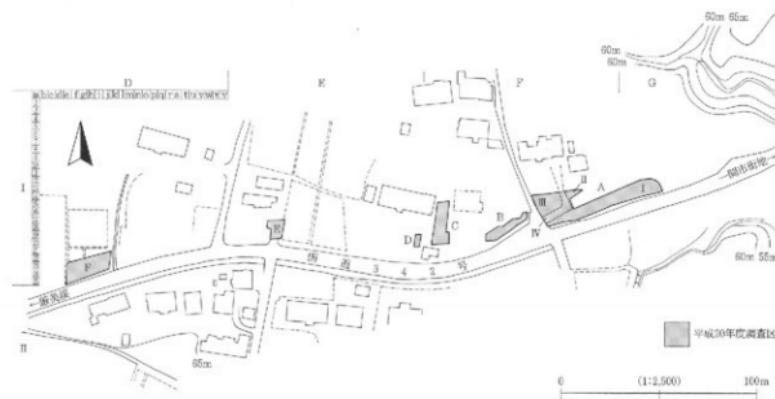
（県南広域振興局一関総合支局土木部）



第1図 遺跡の位置

2 遺跡の位置と立地

上野 I・II 遺跡は岩手県一関市の西部、一関市役所の西約 5 km に位置し、磐井川左岸の河岸段丘縁辺部に立地する。3 km 西に向かうと、風光明媚で観光地として有名な幾美渓が所在する。今回の調査区は過年度の調査未了地が対象で、調査前の状況は畑、宅地、道路である。標高は上野 I 遺跡で 64~65m、上野 II 遺跡で 65~66m である。



第2図 調査区の位置図・グリッド配置図

3 基本土層

調査区は未了地が対象で、上野 I 遺跡で 4箇所、上野 II 遺跡で 2箇所に細かく分かれている。そのため、東側から調査区を A 区、B 区、C 区、D 区、E 区、F 区と呼称し、さらに A 区は民家の進入路によって 4箇所に分かれため、A I 区、A II 区、A III 区、A IV 区とした。このうち上野 I 遺跡は A III 区、上野 II 遺跡は F 区で層序の観察を行った。内容は以下の通りである。

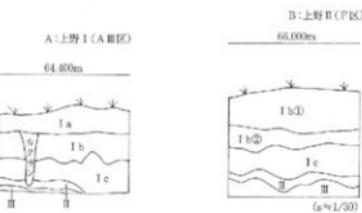
I a 層 10YR3/3暗褐 非常に固く締まっている。近年の重機等による人工的な盛土層。

I b 層 10YR2/2黒褐 I a 層ほどではないが締まっている。炭化物や小礫を含む盛土層。上野 II 遺跡では明黄褐色を呈し、ガラスや礫などを含む盛土層が上部にあり、I b ①層とし、黒褐色を呈する層を I b ②層とした。

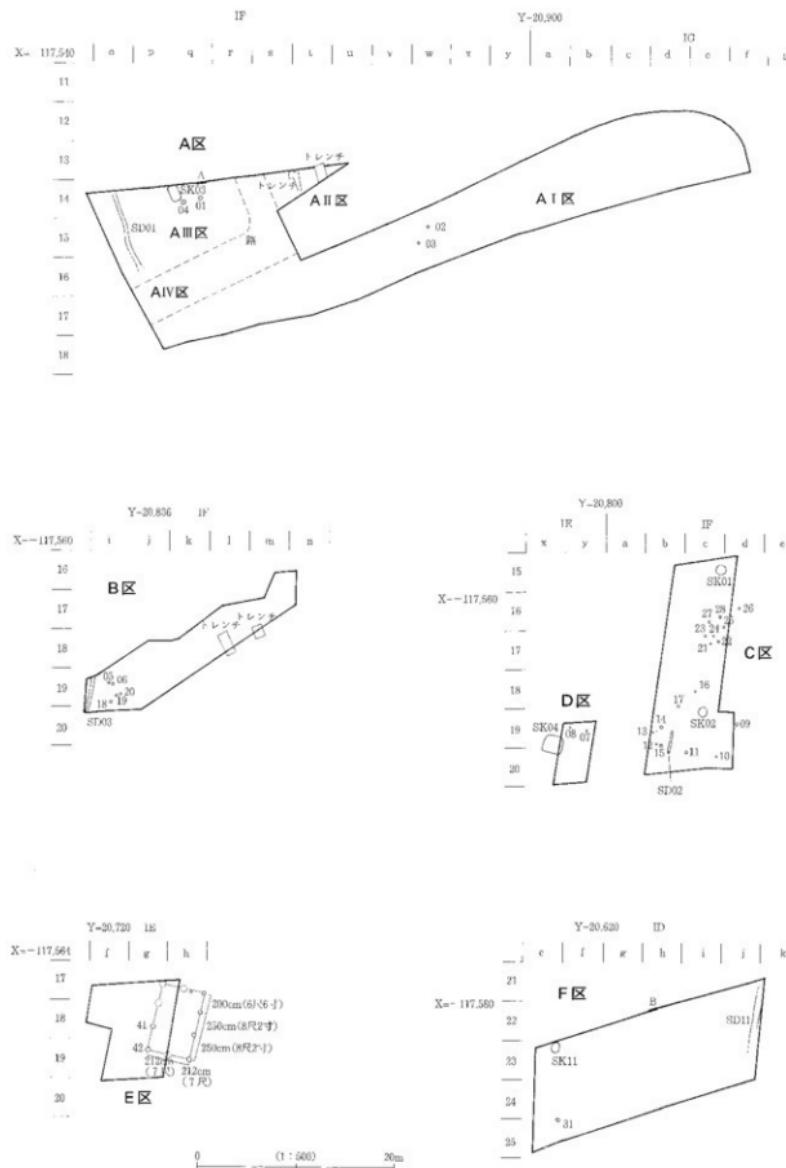
I c 層 10YR2/1.5黒～黒褐 全体的にしまりがなく、モソモソしている。
部分的に III 層を塊状に含んでいる。
盛土以前の表土層。

II 層 10YR2.5/3黒褐～暗褐 粘性・しまり中 一部でしきみられない。

III 层 10YR4.5/6褐～黄褐 粘性中、しまり有 全体的に I c・II 層塊が混入し、鹿ノ子状を呈する。



第3図 基本土層柱状図



第4図 遺構配置図

4 調査の概要

今年度の調査区は前年度の未了部分を対象としている。グリッド及びグリッドの名称は前年度を踏襲したが、遺構名は区域位の名称となっていたため、今回の調査では継続する遺構については同様の名称を使用し、新規の遺構については次の略号を使用した。

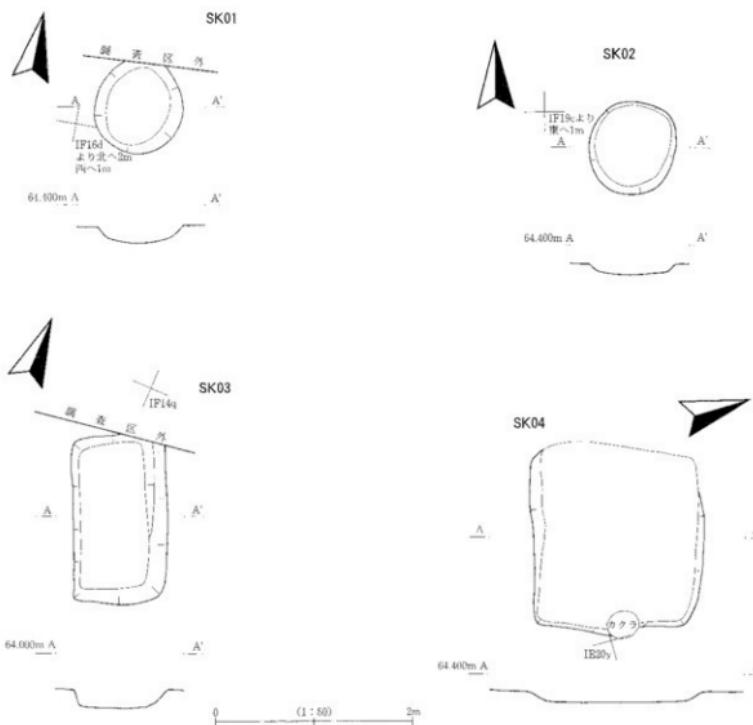
土坑：SK 溝跡：SD 柱穴状上坑：SKP

今年度の調査区内の遺構は、①遺構の帰属する時代・時期の特定できるものが少ない、②全体的に遺構の残存状態が悪く、单一の堆積上で埋没していることから遺構の埋没状況を推察することは難しく、注記と写真で補完できると判断したため、断面図の作成は行っていない。遺構の断面形はエレベーション図を作成した。

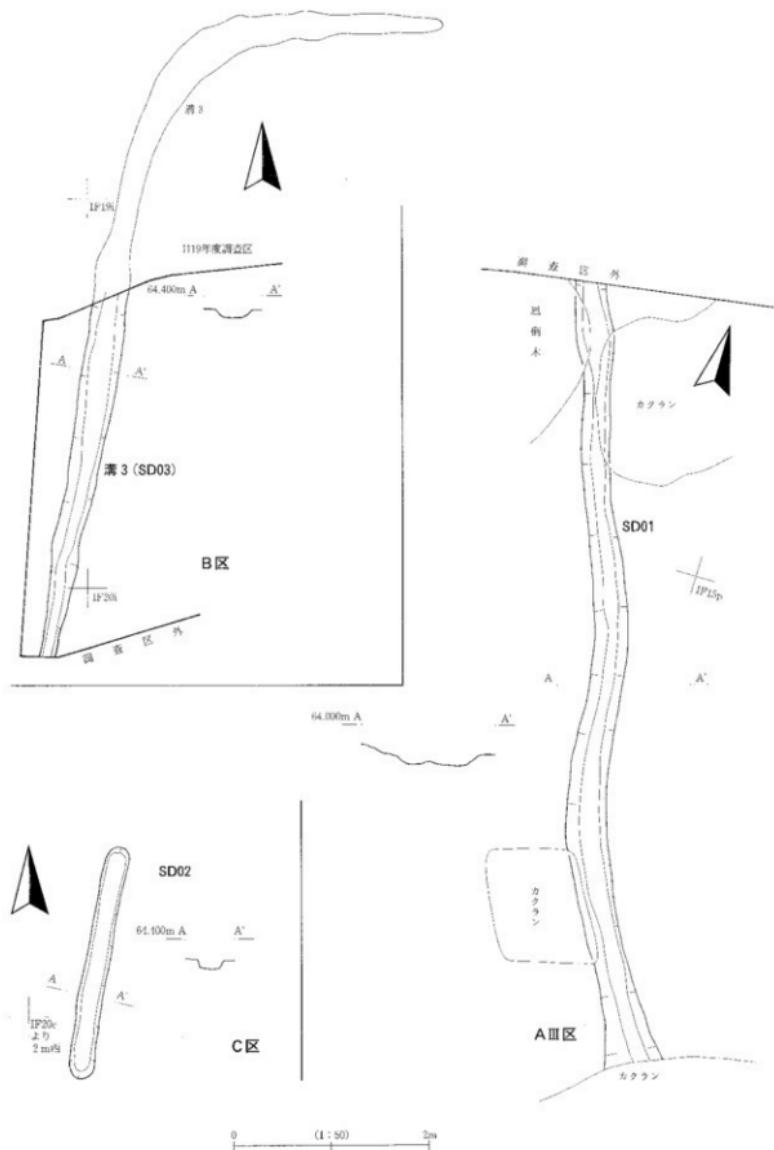
(1) 上野 I 遺跡の遺構

検出した遺構は土坑4基、溝跡3条（内前年度の続き1条）、柱穴状上坑28個である。規模等のデータは第1表を参照して頂きたい。

<土坑> 帰属する時代の特定できたものは1基もない。覆土は単層で非常に浅い。そのなかで、SK04は磨石や台石等の石器を含む甕が底面直上で多量に出土している。詳細は不明であるが、周辺に

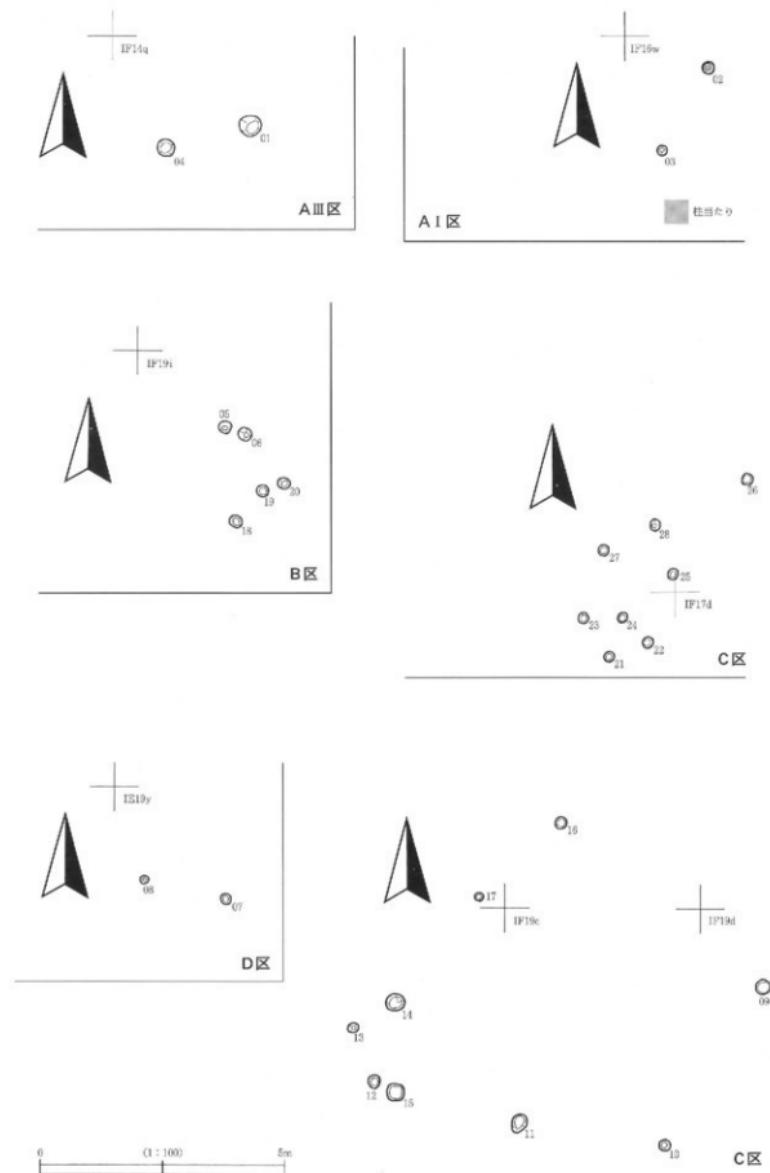


第5図 検出遺構(1)



第6図 换出遺構(2)

(10) 上野 I・II 遺跡



第7図 検出遺構(3)

石器や礫が確認できないため、人為的な行為の結果と考えられる。

＜溝跡＞ 七坑と同様、時代の特定できたものはないが、全て近代以降の可能性が高い。底面の標高地から判断すると、北から南側に傾斜しているのがわかる。

＜柱穴状土坑＞ 挖立柱建物等の遺構に組めなかったものである。調査区全体に分布するが、C区周辺に集中する傾向が見られる。ほとんどの柱穴状土坑の堆積土はIc層に起因すると考えられる黒～黒褐色土の単層である。

(2) 上野 II 遺跡の遺構

検出した遺構は墓壙1基、溝跡1条、柱穴状土坑3個である。堆積土はIc層に起因すると考えられる黒～黒褐色土の単層である。規模等のデータは第1表を参照して頂きたい。E区で検出された柱穴状土坑2個は平成19年度に上野I遺跡で調査された柱穴状土坑4個(2・4・12・42)とともに柱間隔に規則性があり、2×3間の建物になる可能性が高い。

時代の特定できたものは墓壙のみである。寛永通寶と明治銭が副葬されており、明治時代のもので

第1表 遺構一覧

遺構名	区域	位置	検出面			重複	堆 土		形 状	備 考
			底	面	長径		色	種		
SK01	C	I F15 c	■	■	[96]	88	19	なし	10YR1.7/1黒	▲1 円
SK02	C	I F18 c	■	■	[95]	87	12	なし	10YR2/1黒	▲5 円
SK03	A III	I F14 p	■	■	[174]	98	23.5	なし	10YR2/3黒褐色	■10、▲3、★1 焼丸長方
SK04	D	I E19 x	■	■	[195]	175	11.5	なし	10YR1.7/1黒	▲3、●2 焼丸方
S D01	A III	I F	■	■	[817]	42	21	なし	10YR2/1黒	■3 -
S D02	C	I F	■	■	[34]	24	13	なし	10YR1.7/1黒	■30 -
S D03	B	I F	■	■	[383]	38	11	なし	10YR2/2黒褐色	■10 溝3と同一
SKP01	A III	I F14 q	■	■	[47]	46	22.3	なし	10YR5/2黒褐色	■3、▲10、★1 円
SKP02	A I	I F15 w	■	■	[24]	23	25.8	なし	10YR2.5/1黒褐色	■7 円 柱当有
SKP03	A I	I F15 w	■	■	[22]	19	24.7	なし	10YR2.5/1黒褐色	■7 円
SKP04	A III	I F14 q	■	■	[36]	36	11.6	なし	10YR2/2黒褐色	■3、▲10、★1 円
SKP05	B	I F19 i	■	■	[29]	25	26.6	なし	10YR2/1黒	柱当 ■30 握り方 精円
SKP06	B	I F19 i	■	■	[27]	23	29.7	なし	10YR2/1黒	■30 上部 ■30 下部 精円
SKP07	D	I E19 y	■	■	[23]	19	12.5	なし	10YR2/2黒褐色	▲10 モソモソ 精円
SKP08	D	I E19 y	■	■	[20]	16	11.8	なし	10YR2/2黒褐色	■20 不整
SKP09	C	I F19 d	■	■	[32]	31	11.2	なし	10YR2/1黒	▲3～5 円
SKP10	C	I F20 c	■	■	[22]	21	22.3	なし	10YR2/1黒	▲3～5 円
SKP11	C	I F20 c	■	■	[38]	29	15.7	なし	10YR2/1黒	▲3～5 不整
SKP12	C	I F19 y	■	■	[26]	23	13.8	なし	10YR2/1黒	▲3～5 精円
SKP13	C	I F19 b	■	■	[23]	21	32.5	なし	10YR2/1黒	▲3～5 円
SKP14	C	I F19 b	■	■	[39]	37	17.7	なし	10YR2/1黒	▲3～5 円
SKP15	C	I F19 b	■	■	[33]	33	12.6	なし	10YR2/1黒	▲3～5 方
SKP16	C	I F18 c	■	■	[25]	24	11.0	なし	10YR2/2黒褐色	円
SKP17	C	I F18 y	■	■	[18]	17	21.7	なし	10YR2/2黒褐色	■10 円
SKP18	B	I F19 i	■	■	[26]	25	24.2	なし	10YR2/2黒褐色	■10 円
SKP19	B	I F19 i	■	■	[23]	22	15.1	なし	10YR2/3黒褐色	▲5 円
SKP20	B	I F19 i	■	■	[23]	23	21.5	なし	10YR2/2黒褐色	▲2 円
SKP21	C	I F17 c	■	■	[20]	20	14.0	なし	10YR2/2黒褐色	■20 円
SKP22	C	I F17 c	■	■	[22]	21	11.8	なし	10YR2/2黒褐色	■20 円
SKP23	C	I F17 c	■	■	[23]	22	15.6	なし	10YR2/1.5黒～黒褐色	▲3 円
SKP24	C	I F17 c	■	■	[19]	19	12.4	なし	10YR2/1.5黒～黒褐色	▲3 円
SKP25	C	I F16 c	■	■	[23]	22	14.3	なし	10YR2/1.5黒～黒褐色	▲3 円
SKP26	C	I F16 d	■	■	[23]	22	12.8	なし	10YR3/3黒褐色	○10 円
SKP27	C	I F16 c	■	■	[23]	22	14.7	なし	10YR2/2黒褐色	■20 円
SKP28	C	I F16 c	■	■	[21]	20	18.5	なし	10YR2/1.5黒～黒褐色	▲3 円
SK11	F	I D23 e	■	■	[98]	85	10	なし	洋記参照	小判
S D11	F	I D	■	■	[520]	[72]	6	なし	10YR2/2黒褐色	▲3 円
SKP31	F	I D25 e	■	■	[30]	27	23.8	なし	10YR2/2黒褐色	▲5 方
SKP41	E	I E18 g	■	■	[47]	45	18.0	なし	10YR2/1黒	■10 柱当有
SKP42	E	I E19 g	■	■	[52]	49	9.6	なし	10YR2/1黒	■10 柱当有

【規定】 [] は既存値

【堆土・混入物】 数字は% ■:地山塊 ▲:地山粒 ★:炭化物粒 ●:砂 ○:黒褐色土塊

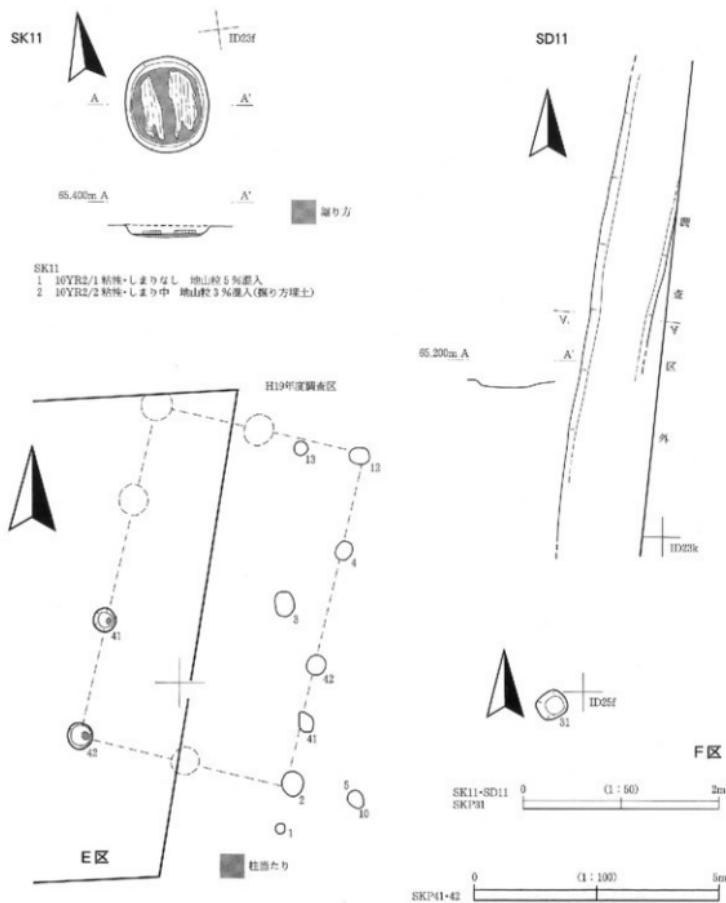
(10) 上野 I・II 遺跡

あるのは確かである。寛永通寶も伴っていることから、明治前半期に属する可能性が高い。

(3) 上野 I 遺跡の遺物

縄文土器小コンテナ 1 箱、石器小コンテナ 3 箱、近世・近代の陶磁器小コンテナ 1/4 箱、時代不明の土製品 1 点、金属製品 2 点、貝殻 1 点、獸骨 1 点が出土している。詳細は観察表や実測図、写真を参照して頂きたい。以下に特徴的な事柄を中心に記述する。

縄文土器はすべて遺構外からの出土である。すべて地文のみのものである。参考資料として掲載した 37 のみが時期の特定できる資料で、縄文時代晚期の浅鉢である。縄文時代の石器は主に A I 区と S K04 から出土した。S K04 は砾石器を中心とする。遺構外から出土したもののは狩猟具である石鏃と加



第 8 図 掘出遺構 (4)

工具である搔器が中心である。ほとんどが I a ~ I c 層の出土である。陶磁器類で産地が特定できるのは35の波佐見産の碗の1点のみである。

(4) 上野 II 遺跡の遺物

近世代の陶磁器小コンテナ3/4箱、寛永通寶1点、寛永通寶2点、一錢銅錢1点、棺の底板1点が出土している。これらのはほとんどが墓壙から出土したものか、盛土層から出土したものである。SK11出土資料は明治10年銘のある一錢銅錢が出土しており、明治前半期の資料の可能性が高い。

第2表 遺物観察表

No.	区域	位置	層位	種別	器種	A	法量(cm)			備考
							B	C	D	
1	A III	S K03	埋土	陶器	漫呑茶碗	体部	—	—	[6.9]	—
2	A III	S K03	埋土	石器	R F	真岩	[1.7]	[2.7]	[0.3]	1.15 在地産?・19C以降 内外縫火袖
3	A III	S K03	埋土	木製品	不明	不明	3.9	7.4	2.6	—
4	D	S K04	埋土	石器	石礫	真岩	[2.7]	1.2	0.4	1.27 縦長削片素材
5	D	S K04	底直	石器	磨石	デイサイト	9.3	5.1	3.8	274.7 1面使用
6	D	S K04	底直	石器	磨石	デイサイト	9.2	6.0	3.4	265.5 2面使用
7	D	S K04	底直	石器	磨石	デイサイト	11.8	5.2	4.9	390.7 1面使用
8	D	S K04	底直	石器	磨石	デイサイト	10.7	9.3	3.3	526.4 1面使用
9	D	S K04	底直	石器	磨石	デイサイト	[14.1]	[12.4]	[7.0]	1359.5 4面使用
10	D	S K04	底直	石器	台石・石皿	デイサイト	20.4	19.2	11.6	5120.0
11	D	S K04	底直	石器	不明石製品	デイサイト	6.8	6.8	3.2	253.8 円形
12	C	S K P16	埋土	鐵文士器	深鉢?	底部	—	—	[3.6]	— 不明
13	A I	撲乱	鐵文士器	深鉢?	底部	—	—	[3.4]	— L.Rヨコ	
14	A I	II層	鐵文士器	深鉢?	底部	—	—	[2.2]	—	
15	C	撲乱	鐵文士器	深鉢?	口縫部	—	—	[3.2]	— 沈縫のみ	
16	A I	I層	石器	石礫	真岩	3.2	1.9	0.3	2.17 縦長削片素材	
17	A I	I F14y	撲乱	石器	赤色頁岩	[2.4]	[1.55]	0.5	1.43 一辺欠損	
18	B	I a 層	石器	石礫	赤色頁岩	[1.4]	[0.9]	[0.5]	0.43 先端部のみ	
19	A I	I c 層	石器	石鉢	真岩	9.7	3.8	0.9	36.10 縦型、粗雑	
20	A I	I 層	石器	削器	真岩	3.9	3.1	0.9	8.76	
21	A III	I a 層	石器	搔器	赤色頁岩	2.75	1.3	0.7	3.02	
22	A I	I 层	石器	搔器	真岩	2.1	2.9	0.7	2.51	
23	A I	I 层	石器	搔器	真岩	[3.0]	[2.7]	1.0	5.68	
24	A I	I F13y	撲乱	石器	真岩	2.1	1.5	0.7	1.83	
25	A I	I 层	石器	舞形石器	真岩	4.5	1.0	0.7	3.26 棒状形	
26	A I	I 层	石器	舞形石器	赤色頁岩	[2.0]	[1.8]	[0.7]	2.22 揃部欠損	
27	C	上層	石器	模形石器	真岩	[2.7]	[2.6]	[1.2]	8.30	
28	A III	撲乱	石器	模形石器	赤色頁岩	1.8	[1.9]	[0.7]	2.75	
29	A I	上層	石器	抉入石器	真岩	3.6	2.7	1.1	11.82	
30	A I	I 层	石器	R F	黒曜石	[1.1]	[2.3]	[0.4]	0.98	
31	A I	I G14a	撲乱	石器	黒曜石	[1.3]	[1.6]	[0.5]	0.60	
32	A I	I F13y	撲乱	石器	石核	黒曜石	1.7	2.3	1.2	4.54
33	A I	I F13y	撲乱	石器	磨石	安山岩	14.7	6.4	4.7	685.9 特殊磨石
34	A I	I 层	石器	凹石	デイサイト	9.2	6.25	4.0	270.4 凹部面面	
35	A III	撲乱	磁器	碗	底部直上	—	—	[2.3]	— 波佐見窯・1750~1790 二重網口文	
36	C	I a 層	磁器	皿	約1/2	18.8	9.4	3.35	— 愛花文	
37	外	表採	鐵文士器	夷鉢	口縫部	—	—	[4.4]	— 晩期、水田表採	
38	外	周辺	表採	石器	削器	真岩	8.3	4.6	1.5	47.73 潤沢区周辺表採
41	F	S K11	埋土	磁器	碗	体~底部	—	3.8	[3.7]	— 産地不明・近代以降 竹文
42	F	S K11	埋土	磁器	碗	口縫部	—	—	[3.8]	— 41と同一個体
43	F	S K11	底面	木製品	柾	底板	[72]	[56]	[3.0]	—
44	F	S K11	埋土	銭貨	一錢銅錢	完形	2.75	2.75	0.17	— 明治十年の銘
45	F	S K11	理上	銭貨	一錢銅錢	完形	[2.5]	—	—	— 銭一文銭?
46	F	S K11	埋土	銭貨	一錢銅錢	一部欠損	[2.5]	—	—	— 銭一文銭?
47	F	S K P32	埋土	陶器	壺	口縫部	(9.6)	—	[2.3]	— 大堀相馬?・19C前 藍灰釉・鉄绘
48	F	東	I c 層	銭貨	寛永通寶	完形	2.4	2.4	0.1	— 古草水

【場位】Ⅲ上：口縫上面

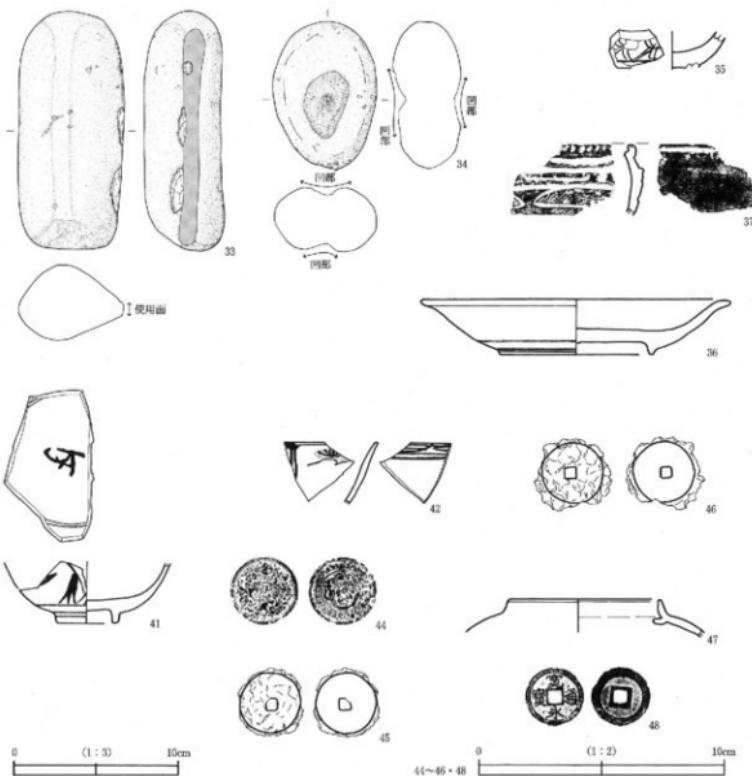
【A】土器類は部位、石器類は石材を示す

【法量】<十器類> B：口径 C：底径 D：高さ <石器類・柾> B：長 C：幅 D：厚

<銭貨類> B：徑 C：厚度 []：残存範 ()：推定範



第9図 出土遺物(1)



第10図 出土遺物（2）

5まとめ

今回の調査で確認された遺構は、上野I遺跡で土坑4基、溝跡3条、柱穴状土坑28個、上野II遺跡で墓壙1基、溝跡1条、柱穴状土坑3個、出土した遺物は、上野I遺跡で縄文土器小コンテナ1箱、石器小コンテナ3箱、陶磁器小コンテナ1/4箱、土製品1点、金属製品2点、貝殻1点、獸骨1点、上野II遺跡で陶磁器小コンテナ3/4箱、銭貨4点、木製品1点である。時代・時期の特定できない遺構・遺物が多く、詳細は不明といわざるをえない。しかし、上野II遺跡では、1基ではあるが墓壙が検出され、明治時代には墓地の一部であった可能性が高い。また、上野I遺跡の東側では、縄文時代後期～晩期の遺物が出土しているとともに、調査区対象外であるが、北側の水田では調査で出土したものより大形の土器片が見つかっており、竪穴住居等の居住域が存在する可能性が高い。今後、隣接地の調査が行われることを期待したい。

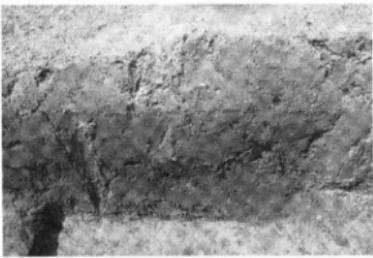
なお、上野I・II遺跡平成20年度調査に關わる報告はこれを以て全てとする。



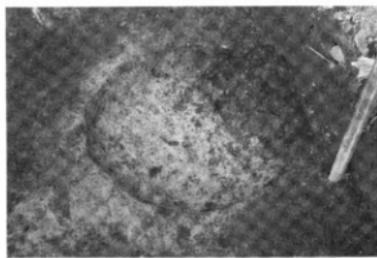
遺跡遠景



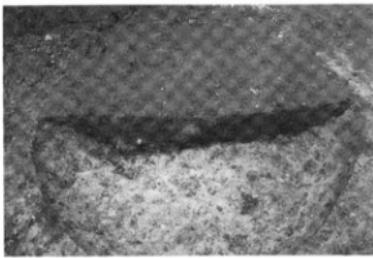
基本層序AⅠ区 (N→)



基本層序AⅢ区 (S→)

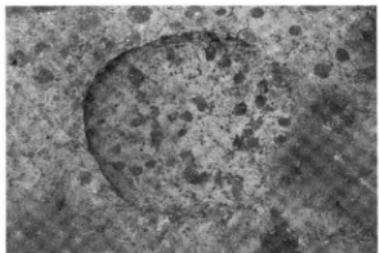


SK01 完掘 (E→)

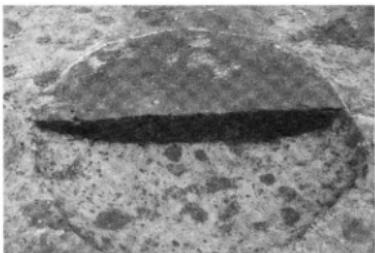


SK01 断面 (S→)

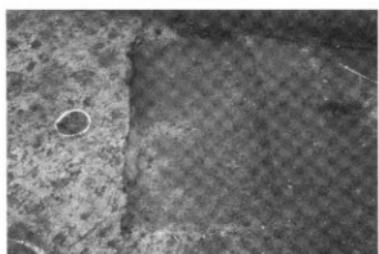
写真図版1 棟出遺構 (1)



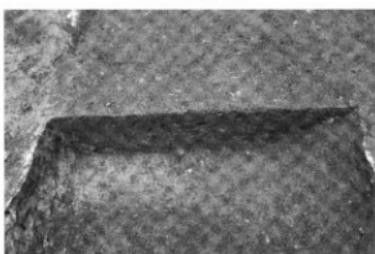
SK02 完掘 (E→)



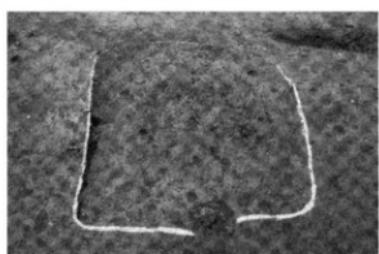
SK02 断面 (S→)



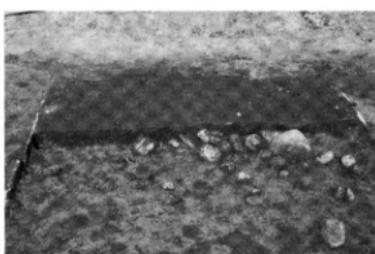
SK03 完掘 (E→)



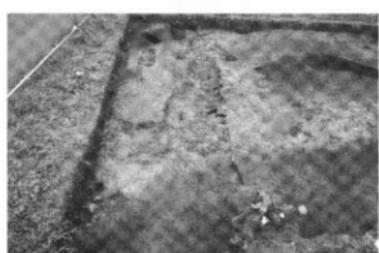
SK03 断面 (S→)



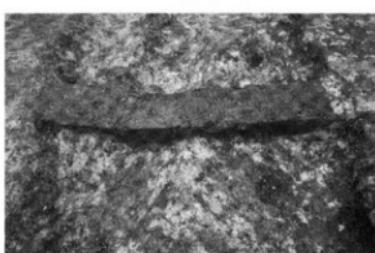
SK04 完掘 (E→)



SK04 断面 (SE→)



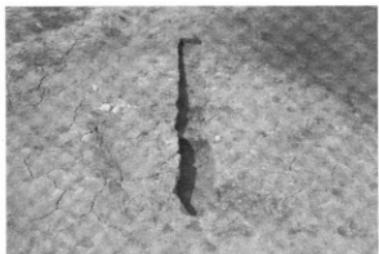
SD01 完掘 (S→)



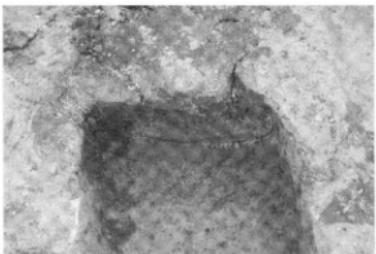
SD01 断面 (S→)

写真図版 2 检出遗構 (2)

(10) 上野 I + II 道跡



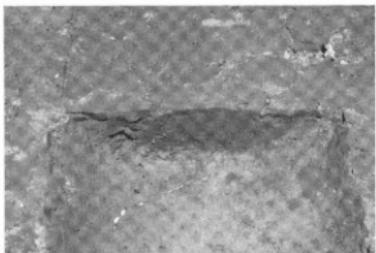
SD02 完掘 (S→)



SD02 断面 (S→)



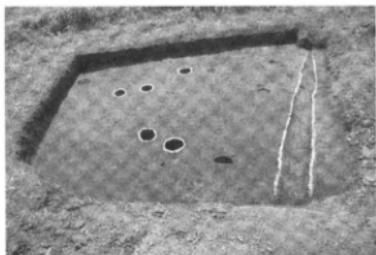
SD03 完掘 (S→)



SD03 断面 (S→)



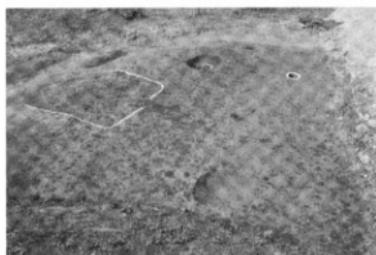
A III 区 完掘 (E→)



B 区西侧 完掘 (N→)

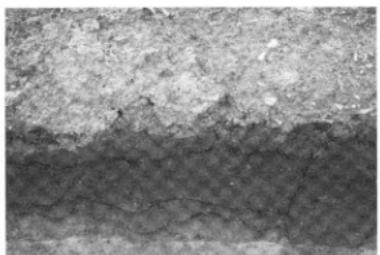


C 区 完掘 (NE→)



D 区 完掘 (S→)

写真図版 3 検出遺構 (3)



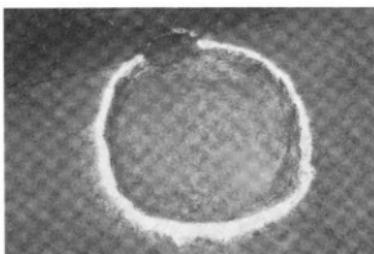
基本層序 F区 (S→)



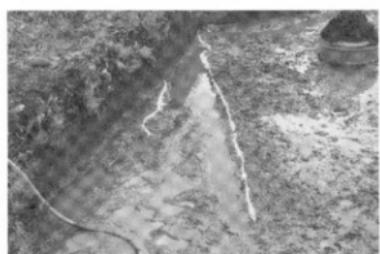
E区 完掘 (SW→)



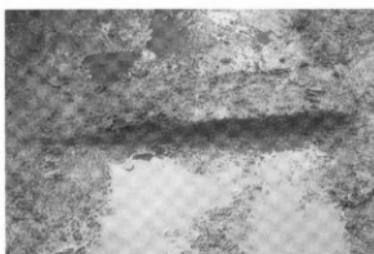
SK11 完掘 (S→)



SK11 挖り方完掘 (S→)



SD11 完掘 (N→)



SD11 断面 (N→)

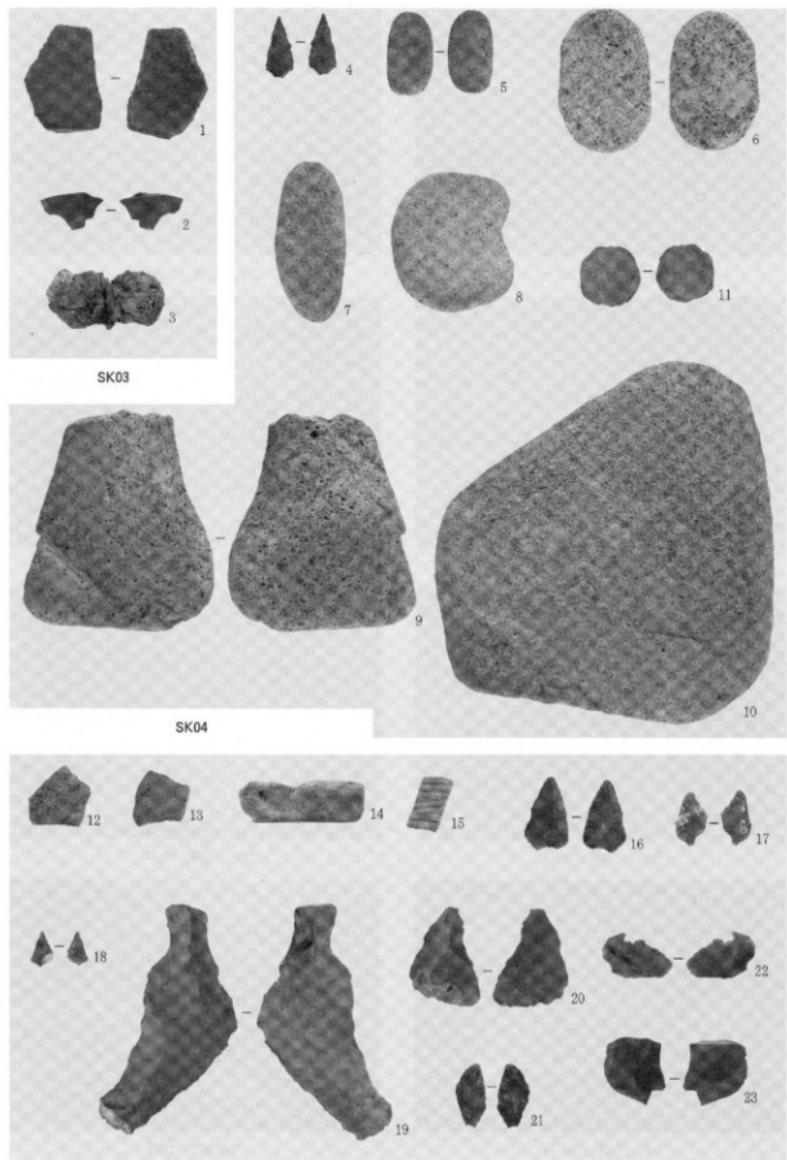


F区 完掘 (NE→)



作業風景 精査

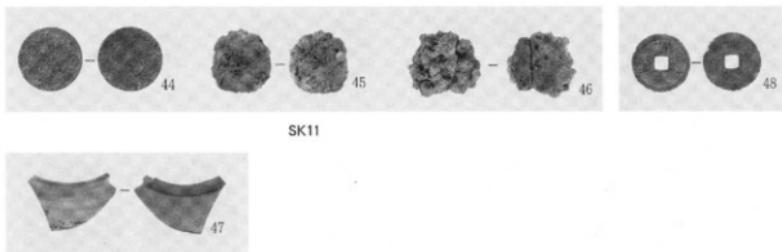
写真図版4 掘出遺構 (4)



写真図版 5 出土遺物 (1)



写真図版 6 出土遺物 (2)



写真図版 7 出土遺物 (3)

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうねんどはくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成20年度発掘調査報告書							
副書名	上野I・II遺跡							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第546集							
編集者名	北村忠昭							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦 2009年3月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 。	調査期間	調査面積	調査原因	
うわの Ⅰ いせき 上野 I 遺跡	いわてけんいのちのせき 岩手県一関 市厳美町字 うわの 上野267-1	03209	NE95-0181	38度 56分 27秒	141度 4分 26秒	2008.07.01 ～ 2008.08.31	690m ²	一般国道342 号厳美バイパス道路改築事業
うわの Ⅱ いせき 上野 II 遺跡	いわてけんいのちのせき 岩手県一関 市厳美町字 うわの 上野153-1	03209	NE95-0198	38度 56分 25秒	141度 4分 16秒	2008.07.01 ～ 2008.08.31	334m ²	一般国道342 号厳美バイパス道路改築事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上野 I 遺跡	散布地	縄文時代		縄文土器・石器				
	散布地	近代		陶磁器				
上野 II 遺跡		不明	土坑 溝跡 柱穴状土坑	4基 3条 28個				
	墓域	近代	土坑(墓)	1基	陶磁器、銭貨、木質遺物			
		不明	溝跡 柱穴状土坑	1条 3個				
要約	縄文時代の土器・石器が出土した。土坑や溝跡が検出されたが、時代の特定できる遺構は上野 II 遺跡で検出された墓壙 1 基のみである。 今回の調査区に隣接する北側の水田では大形の縄文土器が表採されており、縄文時代の集落の中心は北側に存在する可能性が高い。							

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

(11) 新町遺跡

所 在 地	久慈市大川目町第27地割65ほか	遺跡コード・略号	J F 29-2081・SM-08
委 託 者	久慈地方振興局農政部農村整備室	調査対象面積	4,524m ²
事 業 名	経営体育成基盤整備事業	調査終了面積	4,524m ²
発掘調査期間	平成20年4月10日～6月5日	調査担当者	米田 寛・佐藤里恵

1 調査に至る経過

新町遺跡は、経営体育成基盤整備事業大川目地区の施行に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することになったものである。

本地区は、久慈市大川町地内の85haの地区で、現況の水田は昭和20年～30年代に5a区画に整備されたものの、区画形状が小さいうえに農道が狭小なため、農地の流動化や農産物の輸送、農業機械の搬入に支障を来している状態であった。それらの阻害要因を除去し、高生産性農業の確立を図るために、は場の整備を実施することとして、平成13年度に新規採抲されたものである。

本事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、久慈地方振興局農政部農村整備室から平成19年10月16日付久慈整第232号「農業農村整備事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査を依頼した。

依頼を受けた県教育委員会では、平成19年10月22～23日に試掘調査を実施し、工事に着手するには発掘調査が必要となる旨を平成19年11月5日付教生第914号「農業農村整備事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当農村整備室へ回答した。

その結果を踏まえて当農村整備室は岩手県教育委員会と協議し、平成20年4月1日付けで財團法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(久慈地方振興局農政部農村整備室)

2 遺跡の位置と立地

新町遺跡は、JR八戸線・三陸鉄道北リアス線久慈駅から西へ約4kmに位置する。久慈市街は、大半が海岸段丘と市内を流れる河川によって形成された沖積平野部に広がっている。このうち沖積平野は、縄文海進期に海水の流入する環境であったらしい（久慈市史編纂委員会1984）。本遺跡は久慈市内を東西に分断する久慈川とその支流の田沢川によって形成された沖積平野上に位置する。周辺住民によれば、遺跡の東側を流れる田沢川は河川改修工事を行うまでは洪水を繰り返し、本遺跡範囲を含む周辺地域に被害をもたらしていたという。遺跡内の標高は19～20mと低く、田沢川、久慈川両河川によって運ばれた沖積層が見られる。本遺跡の西側には本遺跡と同じ沖積平野上に中田遺跡が位置する。中田遺跡では6世紀後半の集落跡が確認され、土師器甕、土師器壺、土製紡錘車、コハク、鉄鎌、刀子などが出土している。また北西方向には、久慈市指定史跡の久慈城が位置する。

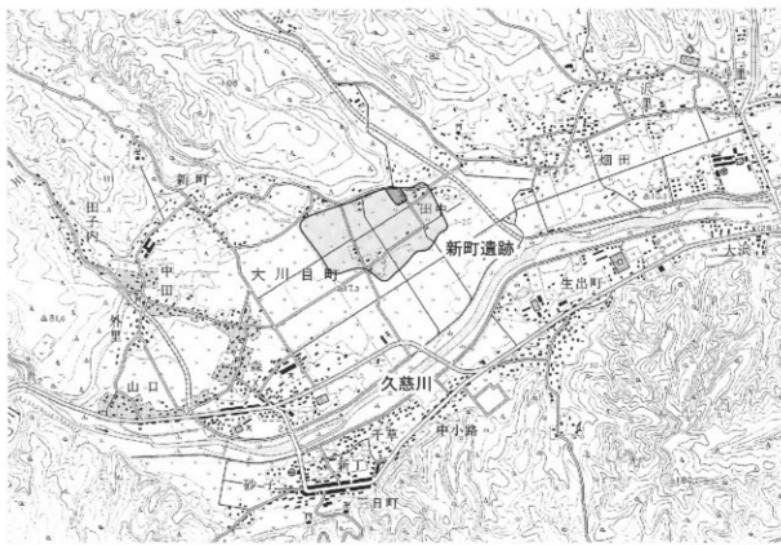
3 基本土層

第I a層 10YR2/3 黒褐色土層（表土）粘性弱 しまりやや密 小礫1%包含
層厚10cm 水田面にはほとんど堆積していない。

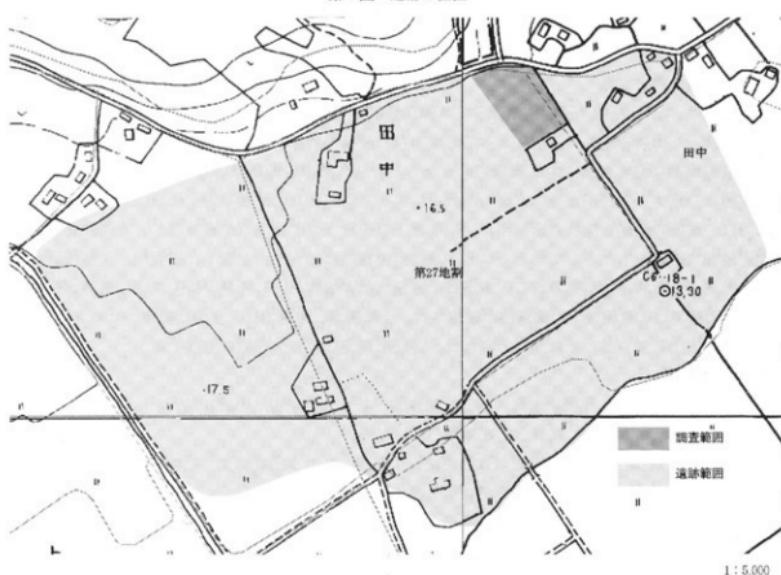
第I b層 10YR3/4 暗褐色土層（は場整備後に形成された水田耕作土）粘性強 しまり密
層厚30～40cm 下部は床土がブロック状に混入。

第II a層 10YR5/4 にぶい黄褐色砂層（洪水堆積層？）粘性なし しまり粗
層厚3～5cm 現代の磁器が出土している。

(11) 新町遺跡



第1図 遺跡の位置



第2図 遺跡調査範囲

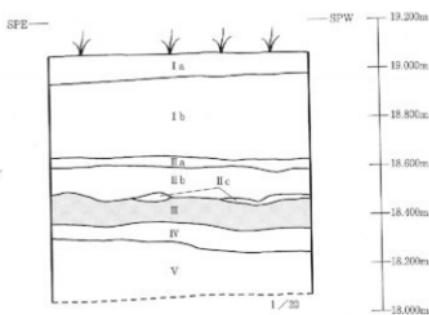
第Ⅱb層 10YR4/1 褐色シルト層
 (は塭整備以前の水田耕作土)
 粘性 やや強しまり密 床上状
 層厚 8.~12cm

第Ⅱc層 10YR6/4 にぶい黄橙シ
 ルト層 (洪水堆積層?) 粘性な
 し しまり粗 バウダーライフ
 厚 2~4 cm

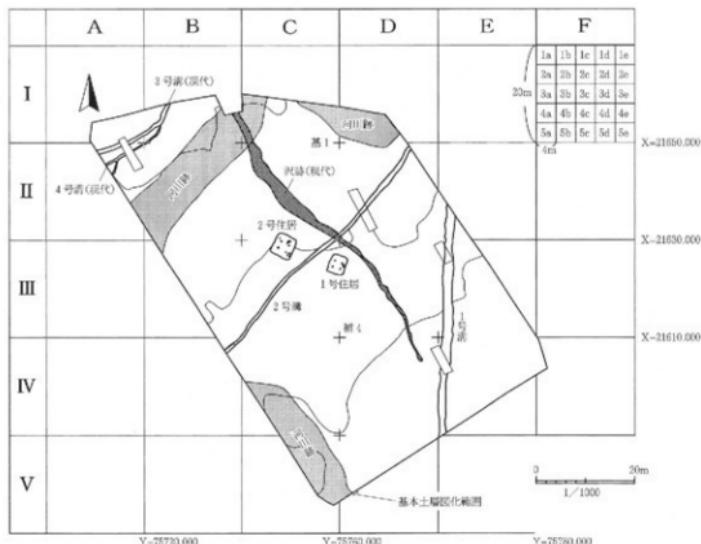
第Ⅲ層 10YR2/1 黒色土層 (遺物
 包含層) 粘性やや弱 しまり粗
 土器、石器を包含。層厚 0~
 15cm 調査区北部は水田造成に
 よりほとんど残っていないかった。

第Ⅳ層 10YR3/2 黒褐色土層 (漸移層) 粘性やや強 しまり密 上面が遺構検出面 層厚 6~
 10cm 暗褐色に近い色調。遺物はⅢ層に比べて散発的。

第Ⅴ層 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土層 (洪水堆積層) 粘性弱 しまり粗 疣多量 層厚不明。



第3図 基本土層



第4図 遺構配置図

4 調査概要

(1) 検出構造：堅穴住居跡 2 棟、溝跡 2 条、河川跡 3 条

IIa層を堆積土とする溝跡 4 条については、野外時に現代遺構と判断していた。本報告の登録遺構からは除外する。なお、これらの溝跡は全体の配置図に平面プランのみ掲載してある。

重機による掘削は、調査期間の関係から第III層すべてを残存させるのではなく、第III層中位程度を目途に掘削した。調査区北側は、耕作により第III層の残存状況が悪く、南側では良好であった。しかし、南側は湧水の多い低湿地となっており、遺物の分布密度も低かった。野外調査は、遺物包含層（第III層）の掘削→小グリッド（4 × 4 m）ごとの遺物回収→第IV層上面ないしは第V層上面での遺構検出→遺構、河川跡の調査→第IV層の部分的な掘削（トレチ調査）で終了している。なお、河川跡はトレチ調査に留めた。

<1号堅穴住居跡>

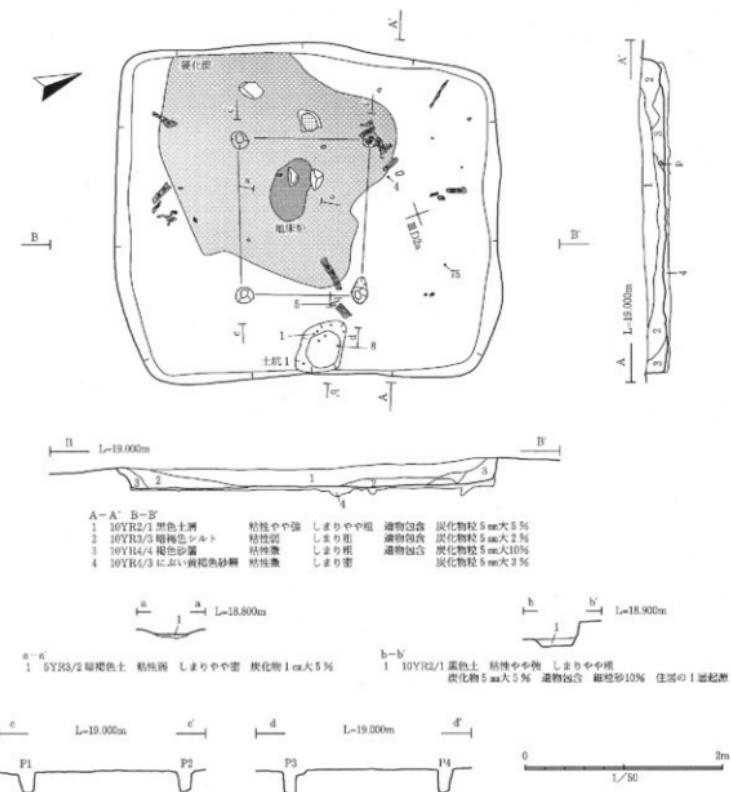
【位置・検出状況】 1号堅穴住居跡が位置するIII C グリッド付近は、耕作土を重機で掘削したところ、第V層が部分的に露出し、第III・IV層の堆積がほとんど見られなかった。摩耗の激しい土器師刷部破片が散在する状況であった。ほぼV層上面での検出によって、III層を主な堆積土とする正方形プランを検出した。古代の遺構の可能性を考え、カマド煙出部の検出を行ったが、確認できなかった。

【堆積土】 正方形プランは、検出状態において外縁部を褐色砂層（3層）、その内側を暗褐色シルト層（2層）、中心部を黒色土層（1層）に分離され、自然堆積の可能性を想定した。断面の観察において、埋没過程は3層→2層→1層を確認した。自然堆積と考えられる。3層は水性作用により形成されたと考えられる。2層のシルト層は暗褐色を呈するが、第IV層を起源とするものではなく、1層と3層が混ざった状態のもので、漸移層の認識で分離したものである。1層は第III層を起源とする。1層は遺構内の中心部では床面にまで達しているため、床面と認識して取り上げた遺物の中に、時期の異なる遺物が混入している可能性は否定できない。なお、遺物の多くは1層から出土している。4層は土層のしまり具合が密で、貼床部の堆積と考えられる。

【規模・形態・特徴】 3.20 × 3.87m の方形基淵の堅穴内に、地床炉、住穴、土坑を確認した。堅穴内中心部の床面は硬化している。堅穴中央部に地床炉、南東壁のほぼ中央に土坑が配置されている。上屋は4本柱で支えられていたと見られる。壁溝は確認できなかった。床面付近では火災住居に特徴的な炭化材の放射状分布が見られた。

カマド状施設と想定される範囲が、北西壁寄りにあった。被熱痕跡のある礫の周辺で微量ながら焼土粒が見られ、堅穴の堆積土1層より砂粒の量が多い範囲をカマドと想定して調査した。堅穴堆積土1層に比べて、ややしまりが強い傾向にあった。配置関係を考慮すると柱穴の目前に燃焼部があることになり、合理性を欠くものと危惧しつつも通常の手順で調査を行った。堆積層は7層に分離した。1層には微量な焼土のほか白色粒子が含まれていたため、カマド構築土の崩落層と想定した。2～4層はカマド内部の堆積層と想定した。炭化物量が多い。5～7層は袖部の堆積と想定したが、明瞭でなく、側面に被熱痕跡がなかった。細粒砂の量が多かった。底面には明確な被熱痕跡を確認できなかった。特徴としては、①煙道部が認識できない。②礫はわずかに被熱していたが、燃焼部が認識できない。③2～4層の炭化物包含層は、1号堅穴住居跡の火災によって形成された炭化物と分離できるほどの状況ではなかった。以上のことから、カマド状範囲はカマドではないと結論する。

【地床炉】 住居のほぼ中央に疎2点を含む、炭化物と焼土が集中した範囲を地床炉と認識した。平面は椭円形を呈する。焼土量は明確に視認できるレベルであったが、量は少ない。被熱土の厚さは4 cm程度である。土壤サンプルを土のう袋で2袋採取し、乾燥重量20kg分をフローテーションした。残渣



第5図 1号竪穴住居跡

資料の種子・木材同定を古代の森研究室に分析委託した。結果はヒエ、ウルシ属、カナムグラ、アカザ属、シソ属の炭化種子が検出された。詳細は付編を参照されたい。

〔土坑1〕南東壁中央部に接して配置されていた。堆積層は単層で土師器片と多量の炭化物を包含する。平面形は梢円形で、断面形は楕円形を呈する。住居入口部施設の可能性も考えられる。なお、出土炭化物は肉眼鑑定ではホウノキと判定された。

〔柱穴〕4個確認した。すべて単層で、底面標高は4本とも18.58～18.60m内にある。

〔遺物分布〕人工物は住居1層内で土師器、弥生土器、石鐵が出土した。1号土坑内では土師器が出土している。弥生土器片が、堆積土下部と上部から4点出土している。これらは住居の埋没過程で流れ込んだ可能性がある。土坑1内の遺物は住居の使用時期に近い資料と考えられる。土師器は堆積土中から壺・甌類の胴部破片資料が多く出土した。遺物は地床炉のある中心部から北側にかけて分布密

度が高いものの、堆積土中では住居範囲内ではほぼ満遍なく散在していた。コハクは床面付近から微量出土した。住居使用時に利用していたかは量的に不明瞭である。

【計測値】 竪穴：規模； $3.20 \times 3.87\text{m}$ 、床面積； 11.19m^2 、床面標高； 18.63m 、残存壁高； 23cm

竪穴軸方位；N-70度-W

土坑1：規模； $0.54 \times 0.43\text{m}$ 、深さ； 12cm

地床炉：規模； $0.63 \times 0.58\text{m}$ 、

柱穴：底面標高； 18.60m

遺物

【土師器塊・坏類】 地床炉付近で2点、住居2層中から1点出土している。破片資料である。1は口縁部がやや内湾する。胎土は脆く、砂粒が少量含まれる。3・4は同一個体と考えられる。外面ミガキ、内面ナデで口縁部が外反する。

【土師器壺・甕類】 少なくとも2個体存在する。北西部と土坑1内に破片が散在している。胴部破片ではヘラケズリ、ヘラナデなどの器面調整が見られ、口縁部片はヨコナデされている。

【弥生土器】 1層から出土した1個体3片で、流れ込みと考えられる。横位の捺糸圧痕を施す。弥生時代後期。

【石器】 石鎌1点が1層から出土した。メノウ製の長脚鎌である。

【コハク】 床面付近で 0.1g 出土した。

時期 遺物の特徴から古墳時代中期以降と考えられる。

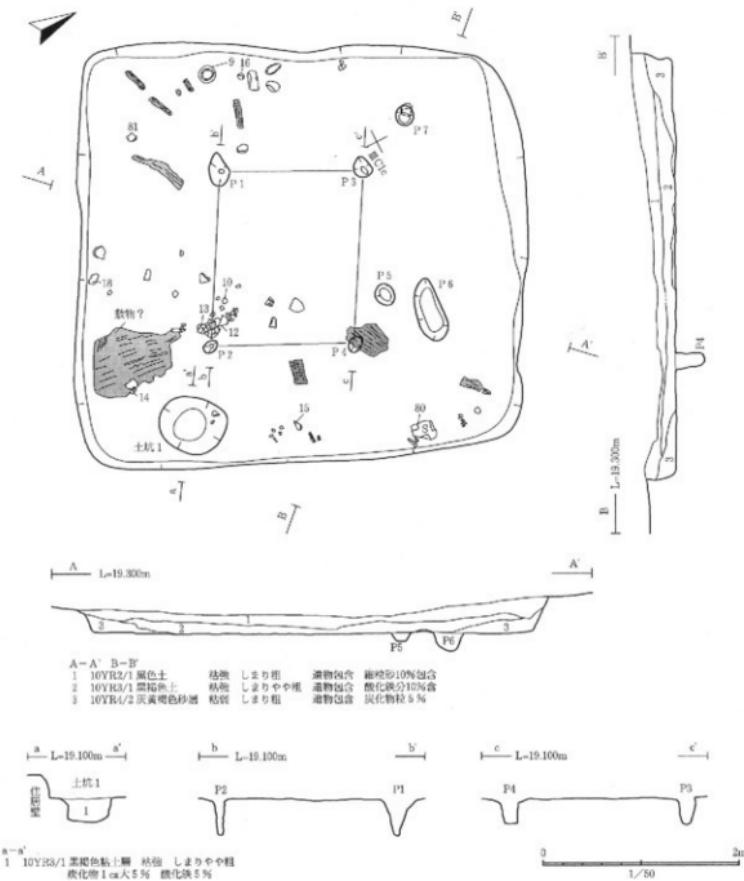
< 2号竪穴住居跡 >

【位置・検出状況】 2号竪穴住居跡が位置するII-Cグリッド付近は、耕作土を重機で掘削したところで湧水が数か所で見られた。第III層の堆積は比較的良好であった。遺物包含層（第III層）掘削時において窪地状に並んでいた範囲の検出作業を進めところ、不整形の第III層を起源とする黒色土プランが残存した。この黒色土プランにベルトを設定して調査を開始した。

【堆積土】 検出状態において黒色土（1層）が不整形で、黒色土上を歩くと沈み込むような軟質土壤であった。検出時は不整形なプランであったため、結果として竪穴の軸と並行するベルト位置にはならなかった。そのため第6図の住居断面図は住居長軸と短軸の長さを反映したものではない。断面の観察において、埋没過程は3層（灰黄褐色砂）→2層（黒褐色土）→1層（黒色土）を確認した。自然堆積と考えられる。3層は水性作用により形成されたと考えられる。2層のシルト層は暗褐色を呈するが、第IV層を起源とするものではなく、1層と3層が混ざった状態のもので、漸移層の認識で分離したものである。1層は第III層を起源とする。1号竪穴住居跡と同じ埋没過程であるが、異なる点として1層が床面にまでは達していないことと、遺物が堆積層内よりも床面で多く出土したことである。床面は水が湧く環境であったため、硬化面を認識できなかった。貼床はない。

【規模・形態・特徴】 $4.35 \times 4.52\text{m}$ の方形基調の竪穴内に、柱穴、土坑を確認した。北西部からは、鉢のミニチュアと甕口縁部の器台転用資料が出土した。南隅に土坑が配置されている。上屋は4本柱で支えられていたと見られる。壁溝は確認できなかった。床面付近では1号竪穴住居と同じく火災住居に特徴的な炭化材の放射状分布が見られた。

北西壁中央部にカマド袖石ないしは屋根材の押さえ石と想定される礫が出土した。竪穴堆積土1層に比べて、しまりがやや強い傾向にあったが、不鮮明であった。この範囲を8層に分離した。1層は竪穴1層に対応。2・3層はカマド構築材の崩落層と想定した。4層は炭化物の量が多くみられたが、住居3層と明確に分離できるほど、密集分布ではなかった。5～8層は袖部の堆積と想定したが、粘土ではなく、細粒砂の量が多い範囲であり、住居3層との境界は不鮮明であった。底面には明確な被熱痕跡を確認できなかった。この範囲は、1号竪穴住居跡の状況とほぼ同じく、①煙道部が明確でな



第6図 2号整穴住居跡

い。②袖石と想定した礫は赤化していない。また、袖石とするには床面から浮きすぎた状態で出土している。③焼土が底面で見られず、燃焼部が明確でない。④底面炭化物量は、火災住居である本遺構床面の炭化物量と同じである。以上の特徴から、この範囲はカマドではないと結論する。

[土坑1] 南端部に配置されていた。堆積層は単層で土器片と多量の炭化物を包含する。平面形は梢円形で、断面形は椀形を呈する。

[柱穴] 7個確認した。すべて単層である。P1~4は支柱穴で、底面標高はP1・2が18.30m、P3・4が18.40mである。

[遺物分布] 人工物は床面と1号土坑内で出土している。堆積土出土資料は少ない。土坑1内では土師器が出土している。遺物は住居中央から西側にかけて多い。土師器壺の破片が1号土坑周辺に多い。炭化物が中心から放射状に分布する。火災によって崩落した屋根材と考えられる。炭化物の一部の肉眼鑑定結果はヤマザクラであった。

[計測値] 竪穴：規模：4.35×4.52m、床面積：17.21m²、床面標高：18.70m、残存壁高：42cm

竪穴軸方位：N-63度-W 土坑1：規模：0.67×0.58m、深さ：25cm

柱穴：底面標高：P1・2 (18.30m)、P3・4 (18.40m)

遺物

[土師器鉢] 1点出土した。ミニチュア(16)である。ヨコナデ、ヘラナデ調整され、口縁部が内湾する。底面は外縁部が摩耗し、中心部がやや窪む。

[土師器壺・甕類] 少なくとも8個体存在する。破片資料のため明確には分類しがたい。15は小型丸底壺の口縁部、9は頸部で切断されて、器台として転用されたと考えられる。頸部の断面には使用痕と考えられる摩耗が観察される。

[石器] 頁岩製の剥片1点と磨石1点が床面から出土している。

[コハク] 堆積土から0.16g出土している。

時期 遺物の特徴から古墳時代中期の南小泉式段階と考えられる。

<1号溝跡>

[位置・検出状況] 調査区東側を南北方向に走る。19年度の試掘調査で一部が確認されていた。第IV層上面の検出で幅1.7mの黒褐色土ブランを検出した。

[規模・形態・特徴] 長：45.57m、幅：1.96m、深さ：34cm。断面形は楕円形を呈する。底面は不整形だが、部分的に平坦である。北端底面標高が18.50mで南端底面標高17.90mである。緩やかに南に向かって下降しており、底面に鉛化の進行が見られることから水路として構築されたもの可能性がある。

[堆積土・堆積物] 6層に分離した。1～3層が黒褐色土層で遺物を比較的多く含む。4層は砂層、5層は黒色シルト層、6層は暗褐色粘土層である。6層内と底面は鉛化していた。底面から土師器壺・甕類の破片数点出土したほかは、堆積土中から土師器壺・甕類とコハク片が出土している。

遺物 底面から出土した壺・甕類の破片を2点掲載した(19・20)。

時期 底面遺物の存在から古墳時代～古代と捉える。

<2号溝跡>

[位置・検出状況] 調査区中央を北東から南西に向かって走る。第IV層上面の検出で幅0.8mの黒色土ブランを検出した。

[規模・形態・特徴] 長：56.7m、幅：1.02m、深さ：30cm。断面形は楕円形を呈する。北東端底面標高が18.95mで南西端底面標高18.70mである。緩やかに南西に向かって下降しているが、ほぼ水平に近い。底面に鉛化の進行が見られることから水路として構築された可能性がある。

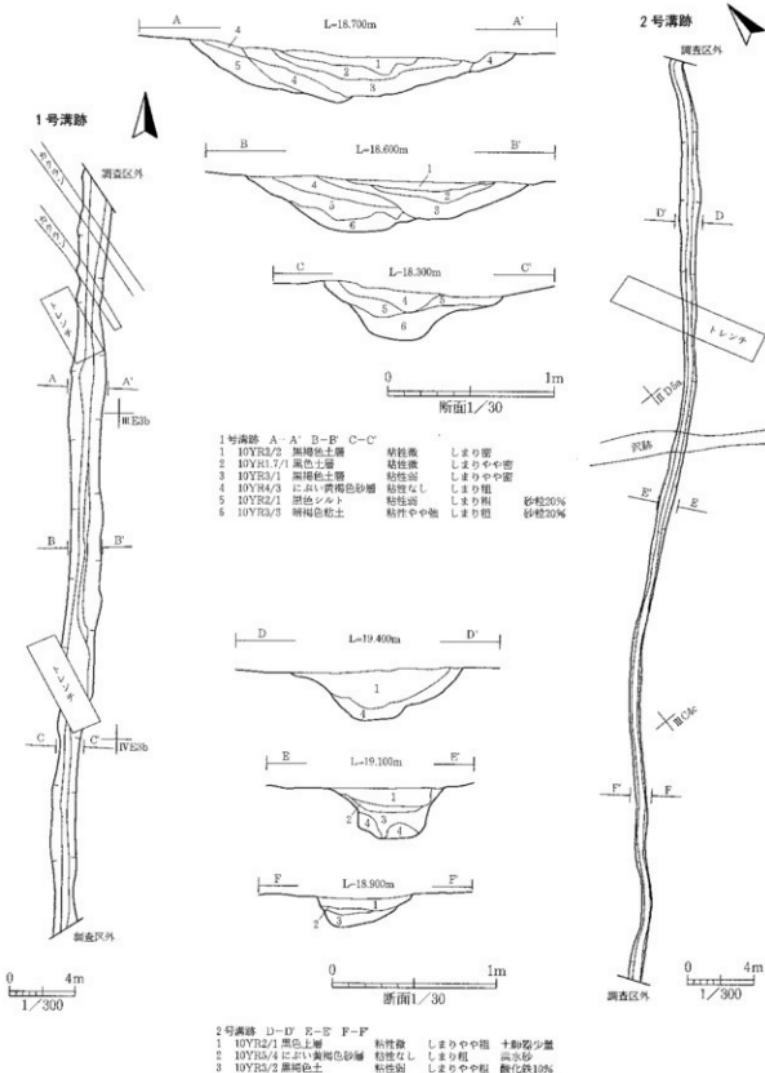
[堆積土・堆積物] 4層に分離した。1層が黒色土、2層がにぶい黄褐色砂、3層が黒褐色粘土層で4層が褐色砂層である。底面は鉛化していた。底面からの出土遺物はない。堆積土中から土師器壺・甕類が出土している。

遺物 堆積土から出土した土師器胴部片を3点掲載した(21～23)。

時期 明確な時期不明。古墳時代以降で圃場整備以前。

<河川跡>

3条確認した。2条ともトレーン調査で深さを確認し、平面を測量するに留めた。底面は湧水する。



第7圖 1・2号溝跡

(11) 新町遺跡

上部層は第Ⅲ層、下部層は黒褐色粘土層に疊が混入する。遺物は摩耗した土師器が上部層で出土するが、下部層では確認できなかった。トレンチ内から時期の特定可能な土師器は出土していない。

(2) 出土遺物：土師器中コンテナ1.5箱、弥生土器4号袋1袋、続縄文土器5点、上製紡錘車1点、コハク片約30g、石鏃3点、石皿1点、剥片5点。

土師器は大半が遺構外出土資料である。口縁部と底部片を中心に掲載した。河川跡周辺で出土した土器のうち胎土に砂粒が少なく、やや厚手の資料がある。そのうち二重口縁壺（24・25）は古墳時代前期の所産とされる。これとほぼ同胎土で壺（26・27）、高环脚部（49・52）、壺・甕類の破片などがあるが、これらは古墳時代前期～中期の特徴を有する。ほぼ同じ埋没過程と想定される1・2号竪穴住居内の遺物は、小型丸底壺の口縁部（15）、鉢（16）、壺甕類（5～14・18）、塊環類（1～4）などの破片がある。遺物の特徴から古墳時代中期段階の所産と考えられる。また、遺構外出土遺物で、器厚が薄く口縁部の面取りが明確な壺・甕類（45・46）や有段丸底壺（48）があるが、これらは後期の所産の可能性がある。

弥生土器は中期の天王山式1点（65）と、後期の胴部に沈線で山形文と重菱形文を施す個体（69）がある。1号竪穴住居跡の堆積土から3点出土した以外はすべて第Ⅲ層遺構外出土資料である。

続縄文土器は第Ⅲ層から出土している。三角刺突文が見られ、細沈線区画内にRL縦文を施す（71～73）。大枠では後北C2・D式ではあるが、沈線区画自体は後出の特徴であり、北大式段階の可能性もある。

コハクは第Ⅲ層内を中心出土したが、微量ながら1号竪穴住居跡の床面付近、2号竪穴住居跡の堆積土からも出土している。物量からは竪穴住居居住者のコハク利用を評価しがたい。

石器は1号竪穴建物跡から石鏃（75）、2号竪穴住居床面から石皿（80）と剥片（81）が出土している。

まとめ

新町遺跡では主に古墳時代の遺構・遺物が確認された。遺物包含層からは弥生時代中期～後期の上器、二重口縁壺を特徴とする古墳時代前期の上器、高环や小型丸底壺などの中期の土器、後期の可能性がある土器、北海道・東北地方を主な分布圏とする続縄文土器が出土している。2棟の竪穴住居跡からは、古墳時代中期以降の土器が出土している。このうち、2号竪穴住居跡は南小泉式段階と考えられる。北東北太平洋沿岸地域における古墳時代中期の集落の北限は、現段階では青森県八戸市田向冷水遺跡で、時期は古墳時代中期後半である。今回の本遺跡の調査によって、前方後円墳体制下の勢力が、すでに古墳時代前期後半～中期前半には久慈地域にまで到達していたことが明らかとなった。

竪穴住居跡においてカマド状施設の存在を検証したが、燃焼部の明確な被熱痕跡は見いだせなかった。また、2号竪穴住居跡出土の壺は口縁部にまでススの付着が認められ、カマド使用による甕のスス・コゲの一般的な付着状況とは異なるため、カマドはなかったと結論する。陸奥南部においてカマドは5世紀前葉頃に出現する（吾妻2003）。現象面ではカマドの出現以降に環類が多量に出現し、高环は消滅していく（仙台市史編纂委員会2000）。本遺跡では組成論に耐えうるだけの資料が出土していないため不明瞭であるが、塊環類の組成率を重視すれば、1号竪穴住居跡で3点塊環類が出土したのに対し、2号竪穴住居跡では塊環類が出土していない。2棟の住居の埋没過程は類似するが、住居の存続年代には差があるかもしれない。

2号竪穴住居跡では、9の壺甕類口縁部が特徴的な出土状況であった。口縁部側を床面に設置し、頸部側の断面は摩耗しているが、一部がほぼ平坦になっている。この平坦面は廃棄後の自然摩耗ではなく、長期的な使用による痕跡と考えられる。口縁部のみで見るとほぼ一周残存しており、形状を損

ねることなく住居壁際の床面から出土した（写真図版5）。内面口縁部に微量のコゲが付着しているが、外面にはコゲがない。また外面のススは極めて少なく、タテミガキされる外面に被熱痕跡と考えられるような器面剥落は見られない。これらの特徴はいわゆる「可搬転用」（胴生1988）土器のあり方を示している。古墳時代には底径が小さく、安定して直立しない壺甌類がある。それらを置く台として転用されたものと考えられるが、被熱痕跡が観察されなかったことから甌セットとしての使用は想定し難い。2号堅穴住居跡は火災住居であり、9は遺棄時の原位置をほぼ保って出土したと考えられるが、その9の床面には焼土は確認できなかったことも、甌セットとしての使用を想定できない根拠である。15のような丸底甌を置いたのであろうか。

コハクは、本州島東半において千葉県銚子産、福島県いわき産、岩手県久慈産が知られ、埋藏量においては久慈産が多い。久慈市内の古代遺跡においてはコハク玉造工房と思われる遺構が中長内遺跡で確認されているが、古墳時代においては不明であった。岩手県内においては奥州市中平入遺跡で確認されている以外、類例に乏しい。コハクは畿内の古墳からも出土していたため、久慈産の可能性も指摘されていたが、久慈において古墳時代のコハク加工の証拠が見出されていなかったため根拠にかけていた。今回の調査で出土した微量のコハクは、堅穴住居跡の床面付近と堆積土内のか、第Ⅲ層から出土した。出土土器は前方後円墳体制下にある勢力の存在を示しており、本遺跡の調査成果は、コハクを媒介とした久慈地方と畿内へと通ずる勢力との関係性を再考するうえで重要である。東北地方をみると、岩手県内の奥州市中平入遺跡では久慈産のコハク片やコハク玉、玉未製品が出土しており、遺跡内で玉造が行われている。また、古墳時代前期を主体とする仙台市今泉遺跡でもコハク塊が出土している。一方、北海道では海岸部や石狩低地帯の続繩文時代の墓副葬品として、多量のコハク製玉類が出土している。いまのところ北海道内で大規模な産地は知られていないが、旧厚田村内、空知管内雨竈川上流、南サハリンなどが有力な産地候補とされている（野村・宇田川2003）。これらは質感が久慈産とは異なるようあるため久慈産の可能性は低いが、本遺跡からわずかながらも続繩文土器が出土したことは、北方とのなんらかの交流を示すものであり、久慈産コハクが北海道方面に流通した可能性も完全には否定できない。これらの事例から古墳時代においてコハク資源産地「久慈」の存在は、広く認知されていた可能性がある。今後は在地で原材料採取のみが行われたか、あるいは在地集団による継続的なコハク玉造が行われたかを検討していく必要性があるだろう。これについて中田遺跡報文の考察の註で、報告者の石崎高臣はあくまで推測と断ったうえで、古墳時代中期後半に中平入遺跡の集団と久慈地域の集団の両者がコハク採掘に関わり、中平入遺跡において加工されていたものが、久慈地域の集団の鉄製品受容に伴い、自ら採掘加工するようになったのではないかと想定している（岩文埋2006）。この想定が成り立つならば、古墳時代前期後半～中期前半において久慈地域の集団は、採掘・搬出を行うのみであったと言えよう。

続繩文土器については、遺構外から出土している。後北C 2・D式ではあるが、沈線区画はやや新しい様相である。北見市開成4遺跡など道東方面に類例が多いようである。岩手県内では中平入遺跡で同文様の底部片が出土している。

今回の調査によって、久慈川流域の沖積平野上には、本遺跡や隣接する中田遺跡のような古墳時代の小集落が形成されていることが明らかとなった。今後の調査の進展によっては、岩手県沿岸北部の古墳時代の様相が次第に明らかとなっていくであろう。また、それと同時に続繩文土器を使用していた集団との関係性など、新知見が加えられていくことが期待される。

なお、新町遺跡平成20年度調査に関する報告はこれをもって全てとする。

〈引用・参考文献〉

- 吾妻俊典 2003 「弥興南部におけるカマド出現期の土器」『宮城考古学』5 宮城県考古学会

(財) 岩手県文化振興事業団・宮城文化財センター 2002 「中半入遺跡・般塚塚古墳発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第380集

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006 「中田遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第478集

桐生直彦 1988 「転用土器器種考」『うつわ』2 国学院大学第II部考古学研究会

久慈市史編纂委員会 1984 「久慈市史 第1巻通史（自然・原始古代・中世）」久慈市

久慈市教育委員会 1988 「『中川内遺跡調査報告書』久慈市埋蔵文化財調査報告書第8集

仙台市史編纂委員会 2000 「仙台市史 通史編 古代中世」仙台市

仙台市教育委員会 1983 「今泉城跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第58集

仙台市教育委員会 1985 「南小泉遺跡第12次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第80集

仙台市教育委員会 1985 「南小泉遺跡第13次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第81集

仙台市教育委員会 1990 「南小泉遺跡 第16~18次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第140集

仙台市教育委員会 1998 「南小泉遺跡 第30・31次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第226集

八戸市教育委員会 2006 「中冷沢跡Ⅷ」八戸市埋蔵文化財調査報告書第113集

野村崇・宇田川洋 2003 「新北海道の古代－2 綱謙義・オホーツク文化」北海道新聞社

報告書抄録

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

付編：新町遺跡より出土した炭化種実

吉川純子（古代の森研究会）

1.はじめに

新町遺跡は、久慈市大川目町にあり、田沢川上流からの流水が多い地域である。本遺跡では琥珀玉や琥珀片が検出されており、集落で琥珀加工を行っていた可能性がある。分析試料は古墳時代の1号堅穴住居中央部分の炉範囲のうち、乾重にして20kgの土壌をフローテーションして得られた炭化種実である。

2.結果

炉堆植物より出土した炭化種実の同定結果を表1に示す。不明種実をもっとも多く出土し、ヒエ、ウルシ属、アカザ属、カナムグラ、シソ属を出土した。
以下に出土した炭化種実の形態記載を行う。

表1 新町遺跡出土炭化種実

1号住居 分類群名	出土部位 炉	1号住居 出土部位 炉
ウルシ属	内側皮	3
ヒエ	Echinocloa utilis Ohwi et Yabuno 種子	8
カナムグラ	Humulus japonicus Sibd et Zucc 種子	1
アカザ属	Chenopodium 種子	3
シソ属	Perilla 果実	1
不明	Unknown	13

ウルシ属：内果皮は梢円形で頂部が丘状に突出する。不明瞭だが縦方向にへこみがあり、内果皮壁は柵状組織が確認でき、燃焼のため最内層のみ残っている。

ヒエ：種子は径2mm前後の丸い菱形

で焼け膨れると頂部が突出した感じになる。基部には梢円形の胚があり、種子長の半分以上を占める。

カナムグラ：種子は円形で側面観がレンズ形、基部がやや丘状に膨らんで不明瞭な縦方向の筋がある。

アカザ属：種子は径1mm円形で扁平、一端にへこんだへそがある。

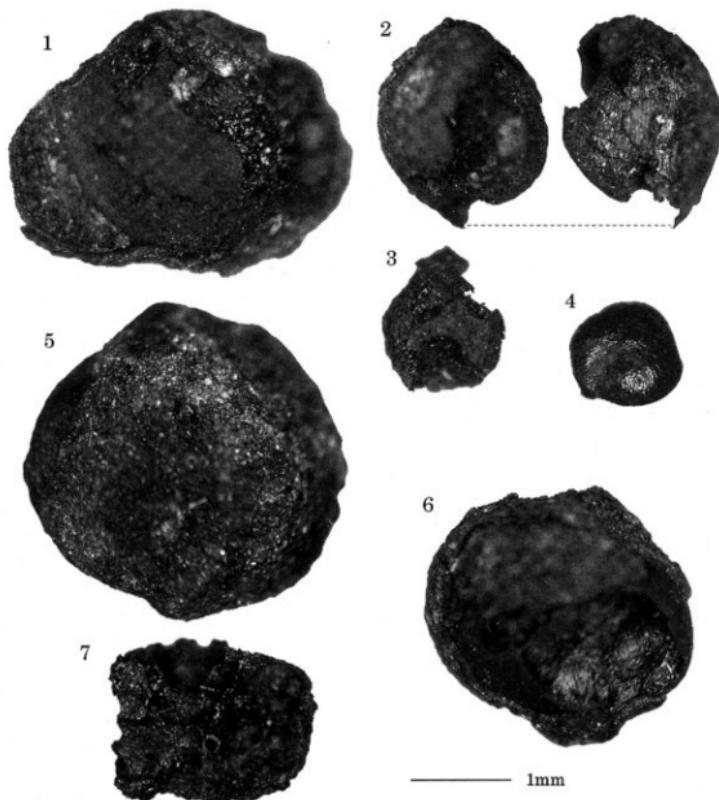
シソ属：高さが2.6mmとやや大きいが、果皮が燃焼で裂けて膨れていると思われる。シソ属特有の基部を持ち、部分的に大きめの網目が確認できる。

不明：穀類もしくはほかの種実とみられるが、燃焼により表面や外形が著しく変化しているため種類の特定ができない。

3.考察

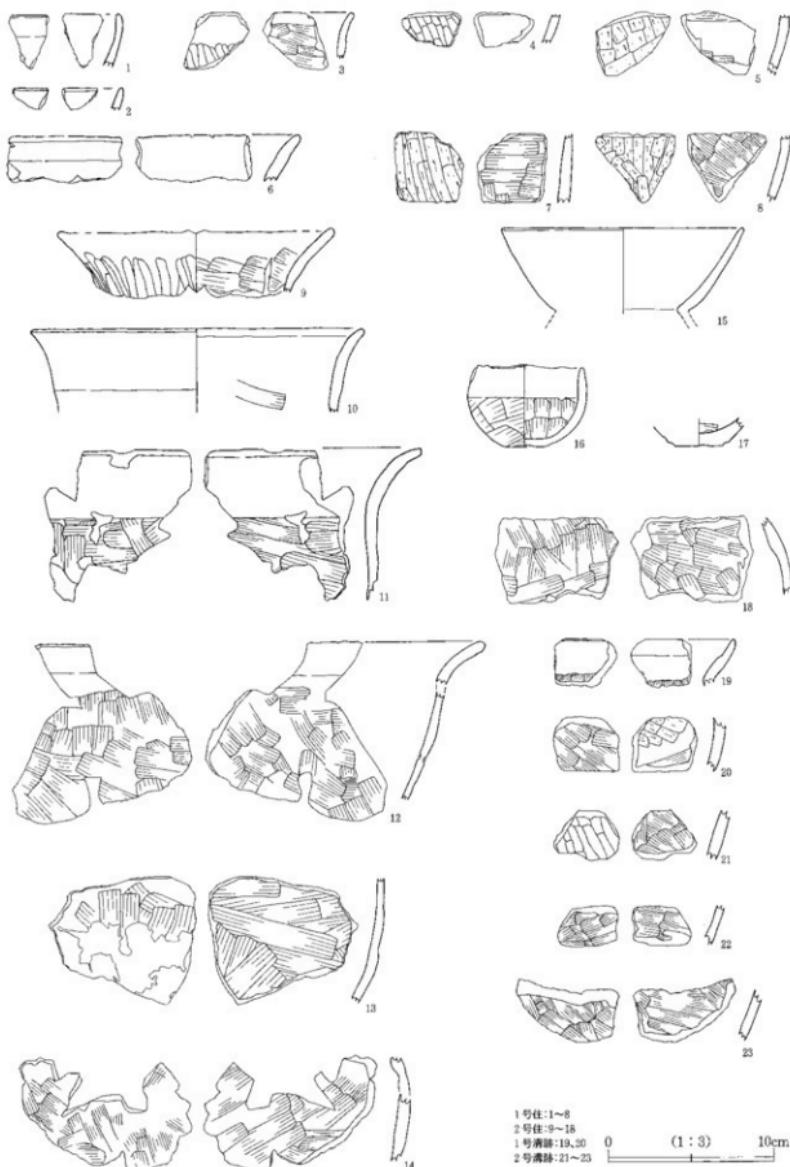
本遺跡では穀類はヒエのみ出土し、利用していた可能性がある種類はウルシ属とシソ属を出土した。種実の保存状況は、燃焼のため焼けただれたり膨れているものが多く不明種実の中に穀類があると考えられる。また、ウルシ属のうちでは、ウルシとヌルデが塗料と染料として生業の利用対象となるほか、ウルシ属の果実に油脂分が多いため焚きつけとしても利用される。

近隣では奈良～平安時代の遺跡ではあるが、宮古市木戸井内IV遺跡と隠里III遺跡から穀類が出土しており、木戸井内IVからは多量のオオムギにコムギ、イネ、アワ、ヒエを随伴し、隠里IIIからはやや多くのイネとクリにアワ、キビ、ヒエを随伴した。立地条件をほぼ同じくする近接する遺跡でも異なった出土傾向を示すのは、家畜を飼う集落と鍛造集落といった違いに起因すると推測され、玉造集落と推定される本遺跡でもその違いが出ることが推測されたが、量的な比較までには至らなかった。ただし、本遺跡で出土したヒエの存在から、やや冷涼気候に対応した雑穀に依存する傾向があると考えられる。



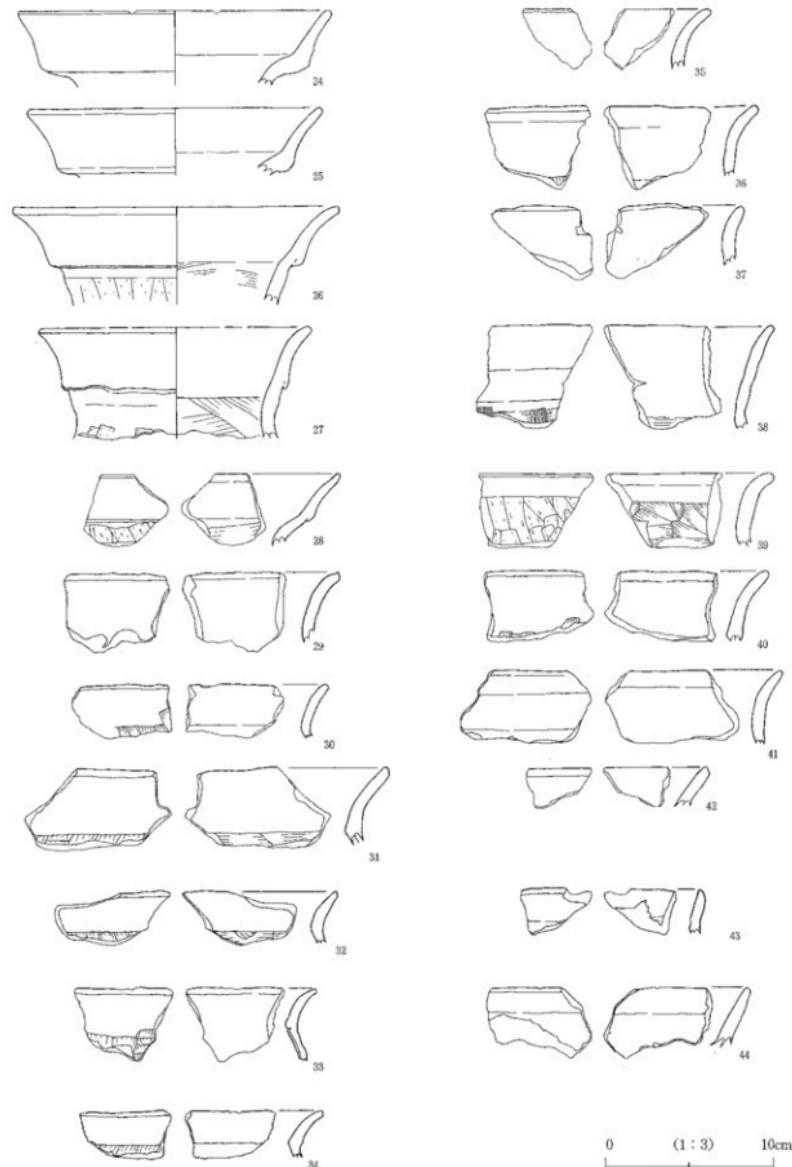
第8図 新町遺跡1号堅穴住居出土炭化種実

1.ウルシ属、内果皮 2.ヒエ、種子 3.ヒエ、種子 4.アカザ属、種子 5.カナムグラ、種子 6.シソ属、果実 7.不明、種実

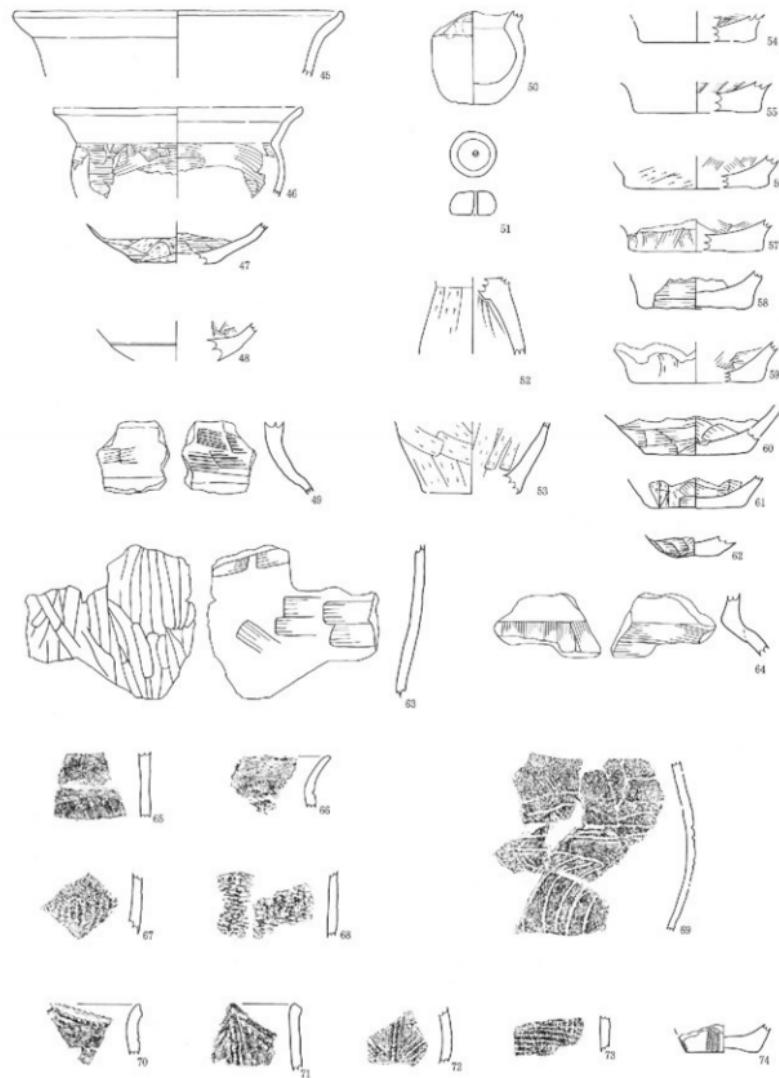


第9図 遺構内出土土師器

(11) 新町遺跡

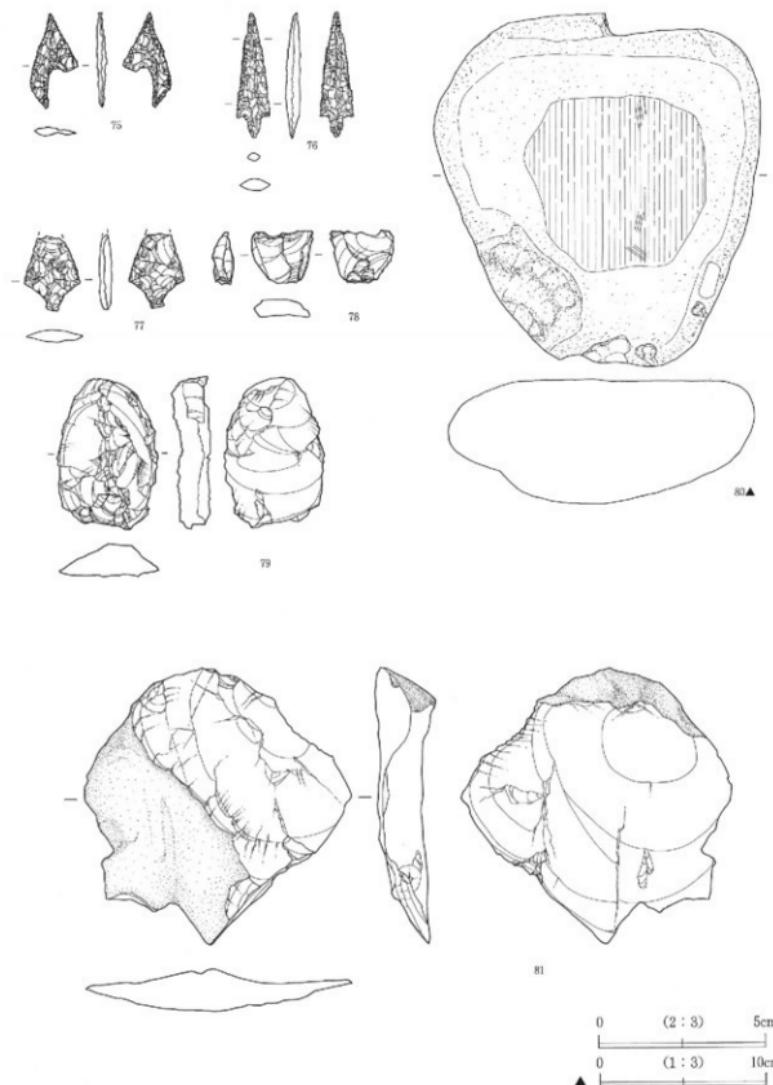


第10図 造構外出土土師器①



0 (1 : 3) 10cm

第11図 遺構外出土土器跡②・弥生土器・統繩文土器



第12図 石器

第1表 新町遺跡土器・土製品観察表①

No.	種別	器種	部位	位置・層位	時期	調査・特徴
1	土師器	壺環類	口縁	I号住・II号上杭 ・1層	古墳中期 古墳中期	ヨコナデ、口縁部内溝
2	土師器	壺環類	口縁	I号住・2層	古墳中期	ヨコナデ
3	土師器	壺環類	口縁	I号住・床面	古墳中期	ヨコナデ、ミガキ、ナデ 4と同一個体?
4	土師器	壺环類	肩部	I号住・床面	古墳中期	ミガキ、3と同一個体?
5	土師器	壺環類	肩部	I号住・床面	古墳中期	ケズリ、ナデ
6	土師器	壺環類	口縁	I号住・I脚	古墳中期	ヨコナデ
7	土師器	壺環類	肩部	I号住・床面	古墳中期	ケズリ、ナデ
8	土師器	壺環類	肩部	I号住・II号土坑 ・1層	古墳中期	ケズリ、ナデ
9	土師器	壺環類	口縁	2号住・床面	古墳中期	ヨコナデ、ミガキ、ナデ 外側スス付着、口径16.7cm
10	土師器	壺	口縁～肩部	2号住・床面	古墳中期	ヨコナデ、ナデ、内外面スス付着 口径19.8cm
11	土師器	壺	口縁～肩部	2号住・床面	古墳中期	ヨコナデ、ナデ
12	土師器	壺	口縁～肩部	2号住・床面	古墳中期	ヨコナデ、ナデ、内面スス付着
13	土師器	壺	肩部	2号住・床面	古墳中期	ナデ、外側コゲ付着 10と同一個体?
14	土師器	壺	肩部	2号住・床面	古墳中期	ナデ、外側スス付着
15	土師器	壺	口縁	2号住・床面	古墳中期	ヨコナデ、口縁部黒斑、 外血塗赤彩、口径14.4cm
16	土師器	鉢	口縁～底部	2号住・3層 下部～床面	古墳中期	ミニチュア土器、ヨコナデ、ナデ 外側肩部黒斑、口径6.6cm、 高さ5.0cm、底径2.4cm
17	土師器	壺環類	肩部	2号住・床面	古墳中期	ナデ、外側スス・コゲ付着
18	土師器	壺	肩部	2号住・床面	古墳中期	ナデ
19	土師器	壺環類	口縁	1号溝跡・2回	古墳以降	ヨコナデ、ナデ
20	土師器	壺環類	肩部	1号溝跡・底面	古墳以降	ナデ、ケズリ 内面黒斑
21	土師器	壺環類	肩部	2号溝跡・1回	古墳以降	ミガキ、ナデ
22	土師器	壺環類	肩部	2号溝跡・3箇	古墳以降	ナデ
23	土師器	壺環類	肩部	2号溝跡・1箇	古墳以降	ナデ
24	土師器	壺	II B1a, II B2a, II B2b・Ⅲ肩	古墳前期	ヨコナデ 口径18.6cm、頭径8.0cm	
25	土師器	壺	II A1d・Ⅲ肩	古墳前期	ヨコナデ、口径17.4cm	
26	土師器	壺	II A1e・Ⅲ肩	古墳前～中期	ヨコナデ、ケズリ、ナデ 口径19.4cm	
27	土師器	壺	II A1e・Ⅲ肩	古墳前～中期	ヨコナデ、ナデ 口径16.3cm	
28	土師器	壺	II A1d・Ⅲ肩	古墳前～中期	ヨコナデ、ケズリ、ナデ	
29	土師器	壺	II D1c・Ⅲ肩	古墳中期以降	ヨコナデ、口縁部面取り刃跡	
30	土師器	壺環類	口縁	II C4e・Ⅲ肩	古墳中期以降	ヨコナデ、ナデ、 口縁部面取り明瞭、 口唇部黒斑・スス
31	土師器	壺環類	口縁	表土・括	古墳以降	ヨコナデ、ナデ、 口縁部面取り明瞭
32	土師器	壺環類	口縁	II A2e・Ⅲ肩	古墳以降	ヨコナデ、ナデ、 口縁部面取り明瞭
33	土師器	壺環類	口縁	II A2e・Ⅲ肩	古墳以降	ヨコナデ、ナデ、 口縁部面取り明瞭
34	土師器	壺環類	口縁	II B2a・Ⅲ肩	古墳以降	ヨコナデ、ナデ、 口縁部面取り明瞭
35	土師器	壺環類	口縁	II B2a・Ⅲ肩	古墳以降	ヨコナデ
36	土師器	壺	II A1d・Ⅲ肩	古墳以降	ヨコナデ、ナデ、外側スス・コゲ	
37	土師器	壺	II A1e・Ⅲ肩	古墳以降	ヨコナデ、外側スス	
38	土師器	壺環類	口縁	III C1d・Ⅲ肩	古墳以降	ヨコナデ、ハゲム、ナデ
39	土師器	壺環類	口縁	II D4n・Ⅲ肩	古墳以降	ヨコナデ、ケズリ、ナデ
40	土師器	壺	II B2a・Ⅲ肩	古墳以降	ヨコナデ、ナデ、外側スス・コゲ	
41	土師器	壺	II A1d・Ⅲ肩	古墳以降	ヨコナデ、内外面スス・コゲ	
42	土師器	壺環類	口縁	II B2a・Ⅲ肩	古墳以降	ヨコナデ、口縁部面取り刃跡
43	土師器	壺	II B2e・Ⅲ肩	古墳以降	ヨコナデ、内外面スス、 口縁部面取り明瞭	
44	土師器	壺	II C3b・Ⅲ肩	古墳以降	ヨコナデ、内外面スス、 口縁部面取り明瞭	

(11) 新町遺跡

第2表 新町遺跡土器・土製品観察表②

No.	種別	岩種	部位	位置・層位	時期	調整・特徴
45	土師器	甕	口縁～胴部	III B2e・Ⅲ層	古墳後期	ヨコナメ、外面スス・コゲ、 口唇面取り明瞭 口径20.0cm
46	土師器	甕	口縁～胴部	II A1d, II A2d ・Ⅲ層	古墳後期	ヨコナメ、ナデ、ケズリ、 外面スス・コゲ、口唇面取り明瞭、 47と同一個体? 口径15.0cm、底径12.2cm
47	土師器	甕	底部	II A1e・Ⅲ層	古墳後期	ナマ、ケズリ、外面スス・コゲ、 口唇面取り明瞭、46と同一個体? 底径14.8cm
48	土師器	环	腹縁	II B3c・Ⅲ層	古墳後期	ナデ、丸底
49	土師器	高环	腹縁	II B1a・Ⅲ層	古墳前～中期	ナダ、ハケメ
50	土師器	甕	胴～底部	II A1d・Ⅲ層	古墳前～中期	ミニチュア土器、てづくね、 外面スス 底径2.5cm
51	土製品	紡錘車		II C5b・Ⅲ層	古墳前～中期	ミニチュア?、てづくね 輪2.8cm、厚1.45cm、 丸幅1.22cm、重量11.6g
52	土師器	高杯	脚部	II C5d・Ⅲ層	古墳前～中期	ケズリ、内曲刺突痕 接続底径4.4cm
53	土師器	甕	底部	II C5e・Ⅲ層	古墳前～中期	ケズリ、外面スス・コゲ、 底径8.8cm
54	土師器	壺底類	底部	II A2e・Ⅲ層	古墳前～中期	ナデ、底径7.0cm
55	土師器	壺底類	底尾	II B4e・Ⅲ層	古墳前～中期	ナデ、底径7.5cm
56	土師器	壺底類	底尾	II A5e・Ⅲ層	古墳前～中期	ケズリ、ナデ、底径8.8cm
57	土師器	壺底類	底尾	II B4e・Ⅲ層	古墳前～中期	ナデ、底径8.1cm
58	土師器	壺底類	底部	II B2e・Ⅲ層	古墳前～中期	ナデ、底径5.2cm
59	土師器	壺底類	底部	II B2a・Ⅲ層	古墳前～中期	ケズリ、ナデ、底径8.0cm
60	土師器	壺底類	底部	II C5a・Ⅲ層	古墳前～中期	ナデ、底径6.5cm
61	土師器	壺底類	底部	II C4a・Ⅲ層	古墳前～中期	ケズリ、ナデ、底径5.4cm
62	土師器	壺底類	底部	II C2b・Ⅲ層	古墳前～中期	ナデ、底径2.8cm
63	土師器	甕	脚部	II B2e・Ⅲ層	古墳以降	ミガキ、ナデ、内外面スス
64	土師器	壺底類	脚部	II A1d・Ⅲ層	古墳前～中期	ヨコナメ、ナデ
65	弥生土器	壺底類	脚部	II A1d・Ⅲ層	弥生後期	RL、大土山式
66	弥生土器	壺底類	1号住・3層	弥生後期	側面片質L、67と同一個体	
67	弥生土器	壺底類	脚部	1C4a・Ⅲ層	弥生後期	LR
68	弥生土器	壺底類	脚部	1号住・2層	弥生後期	燃系L、横位、66と同一個体
69	弥生土器	壺底類	脚部	IV D1b・Ⅲ層	弥生後期	RL構文、直線文、山形文、重巻形文
70	純鶴文土器	甕	口縁	III C4・Ⅲ層	後北C2・D式	口縁部2列の刺突、三角刺突
71	純鶴文土器	甕	口縁	III C5a・Ⅲ層	後北C2・D式	繩文模様区画内にRL構文、三角刺突
72	純鶴文土器	甕	脚部	III C3d・Ⅲ層	後北C2・D式	繩文模様区画内にRL構文、二角刺突
73	純鶴文土器	甕	脚部	III C4d・Ⅲ層	後北C2・D式	繩文模様区画内にRL構文
74	純鶴文土器	壺底類	底部	III C4b・Ⅲ層	後北C2・D式	単純な縦条名体1類、底径4.1cm

第3表 新町遺跡石器観察表

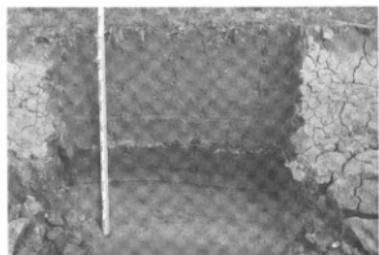
No.	種別	岩種	位置・層位	石質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
75	剥片石器	石礫	1号住・3層	メノウ	2.95	1.49	0.32	0.7	基部欠損
76	剥片石器	石礫	III C5e・Ⅲ層	頁岩	3.85	0.99	0.45	1.1	
77	剥片石器	石礫	III B2e・Ⅲ層	頁岩	2.31	1.71	0.41	1.4	先端部欠損
78	剥片石器	楔形石器	I D1a・Ⅲ層	頁岩	1.61	1.82	0.58	1.8	
79	剥片石器	剥片	III C4c・Ⅳ層	チャート	4.68	2.98	1.19	15.1	
80	撲石器	石皿	2号住・床面	砂岩	21.70	19.70	7.50	4540.0	
81	剥片石器	剥片	2号住・床面	頁岩	8.55	8.03	2.06	84.7	

第4表 コハク観察表

No.	種別	位置・層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
82	コハク塊	III E3a・Ⅲ層	1.33	1.24	1.06	0.9	写真記載
83	コハク塊・片	IV E2c・Ⅳ層				11.9	写真記載
84	コハク塊・片	Ⅳ層					写真記載



調査区全景



基本土層



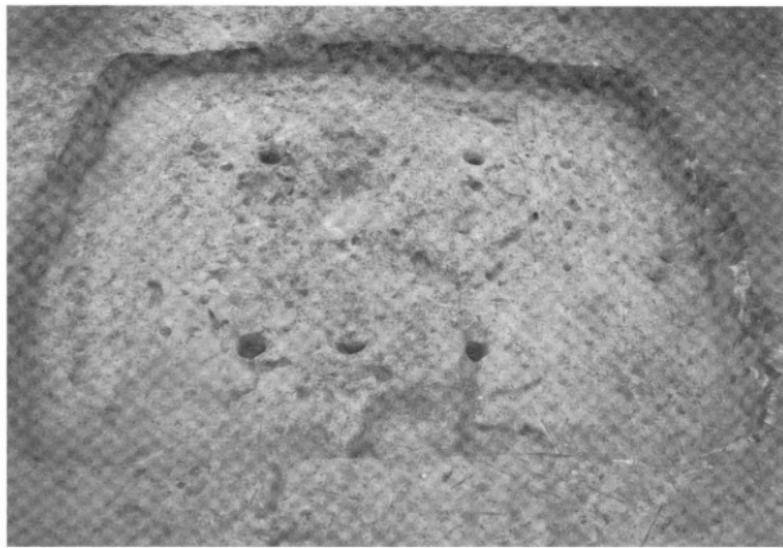
調査前風景



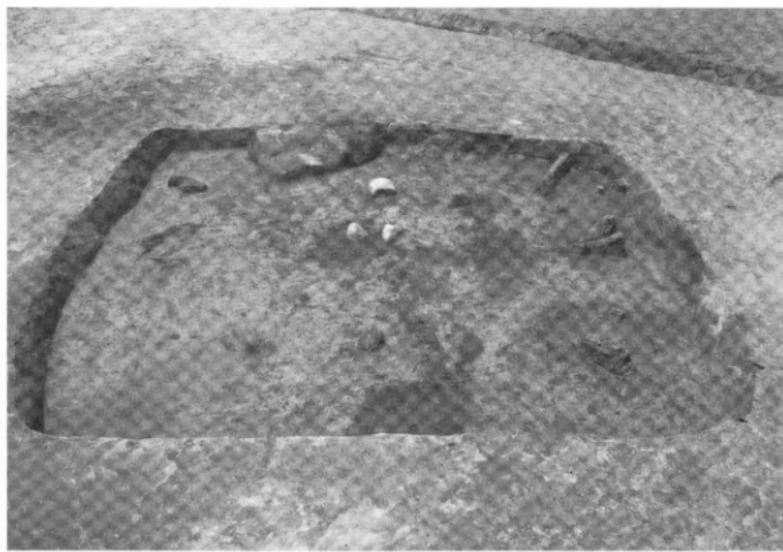
河川跡断面



現地公開風景

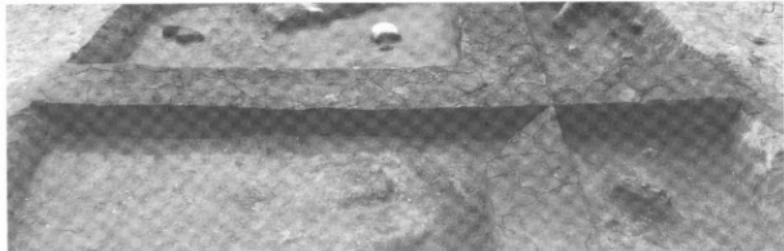


1号竪穴住居跡 全景

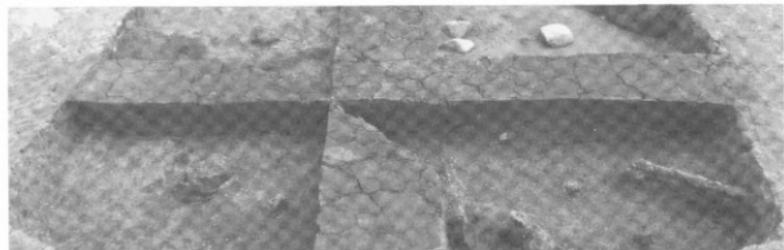


1号竪穴住居跡 遺物出土状況

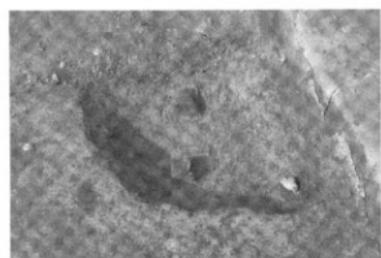
写真図版 2



1号竪穴住居跡 断面 (B-B')



1号竪穴住居跡 断面 (A-A')



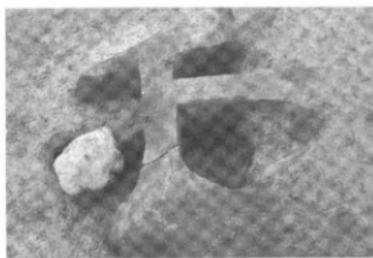
土坑 1 遺物 出土状況



土坑 1 断面

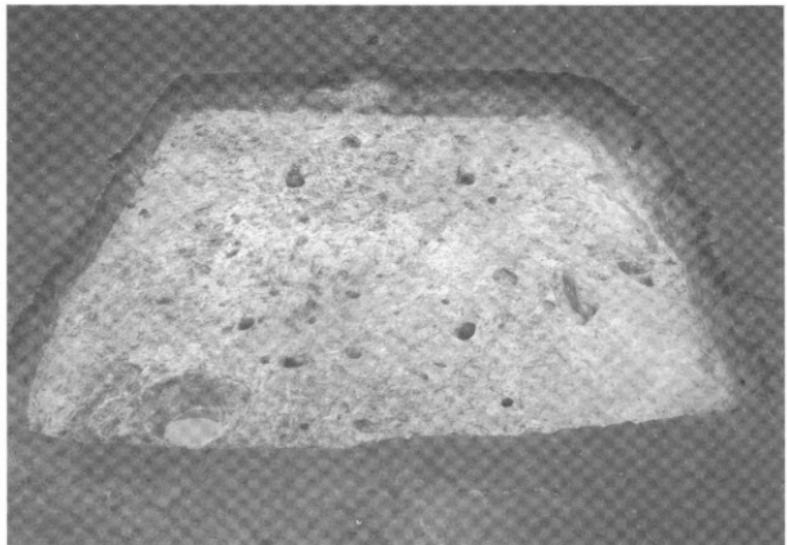


地床炉 検出状況

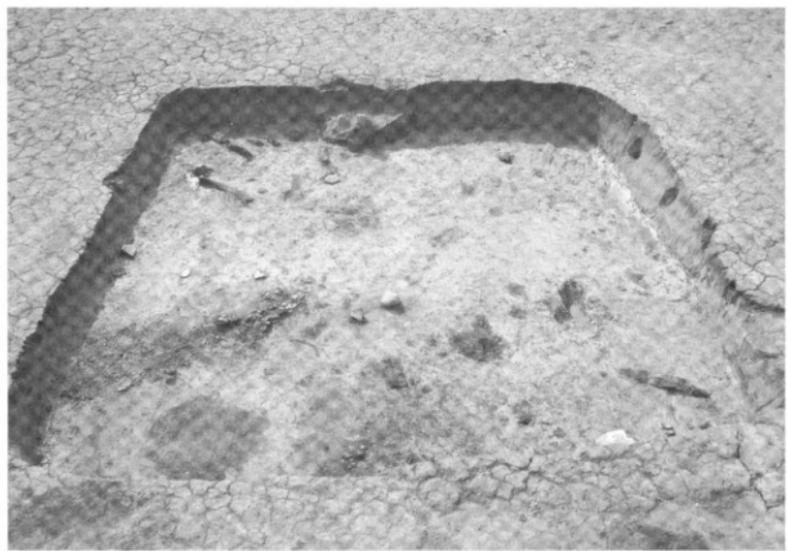


カマド様範囲 調査状況

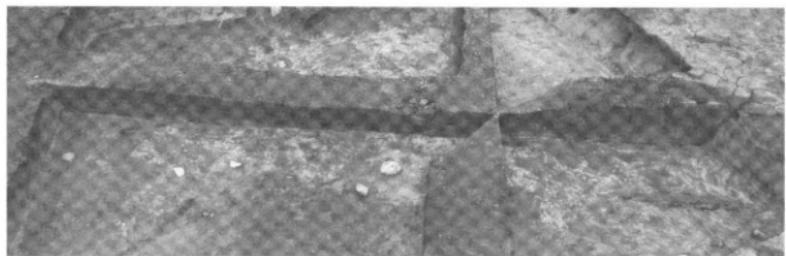
(11) 新町遺跡



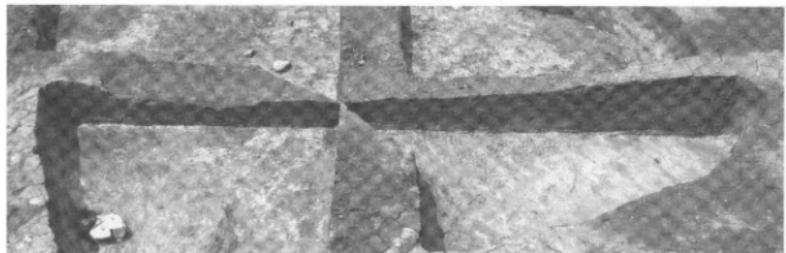
2号墳穴住居跡 全景



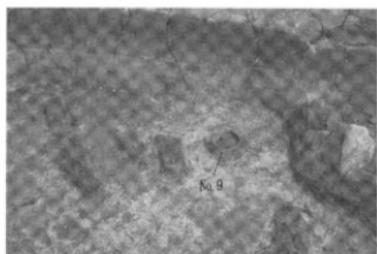
2号墳穴住居跡 遺物出土状況



2号型穴住居跡 断面 (A-A')



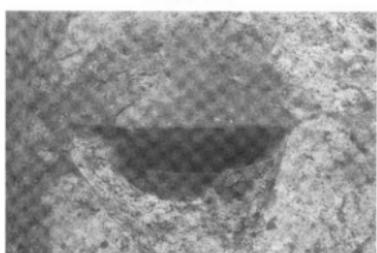
2号型穴住居跡 断面 (B-B')



遺物出土状況



遺物出土状況

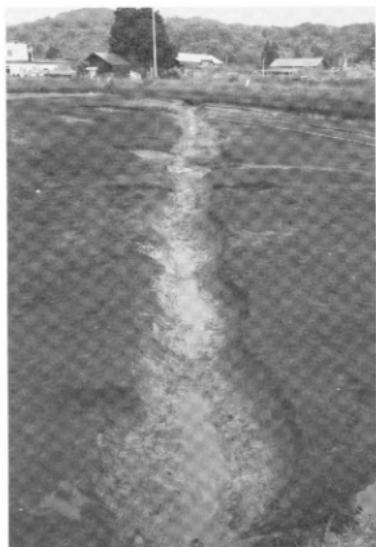


土坑 1 断面

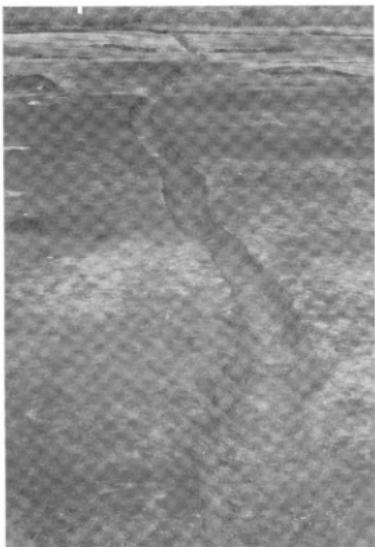


カマド様範囲 調査状況

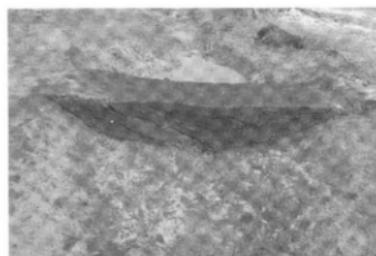
(11) 新町遺跡



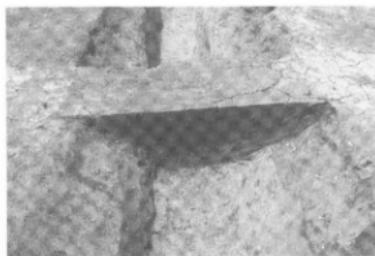
1号溝跡 全景



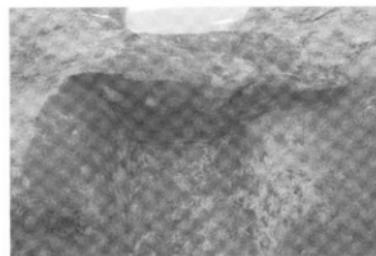
2号溝跡 全景



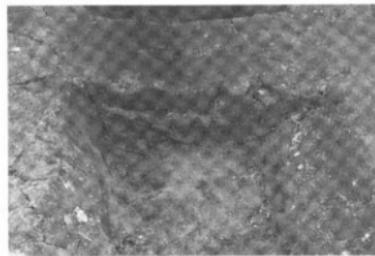
1号溝跡 断面 (A-A')



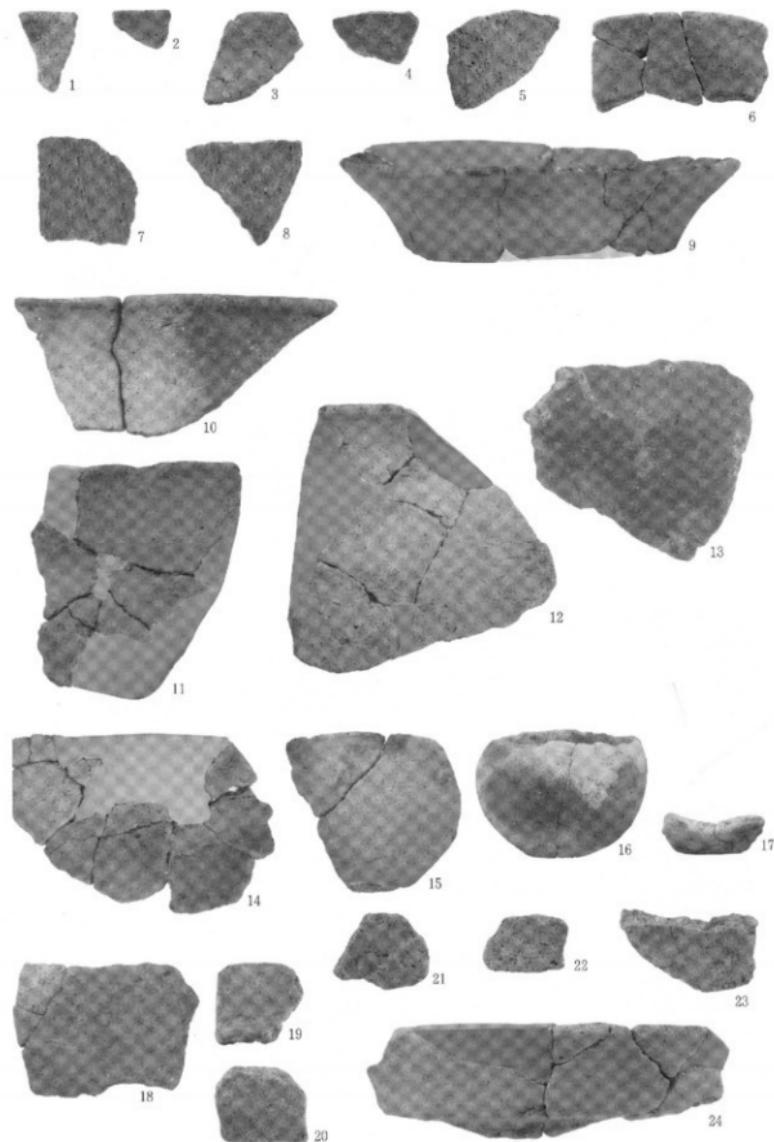
2号溝跡 断面 (D-D')



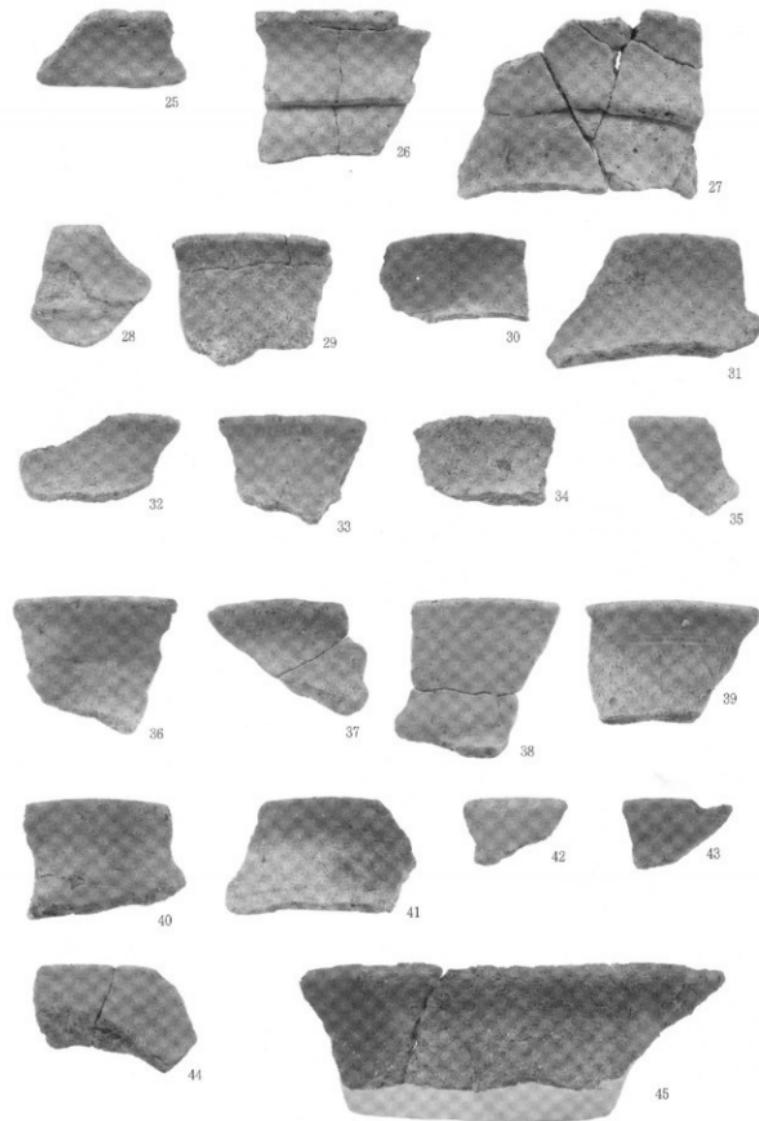
1号溝跡 断面 (C-C')



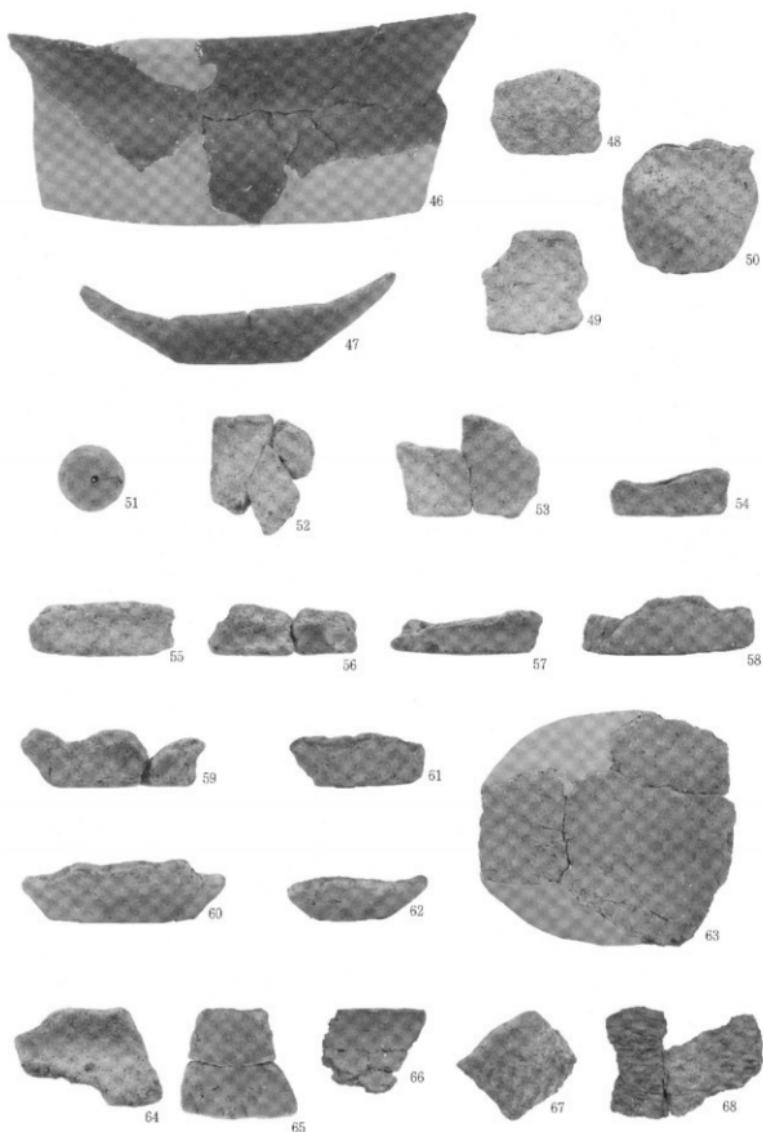
2号溝跡 断面 (F-F')



写真図版 7



写真図版 8





写真図版10

II 発掘調査概報

凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30cm

中コンテナ：42×32×20cm

小コンテナ：42×32×10cm

(12) 衣の関道遺跡 第2次調査

所 在 地 奥州市衣川区下衣川字闇谷起
 委 托 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
 事 業 名 一関遊水地事業衣川本川築堤工事
 発掘調査期間 平成20年4月11日～7月22日
 調査終了面積 7,600m²
 調査担当者 村上 拓・駒木野智寛
 主要な時代 平安（9～10・12世紀）

遺跡の立地

本遺跡はJR東北本線平泉駅の北西約6.0kmの衣川左岸に位置し、調査区北部に接する段丘面から一段低位に形成された段丘状平坦面に立地する。この面は過去の度重なる洪水土砂によって形成されたもので、調査区内の微地形は2筋の低位部とその脇の3つの微高地からなっている。

調査の概要

今回の調査は平成17年度に実施された第1次調査の結果を受け、さらに下位面の調査が必要と判断された範囲を対象としたものである。第1次調査ではおよそ30棟の掘立柱建物跡と、「州浜」とされる敷石を伴う池状の遺構、テラス状遺構などを確認、12世紀の所産と推定された。その後歴史研究団体等から寄せられた要望に応じ池状遺構は盛土保護されることとなり、この範囲は今回の調査対象から除外されている。

今回新たに検出されたのは柱穴約500個、竪穴状遺構1棟、土坑10基、溝跡3条、カマド状遺構4基などである。杭穴状小ピットを除き、検出された遺構の多くは上述の微高地上に集中する傾向が認められる。一方低位部では、最下面に十和田a類似火山灰がブロック状に点在し、この上位を10世紀・12世紀の土器片を含む土層が被覆している。第1次調査で検出された池状遺構は、調査区北隣の段丘崖下から調査区西部へ帯状に連続する自然の低位部上に位置することが改めて確認された。

12世紀遺物であるかわらけ片の分布を見ると池状遺構の西縁付近と調査区東端部南側（最も川側の微高地上）に比較的まとまった出土が認められ、この付近に位置する遺構の一部は12世紀に帰属する可能性が高いと思われる。しかしながら後世の改変によって微高地上の遺構や土層の残存状況は悪く、遺構内出土物の乏しさとあいまって帰属年代の特定が困難な状況となっている。今後、遺構の相関関係や出土遺物の再検討、理化学的年代測定の活用などにより検出遺構の帰属時期の解明に努めたい。



1:50,000 水沢・一関



掘立柱建物跡（池状遺構東縁部）



柱穴群（池状遺構西縁部）

(13) 川目A遺跡 第5次補足調査

所在 地 盛岡市川目第5地割49-2ほか
 委託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
 事業 名 一般国道106号都南川目道路
 発掘調査期間 平成20年4月11日～11月7日
 調査終了面積 1,764m²
 調査担当者 高木晃・福島正和・横山寛剛
 主要な時代 繩文

遺跡の立地

本遺跡はJR東北本線盛岡駅の南東約7.5kmに位置し、北上川の支流である築川左岸の河岸段丘上に立地する。標高は177m前後で、遺跡の南東側は小起伏山地の末端にあたる。今回の第5次調査は平成18年度より開始され、過去2年間の調査で未了となっていた区域1,570m²に加え、新規に630m²の追加調査区について実施した。合計対象面積は2,200m²である。追加調査区のうち436m²は次年度に継続となる。

調査の概要

今年度新たに検出した遺構は堅穴住居跡1棟、配石遺構18基、土坑23基、土器埋設遺構3基、炉跡1基、焼上遺構7基等、概ね繩文時代後期の遺構である。他に繩文時代中期以前に形成された風倒木痕を26箇所確認した。また調査区のほぼ全面に最大1m以上の層厚で繩文時代後期主体の遺物包含層が広がる。

包含層は上位よりⅡ、Ⅲa、Ⅲb、Ⅲc層、Ⅳ層に細分され、それぞれの層界に配石遺構群が形成されている。このうち今年度は主にⅢc層上面配石遺構群の精査とⅢc層～Ⅳ層の掘り下げを行った。配石遺構は直径が1～2m程度の小規模なものが多く、そのうち一部は下部に墓坑と思われる土坑を伴う。

遺物は土器が大コンテナ270箱、剥片石器類が小コンテナ約40箱、礫石器類が中コンテナ190箱、土偶約300点、石棒類約100点、その他各種土製品、石製品、アスファルト塊、琥珀玉、焼骨細片、炭化種子類等である。土器では繩文時代中期後葉、同晩期が若干含まれる他は後期に属する。特徴的な遺物では、岩手山起源安山岩質溶岩が石材として多数搬入され石皿、砥石等の石器素材として利用されている。また蛇紋岩を主要石材とする磨製石斧では製作工程途上にあるものが多い。

次年度は更に東側の区域の調査が予定されており、配石遺構群および遺物包含層の広がりが判明していくものと考えられる。



1 : 50,000 盛岡・日誌



配石遺構群



遺物出土状況

(14) 羽黒田遺跡

所 在 地 花巻市東和町安俵11区地内
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
 事 業 名 東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業
 発掘調査期間 平成20年7月14日～12月5日
 調査終了面積 8,062m²
 調査担当者 村上 阿波田 宏・中村繪美・鈴木野智實・藤原大輔・小椋勇記・藤田 花
 主要な時代 平安

遺跡の立地

本遺跡はJR釜石線土沢駅の南西約1.1kmに位置し、猿ヶ石川右岸に形成された沖積地上の微高地に立地する。標高は100m前後、調査前は主に水田等の耕作地として利用されていた。

調査の概要

今回の調査では平安時代（9～10世紀）の遺構として堅穴住居跡18棟、住居状遺構1棟、土坑（土器焼成関連？）4基が検出され、土師器・須恵器 大コンテナ10箱）をはじめ、刀子、曲物部材片、布片などの遺物が出土した。

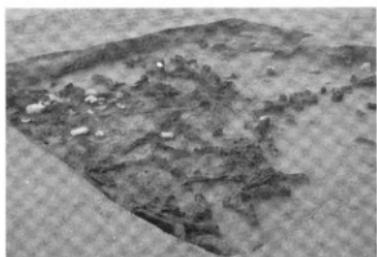
堅穴住居跡は微高地頂部に相当する調査区中央部にまとまって分布する。大半が焼失家屋であり、このうち数棟では炭化した木材が良好な状態で残存していた。

また土坑のうち4基では、火熱で破碎した剥片状の土器片が炭・焼上を多く含む土とともに出土しており、土器焼成遺構とされた他遺跡の事例によく似ている。近接する住居跡の床面からは鏡餅のような精製された粘土塊が出土しており、集落内における土器製作を示唆する事例とみられる。焼成遺構に伴うと思われる土器には高台付の浅い环形土器や碗形・鉢形など風変わりな器形が目立ち、内外面黒色処理されたものを含む。出土遺物に着目すると、この種の土器を主体的に伴う住居とほとんど伴わない住居に大別できそうである。

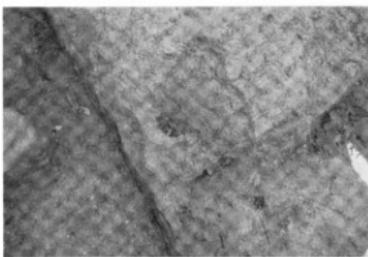
布片が出土したのは多量の土器と大形礎が投げ込まれていた住居状遺構で、つぶれた状態の須恵器大甕の破片の下から発見された。大きさは5cm四方ほどで、蛇腹に折り畳んだようなひだが認められる。素材や織りの種類について現在分析を進めている。



1:50,000 花巻



焼失住居跡



布片出土状況

(15) 中嶋遺跡

所 在 地 花巻市東和町安俵11区149-1 ほか
 委 托 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
 事 業 名 東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業
 発掘調査期間 平成20年8月1日～10月17日。
 調査終了面積 2,702m²
 調査担当者 福島正和・高橋静歩
 主要な時代 古代（奈良・平安）

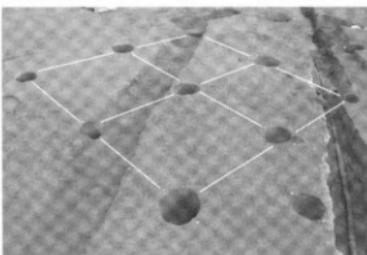
遺跡の立地

中嶋遺跡は、JR釜石線土沢駅の南約1kmに位置し、東から西へと流れる猿ヶ石川北岸の自然堤防及び後背湿地に立地する。遺跡の標高は100m前後である。調査前は主に水田として利用されていた。平成19年度に今年度調査区の西側が調査され、平安時代の井戸が検出されている。また、風字硯が出土しており、これらは識字者層や官的な施設の存在を示唆している。

調査の概要

今回の調査では、奈良時代の堅穴住居1棟、平安時代の堅穴住居12棟、掘立柱建物1棟（2×2間総柱建物）、上坑12基、時期不明の溝1条、遺物包含層1箇所を検出した。堅穴住居からは、土師器・須恵器が大コンテナ約6箱出土した。また、遺物包含層からは大コンテナ2箱の土師器・須恵器が出土した。特筆すべき遺物として、包含層から出土した刻書土器が挙げられる。これは、焼成前の土師器全体部に「寺智□」と流麗な筆致で刻書されている。土師器甕に複数の文字が刻書されている例は県内において数少ないものとみられる。

昨年度の調査区は大半が微低地で、井戸が検出されている。今年度調査区は大半がそれより微高地にあたっており、居住域となっていることが確認された。のことにより、古代の人々の微低地と微高地の使い分けが明確となっていることがわかった。



掘立柱建物全景



堅穴住居全景



堅穴住居内遺物出土状況

(16) 向II遺跡

所 在 地 遠野市綾織町下綾織第35地割123ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
 事 業 名 東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業
 発掘調査期間 平成20年4月14日～7月31日
 調査終了面積 8,000m²
 調査担当者 福島正和・高橋静歩
 主要な時代 繩文・古代・近世

遺跡の立地

向II遺跡は、JR釜石線岩手二日町駅の南約1.5kmに位置し、東から西へと流れる猿ヶ石川南岸の河岸段丘上に立地する。遺跡の2km東には、国指定史跡である綾織新田遺跡が所在する。調査前の現況は、中央南北方向に流れる沢を挟んで西側は水田、東側は牧草地・山林として利用されていた。

調査の概要

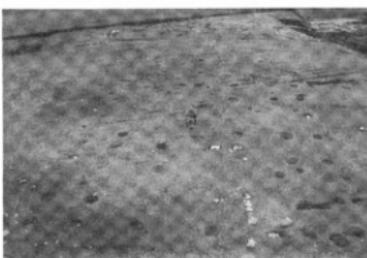
今回の調査では、縄文時代の遺物包含層1箇所、平安時代と考えられる堅穴住居状遺構2基、焼土遺構3基、近世の掘立柱建物1棟・墓壙20基・水田に伴う石組み暗渠、時期不明の溝、土坑などを検出した。遺物包含層からは縄文時代早期後葉～前期前葉の土器、晩期の土器、石器、石製品、土製品などが合計大コンテナ2箱、平安時代の焼土の上面では、平安時代の土器が小コンテナ1箱出土した。また、近世の墓壙からは磁器、銭貨（寛永通寶）、煙管、火打ち金、小柄、鉄製鉢、数珠、漆器椀塗膜片、不明鉄製品など多様な副葬品が出土した。

遺構は認められないものの、縄文時代早期～前期・晩期の遺物が出土することから、この時期の集落が調査区周辺に存在することが推測される。

また、平安時代においても集落の縁辺を調査した可能性が高く、今回の調査区より北に同時期の遺構が存在する可能性が高い。近世においては屋敷・墓域・水田という3つの要素が調査区内で認められた。断定はできないが、これらが同時期、一つの家の所有するものである可能性も考えられる。



1:50,000 人間



掘立柱建物全景



墓壙内棺底検出状況



墓壙副葬品出土状況

(17) 下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡

所 在 地 奥州市胆沢区若柳字東下嵐江地内
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所
 事 業 名 胆沢ダム建設事業
 発掘調査期間 平成20年4月11日～11月14日
 調査終了面積 3,574m²
 調査担当者 村木 敬・藤田 祐・濱田 宏・藤原大輔・菅野紀子
 主要な時代 旧石器・近世

遺跡の立地

遺跡は石淵ダムの南西約2km、胆沢川と前川の合流地点に位置し、東に細長く突き出た舌状地形の緩斜面上、標高345m前後の河岸段丘に立地する。段丘の内陸部側が下嵐江Ⅰ遺跡、先端部側が下嵐江Ⅱ遺跡と両遺跡は隣接している。調査は昨年度から継続して行われているが、本格的な調査は今年度からである。次年度以降も継続して調査を行う予定である。

調査の概要

調査は6月14日に起きた岩手・宮城内陸地震により、ダム構内に進入できず2ヶ月近く中断を余儀なくされた。この結果、調査期間・面積に年度当初より大幅な変更が生じている。

今年度の調査では、下嵐江Ⅰ遺跡では旧石器時代、縄文時代、近世の遺構や遺物を確認できた。段丘の先端部付近では旧石器時代の遺物、段丘内陸部の高位段丘の裾付近では縄文時代と近世の遺構と遺物が広がる。

旧石器時代は、石刀石器群と細石刃石器群の2文化層を確認した。石器集中区8箇所が検出され、石器約750点が出土した。特に、細石刃石器群は広範囲に分布しており、次年度予定している調査区まで広がることが予想される。縄文時代は堅穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟、土坑3基が検出された。中期後半から後期にかけての土器を主体に中コンテナ1箱出土している。近世は掘立柱建物跡7棟、井戸跡2基、土坑4基、性格不明遺構2基、溝跡1条、柱穴280個が検出された。陶磁器を中心に入コンテナ1箱出土している。

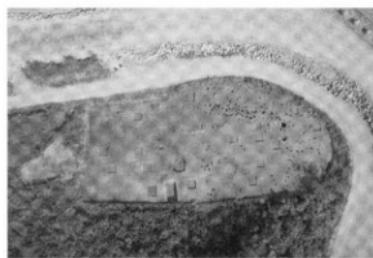
次年度の調査により、旧石器時代や近世の遺構や遺物がどのように形成されているかを捉え、遺跡の全体像を明らかにしていきたい。



1:50,000 標石房



遺跡全景



南側調査区全景

(18) 坪沢II遺跡

所 在 地 奥州市胆沢区若柳字追分34ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所
 事 業 名 胆沢ダム建設事業
 発掘調査期間 平成20年4月11日～5月29日
 調査終了面積 2,000m²
 調査担当者 濱田 宏・藤原大輔・小林弘卓
 主要な時代 縄文・近世



遺跡の立地

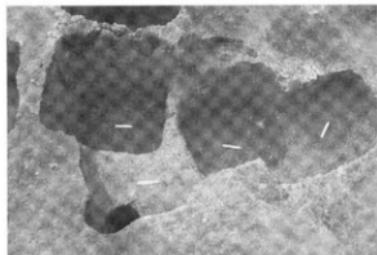
遺跡は、奥州市役所の西南西約25km付近にあって、胆沢川の支流前川左岸の河岸段丘上に立地し、調査区は南東向きの緩斜面となっている。遺跡の標高は346～353mほどである。以前、この周辺には人家や畑地があったが、ダム建設計画による移転後には完全な荒地となつたようである。

調査の概要

昨年度の調査成果から、今回も近・現代の墓壙の検出が見込まれていたが、最終的には江戸期の墓壙が63基、明治期のものが9基の併せて72基が確認された。これらの墓壙は改葬されたもののが多かったが、中には棺の一部とともに人骨がほぼ一体分埋葬されたままのものも数基見つかった。この他には、縄文時代の土坑4基と上器埋設遺構1基、時期不明の土坑13基、同じく時期がわからない柱穴状の土坑が9個検出された。

遺物は墓壙に伴う副葬品が大半で、錢貨353枚（寛永通寶主体、明治期の硬貨50枚ほど）、煙管、簪、柄鏡、刀子、和銛などの金属製品74点、陶器3点、硯1点、木櫛2点などが出土した。その他には、縄文時代中期から晩期にかけての土器片が3袋、石器の剥片が3点出土した。

今年度の調査の主体は近・現代の墓壙であったが、このことに関連して、かつてこの周辺は「寺屋敷」と呼ばれ「龍澤寺」という曹洞宗の寺院があったとの記述がみられ、この墓壙群がそれに付属するものであろうことが裏付けられた。また、昨年度確認されていた縄文時代後・晩期の堅穴住居跡や土坑については今回は検出されず、該期の集落は調査区南東側まではその範囲を広げないことも明らかとなった。



重複する墓壙群



調査区全景

(19) 大平野 II 遺跡

所 在 地 奥州市胆沢区若柳字大平野1-1 ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所
 事 業 名 胆沢ダム建設事業
 発掘調査期間 平成20年6月2日～11月14日
 調査終了面積 11,750m²
 調査担当者 濱田 宏・藤原大輔・村木 敏・藤田 祐
 主要な時代 繩文

遺跡の立地

遺跡は、胆沢総合支所の南南西およそ19km、石淵ダムの南西4km付近にあって、北西から延びる丘陵の南東向き緩斜面に立地する。調査区の標高は358～371mである。この周辺は、かつて一時的にレジャー施設として利用されたが、ダム建設計画とともに施設は閉鎖され、その後は荒地となったようである。

調査の概要

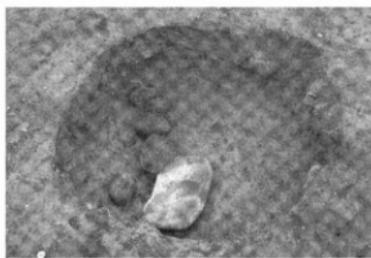
今年度は、調査を開始したその数日後に最大震度5強の大地震に見舞われ、約2ヶ月間の中止を余儀なくされた。以降8月中旬に調査を再開したが、その後の悪天候も重なって遅れを取り戻すことができず、最終的に約600m²が調査未了となり次年度へ繰り越されることとなった。

今回の調査で確認された遺構は、竪穴住居跡8棟、竪穴状遺構3棟（いずれも縄文中～後期）、竪穴住居跡とほぼ同時期と思われる土坑42基、土器埋設遺構1基、沢の氾濫部内に形成された縄文時代の遺物を包含する地点8箇所である。遺物は、縄文時代早期・前期前葉・中期後半～後期前半・晚期などの土器片が大コンテナ15箱、縄文時代の石器類（石錐・石匙・石皿のほか石棒などの石製品）が中コンテナ10箱あまり出土した。

今回の調査では、過去3年間で最も多くの遺構・遺物が検出され、中でも縄文時代中期後半から後期に属すると思われるプランに沿って円形に礫が配される住居跡が3棟見つかったほか、貯蔵用から墓壙に転用されたと思われる土坑も確認された。また、遺物では石棒と凹石の出土が多いことが特徴として挙げられ、調査の進展とともにこの遺跡の内容や性格がより明らかになってきた。



竪穴住居跡



礫が入れられた土坑

(20) 金浜 I 遺跡

所 在 地 宮古市大字金浜第2地割字古館16ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業
 発掘調査期間 平成20年4月8日～5月31日
 調査終了面積 3,800m²
 調査担当者 村田 淳・高橋聰子
 主要な時代 縄文・弥生・古代・近代

遺跡の立地

本遺跡はJR山田線津軽石駅から約2km北方、宮古湾の最奥部に位置している。調査区は西側の丘陵から派生する尾根とそれに付随する谷部（沢跡）からなる。遺跡台帳上は尾根の一部及び南側谷部が金浜II遺跡となっているが、立地及び遺構・遺物の類似性を勘案すると本来的には一連の遺跡であると考えられる。調査前現況は宅地及び畠地であり、検出面標高は尾根部が22m前後、谷部が15～17mである。

調査の概要

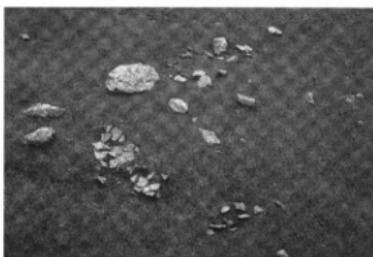
検出遺構には縄文時代の陥し穴状遺構3基・土器集中区3箇所、古代の竪穴住居1棟・焼土遺構5基・性格不明遺構1基、近代の炭窯1基、時期不明のものとして土坑20基・溝1条・柱穴列1基・柱穴53個などがある。陥し穴状遺構はすべて溝形で、主軸方向は異なるが沢筋に沿って等間隔に掘削されている。また、沢跡内の十和田中振火山灰を含む層の上層で検出された土器集中区からは縄文時代前～中期前半に属する破片がまとまって出土した。調査区西側の鉄塔下トレンチ内で検出した竪穴住居は方形のプランであり、出土遺物から平安時代のものと考えられる。炭窯は使用直前に何らかの理由で廃棄されたものであり、年代推定の可能な遺物の出土は無いが、形態から近代に属するものと判断した。

出土遺物は、縄文・弥生土器中コンテナ3箱、土師器・須恵器中コンテナ1箱、石器（鐵・匙・磨製石斧・敲磨器）小コンテナ1.5箱、鉄滓小コンテナ1箱、羽口・炉壁など小コンテナ1箱、釘などの鉄製品少量である。縄文土器は前～中期、弥生土器は中期の破片が主体である。

以上のように、今回の調査では本遺跡が縄文から近代にかけて断続的に利用された遺跡であることを確認することができた。なかでも一定量出土した弥生時代の土器については、県内でも出土量が少ない中期後半に属するものが多い為、今後詳細な検討を行っていきたい。



調査区全景（北から）



沢跡内土器集中区

(21) かねはま
金浜 II 遺跡

所 在 地 宮古市大字金浜第2地割字古館17ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業
 発掘調査期間 平成20年6月2日～8月28日
 調査終了面積 5,500m²
 調査担当者 村田 淳・高橋聰子
 主要な時代 繩文・弥生・古代・近現代



遺跡の立地

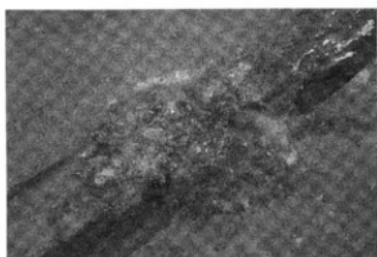
本遺跡はJR山田線津軽石駅から約2km北方、宮古湾の最奥部に位置している。調査区は西側の丘陵から派生する尾根とそれに付随する谷部（沢跡）からなる。遺跡台帳上は尾根の一部及び北側谷部が金浜I遺跡となっているが、立地及び遺構・遺物の類似性を勘案すると本来的には一連の遺跡であると考えられる。調査前現況は宅地及び畠地であり、検出面標高は11～18mである。

調査の概要

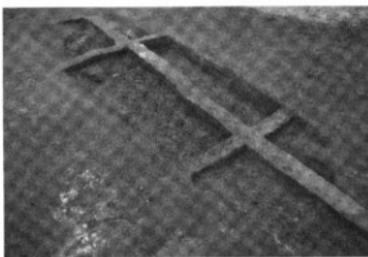
検出遺構には縄文時代の陥し穴状遺構2基・土坑1基、古代の堅穴住居2棟・精錬炉1基・炭窯3基・焼土遺構6基・掘立柱建物1棟・土坑2基、近現代の炭窯1基、時期不明の土坑22基・柱穴21個・性格不明遺構2基がある。古代の遺構は調査区の中央付近にまとまる傾向があり、とくに精錬炉や炭窯、排溝場など鉄生産関連の遺構は沢跡の縁辺部に集中する。その他にも金浜I遺跡との境界付近で粘土採掘坑の可能性がある遺構も検出されている。なお、後述するように今回の調査では弥生土器がまとまって出土しているが、この時期に比定できる遺構は確認できなかった。

出土遺物は、縄文・弥生土器中コンテナ4箱、土師器・須恵器中コンテナ1箱、石器小コンテナ4箱（鐵・匙・磨製石斧・敲磨器など）、鉄滓中コンテナ5箱、羽口小コンテナ1.5箱、鉄鐸・鐵などの鉄製品少量、土製小玉・石製勾玉・政和通寶各1点である。縄文・弥生土器は沢跡内堆積土の黒色土層から混在して出土しているが、口縁部破片数をみると大半が弥生土器であり、とくに中期後半に比定できる破片が最も多い。この他にも弥生時代後期、縄文時代中期の破片が少量確認できる。

以上のように、今回の調査では縄文から近現代にかけての生活の痕跡が認められた。なかでも小規模ではあるが鉄生産関連の遺構、及び弥生時代中～後期の土器が一定量出土したことが成果といえる。



精錬炉



古代の炭窯

(22) 八木沢野米遺跡

所 在 地 宮古市大字八木沢第8地割字駒込地内
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業
 発掘調査期間 平成20年10月29日～11月26日
 調査終了面積 1,720m²（内、終了面積130m²）
 調査担当者 丸山直美・村田淳・鈴木博之・高橋聰子
 主要な時代 繩文・中世？

遺跡の立地

本遺跡はJR山田線磯鶴駅の南西約3.9kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川の西岸に形成された小起伏山地の先端部に立地する。標高は43～46mを測る。

調査の概要

次年度に継続調査が予定されているため、今回は遺跡内容の把握を中心とした調査に留めている。検出された遺構は、繩文時代の堅穴住居1棟、焼上遺構7基、土坑4基、埋設土器1基、遺物包含層1箇所、中世の可能性のある堀状遺構1条、土壘状遺構1箇所、柱穴状小土坑3個である。遺物は繩文土器、石器、陶磁器、鉄製品、鉄滓など総量で大コンテナ8箱が出土している。調査の結果、調査区東半部を中心として主に繩文時代の集落跡、遺物包含層が形成されていることが判明した。



1:50,000 宮古



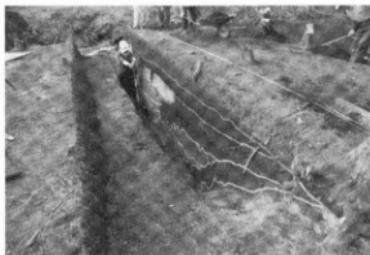
繩文土器出土状況



繩文時代堅穴住居検出状況



中世の可能性のある堀状遺構検出状況



堀状遺構断面

(23) 八木沢駒込 I 遺跡
やぎさわこまごめ

所 在 地 宮古市大字八木沢第8地割字駒込7-2ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事 業 名 三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業
発掘調査期間 平成20年9月16日～10月29日
調査終了面積 1,600m²
調査担当者 丸山直美・鈴木博之
主要な時代 繩文・近世

遺跡の立地

本遺跡はJR山田線磯駒駅の南西約3.4kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川の西岸に立地している。調査区は西から東方向へ延びる山地の谷部と、八木沢川支流によって形成された低地面からなる。標高は29～32mを測る。

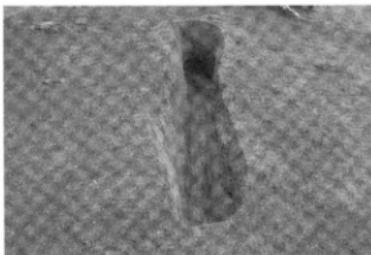
調査の概要

検出された遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構1基、近世の土坑（炭窯の可能性あり）1基、焼土遺構1基、畑跡3面、道路状遺構1条である。遺物は縄文土器、石器、陶磁器、鉄製品などが小コンテナで1箱出土している。

調査の結果、西半部は縄文時代の狩場として、東半部の旧河道および自然堤防上は主に近世以降の畑作耕地として利用されていることが判明した。



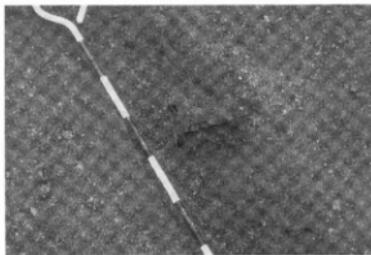
調査区全景



陥し穴状遺構完掘



近世以降の畑跡検出状況



畑跡歓間鉄製品（船釘）出土状況

(24) 八木沢駒込Ⅱ遺跡 第2次調査
やぎさわこまごめ

所 在 地 宮古市大字八木沢第8地割字駒込75-3 ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業
 発掘調査期間 平成20年11月4日～11月27日
 調査終了面積 2,800m²
 調査担当者 阿部勝則・菅野 梢
 主要な時代 縄文・古代

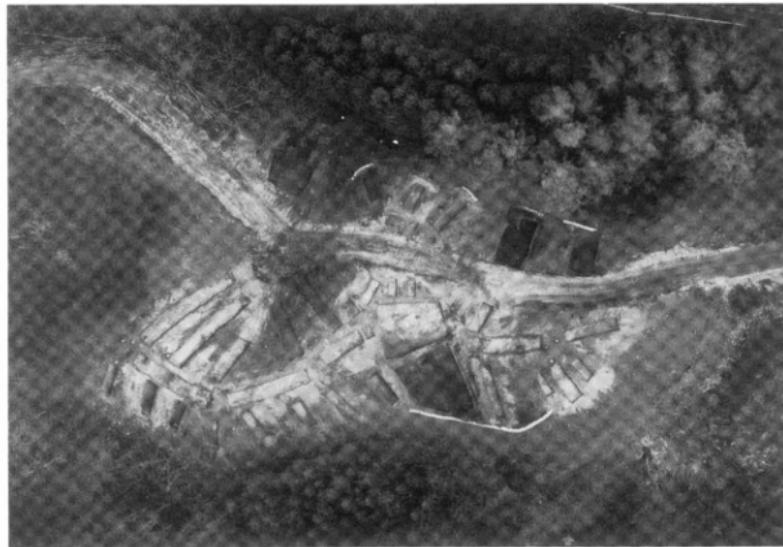
遺跡の立地

本遺跡は、JR山田線磯鶴駅の南西約3.8kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸に立地する。昨年度、遺跡の北端部を調査しており、今年度は第2次調査となる。今回の調査区は遺跡の中央部にあたる。調査区の微地形は、尾根部と東谷部・西谷部に分かれる。北側から南東方向に延びる尾根の西側に一つ、東側に二つの谷が入る。標高は46～63mを測る。現況は山林であった。

調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、土坑1基である。出土遺物がないため、時期は不明である。
 出上した遺物は、縄文土器が少量、銅製の和鏡・飾金具が各1点である。縄文土器は西谷部、和鏡・飾金具は尾根部の試掘時に出土したものであり、遺構に伴うものではなかった。

調査は、次年度も引き続き行われる予定であり、今後の調査が期待される。



調査区全景（西から）

(25) 八木沢Ⅱ遺跡 第2次調査

所 在 地 宮古市大字八木沢第3地割字中村153ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業
 発掘調査期間 平成20年4月8日～7月15日
 調査終了面積 7,000m²
 調査担当者 阿部勝則・菅野 梢
 主要な時代 縄文・古代

遺跡の立地

本遺跡は、JR山田線磯鶴駅の南西約3kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸の山地に立地する。昨年度、遺跡の北側を調査しており、今年度は第2次調査となる。今回の調査区は遺跡の南側にある。調査区の微地形は、西部にある山地から連なる尾根部と、その北側・南側にある八木沢川の支流によって形成された低地からなる。標高は約28～48mを測る。現況は、尾根部と南側谷部は山林、北側谷部は畑地であった。本遺跡の南側には今年度調査を行った八木沢ラントノ沢Ⅱ遺跡が隣接している。

調査の概要

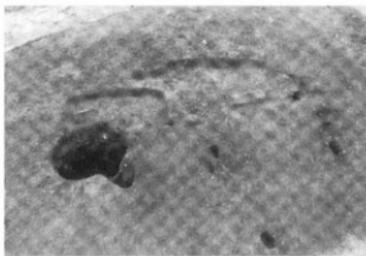
今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡2棟、陥し穴状遺構8基、炉跡3基、土器埋設遺構1基、古代の堅穴状遺構1棟、製炭土坑1基、銀冶炉6基、縄文時代のものを含む大型土坑9基、土坑37基などである。遺構の分布をみると、北側谷部では、西側の高位面に縄文時代晚期末葉、南東側の低位面に前期中頃と後期の遺物が分布し、遺構も確認された。北東側の低位面では、古代の生活面が確認された。南側谷部では、埋没沢に近接する緩斜面で遺構が確認されたが、遺構・遺物の量は少ない。

出土した遺物は縄文土器が大コンテナ3箱、石鎌、石匙などの石器類が42点、羽口などの上製品が6点、刀子、鋸鍤車などの鉄製品が16点、鐵滓が中コンテナ2箱、炭化材が38点などである。縄文土器は早期から晩期のものが出土している。

今回の調査では、縄文時代の集落および生業域、古代の鉄生産に関わる遺構・遺物が見つかり、時代によって土地利用のあり方が異なることが分かった。当時の生活や生業を考える上で良好な資料になると考えられる。



調査区全景（東から）



竪穴状遺構・製炭土坑・土坑平面（東から）

(26) 八木沢ラントノ沢Ⅱ遺跡

所 在 地 宮古市大字八木沢第3地割字中村89ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業
 発掘調査期間 平成20年7月16日～10月30日
 調査終了面積 5,023m²
 調査担当者 阿部勝則・菅野 梢
 主要な時代 縄文・古代

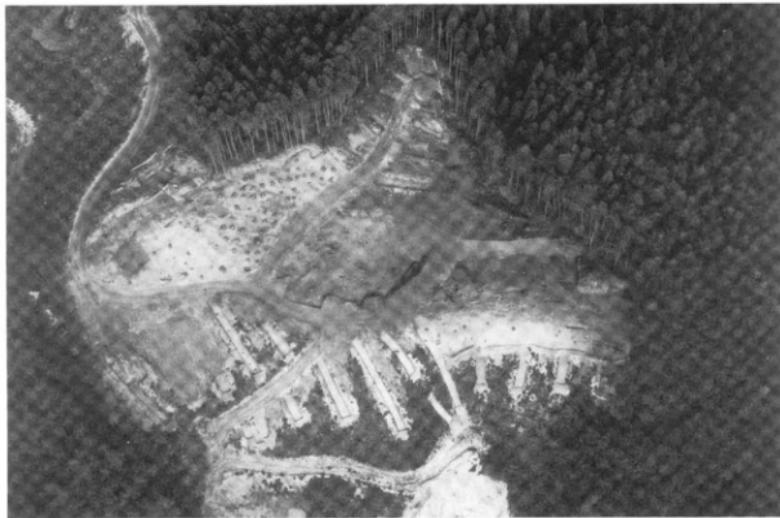
遺跡の立地

本遺跡は、JR山田線磯薙駅の南西約3kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸の山地に立地する。調査区の微地形は、尾根部と東谷部・南谷部に分かれる。標高は62～82mを測る。現況は山林であった。今回の調査区の北側には今年度調査を行った八木沢II遺跡、南側には昨年度調査を行った八木沢ラントノ沢I遺跡が隣接している。

調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代と推定される陥し穴状遺構5基、フラスコ状土坑1基、古代と推定される製炭土坑12基、時期不明の焼土遺構3基、土坑5基である。遺構の分布をみると、尾根頂部と、そこから南東方向に延びる南東尾根・北東方向に延びる北東尾根で確認された。

出土遺物は縄文土器が小コンテナ1箱、炭化材が大コンテナ3箱などである。縄文土器は中期の円筒上層式のものなどが出土している。



調査区全景（南から）

(27) かくれざと
隠里Ⅷ遺跡

所 在 地 宮古市大字松山第8地割地内
委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事 業 名 三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業
発掘調査期間 平成20年4月15日～8月31日
調査終了面積 9,000m²
調査担当者 丸山直美・鈴木博之
主要な時代 繩文・奈良



遺跡の立地

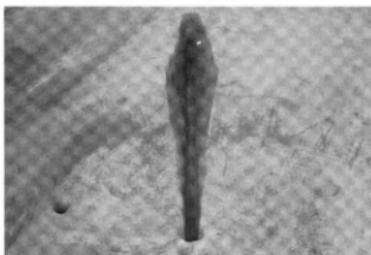
本遺跡はJR山田線礫駒駅の南西約3.2kmに位置し、閉伊川南岸の小起伏山地に立地する。調査区はこのうち東西方向へ樹枝状に延びる山地の尾根部とその間の谷部の9,000m²である。標高は尾根部の最高位で77m前後、谷部の最低位で41m前後を測る。

調査の概要

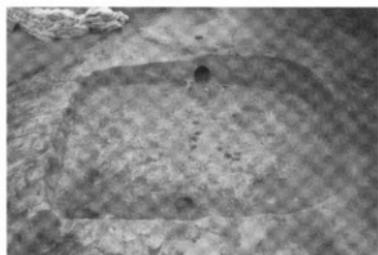
今回検出された遺構は、繩文時代の炉跡1基、陥し穴状遺構6基、奈良時代の堅穴住居4棟、時期不明の土坑5基、焼土遺構1基、道路状遺構1条で、大部分が南向き斜面～尾根頂部の標高50～67mの地点に立地する。出土遺物は繩文土器、弥生土器、石器、土師器、須恵器、鉄製品、炭化種子（イネ、オオムギ、キビほか）など、総量で大コンテナ5箱である。



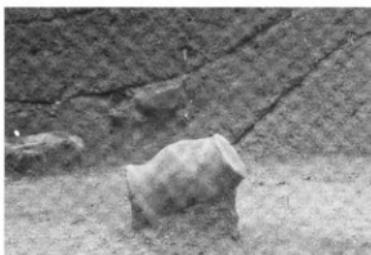
調査区全景



陥し穴状遺構



奈良時代の堅穴住居



土器出土状況（土師器壺）

(28) 向中野館遺跡 第10次調査

所 在 地	盛岡市飯岡新田2地割133-2ほか
委 託 者	盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事 業 名	盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間	平成20年5月1日～11月10日
調査終了面積	2,916m ²
調査担当者	金子佐知子・本多準一郎・小椋勇紀
主要な時代	奈良・平安・中世

遺跡の立地

本遺跡は、盛岡市の南、JR東北本線仙北町駅から南西に約1.2kmに位置する。遺跡は零石川の形成した自然堤防上に位置する。標高は122m前後である。

調査の概要

今回は南館と呼ばれている地点の調査を行った。遺構は、曲輪1箇所、堀2条、土塁1条、堅穴住居跡15棟、掘立柱建物跡3棟、柱穴列1条、土坑29基、堅穴状遺構2基、焼土遺構5基、近世墓壙4基、柱穴状上坑多数、溝跡1条、旧河道1条が検出された。遺物は、土師器・須恵器が大コンテナ8箱、永楽通寶、洪武通寶各1点などである。

中世と考えられる構造は、曲輪、堀、土塁、堅穴住居跡1棟で、柱穴状土坑は多数検出されているが、時期が不明のうえ、規則的に並ばないものがほとんどである。堀は曲輪の西辺と北辺の一部、東辺から検出された。調査区北側を東流する湿地状の旧河道も防護施設として利用していたと思われ、北側の堀はごく短い。曲輪はさらに調査区南側へ広がっている。中世の遺構、遺物は少ない。

平安時代の集落は南側の細谷地跡から続いている。調査区周辺では以前から掘立柱建物跡が多く検出されていたが、今回も第11次と併せて3棟が検出され、盛南地区の他の集落とは異なる様相を見せており、また、旧河道から墨書き土器・刻書き土器を含む土師器・須恵器が多く出土した。



調査区全景

(29) 向中野館遺跡 第11次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田2地割71ほか
委 託 者 独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所
事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間 平成20年4月11日～11月10日
調査終了面積 615m²
調査担当者 金子佐知子・小椋勇紀
主要な時代 平安・中世

遺跡の立地

本遺跡は、盛岡市の南に位置し、零石川の形成した自然堤防上に位置する。標高は122m前後である。

調査の概要

今回は南館と呼ばれている地点の調査で第10次調査区と隣接している。検出された遺構は、曲輪1箇所、土塁1条、旧河道1条（以上第10次と共に）、竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡2棟、土坑17基、竪穴状遺構1基、近世墓壙7基、溝跡1条、柱穴状土坑多数である。中世と考えられる遺構は曲輪と土塁で、そのほかは、平安時代の遺構と近世の墓壙群である。遺物は、上師器・須恵器が大コンテナで2箱である。

中世の曲輪の北辺は直線的に削平したと見られ、自然堤防縁辺部にまで分布する平安時代の住居跡が削られている。曲輪の北辺と西辺に土塁が残っているが、北辺は近世において草地として利用され、削平されている。平安時代の集落は竪穴住居跡のほか、焼成土坑や2間×2間の掘立柱建物跡2棟が検出された。



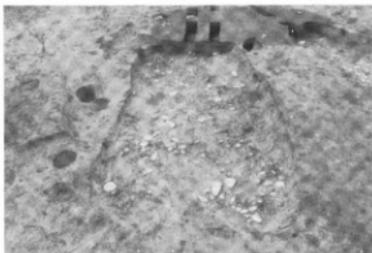
土塁（中世）



竪穴住居跡（平安時代）



掘立柱建物跡（平安時代）



土坑（平安時代）

(30) 細谷地遺跡 第19次調査

所 在 地 盛岡市向中野字野原9-6ほか
 委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業
 発掘調査期間 平成20年7月16日～10月7日
 調査終了面積 1,046m²
 調査担当者 木戸口俊子・金子昭彦
 主要な時代 平安

遺跡の立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北駅から南西へ約1.3kmに位置し、零石川右岸に形成された河岸段丘上に立地している。調査区は遺跡の中央やや北寄りにあり、標高は約122m、調査前はガソリンスタンドだった。本調査区の南側に旧沢跡が東西に延びているが、これまでの調査された遺跡全体の遺構検出の傾向として、旧沢跡周辺では遺構が希薄になりつつあり、本調査区でも同傾向であることがわかった。

調査の概要

今回の調査では、古代の遺構として、竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡2棟、土坑8基、柱穴状土坑2個、旧沢跡1箇所（20次と重複）、近世の遺構として、土坑6基が検出されている他、時期不明であるが土坑1基、溝1条が検出されている。遺物は、土師器および須恵器片中コンテナ1箱、近世陶磁器数点と少ない。

竪穴住居跡や掘立柱建物跡は、当該調査区の西側で昨年度行われた調査で検出された遺構（竪穴住居跡および掘立柱建物跡）の延長上に検出している。当遺跡では、竪穴住居跡のカマドは東西に作られることが多いが、検出した2棟の竪穴住居跡のカマドはいずれも南北方向に作られている。北側の竪穴住居跡は、1辺1.8m（上端）と小さい住居で、カマドを北側から北東角隅に作り替えている。南側の住居跡も、南側カマドから北側カマドへと作り替えが行われているが、最初のカマドの燃焼部から出土した土器と、北側の住居跡の床に置かれた（敷かれた）土器と同一個体であることは、興味深い。これらの住居跡は、ほぼ軸を同じくし南北に並んで検出しているが、同様の軸を持つ掘立柱建物跡も南北に2棟並んで検出されている。この掘立柱建物跡は、2間×2間の総柱の建物で、掘り方は方形を呈している。北側にある1棟の規模は3m70cm、間尺は約150～160cm（5尺～5尺3寸）、柱穴の大きさは50cm～70cmである。中央の柱穴状土坑はやや浅いが、その他の深さは40cm前後、全てではないが25cm～30cmの柱あたりを確認できたものもあった。南側にあるもう1棟はやや規模は大きいが、ほぼ同じ状況である。



掘立柱建物跡



掘立柱建物跡 柱穴断面

(31) 細谷地遺跡 第20次調査

所 在 地 盛岡市向中野字野原 9-6 ほか
 委 託 者 独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所
 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業
 発掘調査期間 平成20年8月1日～10月7日
 調査終了面積 856m²
 調査担当者 木戸口俊子・金子昭彦
 主要な時代 平安

遺跡の立地

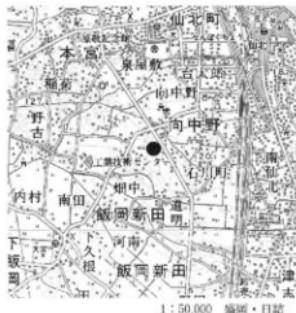
遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北駅から南西へ約1.3kmに位置し、零石川右岸に形成された河岸段丘上に立地している。調査区は遺跡の中央やや北寄りにあり、標高は約122m、調査前はガソリンスタンドだった。本調査区の南側に旧沢跡が東西に延びているが、これまでの調査された遺跡全体の遺構突出の傾向として、旧沢跡周辺では遺構が希薄になりつつあり、本調査区でも同傾向であることがわかった。

調査の概要

今回の調査では、古代の遺構として、竪穴住居跡5棟、土坑8基、畝間状遺構3箇所、柱穴状土坑20個、旧沢跡1箇所（19次と重複）、近世の遺構として、土坑7基が検出されている他、時期不明であるが土坑6基、焼土1基、柱穴状土坑8個が検出されている。遺物は、土師器および須恵器片中コンテナ1箱、近世陶磁器数点と少ないが、「十」「乍？」などと見られる墨書きのある土師器の壊も数点出土している。

調査区中央では広範囲の搅乱があり、今回検出した竪穴住居跡も搅乱の影響を受け、全容の不明なものが多い。5棟のうち4棟は第19次調査で見つかった住居跡と規模が似ているが、最東で検出され3分の2が現道下に延びている1棟は、今回の調査で最も大きい住居跡で、確認できた規模は1辺が5m70cmである。この住居からは、今回最も多くの遺物が出土しており高台のついた内黒の壊や上述した「乍？」の墨書き土器が出土している。この住居周辺では土坑や柱穴状土坑も検出している。第19次調査区で検出された掘立柱建物跡の柱穴状土坑と類似した方形の掘り方を持つ柱穴状土坑（2個）も見つかっている。

3箇所の畝間状遺構は、昨年度の調査区から延びる旧沢跡の検出上面で見つかっている。これらの遺構は、いずれも白色火山灰を筋状に含んでいるもので、1箇所は東西方向に、もう2箇所は南北方向の軸をとっている。また、この畝間状遺構の下から竪穴住居跡1棟が検出している。煙出し部分や南側などは搅乱の影響で詳細は不明だが、燃焼部や東隅壁の張り出し部分から数個体の土師器の壊も出土している。



1:50,000 盛岡・日誌



遺跡全景（右が北）



畝間状遺構検出状況

(32) 矢盛遺跡 第18次調査

所 在 地 盛岡市向中野字野原50-3ほか
 委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業
 発掘調査期間 平成20年5月16日～11月6日
 調査終了面積 7,877m²
 調査担当者 金子昭彦・木戸口俊子
 主要な時代 繩文・平安

遺跡の立地

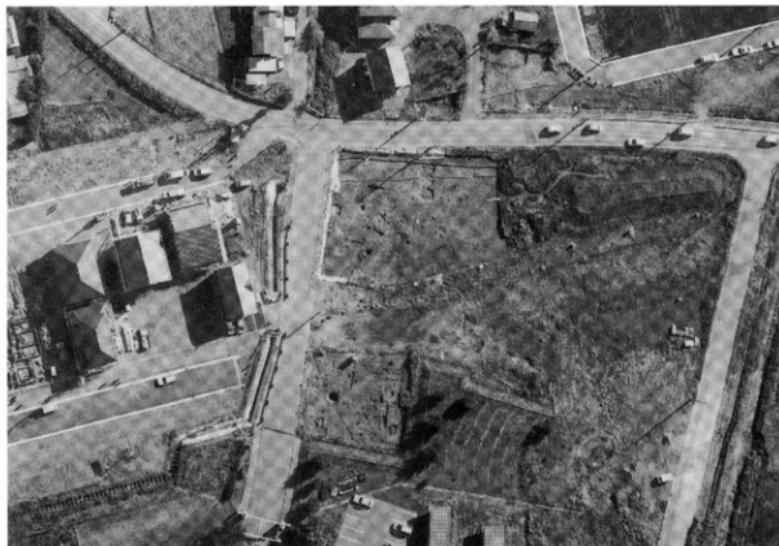
遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南に約3km、仙北町駅から南西約1.8kmに位置し、零石川によって形成された沖積段丘上および周囲の旧河道に立地する。標高は122m前後である。

調査の概要

調査区は八箇所に分かれるが、写真は遺構が検出された五箇所のうち三箇所である。遺構は、縄文時代のラスコ状土坑1基、陥り穴状遺構1基、平安時代の竪穴住居跡2棟、土坑3基、古代以降の井戸跡2基、土坑3基、溝跡5条（古代2条？）、近世以降の掘立柱建物跡2棟、墓壙2基、土坑2基、柱穴状土坑21個検出された。出土遺物は、石鎌2点、平安時代の土師器・須恵器片小コンテナ約1箱、斐伊羽口1片、鐵鎌1点、近世末～近代陶磁器片、錢貨2点（寛永通宝）などである。



1:50,000 盛岡・日誌



縄文、平安時代の遺構が検出された調査区（上が東）

(33) 矢盛遺跡 第19次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田4地割2ほか
委 託 者 独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所
事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間 平成20年4月16日～9月15日
調査終了面積 494m²
調査担当者 金子佐知子・金子昭彦・木戸口俊子
主要な時代 中・近世

遺跡の立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南に約3km、仙北町駅から南西約1.8kmに位置し、零石川によって形成された冲積段丘上および周囲の旧河道に立地する。標高は122m前後である。

調査の概要

調査区は三箇所に分かれるが、遺構・遺物が発見されたのは一箇所だけである。検出遺構は、掘立柱建物跡2棟、カマド状遺構4基、墓壙10基、土坑6基、柱穴状土坑1個、溝跡4条で、カマド状遺構、土坑1基が中世末あたり、溝跡3条がそれ以前であるほかは、いずれも近世末～近代で、隣接する今の民家に関係するものであろう。遺物は、近世末～近代の陶磁器を中心で、小コンテナ1箱弱、他に、平安時代の土師器・須恵器十数片、錢貨數点（寛永通宝）、鉄鍋1点、キセル1点などがある。



遺構が検出された調査区

(34) 戸仲遺跡 第3次調査

所 在 地 盛岡市川日第4地割51-3ほか
 委 託 者 盛岡地方振興局土木部築川ダム建設事務所
 事 業 名 一般国道106号築川道路起点部改良工事
 発掘調査期間 平成20年4月11日～6月17日
 調査終了面積 1,500m²
 調査担当者 丸山浩治・菅野紀子
 主要な時代 繩文

遺跡の立地

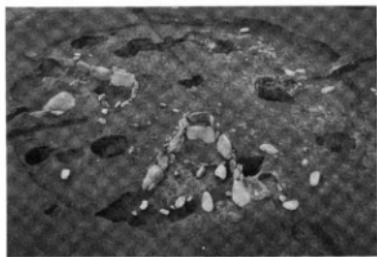
本遺跡は、JR東北本線盛岡駅の南東約8.7kmに位置し、北上川の支流である築川によって形成された河岸段丘上に立地する。標高は190m前後である。現況は水田・畑地・原野である。当センターによって平成18・19年の2度の発掘調査が行われており、縄文時代後期後葉～晩期中葉の配石造構などが検出されている。調査地点は、いずれも今次調査区の北西に位置する。

調査の概要

今次調査区は、国道106号南側の法面下から築川右岸にあたり、国道106号と築川にはさまれた河岸段丘上の端（上段部分）と旧河道部分（下段部分）に分けられる。上段部分では、縄文時代の竪穴住居8棟、土坑6基、陥り穴状造構19基、焼土4基、配石造構2基、集石造構1基、埋設土器造構1基、柱穴状土坑10個を検出した。竪穴住居は、複式炉を有する縄文時代中期後葉～末葉のもので、円形を呈し、規模は径3～7mを測る。なお、下段部分には縄文時代の造構は存在しない。竪穴住居の一部が段丘崖で切れていることから、その後の築川の浸食作用によって消失したものと考えられる。近世以前には陸地化していたようで、近世以降の溝1条を検出した。

出土遺物は、縄文土器大コンテナ7箱、石器中コンテナ15箱（大半が礫石器）、土製品（斧状土製品・土器片円板・土偶）6点、石製品（石棒）2点、須恵器1点、陶器1点、錢貨1点などである。縄文土器は、中期後葉～末葉が主体であるが、早期・前期・後期・晩期の土器も少量出土している。

今回の調査により、築川に極めて近い地点に縄文時代中期後葉～末葉の集落が存在することが明らかとなった。第1・2次調査区において該期の造構はほとんど検出されていない。いっぽうで今次調査区には縄文時代後～晩期の造構が存在しない。時期による選地の違いを示す事象と考えられる。



縄文時代の竪穴住居



現地公開のようす

(35) 中村城跡

所 在 地 一関市花泉町老松字寺田320ほか
 委 託 者 県南広域振興局一関総合支局土木部
 事 業 名 一般国道342号花泉バイパス道路改築事業
 発掘調査期間 平成20年5月1日～11月6日
 調査終了面積 5,893m²
 調査担当者 北田 眞・佐藤あゆみ
 主要な時代 平安・中世

遺跡の立地

中村城跡は、一関市役所花泉支所の北東約0.6kmに位置し、金流川東岸の微高地に立地している。現況は水田である。調査区は北西から南東方向の直線上に約500mの範囲にあり、北西端は飛び地となっている。標高は22～23m前後である。

調査の概要

今回の調査で検出した遺構は、平安時代の竪穴住居跡1棟・土坑1基・水田跡2地点×1・2面(6区画300・150m²)・炉跡1基・溝跡5条・旧河道4箇所(うち1箇所に土器捨て場)、中世の堀跡1条・橋跡2基・溝跡7条・土坑1基・柵状遺構1基・杭多数、近世以降の溝跡8条・土坑4基・杭多数である。遺物は平安時代の土器大コンテナ11箱・土錘5点・鉄鏃2点・木製品2点、中世の陶磁器小コンテナ0.5箱・埴輪1点・板碑2点(うち1点に延文5年銘)を含む石製品7点・銭貨25点・漆椀や曲物、下駄などの木製品約60点・杭や柱多量、近世以降の陶磁器小コンテナ1箱・蹄鉄や煙管など金属製品小コンテナ1箱・杭多量、自然遺物(種実中コンテナ1箱・獸骨少量)が出土した。

調査区は調査の進行上、便宜的に北区・中央区・南区の3つに区分している。北区は竪穴住居跡や旧河道(土器捨て場)などが検出されており、平安時代の遺構が集中する。中央区は北側に平安時代の水田跡4区画300m²があり、十和田aテフラ直下の田面には人や牛馬の足跡、耕作痕が残っていた。南側には南北に走る旧河道がある。南区は中世を中心とする区域で、幅7m・深さ1.5mの堀跡で囲まれた内部に幅2m・深さ1.5mの大溝が4条見つかっている。堀跡は一部途切れる箇所があり、土橋跡と考えられる。これら中世の遺構は中村城跡に関連する可能性がある。他に平安時代の水田跡2区画150m²(2面)が検出されている。



平安時代の水田跡



中世の柵状遺構

(36) 子飼沢 II 遺跡

所 在 地 気仙郡住田町世田米字子飼沢1-3ほか
 委 託 者 大船渡地方振興局土木部津付ダム建設事務所
 事 業 名 津付ダム建設事業
 発掘調査期間 平成20年8月19日～11月27日
 調査終了面積 8,255m²
 調査担当者 星 雅之・須原 拓・小林弘卓・田中美穂
 主要な時代 繩文・弥生・近代

遺跡の立地

本遺跡は、住田町役場の西約15km、種山高原の東約5kmの位置にあり、大股川右岸の河岸段丘に立地する。現況は棚田で標高は337～370mである。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1棟、配石1基、焼土2基、フラスコ状ピット39基、土坑1基、遺物包含層区1箇所、近代の炉跡?2基、炭窯?1基、拌滓場1箇所、溝跡1条、不明遺跡3基、土坑4基である。出土遺物は、土器（縄文時代早期～晚期・弥生時代前期）大コンテナ6箱分、石器類大コンテナ10箱分、鉄滓・羽口・炉壁合わせて大コンテナ180箱分以上が出土した。

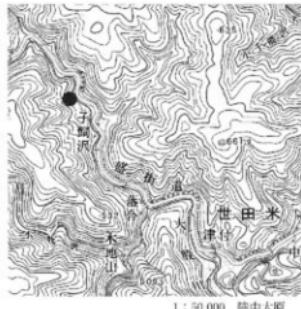
調査の結果、縄文時代早期～晚期・弥生時代・近代の鉄生産遺跡であることがわかった。特記事項としては、以下の①～④が挙げられる。

①縄文時代早期後葉の土器がTo-Cu下位の土層から層位的に良好な状態で出土した。これらの土器群は、外面に細縦起線文、内面に貝殻条痕文を伴う櫻木I式に相当するもので、放射性炭素年代測定の結果から7,500yrBP前後の年代を得られている。

②縄文時代中期末葉を主体とするフラスコピットを多数検出した。これらは平坦な地形部分ではなく、斜面地に作られており、その空間占地は比較的広範囲にある。

③縄文時代後期の竪穴住居跡・焼土・配石が検出され、該期に小規模な集落が形成されていたと考えられる。

④近代と推定される鉄生産に関連する遺構として、炉跡?・炭窯?・拌滓場・溝跡・不明遺構などが検出された。個々の鉄滓を観察した限りでは、この遺跡においては製鉄炉ではなく精錬炉が操業されていた可能性が高い。これら鉄生産関連遺構の時期は、来年度の調査で明らかにしたい。



調査区全景（北西から）

(37) 松山大地田沢遺跡

所 在 地 宮古市大字松山第7地割大地田沢112-64ほか
委 託 者 岩手県宮古地方振興局土木部
事 業 名 道路改良事業一般国道106号宮古西道路松山地区
発掘調査期間 平成20年7月1日～9月12日
調査終了面積 1,790m²
調査担当者 丸山直美・鈴木博之
主要な時代 奈良・平安

遺跡の立地

本遺跡はJR山田線磯駒駅の南西約3.5kmに位置し、閉伊川南岸の小起伏山地に立地する。調査区はこのうち北側へ延びる丘陵の尾根部および谷部の1,790m²である。標高は37～44m前後を測る。

調査の概要

今回検出された遺構は、古代の竪穴住居7棟、掘立柱建物1棟、門跡？1基、炭窯2基、土坑10基、炉跡3基、焼土遺構1基、遺物集中区2箇所である。

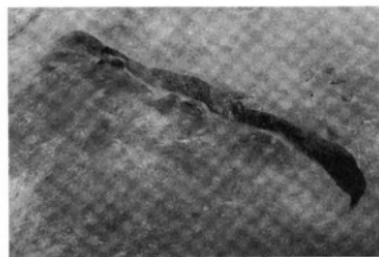
遺物は土師器、須恵器、鉄製品、炭化種子（イネ、オオムギ、コムギほか）など、総量で大コンテナ8箱が出上している。



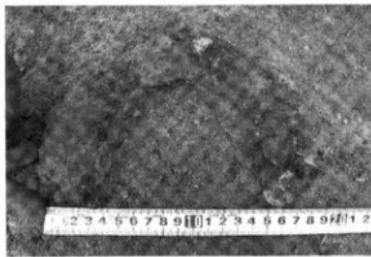
調査区全景



奈良時代の竪穴住居



古代の炭窯



鉄製品出土状況（鋤先）

(38) 下川原 I 遺跡

所 在 地 紫波郡紫波町南日詰字八坂47-2 ほか
 委 託 者 盛岡地方振興局農政部農村整備室
 事 業 名 経営体育成基盤整備事業南日詰地区
 発掘調査期間 平成20年4月10日～11月21日
 調査終了面積 6,693m²
 調査担当者 川又 晋・八重畠ちか子
 主要な時代 繩文・平安・中世

遺跡の立地

下川原 I 遺跡は、JR東北本線日詰駅の南東約2.5km、北上川西岸の河岸段丘上に立地する。調査前の状況は水田で、標高は90m前後である。平成19年度に遺跡の北側部分を調査している。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代の陥し穴17基、平安時代の竪穴住居7棟、竪穴住居状遺構3基、土坑30基、溝跡33条、焼土遺構12基、柱穴状土坑815個、歎間状遺構1箇所、遺物包含層30m²である。遺物は、縄文土器小コンテナ0.5箱、石鎚2点、土師器・須恵器大コンテナ5箱、鉄製品8点、12世紀のかわらけ中コンテナ1箱、陶磁器13点、寛永通寶4点が出土した。

調査区中央では大形の竪穴住居群が確認され、調査区南側の柱穴・溝では12世紀のかわらけ・陶磁器類が出土している。



1 : 50,000 日詰



下川原 I・II 遺跡と周辺（南から）

(39) 下川原Ⅱ遺跡

所 在 地 紫波郡紫波町南口詰字下川原118-3 ほか
委 託 者 盛岡地方振興局農政部農村整備室
事 業 名 経営体育成基盤整備事業南口詰地区
発掘調査期間 平成20年4月10日～11月21日
調査終了面積 11,354m²
調査担当者 川又 晋・八重畠ちか子・小林弘卓
主要な時代 繩文・平安・中世

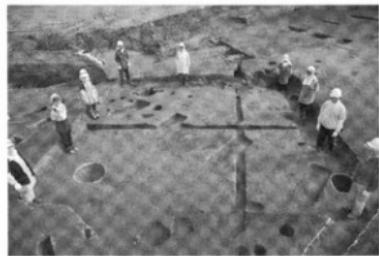
遺跡の立地

下川原Ⅱ遺跡は、JR東北本線日詰駅の南東約2.5km、北上川西岸の河岸段丘上に立地する。調査前の状況は水田で、標高は90m前後である。平成3年度に遺跡の南西部部分を調査している。下川原Ⅱ遺跡の北側には下川原Ⅰ遺跡が隣接する。

調査の概要

検出構造は、縄文時代の陥し穴25基、平安時代の堅穴住居5棟、堅穴住居状遺構4基、土坑21基、井戸1基、溝跡14条、焼上遺構2基、土器埋設遺構1基、柱穴状土坑133個である。遺物は、土師器・須恵器大コンテナ2箱、縄文土器小コンテナ0.5箱、かわらけ小コンテナ1箱、鉄製品8点が出上した。

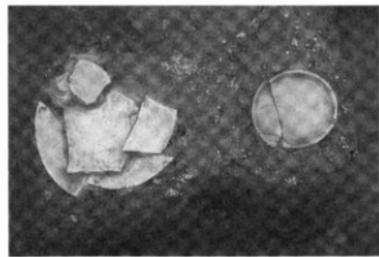
調査区南端にある土坑で、12世紀のかわらけが出土した。下川原Ⅰ・Ⅱ遺跡とともに12世紀の遺構・遺物が確認されたことから、北西に位置する比爪館跡との関連が注目される。



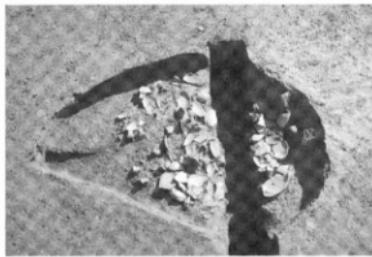
平安時代の堅穴住居（下川原Ⅰ）



石組みのカマド（下川原Ⅰ）



溝から出土したかわらけ（下川原Ⅰ）



かわらけが出土した土坑（下川原Ⅱ）

(40) さくやしき
作屋敷遺跡

所 在 地 奥州市胆沢区南都田字作屋敷487ほか
 委 託 者 県南広域振興局農林部農村整備室
 事 業 名 経営体育成基盤整備事業都島地区
 発掘調査期間 平成20年6月9日～8月12日
 調査終了面積 2,044m²
 調査担当者 星 雅之・田中美穂
 主要な時代 平安

遺跡の立地

本遺跡は、JR東北本線水沢駅の西約6km、胆沢総合支所（旧胆沢町役場）から北約2kmの位置にあり、遺跡の北約2.5kmには胆沢川が西～東に向かい流れ、胆沢川沿いには胆沢扇状地が広がる。本遺跡はこの胆沢扇状地内の水沢段丘高位に立地する。現況は水田で、標高は約92～96mである。

調査の概要

今回の調査で検出した遺構は、縄文時代の陥し穴2基、平安時代堅穴住居跡7棟、掘立建物跡1棟、堅穴状遺構1基、土坑20基、溝跡19条、焼土遺構2基、柱穴状土坑265個、近世の溝跡1条、近世～現代の溝跡1条、現代の土坑1基である。

出土遺物は、土師器中コンテナで7.5箱、綠釉陶器1点、灰釉陶器1点、石器0.5箱、陶磁器10点、鉄製品5点、鉄滓数点が出土した。

今回の調査の結果、出土した土師器の年代や十和田a火山灰のあり方から、9世紀後半～10世紀前半を中心とする集落跡であることが分かった。



調査区全景（南から）

(41) 牡丹野遺跡

所 在 地 奥州市胆沢区南都田字国分371ほか
委 託 者 県南広域振興局農林部農村整備室
事 業 名 経営体育成基盤整備事業都鳥地区
発掘調査期間 平成20年4月10日～6月12日
調査終了面積 2,698m²
調査担当者 星 雅之・田中美穂
主要な時代 平安

遺跡の立地

本遺跡は、JR東北本線水沢駅の西約5km、胆沢総合支所（旧胆沢町役場）から北約2kmの位置にあり、胆沢扇状地水沢段丘高位に立地する。現況は水田で、標高は90～92mである。

調査の概要

今回の調査で検出した遺構は、平安時代堅穴住居跡2棟、堅穴状遺構1基、土坑4基、溝跡3条、柱穴状土坑32個、旧河道2条、時期不明の溝1条、現代の旧河道2条である。

出土遺物は、弥生土器少量、土師器が大コンテナ1、陶磁器57点、石器7点、チップ・フレイク少量が出土した。

今回の調査の結果、平安時代の集落跡の一端が明らかとなつたが、昭和20年代後半に実施された耕地整理に伴い、削平を受ける部分が多く、遺構・遺物ともに予想を下回る遺存状態にあった。

堅穴住居跡の年代は、出土土器や重複関係にある土坑の埋土より十和田a火山灰が検出されている状況から、9～10世紀と推定される。また、旧河道からは平安時代の土師器と弥生土器が少量出土し、埋没時期は古代と考えられる。当時の旧地形の復元を推定する上で、貴重な資料と考えられる。



調査区全景（南から）

(42) 尼坂遺跡

所 在 地 奥州市胆沢区南都田字国分370-1ほか

委 託 者 県南広域振興局農林部農村整備室

事 業 名 経営体育成基盤整備事業都鳥地区

発掘調査期間 平成20年5月1日～5月15日

調査終了面積 322m²

調査担当者 星 雅之・田中美徳

主要な時代 近世

遺跡の立地

本遺跡は、JR東北本線水沢駅の西約5km、胆沢総合支所（旧胆沢町役場）から北約2kmの位置にあり、胆沢局状地水沢段丘高位に立地する。現況は水田で、標高は90～92mである。

調査の概要

今回の調査区は、幅1.5m、長さ約300mにわたって実施された。また、隣接する牡丹野遺跡とは遺跡境は明確ではない。

調査の結果、遺構は検出されず、遺物も近世～現代と考えられる陶磁器片5片のみであった。今回の調査地は、昭和20年代後半に実施された水田の耕地整理に伴い、大規模に削平を受けている。また、周知されている尼坂遺跡は、胆沢町教育委員会により過去4回の調査が行われ、縄文時代早期～前期を中心とする遺構・遺物が検出されているが、その調査地は今回より3～5m高位にある福原段丘に相当する。今回の調査地は、福原段丘より一段低い水沢段丘高位に立地しているので、遺構が検出されなかった可能性も考えられる。



調査区全景（南から）

(43) 合野遺跡

所 在 地 奥州市前沢区白山字合野4-1ほか
 委 託 者 県南広域振興局農林部農村整備室
 事 業 名 経営体育成基盤整備事業白山地区
 発掘調査期間 平成20年4月10日～6月30日
 調査終了面積 4,275m²
 調査担当者 菊池昌彦・杉沢昭太郎
 主要な時代 縄文（晩期）・平安・近世

遺跡の立地

本遺跡は、北上川西岸、河岸低地の自然堤防上に立地している。標高は31m～32mで、現況は水田や畠である。東側に道上遺跡、南東側から南側にかけて小林繁長や白山上野の両遺跡があり、周辺一帯は縄文時代から近世に至るまでの生活痕跡が見られる。合野遺跡は昨年度も調査を行ったが、今回の調査区はその南側に位置する。

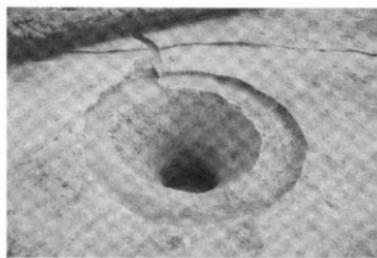
調査の概要

検出遺構は掘立柱建物跡4棟（平安～近世）、井戸4基（平安～近世）、円形周溝1条（不明）、土抗23基（縄文～）、溝22条（平安～）、陥し穴状遺構1基（縄文）、焼土遺構4基、柱穴状土抗384個である。北側の調査区では、柱穴が並ぶ形状から神社等の祠（ほこら）と推測される掘立柱建物が確認された。井戸は上部外周の直径が3mほどになるものもあり、その埋土からは須恵器片が出土した。平安時代のものと思われる。焼土は竪穴住居に伴うカマド跡の可能性もあるが、水田造成時に上部が削られたものとみられ、竪穴住居跡は確認できなかった。出土遺物は縄文土器（晩期）、土師器、須恵器が中コンテナ2箱、剥片、陶器片が小コンテナ1箱、石臼1個である。

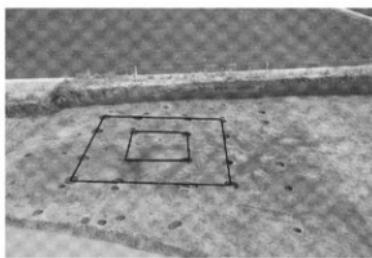
土器の出土状況や遺構の検出状況から判断すると、この周辺は縄文時代の狩り場や居住域、古代から近世にかけての居住域だった可能性が高いと言える。



1:50,000 水沢



平安時代の井戸



近世の祠と思われる掘立柱建物

(44) 小林繁長遺跡

所 在 地 奥州市前沢区白山字小林85-1 ほか
 委 託 者 県南広域振興局農林部農村整備室
 事 業 名 経営体育成基盤整備事業白山地区
 発掘調査期間 平成20年7月1日～11月7日
 調査終了面積 3,997m²
 調査担当者 杉沢昭太郎・菊池昌彦
 主要な時代 繩文

遺跡の立地

本遺跡は、奥州市立白山小学校の北及び西側、北上川西岸の自然堤防上に立地する。標高は29m前後で調査前の現況は水田・道路である。昭和61年度の前沢町教育委員会による発掘調査では、縄文時代（中期・晚期）、弥生時代前期の土器が出土している。前年度の当センター調査では近世の掘立柱建物が1棟検出されている。

調査の概要

今回の調査では、縄文時代中期の住居（石囲炉のみ）1棟・住居状造構1棟・捨て場2箇所・土坑2基・焼土1基、弥生時代の土坑1基、近世の掘立柱建物1棟・井戸1基・炉1基、時期不明の土坑10基・焼土1基、溝8条、柱穴約40個が検出された。縄文時代の捨て場は遺跡西側（中期中葉主体）と北側（中期初頭～中葉が主体で晚期の土器も微量だが出土）にあり、互いに距離が離れているためこれに伴うであろう集落も2地点に分かれてあると推測される。北側の捨て場は大規模でその内の48×10mを調査したが、さらに調査区外の東～南側へと続いている。居住城はこの捨て場の南側に展開すると考えられる。

出土遺物は、縄文土器（中期・晚期）大コンテナ30箱、石器類が大コンテナ3箱、弥生土器は小コンテナ1箱、土製品1点、石製品1点、平安時代の土師器・須恵器が5片、中世末～近世初頭の陶器2点、羽口數点である。



北側捨て場近景

(45) 下中居 I・II 遺跡

所 在 地 花巻市大迫町外川目第28地割132-1ほか
委 托 者 県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室
事 業 名 中山間地域総合整備事業中居地区
発掘調査期間 平成20年7月1日～11月17日
調査終了面積 I : 3,490m² II : 560m² 計4,050m²
調査担当者 米田 寛・佐藤里恵
主要な時代 繩文・中世～近世

遺跡の立地

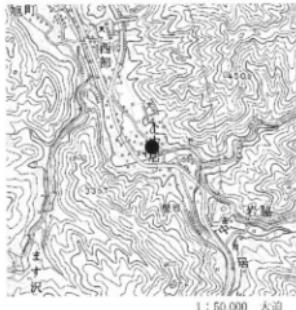
花巻市役所大迫総合支所から南東に約2kmの中居川東岸の河岸段丘上に位置する。標高は約172～189m、調査前の現況は水田である。

調査の概要

本調査区3,490m²、確認調査区560m²の合計4,050m²より検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡5棟、フ拉斯コ状土坑2基、焼土遺構2基、土坑16基、捨て場遺構約470m²、中世～近世の竪穴建物跡3棟、近世墓11基、採掘坑7基、ほかに時期不明の掘立柱建物跡2棟、柱穴列4列、溝跡2条、土坑14基、柱穴175個である。

遺物は、縄文土器大コンテナ43.5箱、剥片石器小コンテナ2箱、礫石器大コンテナ9箱、土偶5点、土製品5点のはかに、近世墓から近世人骨9体、キセル1点、銅鏡1点、寛永通宝5点、竪穴建物跡から永楽通宝1点が出土している。

縄文時代の集落は河岸段丘上の広い範囲に存在していたと考えられ、その崖下に捨て場遺構が形成されている。一方、中世～近世初頭の集落は旧道野街道沿いに見られる。また、近世墓域の存在は、近世期を通じて集落が営まれていたことを指すと考えられる。



調査区全景（南から）

(46) 舟渡Ⅰ遺跡 (県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室)

所 在 地 北上市更木6地割16ほか
 委 託 者 県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室
 事 業 名 経営体育成基盤整備事業更木新田地区
 発掘調査期間 平成20年4月9日～7月4日
 調査終了面積 7,150m²
 調査担当者 潤 浩二郎・吉田泰治
 主要な時代 繩文・弥生・古代

遺跡の立地

遺跡は北上市役所の北東約6.0kmに位置し、北上川東岸の微高地に立地する。遺跡の標高は66m前後で、調査前の現況は水田・宅地である。

調査の概要

本遺跡は平成12年に新規発見され、繩文・平安の散布地として周知されている。事業に先立って行われた県教育委員会による試掘調査でも、遺跡内に該当する時期の埋蔵文化財が確認されたため今回の調査が実施された。

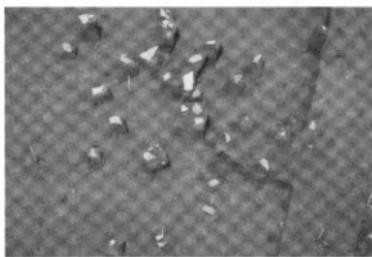
今回の調査は、本調査面積3,990m²、確認調査面積3,160m²である。

検出された遺構は溝6条・柱穴状土坑1個であり、このうち柱穴状土坑と溝1条は確認調査区内に位置し、溝5条は本調査区と確認調査区にまたがる。出土した遺物は繩文土器（後期～晚期）・石器・弥生土器・古代の土師器・須恵器・近世陶磁器合わせて大コンテナ1箱であり、遺物出土地点は旧沢跡の埋土や現堤防付近の旧河道縁部を中心とする。各地点で堆積状況が異なる点、單一の土層のみ着目しても様々な時期の遺物が出土する点等から、この地点で土砂の流入・堆積が比較的頻繁に繰り返され、その土砂に混じり原位置を移動した遺物がこの地点より出土しているものと思われる。この堆積状況に加え、遺構内から出土する遺物もなかったため、遺構が属する時期はいずれも不明である。

遺物が出土する以上、移動可能な程度の付近に遺物の属した時代の集落等が存在すると思われるが、遺跡面積の約5%にあたる今回の調査からは、遺跡の主体及びその性格は確認できなかった。



調査区全景（上が北東）



遺物出土状況

(47) 舟渡I遺跡 (県南広域振興局北上総合支局土木部)

所 在 地 北上市更木5地割79ほか
委 託 者 県南広域振興局北上総合支局土木部
事 業 名 緊急地方道路整備事業更木地区
発掘調査期間 平成20年6月2日・8月1日～8月12日
調査終了面積 453m²
調査担当者 溝 浩二郎・吉田泰治
主要な時代 繩文

遺跡の立地

遺跡は北上市役所の北東約6.0kmに位置し、北上川東岸の微高地に立地する。遺跡の標高は66m前後で、調査前の現況は水田である。

調査の概要

本遺跡は平成12年に新規発見され、繩文・平安の散布地として周知されている。事業に先立って行われた県教育委員会による試掘調査でも、遺跡内に該当する時期の埋蔵文化財が確認されたため今回の調査が実施された。

この調査区は、もともと登録されていた遺跡範囲より北に位置していたが、試掘の結果、繩文土器片が数点出土したため本調査を行うとした区域である。

今回の本調査では、繩文土器片がわずかに出土しただけで遺構は検出されなかった。隣接する県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室委託の調査区においても北に向かうに従って遺物の出土は減少しており、この調査区付近を遺跡の北限とした試掘結果を裏付ける調査結果となった。



調査区全景（上が北東）

(48) 戸桜遺跡

所 在 地 北上市更木10地割25ほか
 委 託 者 県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室
 事 業 名 経営体育成基盤整備事業更木新田地区
 発掘調査期間 平成20年6月16日～7月31日
 調査終了面積 2,295m²
 調査担当者 吉田泰治・溜 浩二郎
 主要な時代 繩文・平安・近世

遺跡の立地

遺跡は北上市役所の北東約6.5kmに位置し、北上川東岸の微高地に立地する。遺跡の標高は65m前後で、調査前の現況は水田・宅地である。

調査の概要

本遺跡は平成12年に新規発見、14年に範囲拡大をしており、繩文・弥生・平安・近世の散布地として周知されている。事業に先立って行われた県教育委員会による試掘調査でも、今回の調査区を含む遺跡内に該当する時期の埋蔵文化財が確認されたため本調査・確認調査が実施されることとなった。調査区は遺跡の南端部分に当たる。

検出された遺構は溝4条・陥し穴1基である。このうち溝1条は確認調査区内にあり、他は本調査区と確認調査区にまたがる。出土した遺物は繩文土器3点・須恵器1点・近世磁器1点と極めて希薄で、遺構外からの出土である。

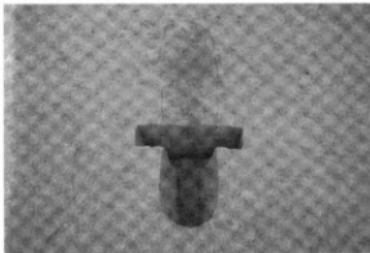
遺跡面積の約3%に当たる今回の調査では、陥し穴とその形状からこの区域が繩文時代の狩り場であったこと、繩文・平安・近世の遺物散布地であることは確認できたが、溝の属する時期や性格は明らかにならなかった。



調査区全景（上が南西）



溝



陥し穴

(49) 野沢 I 遺跡

所 在 地 北上市更木17地割59ほか
 委 託 者 県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室
 事 業 名 経営体育成基盤整備事業更木新田地区
 発掘調査期間 平成20年9月1日～10月16日
 調査終了面積 656m²
 調査担当者 須原 拓・小林弘卓
 主要な時代 古代

遺跡の立地

遺跡は北上市役所の北東約6km、北上市と花巻市の東側を蛇行し南流する北上川左岸に立地し、地形的には北上川河谷平野に載る。標高は64m前後を測る。また調査前は水田であった。

調査の概要

今回は工事の範囲を台形に一周する水路幅のみの調査であり、一辺の長さが20～40m、幅2～3mの限られた中で遺構・遺物検出を行った。また調査区内の北西から南東にかけて比較的大きな旧河道がはしっており、深さも現地表面から3mをこえていた。検出面上、埋土中ともに遺構・遺物は検出しなかった。

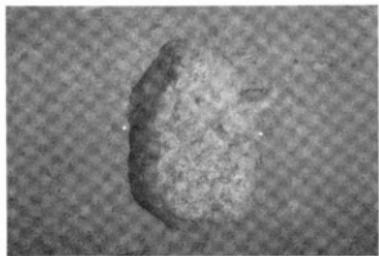
今回の調査で見つかった遺構は、古代に比定される土坑5基、焼土遺構1基を検出し、他に時期不明の溝6条、柱穴47個が見つかっている。

土坑は埋土中に遺物が混入しないので具体的な帰属時期は不明であるが、隣接する野沢II遺跡から同様な土坑が見つかっており、埋土中から古代の土師器が見つかっているので、本遺跡で検出した土坑群も古代に帰属するものと推定される。

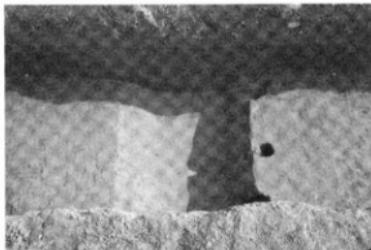
溝は、いずれも野沢II遺跡からみつかった溝群につながるものである。幅は10～50cmと様々であった。遺物は伴わない。



調査区全景（上が北）



土坑



溝

(50) 野沢Ⅱ遺跡

所 在 地 北上市更木17地割69ほか
 委 託 者 県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室
 事 業 名 経営体育成基盤整備事業更木新田地区
 発掘調査期間 平成20年4月9日～10月16日
 調査終了面積 11,313m²
 調査担当者 須原拓・北村忠昭・鳥居達人・小林弘卓
 主要な時代 繩文・弥生・平安・近世

遺跡の立地

遺跡は北上市役所の北東約6km、北上市と花巻市の東側を蛇行し南流する北上川左岸に立地し、地形的には北上川河谷平野に載る。標高は63～64m前後を測る。また調査前は水田であった。

調査の概要

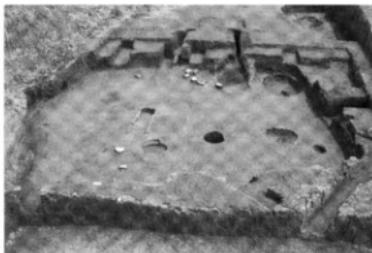
今回は工事の範囲を外周するように設置される水路幅のみの調査であり、したがって調査区幅は2～9mの限られた中で遺構・遺物検出を行った。見つかった遺構は、縄文時代の落とし穴3基、貯蔵穴1基、土坑2基、平安時代の竪穴住居7棟、住居状遺構1棟、土坑58基、焼成遺構4基、畝間状遺構と、また時期はおそらく近世以降と推定される掘立柱建物跡3棟、溝50条である。このように複数の時代の遺構が見つかっているが、最も多いのは平安時代に帰属する遺構である。

平安時代の竪穴住居群は調査区の東端に分布する。各住居はそれぞれ離れて位置するが、前述した通り限られた範囲での調査であり、今回調査区からはずれた場所にも住居群が存在するものと推定すると、広範囲に集落がひろがっている可能性がある。特筆する点として、住居床面の中央に「ロクロピット」と思われる付属施設を伴う住居を1棟検出した。またこの住居の床面上からは土鈴が1点出土している。焼成遺構は土師器の焼成遺構ではないかと考える。土師器の小片や粘土塊が出土している。住居群とはほぼ同時期のものであると推定する。

遺物は大コンテナで9箱出土した。内訳は土器では縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器で、土師器が主体で、9世紀後半に帰属するものが多い。またこれと同時期の土鈴1点が出土している。他に縄文時代の石器が出土している。



遺跡全景（東から）



竪穴住居

さかい
(51) 境遺跡 (県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室)

所 在 地 北上市稻瀬町地蔵堂3-1ほか
委 託 者 県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室
事 業 名 経営体育成基盤整備事業下門岡地区
発掘調査期間 平成20年8月1日～11月14日
調査終了面積 300m²
調査担当者 鳥居達人・吉田泰治・溜 浩二郎
主要な時代 繩文・中世



遺跡の立地

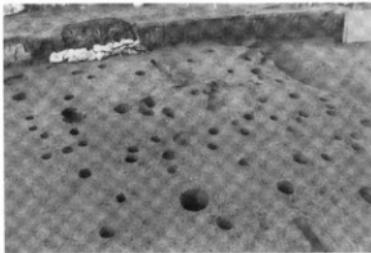
境遺跡は南流する北上川の東岸、JR北上駅からほぼ南に4.5km離れたところに位置する。所在地は北上市稻瀬町地蔵堂である。北上川が作り出す河岸段丘上に立地し、標高は50mで、おおむね平坦である。現況は更地で北上市道脇に当たる。圃場整備に伴い、水路の構築を目的として調査することになった。

調査の概要

検出遺構は、中世では溝跡2条、墓壙2基、土坑1基である。また、縄文時代晩期末葉の竪穴住居跡2棟、住居状遺構2基、石囲炉2基、土坑2基、柱穴状土坑約100個である。出土遺物は、土器が大コンテナ2箱、石器が中コンテナ1箱出土している。また、2基の墓壙から2体の人骨とともに、永楽通寶などの古銭が出土している。



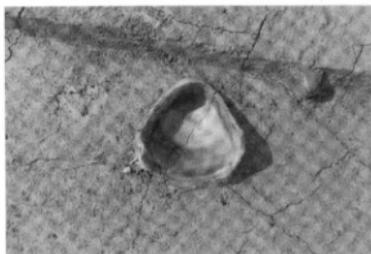
中世の溝



縄文時代晩期末葉の竪穴住居跡（完掘）



中世墓壙の人骨出土状況



土器出土状況

(52) 境遺跡 平成20年度調査

所 在 地 北上市稻瀬町地蔵堂 3-1 ほか
 委 託 者 県南広域振興局北上総合支局土木部
 事 業 名 緊急地方道路整備事業下門岡地区
 発掘調査期間 平成20年8月1日～11月14日
 調査終了面積 1,050m²
 調査担当者 烏居達人・吉田泰治・溜 浩二郎
 主要な時代 繩文・中世

遺跡の立地

境遺跡は南流する北上川の東岸、JR北上駅からほぼ南に4.5km離れたところに位置する。所在地は北上市稻瀬町地蔵堂である。北上川が作り出す河岸段丘上に立地し、標高は50mで、おおむね平坦である。

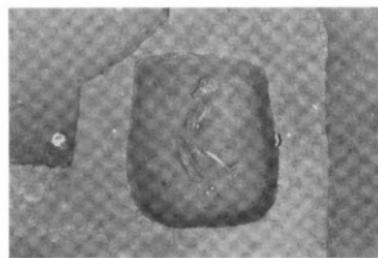
調査は平成18年度から開始され、今年度で3年目になる。前年度までには、弥生時代中期～後期や平安時代の竪穴住居跡、中世の堀などが検出されており、複合遺跡の様相を示している。平成21年度でも遺跡の北側で調査が予定されている。

調査の概要

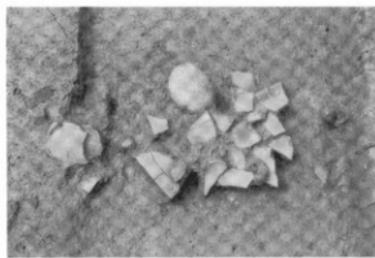
検出遺構は、調査区南側（A区）で中世の溝跡7条、墓壙4基、土坑3基、繩文時代晩期末葉から弥生時代初頭期の竪穴住居跡3棟、竪穴住居状遺構1基、土坑9基、集石遺構5基、埋設土器2基が検出された。その他では時代不明の柱穴状土坑が約200個検出されている。調査区北側（B区）では古代から中世期と想定される竪穴建物跡1棟、炭化物集中区1箇所、溝跡3条が検出された。また、繩文時代中期後葉の竪穴住居状遺構1棟や、時期不明の土坑11基、柱穴状土坑20個も検出されている。

出土遺物は、土器は大コンテナ6箱が出土し、繩文時代晩期末葉の土器を中心とする。石器は石鎚や磨製石斧など、中コンテナ2箱が出土している。その他では、墓壙内から4体の人骨とともに、古銭が出土した。特色は、前年度まで多く出土した土師器や須恵器が破片のみ5点と少ないとあることである。

検出された遺構は、前年度までに解明された遺跡の様相を、なお明確に示す結果となった。また、出土土器は前年度出土土器の空白を埋める形となり、繩文時代中期後葉から中世期まで続く複合遺跡としての特色を、一層濃くする調査結果となった。



中世墓壙の人骨出土状況



繩文時代晩期末葉浅鉢出土状況

(53) 田代遺跡

所 在 地 北上市上江釣子10地割265-6ほか
 委 託 者 県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室
 事 業 名 経営育成基盤整備事業江釣子第二地区
 発掘調査期間 平成20年4月8日～7月18日
 調査終了面積 4,452m²
 調査担当者 中村絵美・本多準一郎・丸山浩治・吉田泰治
 主要な時代 中・近世

遺跡の立地

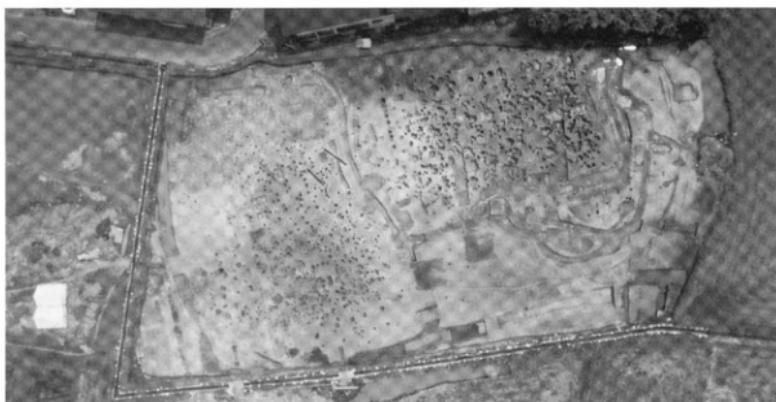
遺跡はJR北上線江釣子駅から北へ500m、黒沢川の自然堤防上に位置しており、「田代主殿屋敷」という中世城館とされている場所である。過去に堀跡が存在するとの報告もあるが、調査前は水田および畠となっていました。現況でその痕跡は確認できなかった。標高は77m前後である。

調査の概要

検出された遺構は、中世から近世を中心とする柱穴約1500個、堀跡1条、溝跡30条、墓壙1基、土坑14基、縄文時代の陥し穴状遺構7基である。

柱穴は掘立柱建物跡を構成しているものと考えられ、重複が多いことから何度も建て直しが行われていたようである。柱穴掘り方内からは、少量であるが中世～近世の陶磁器・銭貨が出土しており、ここからも時期変遷があることが伺える。柱穴群は、集中する箇所が西側と東側にわかれています。西側の方が、規模が大きく重複も激しい。またこれらを囲むように堀・溝が検出され、遺跡内には環濠数ヶ所が存在していたものと考えられる。

出土遺物は、中世～近世の陶磁器が小コンテナ2箱、石臼・石鉢・砥石等が約50点、その他、木製の椀・簪・キセル・釘などの金属製品、銭貨などである。柱穴掘り方内には柱材も多く残っていた。また縄文土器、剥片石器なども少量出土している。



調査区全景

(54) あまたさき
雨滝遺跡

所 在 地 二戸市釜沢字白山5ほか
 委 託 者 二戸地方振興局農政部農村整備室
 事 業 名 畑地帯総合整備事業（舌崎地区）
 発掘調査期間 平成20年7月1日～9月30日
 調査終了面積 398m²
 調査担当者 丸山浩治・菅野紀子
 主要な時代 繩文（晚期）

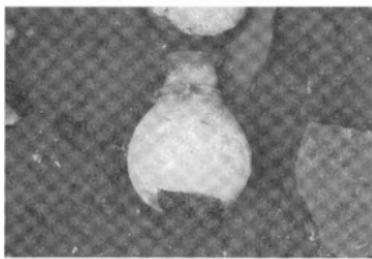
遺跡の立地

本遺跡は、IGR金田一温泉駅の北西3.3kmに位置し、馬瀬川右岸に形成された河岸段丘の南西向き緩斜面上に立地している。調査区の標高は70～74mで、現況は道路・宅地である。本遺跡は、明治大学により1953・1958・1963年の3回、当センターにより2007年に1回の調査がなされており、今回が5回目となる。明治大学の調査地点は今次調査区の東方約150mにあたり、その結果から縄文時代晚期前葉の「雨滝式土器」が提唱されたことで著名である。

調査の概要

調査区は長さ約70m・幅3～4mと北東一南西に細長く、傾斜に直交するトレンチを開けているような状況を呈する。検出遺構は、縄文時代の遺物包含層1箇所、竪穴状遺構1基、土坑1基、柱穴状土坑8個、平安時代以降の溝2条、近世以降の土坑4基である。また、地形調査の結果、現地形には表れていない小規模な段丘が3面確認された（上・中・下位面）。遺物包含層は、調査区北東部にあたる上・中位2面上に形成されており、確認面積は111m²である。この包含層はいわゆる捨て場で、一部は盛土状を呈する。層厚は約1mで、出土土器型式の主体は縄文晚期前葉～中葉の大洞B C～C1式である。場所や層位により主体をなす型式が偏在しており、上位面から中位面北半にかけては古期の、中位面南半には新期の遺物がまとまる傾向が看取された。なお、確認面積中の40m²については、深さが現地表面の2m以下まで及んでおり、安全面の問題から現地表面下1.5mまでの調査にとどめ、これ以下は保存扱いとなった。

出土遺物は、土器大コンテナ約70箱、石器中コンテナ約32箱（礫石器多数）、土製品（土偶・耳飾・キノコ形土製品・スタンプ状土製品・土版等）中コンテナ約1箱、石製品（石版・岩偶・玉・石棒類等）中コンテナ約1箱、炭化種実（オニグルミ・トチノミ等）、獸骨・魚骨片等である。



遺物包含層 土器出土状況

(55) 駒板 3 遺跡

所 在 地 九戸郡軽米町大字山内第1地割64-1 ほか
委 托 者 二戸地方振興局農政部農村整備室
事 業 名 中山間地域総合整備事業大清水地区
発掘調査期間 平成20年9月1日～11月18日
調査終了面積 1,587m²
調査担当者 溜 浩二郎・菅野紀子
主要な時代 繩文

遺跡の立地

遺跡は軽米町役場から南西約6.8kmに位置し、瀬月内川右岸の沖積段丘面に立地する。遺跡の標高は210m前後で、調査前の現況は水田・畑地・未舗装道路である。

調査の概要

今回の調査区は本調査区684m²、確認調査区903m²で、検出遺構は縄文時代後期後葉の堅穴住居跡10棟、炉跡1基、土坑2基である。出土遺物は縄文時代後期後葉を中心に後期前葉～晚期中葉の土器が大コンテナ11箱、石器大コンテナ5箱、土製品(土偶2点、土製耳飾り10点、円盤状土製品1点等)、石製品(石棒1点、ヒスイ石製品1点)である。今回調査した一部(調査区南西側)は縄文時代後期後葉の集落跡における居住域にあたる部分であることが判明した。



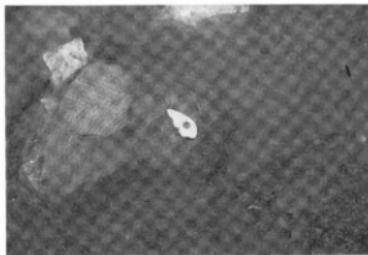
航空写真（上が北）



縄文時代後期後葉の堅穴住居跡



土器出土状況



ヒスイ石製品出土状況

(56) 齋羽場館跡

所 在 地	北上市稻瀬町字前田164-1
委 托 者	県南広域振興局北上総合支局土木部
事 業 名	緊急地方道路整備事業下門閑地区
発掘調査期間	平成20年9月1日～11月21日
調査終了面積	1,290m ²
調査 担 当 者	北村忠昭・丸山浩治・吉田泰治
主 要 な 時 代	後期旧石器・繩文・平安・中世

遺跡の立地

本遺跡は、北上市役所の南南東約3.2kmに位置し、北上川東岸の河岸段丘上に立地している。昭和46年度には県道改築工事に伴い発掘調査が実施され、壙跡や柱穴等の斎羽場館に関係すると考えられる遺構が確認されたほか、旧石器時代の石器や縄文時代早期の土器が出土している。また、昭和61年度には北上市教育委員会によるトレンチ調査が実施され、南北方向の掘跡が確認されている。標高は60~62mで、調査前は宅地や道路等であった。

調査の概要

今回の調査では後期旧石器時代後半期のブロック3箇所、後期旧石器時代終末期のブロック1箇所、縄文時代の土坑1基、ブロック4箇所、平安時代の堅穴住居跡1棟、土坑1基、中世の堀跡1条、溝跡2条、柱穴状土坑18個、時期不明の土坑2基、柱穴状土坑18個が検出された。

出土遺物は旧石器119点（座標データ付99点、グリッド一括・遺構出土資料20点）、縄文土器（早期中心）大コンテナ2/3箱、石器大コンテナ3箱、石製品5点、土師器・須恵器大コンテナ2/3箱、平安時代の石器大コンテナ1/3箱、金属製品1点、中世の磁器2点、石器大コンテナ2/3箱、近世の磁器1点、古錢1点、時期不明の陶器3点、磁器4点、土製品1点、金属製品2点である。

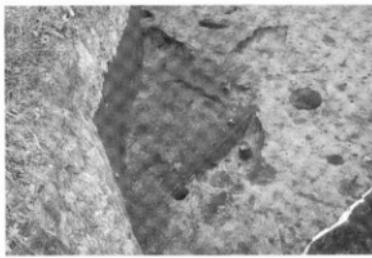
昭和46年度の内容を補強するような遺構・遺物が確認され、後期旧石器時代後半以降断続的に人類活動の痕跡が確認された。北上川東岸では旧石器時代の遺物が出土する遺跡は少なく、貴重な資料と考えられる。また、齊羽場館に関係する可能性が非常に高い遺構や遺物が確認され、齊羽場館の縄張り・構造・年代等を考える上で貴重な資料と考えられる。



1:50 000 北上



旧石器出土状况



平安時代の豊穴住居跡

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第546集

平成20年度発掘調査報告書

印 刷 平成21年3月13日

発 行 平成21年3月18日

編 集 勅岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電 話 (019) 638-9001

F A X (019) 638-8563

発 行 勅岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号

電 話 (019) 654-2235

F A X (019) 625-3595

印 刷 有限会社 博光出版

〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ5丁目8番43号

電 話 (019) 641-0671

